

上 私 部 遺 跡 Ⅲ、有 池 遺 跡 Ⅲ

交野市

# 上 私 部 遺 跡 Ⅲ 有 池 遺 跡 Ⅲ

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇九年八月

2009年8月

財団法人 大阪府文化財センター

財 団 法 人  
大 阪 府 文 化 財 センター

交野市

上 私 部 遺 跡 Ⅲ  
有 池 遺 跡 Ⅲ

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



## 序 文

本書で発掘調査成果を報告いたします上私部遺跡と有池遺跡は、一般国道1号バイパスおよび第二京阪道路建設に伴う発掘調査によって新たに確認されました。

上私部遺跡は大阪府交野市青山に所在する集落遺跡です。平成15年度から数次にわたって行われた発掘調査を通じ、それまで知られていなかった古墳時代の集落の構造と、その変遷の詳細を明らかにすることことができた点は、特筆されます。

今回の調査では前回の調査で検出された、周囲に区画溝を配した掘立柱建物群の北側と東側にも、さらに計画的に配された建物群が展開したことを見らかにすることができました。

有池遺跡は上私部遺跡の東側に隣接して位置します。これまでの調査で古墳時代中期から飛鳥時代、平安時代後期から室町時代の集落遺構を検出しました。特に中世の集落に関しては、灌漑システムの限界のため、それまで放置されがちだった丘陵や段丘・扇状地において、集落が形成される端緒となる時期を経て、開発が軌道に乗り、耕地や居住域が拡大する過程をとらえることができました。

今回の調査では、基幹水路の役割も果たしていたとみられる屋敷地の区画溝の利用状況や、それと隣接する他の屋敷地との関係を把握する上で、重要な成果を得ることができました。

これらの遺跡の背後に目を転ずれば、古くから信仰の対象となっている交野山頂の觀音岩が間近に望まれ、前面には交野台地の広がりをとらえることができます。交野山頂への登山道の入口付近には、旧石器や早期の縄文土器が出土したことで知られる神宮寺遺跡が所在します。一方、周辺の丘陵や台地上には、武具や銅鏡等の副葬品が出土したことで知られる東車塚古墳をはじめ、多数の古墳が存在することが知られています。また私部という地名は、『日本書紀』敏達天皇6年(577)に設置された皇后の生活をまかなうための「私部」に由来すると考えられます。平安時代以降には、一帯はおおむね岩清水八幡宮領の莊園に含まれたとみられ、鎌倉時代になると交野山に開元寺が移ることで、一層発展したことが知られています。このような歴史的な経緯は、この一帯が河内・山城・大和を結ぶルート上に位置することとも関連しているのでしょうか。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社関西支社、大阪府教育委員会文化財保護課、交野市をはじめとする地元関係各位に深く謝意を表しますと共に、今後とも文化財の保護に一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2009年8月

財團法人 大阪府文化財センター

理事長 水野正好

## 例　　言

1. 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路の建設に伴って実施した上私部遺跡07-1と、有池遺跡07-1・上私部遺跡07-2・上私部遺跡08-1の発掘調査報告書である。前者の調査成果を第I部、後者を第II部として掲載する。上私部遺跡と有池遺跡は大阪府交野市青山に所在する。
2. 調査は国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所・西日本高速道路株式会社関西支社から委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。調査名称・受託契約名・受託契約期間は以下の通りである。

上私部遺跡07-1〔上私部遺跡（その3）〕

事業契約名：第二京阪道路（大阪北道路）上私部遺跡発掘調査（その3）・平成19年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（上私部遺跡その3）

受託契約期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日

有池遺跡07-1・上私部遺跡07-2〔有池遺跡（その6）・上私部遺跡（その4）〕

事業契約名：第二京阪道路（大阪北道路）上私部・私部南遺跡他遺物整理・平成20年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理事業（上私部・私部南遺跡他）

受託契約期間：平成20年4月1日～平成21年3月31日

3. 調査及び整理は以下の体制で行った。

上私部遺跡07-1〔上私部遺跡（その3）〕

〔平成19年度　調査〕　調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘

　京阪調査事務所長　山本　彰

　調査第三係長　秋山浩三、主査　上野貞子（写真）

　技師　若林幸子、専門調査員　和田大作　垣内拓郎

〔平成20年度　整理〕　調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘

　京阪調査事務所長　山本　彰

　調査第一係長　三好孝一、主査　上野貞子（写真）

　副主査　若林幸子

有池遺跡07-1・上私部遺跡07-2・上私部遺跡08-1〔有池遺跡（その6）・上私部遺跡（その4）〕

〔平成19年度　調査・整理〕　調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘

　京阪調査事務所長　山本　彰

　調査第三係長　秋山浩三、主査　上野貞子（写真）

　技師　若林幸子、技師　黒須亜希子

　専門調査員　和田大作　垣内拓郎

〔平成20年度　調査・整理〕　調査部長　赤木克視、調整課長　田中和弘

　京阪調査事務所長　山本　彰

　調査第一係長　三好孝一、主査　上野貞子（写真）

副主査 若林幸子、技師 黒須亜希子

4. 今回の調査において、以下の分析・鑑定業務を委託して行った。  
花粉・珪藻・植物珪酸体分析：株式会社古環境研究所  
放射性炭素年代測定（AMS）分析：株式会社パレオ・ラボ
5. 本書に用いた写真は、遺構については調査担当者が撮影した。遺物については京阪調査事務所主査 上野貞子、中部調査事務所主査 片山彰一が撮影した。
6. 本書の編集・執筆は第Ⅰ部を主に若林幸子、第Ⅱ部を黒須亜希子が行った。したがって第Ⅰ部と第Ⅱ部とで、用語や遺構図版の体裁の統一が図られていない部分が若干ある。なお付章の執筆は第Ⅰ節を株式会社古環境研究所、第2節を株式会社パレオ・ラボが担当した。
7. 発掘調査および整理作業においては、財団法人大阪府文化財センター職員をはじめ、以下の諸氏・団体から御協力、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）  
網 伸也・南 孝雄・真鍋成史・小川暢子・大阪府教育委員会・交野市教育委員会
8. 本調査に関わる、遺物・写真・実測図等の資料は財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。

## 凡　　例（第Ⅰ部）

1. 本書に掲載した遺構実測図・地形図などに付された方位はすべて座標北を示している。
2. 本書で使用した測量基準線・地区割方法は、世界測地系による国土座標軸第VI座標系を基準に、当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル（暫定版）』（2003）に準拠している。また座標値はすべてmで標記している。地区割の第Ⅰ区画は7J、第Ⅱ区画は10である。
3. 本書で使用した標高値は東京湾平均海水位（T.P.）を使用している。
4. 実測図の縮尺については、竪穴住居・掘立柱建物は80分の1に統一した。他の遺構については、それぞれ縮尺を明記し、各図にスケールを付した。なお、断面図・見通し図の位置は平面図中に「—」で示した。
5. 遺構番号は、全調査区にわたっておおむね発掘調査の段階で付した番号をそのまま使用している。遺構番号の後ろに遺構の種類を付したものも遺構名とする（例：21溝、14土坑など）。ただ柱穴列の遺構番号の一部は、整理作業の成果から順次新たに付したものである。
6. 遺構平面図には極力遺構名を掲載することとしたが、ピットについては煩雑になるため、番号のみを掲載した場合がある。
7. 遺物実測図の縮尺は、基本的には3分の1に統一したが、他の縮尺を採ったものもある。図版ごとに縮尺はスケールを付して示した。遺物番号は実測図・写真・遺物観察表ともに共通する。
8. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄著『新版 標準土色帖』2008年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・在団法人日本色彩研究所色票監修を基準としている。

# 目 次

序文

例言・凡例（第Ⅰ部）

目次

## 〔第Ⅰ部〕

上私部遺跡（その3）07-1の発掘調査成果報告

図・表目次

写真図版目次

第1章 調査の経過と調査方法	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査方法	2
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺構	10
第1節 遺跡の基本層序	10
第2節 古墳時代の遺構	14
第3節 古代から中世の遺構	56
第4章 遺物	62
第1節 古墳時代の遺物	62
第2節 中世の遺物	85
第5章 まとめ	90
付章 自然科学分析	124
第1節 上私部遺跡（その3）発掘調査に伴う花粉分析	124
第2節 放射性炭素年代測定	130

## 〔第Ⅱ部〕

有池遺跡（その6）07-1・上私部遺跡（その4）07-2・上私部遺跡（その4）  
08-1の発掘調査成果報告

—第Ⅱ部に目次あり—

## 〔第Ⅰ部〕

上私部遺跡（その3）07-1の発掘調査成果報告

## 図 目 次

図 1 調査位置図	1	図 32 中世溝・鞋跡断面図	59
図 2 地区割模式図・調査区配置図	3	図 33 12 穴住居〔1～4〕、298 柱穴（柱穴列 7）〔5〕、25 柱穴（建物 3）〔6〕、121 柱穴（建物 3）〔7〕、199 柱穴（建物 10）〔8〕、37 ピット（建物 13）〔9〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号	63
図 3 調査地周辺地形図	5		
図 4 調査地周辺遺跡分布図	7		
図 5 調査区北壁土層断面図	11		
図 6 土層断面柱状図	12		
図 7 古墳時代遺構配置図	16		
図 8 12 穴住居実測図	17		
図 9 建物 1・2 実測図	19		
図 10 建物 3・4 実測図	20		
図 11 建物 5・6 実測図	22		
図 12 建物 7・8 実測図	23		
図 13 建物 9・10 実測図	25		
図 14 建物 11・12 実測図	27		
図 15 建物 13・柱穴列 1 実測図	28		
図 16 柱穴列 2～9 実測図	30		
図 17 柱穴列 10～14 実測図	32		
図 18 19・20・21・32 溝実測図、21 溝遺物出土状況図	34		
図 19 29・30・127 溝断面図	37		
図 20 26・113～115・154 溝実測図	39		
図 21 1172 土坑実測図、167 土坑断面図	41		
図 22 168 土坑、156・165・169 溝断面図	42		
図 23 36・89・90 ピット、42・43 土坑実測図	43		
図 24 14・33・39 土坑実測図	45		
図 25 18・49・159・170 土坑、187・302～304 ピット実測図	46		
図 26 176・179～181・184・185・188・190・281・299・310・311 ピット実測図	49		
図 27 153 ピット、266・278・279 土坑、300・305・307・308 ピット実測図	51		
図 28 264・265 土坑実測図	52		
図 29 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土遺物実測図	54		
図 30 古代～中世遺構配置図	57		
図 31 中世遺構配置図	58		
図 32 中世溝・鞋跡断面図	59		
図 33 12 穴住居〔1～4〕、298 柱穴（柱穴列 7）〔5〕、25 柱穴（建物 3）〔6〕、121 柱穴（建物 3）〔7〕、199 柱穴（建物 10）〔8〕、37 ピット（建物 13）〔9〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号	63		
図 34 15 溝〔10～15〕、20 溝〔16～24〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号	64		
図 35 21 溝・22 井戸〔25～27〕、21 溝〔28～43〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号	67		
図 36 22 井戸〔44～50〕、32 溝〔51・52〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号	68		
図 37 29・30 溝〔53～60・66・72〕、29・30・127 溝〔61～65・71〕、29 溝〔67～70〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号	70		
図 38 30 溝〔73～84〕、26 溝〔85～88〕、154 溝〔89〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号	71		
図 39 1172 土坑〔90～96〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号	74		
図 40 14 土坑〔97〕、49 土坑〔98〕、278 土坑〔99〕、1009 土坑〔100〕、153 土坑〔101・102〕、266 土坑〔103・104〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号	75		
図 41 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土遺物実測図	77		
図 42 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土遺物実測図	78		
図 43 移動式竈〔129～136〕・U 字状土製品〔137〕実測図 □ 内は遺物掲載番号	79		
図 44 古墳時代遺物包含層〔138・139・141〕、中世耕作土〔140・142～144〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号	80		
図 45 須恵器杯外面線刻拓本図	80		
図 46 21 溝〔151～155〕、22 井戸〔156〕出土木器実測図 □ 内は遺物掲載番号	82		

図 47	242 土坑 [157]、273 ピット [158]、231 ピット [159]、254 ピット [160]、1172 土坑 [161] 出土木器実測図 □ 内は遺物掲載番号 ……83	202) 出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号 .....87
図 48	調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土木器実測図 .....	図 51 瓦実測図 .....
図 49	調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土木器 [168]、中世耕作土出土木器 [209]、調査区北西隅検出谷地形中世耕作土出土木器 [210] 実測図 □ 内は遺物掲載番号 .....	図 52 瓦実測図 .....
図 50	調査区南西隅検出谷地形中世耕作土 (169・170)、 調査区北西隅検出谷地形中世耕作土 (171・172)、 1~3溝 [173]、6溝 [174]、I-2-2層 [175・ 176]、I-2-1層 [177~180]、34 ピット [181]、 I-2層 [182~192]、I-1-2層 [193~195]、 I-1-1層 [196~200]、側溝掘削時 [201・ 202] 出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号 .....	図 53 主軸方向分布図 .....
		図 54 上私部遺跡変遷図 (1) .....
		図 55 上私部遺跡変遷図 (2) .....
		図 56 上私部遺跡変遷図 (3) .....
		図 57 上私部遺跡変遷図 (4) .....
		図 58 上私部遺跡 (その3) 07-1 発掘調査における花粉ダイアグラム .....
		図 59 上私部遺跡の花粉 .....

## 表 目 次

表 1	上私部遺跡小期対応表 .....	91	表 6	上私部遺跡 (その3) 07-1 発掘調査における花粉分析結果 .....	126
表 2	建物・柱穴列土層一覧表 .....	101	表 7	測定試料及び処理 .....	131
表 3	土器・土製品・石器等觀察表 .....	108	表 8	放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果…	131
表 4	木器觀察表 .....	122			
表 5	瓦觀察表 .....	123			

## 写真図版目次

図版 1 遺構	図版 4 遺構
2 調査区東半部古墳時代遺構面全景 (南から)	柱穴列 1・柱穴列 2 (北東から)
2 調査区西半部古墳時代遺構面全景 (東から)	14 土坑土層断面 (西から)
図版 2 遺構	12 穫穴住居・柱穴列 1 (北から)
1 調査区北半部古墳時代遺構面全景 (南東から)	図版 5 遺構
1 調査区南半部古墳時代遺構面全景 (東から)	18 土坑 (南から)
図版 3 遺構	19 溝・20 溝・柱穴列 12 (南から)
14 土坑 (南から)	建物 2 検出状況 (北東から)
39 土坑 (南から)	図版 6 遺構
建物 1 (北東から)	建物 2 完掘状況 (北から)

建物3完掘状況（北から）	建物9・建物8（東から）
77柱穴（南西から）	建物10（東から）
図版7 遺構	建物7（西から）
21溝遺物出土状況（東から）	図版15 遺構
21溝土層断面（南から）	266土坑遺物出土状況（東から）
21溝遺物出土状況（東から）	建物11（東から）
図版8 遺構	建物12（東から）
30溝・127溝・29溝（南から）	図版16 遺構
建物4（南から）	中世遺構面全景（南東から）
1172土坑検出状況（北から）	1溝・2溝・3溝・畦畔4・5溝（南から）
図版9 遺構	畦畔2・畦畔3（南から）
1172土坑出土縁口縁部接写（北から）	図版17 遺構
1172土坑I層掘削状況（西から）	1調査区北半部中世遺構面（東から）
1172土坑VI層上面検出状況（南から）	1調査区中世遺構面全景（南から）
図版10 遺構	図版18 遺物
1172土坑土層断面（南東より）	図版19 遺物
1172土坑土層断面（北西より）	図版20 遺物
1172土坑VI層上面検出状況（北東から）	図版21 遺物
図版11 遺構	図版22 遺物
1172土坑VI層上面検出状況（南西から）	図版23 遺物
1172土坑VI層断ち割り状況（北から）	図版24 遺物
図版12 遺構	図版25 遺物
1172土坑完掘状況（北から）	図版26 遺物
154溝土層断面と遺物検出状況（東から）	図版27 遺物
153ピット遺物出土状況（東から）	図版28 遺物
図版13 遺構	図版29 遺物
調査区北西隅検出谷地形（東から）	図版30 遺物
調査区北西隅検出谷地形土層断面（東から）	図版31 遺物
建物10・建物7（東から）	図版32 遺物
図版14 遺構	図版33 遺物

# 第1章 調査の経緯と調査方法

## 第1節 調査に至る経緯と経過

上私部遺跡は大阪府交野市青山町に所在し、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴って発掘調査が行われた。平成11年度に大阪府文化財センターが確認調査を行ったところ、地点によって粗密は認められたものの、道路予定地のほぼ全域において古墳時代の遺構や遺物が検出された。これらの成果により、文化財保護法に基づく遺跡発見届が提出され、青山2丁目の地域は「上私部遺跡」として周知されることになった。

平成15～16年度に上私部遺跡（その1）03-1の調査〔以下、上私部遺跡（その1）と標記する〕が行われ、平成16年度にはその調査区から西への遺構の広がりを確かめるため、確認調査も行われた。平成17年度には上私部遺跡（その1）調査区の南西隣接地にあたる上私部遺跡（その2）05-1の調査〔以下、上私部遺跡（その2）と標記する〕を行った。今回報告する平成19年度に行われた上私部遺跡（その3）07-1〔以下、上私部遺跡（その3）と標記する〕の調査区は上私部遺跡（その2）調査区の北側に隣接し、調査区東端は上私部遺跡（その1）調査区とも隣り合う。調査対象面積は2,240m<sup>2</sup>である。これまでの調査対象面積を併せると、約15,500m<sup>2</sup>にわたって上私部遺跡の調査が行われてきたことになる。一連の発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所と西日本高速道路株式会社関西支社の委託により、大阪府教育委員会の指導のもと（財）大阪府文化財センターが行った。

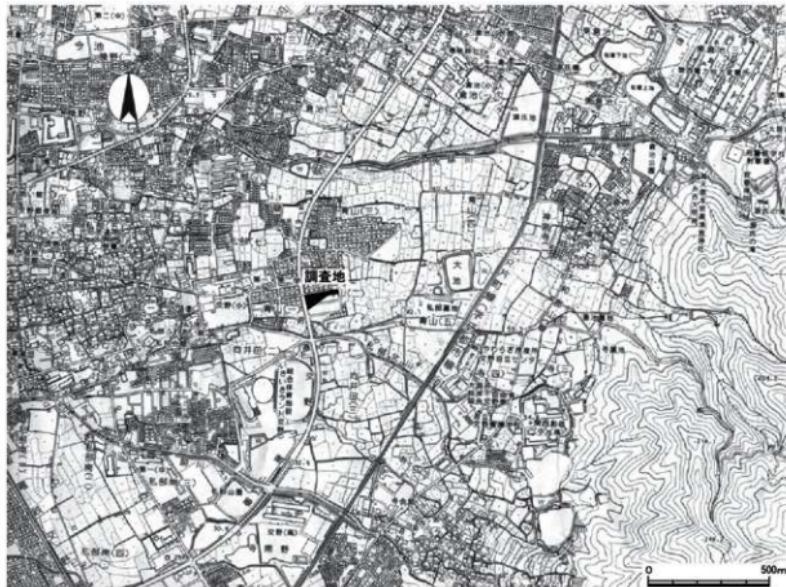


図1 調査位置図（1：20,000）

## 第2節 調査方法

調査範囲は東西方向に長く、東辺よりも西辺が長い三角形に近い形状である。調査区北辺にはほぼ直行する方向で2分割し、西半部を1調査区、東半部を2調査区とした。北側には住宅地が近接し、西側は府道交野久御山線が隣接するため、防塵・防音対策として調査区北辺と西辺を万能柵で囲った後、反転して調査を行った。

建物の基礎部分等の残地物、宅地造成に伴う盛土、および現代～近世耕作土・床土を機械掘削によつて除去し、中世耕作土層以下は人力掘削して遺構・遺物の検出に勤めた。人力掘削にあたっては、耕作土層の層位に注意し、層ごとに出土遺物の帰属を明らかにするように努めた。なお、中世遺構面および古墳時代遺構面では記録写真撮影および図面作成を行った。

測量は世界測地系によって測量した国土座標第VI座標系を基準とし、クレーン車による写真撮影を、古墳時代遺構面において各調査区で1回ずつ、計2回行った。写真測量による図化作業は50分の1の縮尺で行った。また中世遺構面や個別の遺構・遺物の検出状況、土層観察用断面等の実測に際しては、適当な縮尺を選択し、手測りで実測を行った。調査区の全景写真は3段と5段の足場から撮影した。

遺構名の記載方法は基本的に「遺構番号（アラビア数字）—遺構種類」とした。例えば遺構番号が200番の遺構が溝状の形態であった場合、200溝と記載する。ただし建物跡のように、複数の遺構の集合体で一つの機能を有する遺構が構成される場合は、他と区別する必要があるため、建物7というようく「遺構種類一番号」という表記を用いる。

今回の調査で検出された遺構の中には、以前の調査で検出された遺構の延長部分を検出したものも含まれる。そのような遺構に対しても、今回の調査で新たに遺構番号を付した。遺構の詳細を記述する際に対応関係を示すため、以前の調査で付された遺構番号を挙げる場合は、混乱を避けるため遺構名を「」でくくって標記する。「」書きされない遺構番号は今回の調査で付した遺構名である。

遺物は先述した第VI座標系の座標に基づく10m間隔の基準線によって設けた方形区画ごとに取上げ、出土地点及び日付を明示して登録番号を付した。遺物は洗浄・注記後、必要なものは接合・復元し、遺物実測・写真撮影を行った。調査の過程で古環境復元のため、1172 土坑埋土から土壌サンプルを探り、花粉分析等を行った。

なお発掘調査終了後は大阪府教育委員会による立会を受けた。

## 註

註1) 財團法人大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡I』 (財) 大阪府文化財センター調査報告書第151集

註2) 財團法人大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡II』 (財) 大阪府文化財センター調査報告書第165集

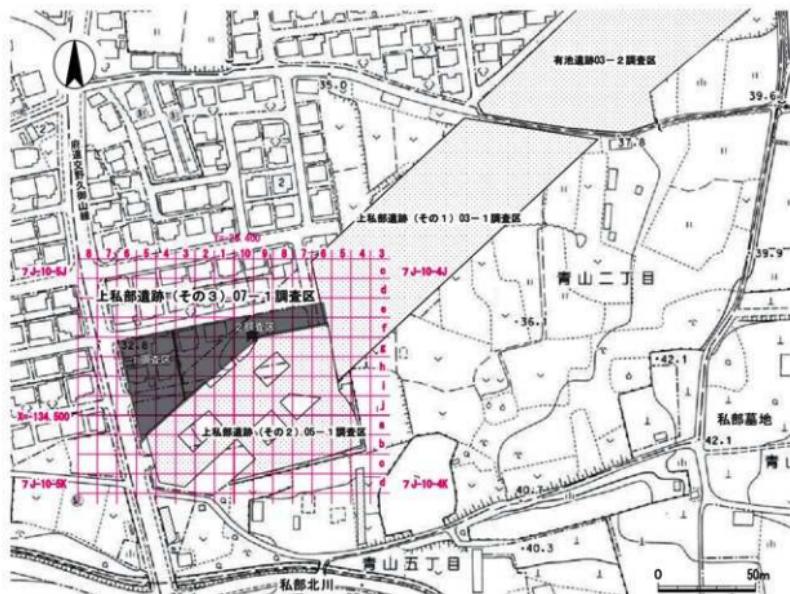
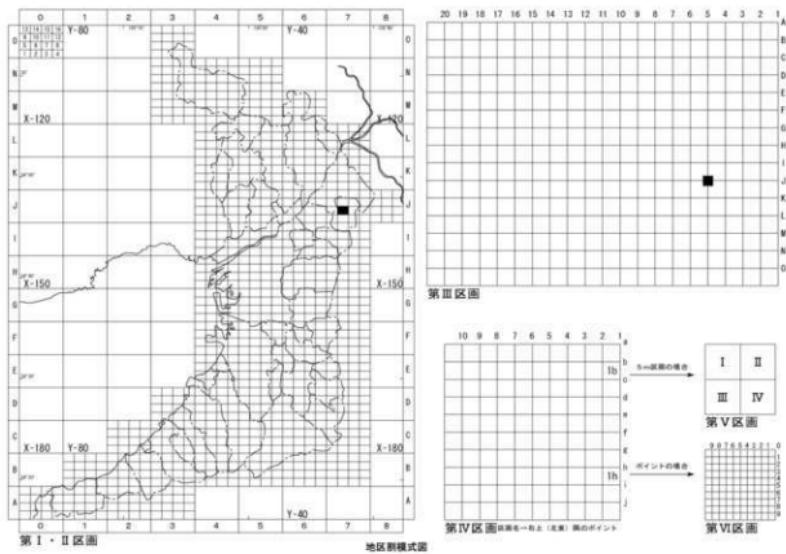


図2 地区別模式図・調査区配置図 (1 : 2,500)

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

大阪府北東部に位置する交野市の、北部に位置する。戦後間もない時期に撮影された米軍撮影空中写真をみると、調査地周辺は水田や果樹園等、広く生産緑地として利用されていたことがわかる。近年は都市近郊のベッドタウンとしての開発が加速しており、徐々に宅地化が進行している。南に河内、東に大和、北東に山城が隣接し、東高野街道へのアクセスにも便利な位置にあり、往時は人の往来が活発だったことが伺える。

当遺跡は交野台地に移行する緩傾斜地に所在し、標高はT.P. + 35 m付近である。現在はほぼ平坦に見受けられるが、近世以降の耕地開発や、近年の宅地開発に伴う盛土を除去すると、東から西に向かって徐々に地盤が下がる。最終氷期後半に形成された低位段丘面を覆う、扇状地面の末端部にあたる。一帯は生駒山系を水源とし、天野川に流れ込む河川の貢入を受けて侵食を受けており、上私部遺跡はそれらの河川の一つである私部北川の右岸段丘上に立地する。

交野山地の岩石組成は主に花崗岩で構成されている。明治以降、大阪府が砂防対策として行った大規模な植林により、一帯の山地は濃い緑に覆われているが、元来は樹木がまばらでごろごろした岩がむき出しだった。植物の根による保水と土砂の保持が弱いため、山麓の村や田畠はしばしば山水の激しい被害を受け、村ごとの移動を余儀なくされた場合もあったことが、伝承や文献資料などからうかがえる。<sup>11)</sup> 平成17年度に行われた自然科学分析結果によると、古墳時代の集落が営まれていた段階では、当遺跡一帯は非常に安定し、かつ高燥な土地条件だったとみられる。古墳時代から中世にかけては氾濫原が形成され、地表面は通常乾燥して好気的な土壤環境で、畑地耕作が継続的に行われていたようだ。灌漑水利体系の再整備により、13世紀代を画期として水田造成が活発化するが、それに伴い耕地の拡大や森林資源の過剰利用による一帯の山のはげ山化が進行し、私部北川が天井川化する。<sup>12)</sup> 河床上昇によって中世後半から近世にかけての時期には、一帯の湿地化・滯水域の増加が進んだようだ。そのような環境の変化から、一方では土砂崩れや洪水が誘発されることになったと考えられる。中～近世には洪水によって耕地が土砂に覆われた後、それを耕地化する営みが繰り返されていたことが、今回の調査でもうかがえた。

### 第2節 歴史的環境

ここでは、上私部遺跡が所在する天野川上流域の遺跡の消長を中心に、歴史的な動向を述べたい。概して天野川上流域は、男山・長尾丘陵・生駒山地に囲まれた淀川右岸一帯の中で、時代の画期となる時期にひとつの核を有していたことがうかがえる地域である。

旧石器時代の遺跡として上私部遺跡・有池遺跡の東側に位置する神宮寺遺跡で、サヌカイト製のナイフ形石器等が採取されたことが知られている。神宮寺遺跡から北へ約2.5kmに位置する津田三ツ池遺跡や、南西約4kmに位置し、多数の剥片や石核の出土で知られる布懸遺跡の立地とあわせると、標高50～100mを測る生駒山の山麓部が、旧石器時代の居住地の条件にかなっていたことがうかがえる。神宮寺遺跡では縄文時代の炉跡などが検出されており、出土した押型文をもつ土器群は「神宮寺式土

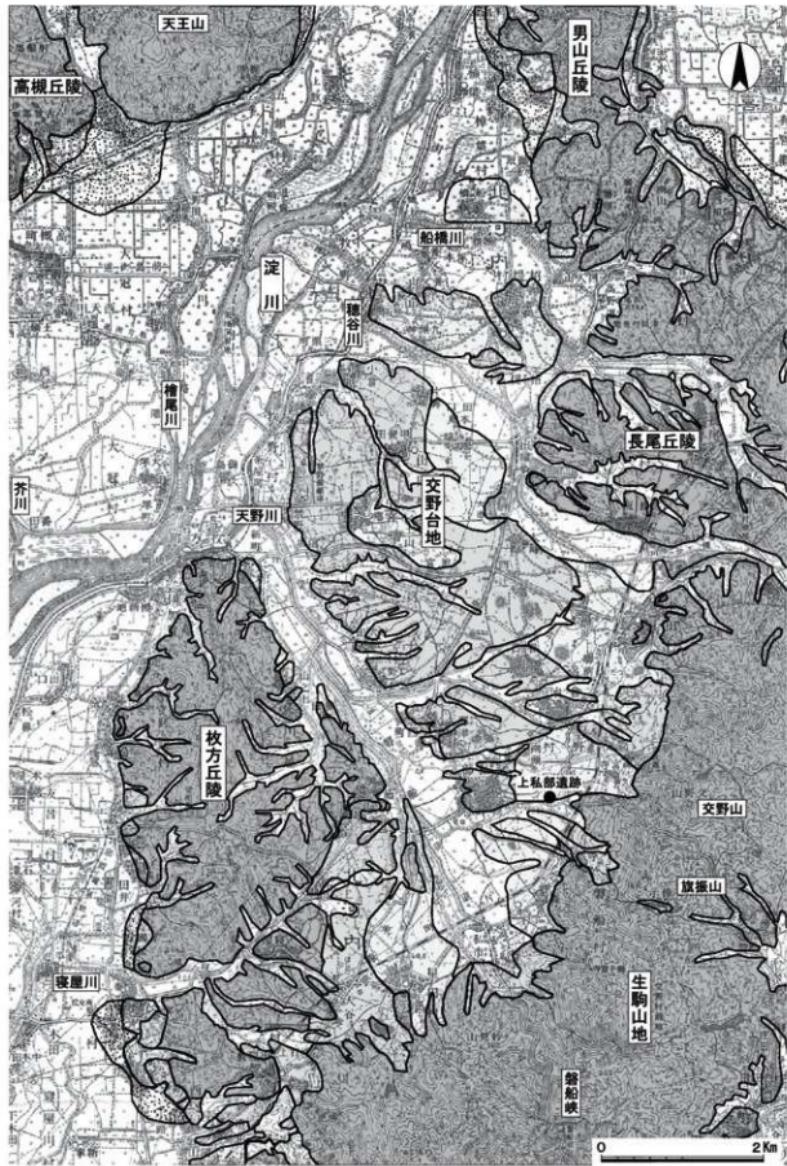


図3 調査地周辺地形図（1：60,000）【註2より転載】

器」として縄文早期土器の指標とされる。神宮寺遺跡より天野川をはさんで南西の方向に位置する標高100 m前後の丘陵上に位置する星田旭遺跡では、醍醐Ⅱ～Ⅲ式・船元式土器の影響を受けた縄文中期とみられる土器や、北白川上層式の影響を受けた縄文後期の土器が出土している。

縄文晚期（滋賀里Ⅲ～Ⅳ式）土器の出土状況は、これまで天野川・種谷川下流の丘陵および台地縁辺部と枚方丘陵に西接する寝屋川流域の低地部の遺跡で出土することが知られていた。それに対して天野川の上流域での出土例は知られていなかったが、一連の第二京阪道路関連遺跡の調査により、茄子作遺跡<sup>日11</sup>や私部南遺跡<sup>日12</sup>でも検出されることがわかった。私部南遺跡では弥生時代前期以降も集落が営まれる。

弥生前期中段階までの状況をみると、天野川と淀川の合流部付近に所在する磯島先遺跡や寝屋川流域に所在する高宮八丁遺跡・讚良群条里遺跡では遠賀川系土器が主体であるのに対して、私部南遺跡では長原式系の土器が主体となっており、縄文系の色彩が濃い。弥生中期前半になると天野川流域で核となる集落は、対岸の上の山遺跡や、下流域に所在する星丘西遺跡に移行するとみられる。上の山遺跡では中期前半の竪穴式住居や土坑群・溝などとともに独立棟持柱をもつ大型の掘立柱建物が検出された。この集落は弥生時代中期後半になると、集落規模を縮小させながら茄子作遺跡へと移行する。後期になるとそれまで交野台地に点在していた集落のほとんどが姿を消し、より山際の小高い位置に集落が多く出現する。その中でも天野川上流部に出現する南山（鍋塚）遺跡は、竜王山の中腹に位置し、高地性集落としての特徴が際立つ。なお上私部遺跡では今回の調査で、中期後半から後期の遺構・遺物をごく微量検出したが、集落の存在を確定するには至らなかった。

弥生時代後期から古墳時代前期になると、天野川右岸の中位段丘上に森遺跡が形成される。またそれに近接する私部南遺跡や上私部遺跡でも集落が形成され始める。これは弥生時代後期の段階に交野台地から姿を消した集落が、古墳時代初頭の段階で再び散在的に姿を現すのと期を一にする現象である。さらに森遺跡の東方尾根上には森古墳群・鍋塚古墳が築かれている。前者は古墳時代前期の盟主古墳群とみなされており、中でも墳形・供獻土器ともに初期古墳の特徴を備える森1号墳は、全長106 m、前方部と後円部の比高差が10 mと突出する。これら交野地域を眺望する古墳群は、山麓の森遺跡と密接に関わっていると考えられる。

古墳時代中期には森遺跡に北接する段丘上に、車塚古墳群が営まれる。中でも5世紀初頭に築かれたとみられる1号墳は前方後方墳とみられる全長65 m以上の大型墳で、後方部に木棺直葬の埋葬施設が3基検出された。うち中央で検出された下層の第1号棺には甲冑・銅鏡・太刀・玉類・青銅器類といった多数の副葬品が含まれていた。森遺跡では5世紀後半から6世紀前半の土器群と併存して、多量の鉄滓や輪の羽口・製塙土器が出土しており、この時期、北河内でも最大規模の鍛冶・製鉄が行われたことがうかがえる。<sup>日13</sup>当然このような森遺跡の動向は、周辺の古墳時代集落にも何らかの影響を与えたと考えられる。

上私部遺跡で本格的に居住域が展開するのは5世紀前半から中頃の時期で、6世紀代に最も居住域が拡大し、森遺跡と同様、7世紀初頭を最後に終息する。6世紀後半から7世紀初頭の時期には、上私部遺跡に接する有池遺跡にも居住域が及ぶと見られ、堀切状に掘削された数条の溝の最下層から土器・木器が検出されている。加えて有池遺跡では、溝に挟まれた微高地で竪穴住居2棟を検出した。ただ古墳時代集落に関する遺構の大半は、中世以降の開発に伴って削平されたようだ。

上私部遺跡では、これまでの調査で5世紀の韓式系土器の平底鉢や懸の破片・牛角状把手が出土するなど、集落成立期における渡来人の存在がうかがえる。また前回の調査では6世紀前半から中頃に、韓

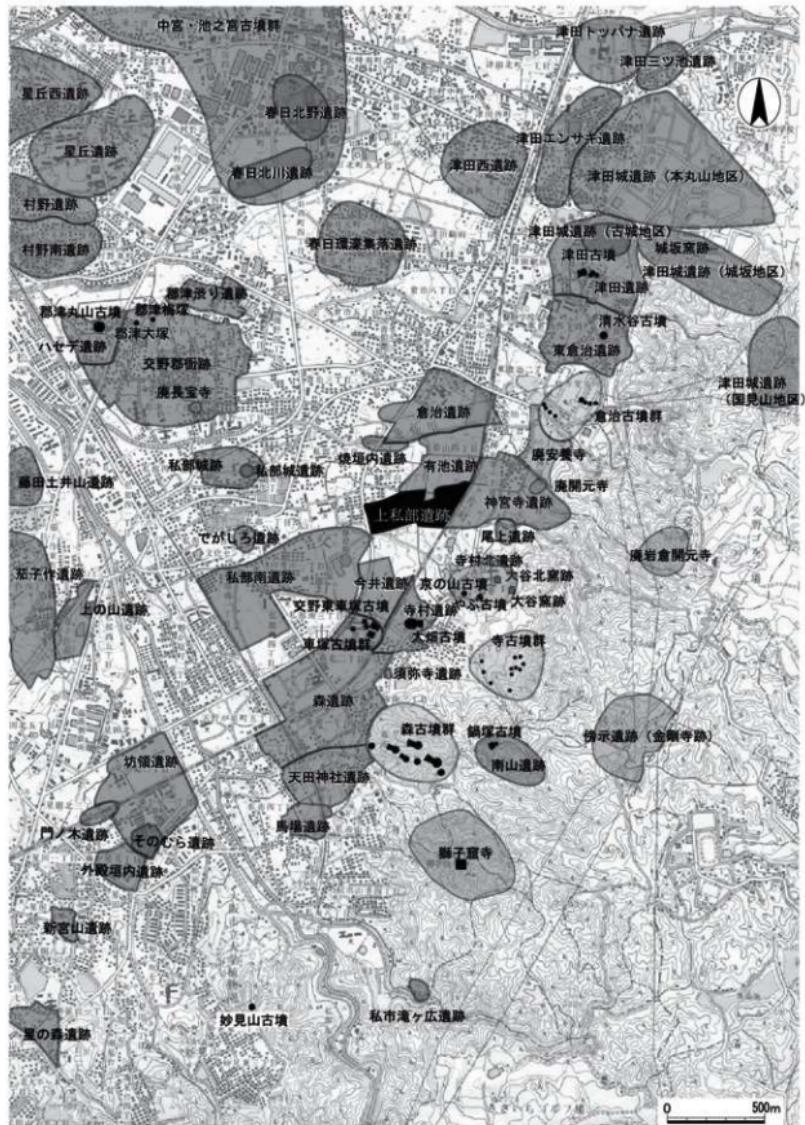


図4 調査地周辺遺跡分布図（1:25,000）

半島から直接もたらされたと見られる新羅土器の破片が出土した。<sup>(9)</sup>これらから古墳時代に入ってからの、一帯の開発や活発な鉄生産の背景には、最新技術をたずさえた新羅系の渡来人たちの活躍があったことがうかがえるのである。

古墳時代後期になると、生駒山麓に多くの群集墳が営まれる。そのうち竜王山麓に群集する寺古墳群は、車塚古墳群の造営を引継ぐように6世紀後半に造営が始まる。この他にも、上私部遺跡から容易にながめられる範囲に倉治古墳群、清水谷古墳が位置する。

一方、寺川の山裾部分に大谷窯址と大谷北窯址が築かれる。前者の調査は灰原部分にあたっており、6世紀末から7世紀初頭の遺物が出土した。後者の調査では窯址の他に、工房と見られる2間四方の建物も検出された。灰原は大きく2層に別れ、7世紀前半と8世紀初頭の遺物を包含する。

『日本書紀』や『古事記』に記述のある、仁徳天皇の治世に設置された茨田屯倉ないし茨田三宅は、広義には淀川南岸一帯の総称ととらえられる。この時期、茨田堤の造営に端的にみられるような大規模な河川改修事業も含みながら耕地開発が推し進められる中で、三宅関連の施設が分散的に設置されたことが想定されている。『和名類聚抄』の河内国交野群に三宅郡の記載があること、敏達天皇6年2月条に皇后のために「私部」が設置されたという記述と、現在も残る「私部」という地名が符合することから、当地は大王家と深いかかりをもつ、支配拠点の一つでもあったと位置づけられる。<sup>(10)</sup>

7世紀中頃に当地域は茨田郡（評）として立評されるが、大宝令施行に伴い交野郡として新たに区分される。<sup>(11)</sup>交野郡衙は現在の郡津周辺に位置したと推定されているが、これまでの調査では頭著な遺構・遺物が検出されておらず、特定には至っていない。奈良時代創建の古代寺院としては須弥寺が知られ、これまでの調査で奈良時代の掘立柱建物・溝、11～12世紀の掘立柱建物、15世紀の土坑などが検出されている。<sup>(12)</sup>平安時代以降には獅子窟寺等の山岳寺院が建立され、鎌倉時代には開元寺が交野山の山上に移ったとみられる。

交野市域における莊園として、岩清水八幡宮領の三宅山と大交野莊がある。三宅山には交野市寺村・森・市私・星田山一帯が比定され、大交野莊には交野市星田・枚方市山之上・茄子作周辺が比定される。大交野莊一帯は興福寺領星田莊と重複しており、しばしば両者の衝突が起ったようだ。三宅莊に比定される森遺跡では、10～15世紀の井戸や溝・柱穴等が検出されており、この一帯で古代の集落の状況をうかがえる数少ない例となっている。前述の須弥寺も、中世には岩清水八幡宮と深い関係を結んでいたことが知られる。

なおお池遺跡では、これまでの調査で11世紀後半を端緒とし、13世紀後半に最盛期を迎える中世集落が検出されている。この集落では13世紀前半に基幹水路の再編を含む大規模な耕地開発が行われたことで、13世紀後半から14世紀にかけて、居住域の拡大と集住の度合いが増したことがわかった。<sup>(13)</sup>

## 註

註1) 片山長三 1981 『交野市史』 交野町略史復刻編（初出1963年）交野市 第4節

註2) 財團法人大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡II』（財）大阪府文化財センター調査報告書第165集 第6章  
付章 第1節

註3) 交野市域の遺跡の概要について、特に引用文献を述べない限り、以下の文献を参考とした。

片山長三 1981 『交野市史』 交野町略史復刻編（初出1963年）交野市

水野正好他 1992 『交野市史』 考古編 交野市

- 註4) 財団法人大阪府文化財センター 2008 『茄子作遺跡』 (財) 大阪府文化財センター調査報告書第174集
- 註5) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『私郎南遺跡Ⅰ』 (財) 大阪府文化財センター調査報告書第154集
- 註6) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『上の山遺跡Ⅱ』 (財) 大阪府文化財センター調査報告書第155集  
なお弥生時代における周辺の集落の動向に関しては、註5) 第V章を参考にした。
- 註7) 交野市教育委員会 1991 『森遺跡Ⅲ』 交野市埋蔵文化財調査報告 1990-Ⅰ
- 交野市教育委員会 1997 『森遺跡Ⅴ』 交野市埋蔵文化財調査報告 1996-Ⅱ
- 交野市教育委員会 2000 『古代交野と鉄Ⅱ』 交野市埋蔵文化財調査報告 1999-Ⅱ
- 註8) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『有池遺跡Ⅰ』 (財) 大阪府文化財センター調査報告書第152集
- 註9) 財団法人大阪府文化財センター 2007 『上私郎遺跡Ⅱ』 (財) 大阪府文化財センター調査報告書第165集
- 註10) 綱 伸也 2005 『淀川水系のミヤケ』 『月刊考古学ジャーナル』 No. 533
- 註11) 交野市教育委員会・(財) 交野市文化財事業団 2004 『須弥寺遺跡』 交野市埋蔵文化財調査報告 2003-Ⅱ
- 註12) 交野市教育委員会 2001 『森遺跡Ⅷ』 交野市埋蔵文化財調査報告 2000-Ⅱ

## 第3章 遺構

### 第1節 遺構の基本層序

現在の調査地とその周辺は、交野・久御山線を挟んで住宅地が広がり、パッチワーク状に耕作地が点在する状況である。昭和36年に作成された3000分の1の地形図を見ると今回の調査区は、やや西に振る方形の条里地割を基準とする水田区画があったところに、北東—南西方向へ斜行して設定されている。なお調査区の南を流れる私部北川の流れにはほぼ平行するように、一帯は西もしくは南西方向へ傾斜している。調査地全体は住宅造成に伴って1~2mの盛土がなされており、それを除去すると耕作面となる。耕作面は南北方向にはする畦畔を伴いながら西に向かって段状に下がり、水田は5面あった。標高は最も高い北東端でT.P.+34.1m、最も低い北西端はT.P.+32.7mである。その下には、中世から連続と営まれてきた水田耕作土層が幾層にも重なって堆積する。

耕作土層の枚数は概して、調査区東端の最も標高が高い水田で少なく、標高が下がるにつれて増えていく。標高の低い部分では少しでも水はけを良くしつつ、耕作面を広げるために盛土することが多かつたのに加え、しばしば洪水砂の影響も受けたことによるとみられる。

中世の耕作土層は、中世遺構面の基盤層よりも上の層と、それ以下の層で土質が異なる。後者の方が粘性は強く、中~粗粒砂の混入も格段に少ない。さらにそれぞれの土層に含まれる遺物にも時期差が認められたことから、その上面を中世における水田造成の一つの画期ととらえた。また中世遺構面基盤層より下では、上私部遺跡（その2）の調査で、中世遺構面鍵層とされた土層を部分的に認めた。水田耕作土層の断面を見ると、中世から近世・現代にかけての畦畔もしくは地割りの位置が、ほとんど変化していないことがわかる。

中世耕作土層を除去すると、古墳時代の遺物包含層を認めた。ただその検出範囲は極めて部分的で、地山が緩やかにくぼむ部分にのみ分布することから、大部分は中世以降の水田造成に伴って削平されたものと考えられる。中世耕作土層もしくは古墳時代包含層を除去した段階で、古墳時代の遺構面を検出した。古墳時代遺構面の基盤層は、花崗岩バイラン土もしくは黄褐色の粘土層からなる地山である。

近世耕作土の床土下面から中世遺構面までに含まれる耕作土層をI層、中世遺構面から古墳時代遺構面までに含まれる耕作土層および遺物包含層をII層とした。I層は粗粒砂を多く含み若干粘性が低い耕作土層と、それよりは有機物を多く含みより土壤化の進んだ耕作土層に大別できたため、前者をI-1層、後者をI-2層とした。またI-1層に関しては、その中でも粗粒砂が混入し粘性の低い耕作土層と、それよりやや粘性が高く、グライト化のみられる耕作土層とに分けられる箇所があったため、前者をI-1-1層、後者をI-1-2層と細分した。II層は中世遺構面の基盤層である、粘性の強い極細粒砂～シルト層をII-1層、その下層で部分的に認めた中世鍵層をII-2層とした。また中世遺構面耕作土層の下層で部分的に認めた古墳時代遺物包含層をII-3層とした。

前回までの調査成果をもとに、中世基盤層上面と、地山上面で遺構の検出につとめた。またそれ以外では、大別した耕作土層の単位ごとに土層を掘り下げて、遺物の検出につとめた。古墳時代遺構面において、明らかに古墳時代遺構埋土とは土質の異なる埋土の、水田耕作に伴うとみられる溝群を検出した。これらは中世遺構面で検出した水田耕作遺構より遡る時期の遺構ととらえられる。



図 5 調査区北壁土層断面図

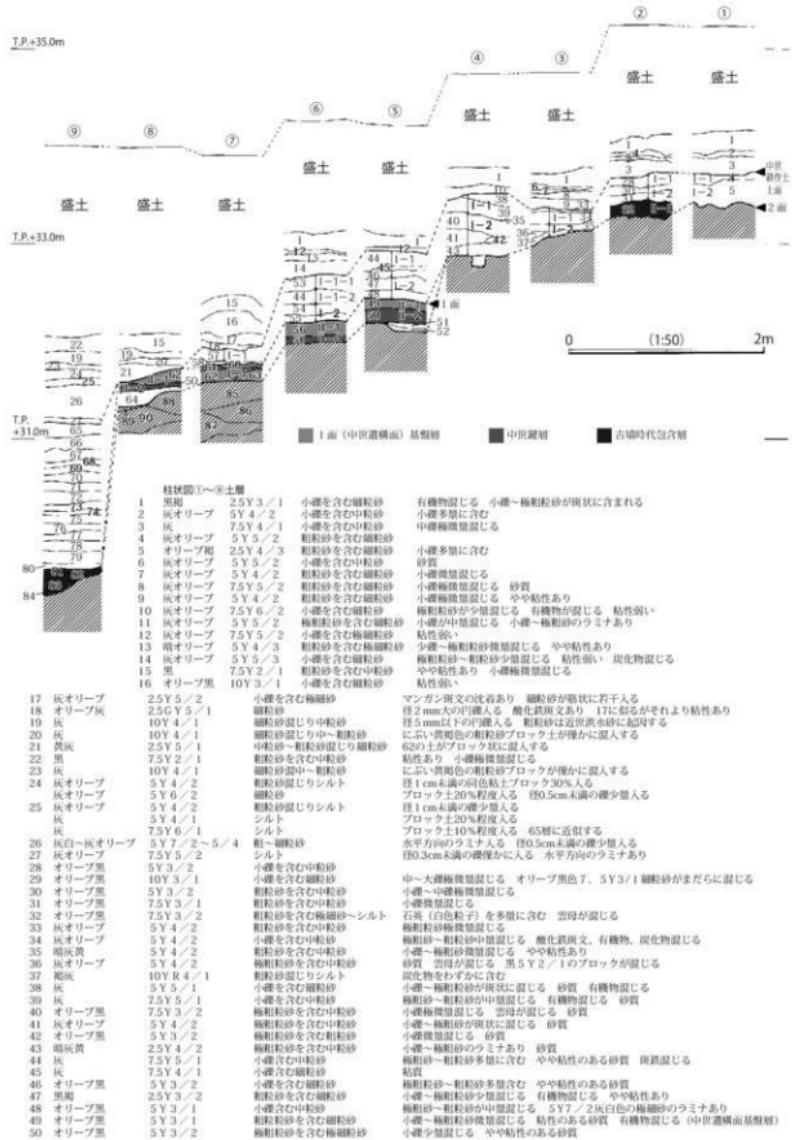


図 6-1 土層断面柱状図

51 黒周	2.5Y 3 / 2	粘質土	砂礫や砂利に混入する
52 黒周	2.5Y 3 / 1	粘質土	砂和粘粒・粗粒砂中に混入する 砂質
53 灰	5 Y 4 / 1	小礫を含む中粒砂	小礫を含む中粒砂中に混入する やや粘性あり 酢化鉄斑文あり
54 オリーブ緑	2.5Y 4 / 4	粘粒砂を含む細粒砂	小礫混じる やや粘性あり 酢化鉄斑文あり
55 暗紅黄	2.5Y 4 / 2	粘粒砂を含む細粒砂	小礫混じる やや粘性あり 酢化鉄斑文あり
56 灰オリーブ	5 Y 4 / 2	小礫を含む細粒砂	小礫混じる やや粘性あり 酢化鉄斑文あり
57 灰	10Y 3 / 1	中粒砂を含む細粒砂	小礫混じる やや粘性あり 酢化鉄斑文あり
58 黒	7.5 Y 3 / 1	中粒砂を含む細粒砂	小礫混じる やや粘性あり 酢化鉄斑文あり
59 オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粘粒砂を含む細粒砂	小礫混じる 有機物が混じる 粘性あり
60 オリーブ黒	2.5Y 4 / 3	粘粒砂を含む細粒砂	灰色細粒がブリック状で混入する 62%に及ぶが中粒砂の量多い (中世遺構面基盤層)
61 黄緑	2.5Y 5 / 3	中粒砂混じり細粒砂	下部に中粒砂ブロックが状態に入れる (中世遺構面基盤層)
62 暗紅黄	2.5Y 5 / 2	中粒砂混じり細粒砂	灰色細粒がブリック状で混入する (中世遺構面基盤層)
63 灰オリーブ	2.5Y 4 / 2	中粒砂混じり細粒砂	明瞭な層理構造が見られる (中世遺構面基盤層)
64 灰	10Y 4 / 1	中粒砂混じり細粒砂	往 5cm以上での層理構造が見られる (中世遺構面基盤層)
65 灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粘粒砂混じるシルト	往 0.1cm未満の微少な層理が見られる 酢化鉄斑文確かに沈着 層部に植物遺体の混じり込みあり
66 灰	5 Y 4 / 1	粘粒砂混じるシルト	同色粘土エロッケ10%程度ある
灰-灰オリーブ	5 Y 6 / 1 ~ 6 / 2	微細粒	エロッケ40%程度ある ブロッケ40%程度ある
67 灰オリーブ	7.5 Y 4 / 2	粘粒砂混じるシルト	往 0.5cm未満の微少な層理が見られる 同色粘土ブロック40%程度ある
68 オリーブ	5 Y 4 / 2	粘粒砂混じるシルト	往 0.5cm未満の微少な層理が見られる
69 黒	2.5 Y 6 / 3	粘-粗粒砂	ブロッケ45%程度ある ブロッケ10%程度ある
70 暗紅黄	5 Y 4 / 1	粘粒砂混じるシルト	往 0.68cm未満にじりあう
71 暗紅黄	2.5 Y 4 / 2	粘-粗粒砂	往 0.5cm未満の白色層少混入
72 暗紅黄	2.5 Y 6 / 3	粘粒砂混じるシルト	ブロッケ10%程度ある
73 暗紅黄	5 Y 4 / 1	粘粒砂混じるシルト	往 0.3cm未満の層理かに入る
74 オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粘粒砂混じるシルト	ブロッケ2.7%程度混入 植物遺体少混入
75 灰	2.5 Y 6 / 2	粘粒砂混じるシルト	往 0.8cm未満の層理少混入
76 オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粘粒砂混じるシルト	ブロッケ10%程度混入
77 オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粘粒砂混じるシルト	往 0.5cm未満の層理少混入
78 オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粘粒砂混じるシルト	往 0.5cm未満の層理少混入
灰	2.5 Y 6 / 2	粘粒砂	ブロッケ10%程度混入
79 オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粘粒砂混じるシルト	往 1 cm未満の層理少混入 植物遺体僅かに入る
80 オリーブ黒	5 Y 3 / 2	粘粒砂混じるシルト	往 1 cm未満の層理少混入
81 黒周	2.5Y 3 / 1	粘粒砂混じるシルト	ブロッケ10%程度混入
82 オリーブ黒	5 Y 2 / 2	粘粒砂混じるシルト	往 1 cm未満の層理少混入
83 オリーブ黒	5 Y 2 / 2	粘粒砂混じるシルト	往 0.5cm未満の層理少混入
84 黒	5 Y 2 / 1	粘粒砂混じるシルト	往 0.5cm未満の層理少混入 款質 植物遺体多く入る

#### 図 6-2 土層断面柱状図

それらの遺構の時期を明確に押えることができないが、古墳時代の遺構を切っていることや、前回の調査結果と照らし合わせて、古代から中世の水田耕作に関わる遺構と判断される。

調査区北西隅に位置する谷地形に起因して、今回の調査区では最も標高の低い水田区画においては、耕作土の堆積状況に、他の水田とは異なる状況が見られた。谷はもともと急傾斜を呈して北西方向に落込んでいたと見られるが、底部でさらにV字状の断面形を呈して急激に落込んでいた。その部分に粘性の強い黒色シルト層が堆積する。これは古墳時代の遺物包含層で、この中に多量の土器や木器が含まれていた。古墳時代遺物包含層より上では、多数の水田耕作土層が堆積する。

洪水砂層直下あたりまでの耕作土層には中世土器と古墳時代の遺物が混在する。谷部に造成された水田は、耕地面積が限られるのに加え、洪水砂の流入といった被害を受けやすかったと考えられる。時には洪水による被覆土を鋤きこみながら、時には意図的に土入れをして水田面のかさ上げと地力の回復を図るうちに、徐々に水田面が高くなっていたものとみられる。またその折々に谷の斜面を掘り込んで平坦面の拡張を図っているため、斜面の所々に階段状のステップが認められる。併せて谷の肩の部分には畔群が設けられていた。中世を通じて徐々に水田面がかさ上げされて、その間に最深部では 1.5 m 近い厚さで耕作土が堆積することになる。それでも周りの水田より一段低い状況だったため、近世のある時期にその部分をめがけ、図 6・柱状図⑨-26 層にみるような洪水砂の堆積が生じたとみられる。その結果、隣接する水田との比高差がなくなり、水田の区画にも変化が生じたと見られる。

調査区の西側では、かつての水田の地割が乱れている。これはおそらく旧谷地形の影響を受けたためとみられる。前回の調査でも調査区の南西隅を東から西に向けて蛇行気味に走る谷地形が検出されており、その延長と見られる肩のラインが今回の調査区の南端で検出されている。以上を勘案すると、前回および今回の調査区は、一連の調査で明らかとなった古墳時代集落の展開する微高地の先端近くにあたるとみられる。

## 第2節 古墳時代の遺構

基本層序で述べたように古墳時代の遺構は地山面で検出している。古墳時代遺構面でみられる旧地形は、東から西に向けて徐々に地盤が下がる。また1調査区の南西隅と北西隅では急激な傾斜を見せる谷地形を検出した。そのうち前者は上私部遺跡（その2）の調査で検出された旧流路北肩の延長部分である。また1調査区の西端部では西に向かって地盤が一段下がる状況が認められた。この壇状の落ちは中世以降の水田造成に伴って成形されたものであるが、旧地形の形状に起因することは明らかである。これらのことから今回の調査区は、南東方向から北西方向に伸びる微高地の先端部にあたると考えられる。

古墳時代遺構面では掘立柱建物13棟と竪穴住居1棟、柵・溝・井戸・土坑などを検出した。2調査区で検出した、南北方向指向する溝群は、上私部遺跡（その2）の調査で検出された、掘立柱建物群を伴う方形区画の西側を限る、南北方向溝群の北側延長部にあたるものである。それらの溝群のうち、最も東側に位置する溝の東肩に、溝と平行する柵の柱穴を検出したのも、前回の調査と同様である。柱穴や土坑等の遺構密度は、これら南北方向の溝群より東側で概して高い様子がみてとれる。そこでまず、南北方向溝群の東側と西側とに分けて、遺構検出状況の概要を述べる。

南北方向指向する溝群より東側では、掘立柱建物4棟〔1棟は上私部遺跡（その1）の調査で検出した「建物3」と一連のもの〕、竪穴住居1棟、井戸、土坑、ピットなどを検出した。また前回の調査で検出された方形区画の北側を限る、東西方向溝の延長部分を検出した。この溝は今回の調査区ではゆるやかに湾曲しながら北側に方向を転ずる。したがってこれらの区画溝は、前回の調査で検した掘立柱建物群の四周を完全に長方形に区画するものではないことが明らかとなった。つまり南北方向指向する溝と、東西から南北方向へゆるやかに方向を転じる溝とに挟まれた部分は、掘立柱建物群を伴う居住空間への出入り口にあたると考えられる。また溝が東西から南北へゆるやかに方向を転ずる箇所では、これに直行する方向で、平行する2条の溝があったことも明らかになった。それら平行する2条の溝を境に、その東側では掘立柱建物とそれに切られる竪穴住居、もしくはその可能性のある遺構が交錯するのに対し、西側の区画では掘立柱建物のみが検出される状況が見てとれる。

南北方向指向する溝群の西側では、掘立柱建物9棟〔1棟は上私部遺跡（その2）で検出した「建物19」と一連のもの〕、集水土坑、谷地形などを検出した。3間×5間の東西方向建物を最大とし、総柱建物2棟を含む。切り合いや方向などからみて、これらの建物は少なくとも2時期に分けられる。

建物の主軸方向や、それらの建物群の北側および東側に配された溝埋土からの遺物の様相から、南北溝群の西側で検出した建物のほとんどは、6世紀後半代に属するものとみられる。それらの北西側および南西側は谷地形に接しており、集落が構築された微高地の先端に当たる部分だったと考えられる。建物群の北側を区切る溝の中ほどで、土坑を3基検出した。そのうちの1基は長軸1m強で、中央に須恵器張と木桶が据えられており、集水機能を有していたものと想定される。次に種類ごとに検出した遺構の詳細を述べる。

### 1 竪穴住居

今回の調査では1棟の竪穴住居を検出した。その他にも土坑の項目で述べるが、12竪穴住居に近接する位置で、竪穴住居の可能性のある土坑を数基検出した。いずれもこれまでの上私部遺跡の調査で検出された竪穴住居に比べて規模が小さい。今回の調査区内でみると、竪穴住居もしくはその可能性がある土坑は、19溝よりも東の範囲に限られる。また前回の調査結果と併せてみても、集落の中心とみら

れる方形区画の西側を限る、南北方向溝群より西側では竪穴住居が展開しない状況がうかがえる。

## 12 竪穴住居（図8）

2調査区中央部やや東寄りで検出した。平面形は方形で、掘形の主軸方向は平均するとN-E°-W、一辺は約3.6mである。柱の心々距離は東西1.4m強、南北約1.2mと、東西方向にやや大きく、柱の位置は全体にやや西に寄る。壁溝は竪穴住居の南西角部分でのみ確認した。検出面から貼り床面までの深さは極めて浅く、10cm強で、特に西辺では壁の立ち上がりは検出できなかった。竪穴住居の北壁は、側溝削時に削平されたため部分的な検出にとどまるが、北辺から幅1m前後の溝が一条、北に向けて伸びるのを確認した。溝の西肩は住居西辺の延長線をなぞるように伸びており、両遺構は同じ計画性のもとに築かれたものと考えられる。溝は住居に伴う排水溝と考えられる。溝の掘形はわずかしか残存していなかったが、埋土は12竪穴住居埋土に似ており、それよりもやや有機物の含有量が少ない状況を認めた。12竪穴住居は、一辺の長さが従前の調査で検出された竪穴住居の中でも短く、小規模である。

C-C'断面で顕著なように、掘形底部には凹凸がある。これは地山の土質と関係するとみられる。調査区内で検出した地山はおむね、粘性の強い中～粗砂混じりの細粒砂～シルト層と、細粒砂混じり中～粗粒砂層からなり、それらが互層に堆積する状況が見られた。12竪穴住居はおむね粘性の強いシルト層上面で検出しており、それを掘り抜くと顔を出す中～粗粒砂層の上面をねらって、掘形の底面としている状況が見られた。その上面に凹凸があるため、必然的に掘形底部にも凹凸が生じたと考えられる。住居の底面は、貼り床を敷き均す際に平らにすればよく、掘形を掘削する際にはまず、粘性が強く、水分を含みやすいシルト層を掘り抜く事が優先されたことが伺える。

住居埋土から須恵器・甕、土師器甕等の破片を検出した。そのうち時期比定が可能なものを中心に実測した。北辺から北へ伸びる溝から遺物は出土しなかった。

## 2 掘立柱建物

今回の調査では13棟の掘立柱建物を検出した（2棟は以前の発掘調査で、部分的に検出されたものの延長部分）。前回の調査で検出された古墳時代集落の中心域とみられる、掘立柱建物群を伴う方形区画の北側と、西側に当たる部分で掘立柱建物を検出した。南北方向溝群と、東西から南北へ緩やかに方向を転じる溝とに挟まれた部分には掘立柱建物はなく、方形区画への出入り口にあたるとみられる。

建物主軸方向の北に対する振れ幅の共通性が同時期に共存した建物群のひとつの根拠となるため、東西棟・南北棟ともに北に対する建物の東西への振れを主軸方向の振れとして示しておく。なお、建物柱穴断面実測図の土層観察については、一括して土色注記表を掲載する。

## 建物1（図9）

2調査区東部で検出した東西4間、南北2間以上の掘立柱建物である。建物の北側辺は調査区外に統く。これまでの上私部遺跡の調査で検出された掘立柱建物の中で、4間四方や4間×1間の建物は検出されていない。したがって4間を桁行ととらえると、梁行は2もしくは3間である可能性が高いことになる。また梁行が4間の建物では、上私部遺跡（その2）の調査で検出された5間×4間の建物が1棟あるのみである。ただこの建物の場合も梁行の柱間が狭いため、平面積でみれば5間×3間のものとほぼ等しい。今回の調査で検出した建物1の4間を梁行とした場合、前回調査の5間×4間の建物よりさらに一回り大きなものになる。これらのことから、おそらく建物1は4間×3間の建物であろうと考える。桁行・梁行の柱間を比較すると、上私部遺跡（その2）の調査で検出された建物10に近似する。ただし両者の主軸方向の振れは一致しない。

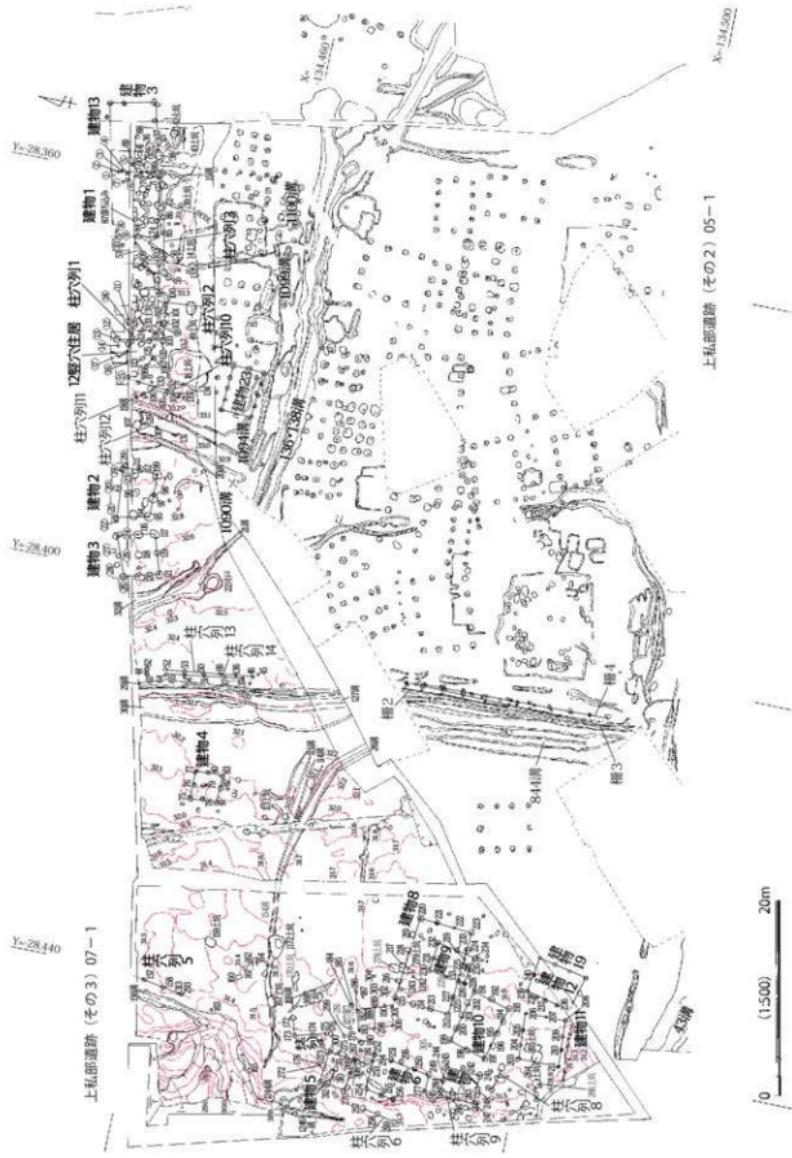
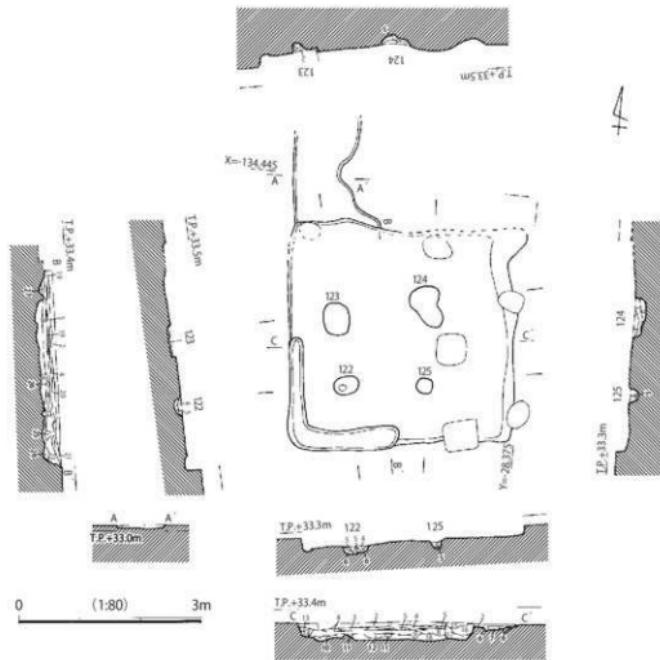


図7 古墳時代遺構配置図



125穴住居		
1 黒灰	10Y R 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
2 黒灰	10Y R 3 / 2	粗粒砂混じり細粒砂
3 黒灰	10Y R 3 / 1	中粗粒砂混じり細粒砂
4 黒灰	2.5 Y 3 / 1	中粗粒砂混じり細粒砂
5 黒灰	2.5 Y 3 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂
6 噴灰黄	2.5 Y 4 / 2	中～粗粒砂混じりシルト
7 灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じり粗粒砂
8 噴灰黄	2.5 Y 4 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂
9 灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じり粗粒砂
10 オリーブ黒	5 Y 3 / 1	細粒砂混じり中～粗粒砂
11 噴灰白	5 Y 4 / 2	中粗粒砂混じり中～粗粒砂
12 噴灰黄	2.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂
13 黒灰	2.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じり細粒砂
14 噴灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂
15 噴灰	10Y R 4 / 1	中粗粒砂混じり粗粒砂
16 黄灰	2.5 Y 4 / 1	細粒砂混じり粗粒砂
17 灰	5 Y 4 / 1	細粒砂混じり中～粗粒砂
18 黄灰	2.5 Y 5 / 3	細粒砂混じり中～粗粒砂
19 噴灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト
20 噴灰	2.5 Y 4 / 1	中粗粒砂混じり粗粒砂
21 オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じり粗粒砂
22 灰	5 Y 4 / 1	中粗粒砂混じり粗粒砂
23 黄灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂
24 灰	7.5 Y 4 / 1	中～粗粒砂混じり細粒砂
25 オリーブ灰	5 G Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂
26 オリーブ灰	2.5 G Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂
27 オリーブ灰	2.5 Y 4 / 3	中～粗粒砂混じり粗粒砂
122～125柱穴		
1 黒灰	10Y R 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂
2 黒灰	10Y R 3 / 1	中粗粒砂混じり粗粒砂
3 黒灰	2.5 Y 3 / 1	中粗粒砂混じり粗粒砂
4 噴灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂
5 黑灰	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂
6 黄灰黄	10Y R 4 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂
7 黒灰	10Y R 3 / 1	中～粗粒砂混じり粗粒砂
地山のシルトブロック入る		
地山の粗粒砂・シルトブロックに		地山の粗粒砂が入る
地山の粗粒砂ブロックと5に似た粗粒砂ブロックが混ざり合う		6より粗粒砂の含有量多い
地山のシルトブロックと地山の中～粗粒砂ブロックが混ざり合う		6より粗粒砂の含有量多い
地山の粗粒砂ブロックに灰色の細粒砂ブロックが僅かに入る		地山の粗粒砂が入る
地山の粗粒砂ブロックに灰色の細粒砂ブロックが僅かに入る		地山の粗粒砂が入る
地山の粗粒砂ブロックに13の粗粒砂ブロックが入る		地山の粗粒砂が入る
炭化物層かに入れる		炭化物層かに入れる
炭化物層かに入れる		炭化物層かに入れる
12に似るがそれより粘性低い		
地山の粗粒砂ブロックと灰色細粒砂ブロックが混ざり合う		地山の粗粒砂ブロックと灰色細粒砂ブロックが混ざり合う
地山の中粗粒砂ブロックと灰色細粒砂ブロックが混ざり合う		地山の中粗粒砂ブロックと灰色細粒砂ブロックが混ざり合う
地山の再堆積層		地山の再堆積層

図 8 12 竪穴住居実測図

建物の南側辺の長さは 6.4 m、東・西側辺の 2 間分の長さは 3.9 m、床面積は 24.9 m<sup>2</sup> 以上である。主軸方向の振れは N-9°-W である。この建物の南側辺と、建物 3・13 および柱穴列 2 の南側辺とはほぼ同一のライン上に乗る。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、わずかに隅丸方形のものが含まれる。平面形が長楕円形の柱穴では柱痕が認められず、断面形状でみると壁面の立ち上がりがゆるやかな部分が認められるので、建物の廃絶後に柱が抜き取られた可能性がある。深さはコーナーに位置する柱穴で約 30 cm とやや深く、それ以外は 20 cm 前後と、概して浅い。68 柱穴から土師器の細片が数点出土したが、時期の特定にはいたらなかった。ただこの建物の南東隅柱に切られる 15 溝から比較的多量の遺物が出土している。したがって 15 溝出土遺物の時期が、この建物の時期の上限を示すといえる。

#### 建物 2 (図 9)

2 調査区中央部で検出した東西 2 間、南北 2 間の総柱建物である。後で述べる、2 間 × 2 間の総柱建物である建物 3 とは隣り合う。北側辺は 5.1 m、南側辺は 4.4 m で、北側辺がやや長い。東側辺・西側辺はいずれも約 3.5 m と、長さはほぼ等しいが、東側辺の柱穴列が他の南北方向の柱穴列より西に振っている。そのため平面形が台形を呈し、全体にややいびつな印象を受ける。建物の床面積は 16.6 m<sup>2</sup>、主軸方向の振れは N-3°-E である。

柱穴の平面形は楕円形もしくはややいびつな隅丸方形で、柱穴の一辺もしくは長軸は 40 ~ 80 cm とややばらつきがある。深さは、コーナーに位置する柱穴で 50 ~ 60 cm と若干深くなる傾向がみられるものの、おむね 40 cm 前後におさまる。東側辺の柱穴列では 2 基の柱穴が別の柱穴で切られるが、切っている方の柱穴と対応する柱穴が周囲に認められないことから、それらは他の建物を構成するものではなく、建物 2 の柱穴を補修もしくは補強するために設けられたものの可能性もある。95 柱穴は掘形を段掘りして柱材を落とし込み、固定している。また 199・98・111 柱穴など、柱穴掘形の端に柱材を立て掛けで固定した柱穴が認められる。(29)・99 柱穴で柱材が残存していた。

199 柱穴で土師器片、(21) 柱穴で須恵器の細片、98 柱穴で外面に平行叩き、内面に同心円文の当て具痕跡が認められる須恵器表の胸部片を各 1 点出土したが、時期の特定には至らなかった。

#### 建物 3 (図 10)

2 調査区中央部で検出した東西 2 間、南北 2 間の総柱建物である。前述の建物 2 の西隣に位置する。東西 4.1 m、南北 3.8 m と東西にわずかに長い。この建物の南側辺と、建物 1・13 および柱穴列 2 の南側辺とはほぼ同一のライン上に乗る。建物の床面積は 15.6 m<sup>2</sup>、主軸方向の振れは N-14°-W である。

柱穴の平面形は隅丸方形もしくはややいびつな隅丸長方形で、柱穴の一辺もしくは長軸は 40 ~ 80 cm とややばらつきがある。柱痕の直径は 20 cm 前後である。深さはコーナーに位置する柱穴で、40 cm 前後と若干深い傾向があるものの、それ以外はおむね 20 ~ 30 cm 前後におさまる。

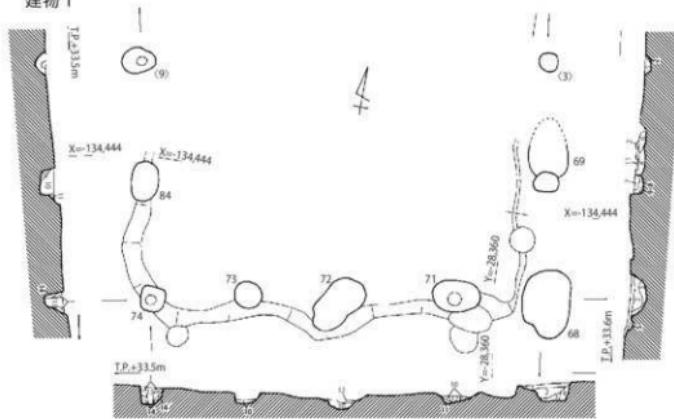
120 柱穴から土師器・須恵器の細片が各 1 点、121 柱穴から須恵器と土師器の細片が数点ずつ出土した。内、からうじて実測可能な須恵器と土師器を各 1 点実測した。

#### 建物 4 (図 10)

2 調査区西部で検出した東西 2 間、南北 2 間の総柱建物である。東西 2.8 m、南北 2.7 m とほぼ正方形で、床面積は 7.6 m<sup>2</sup> である。間数は同じであるが、建物 2・3 と比べて柱間、柱穴の大きさ、柱痕径はいずれも小さく、床面積は半分弱である。主軸方向の振れは N-3°-W である。

柱穴の平面形はいびつな隅丸方形もしくは楕円形で、一辺もしくは長軸の長さはおむね 30 ~ 60

建物 1



建物 2

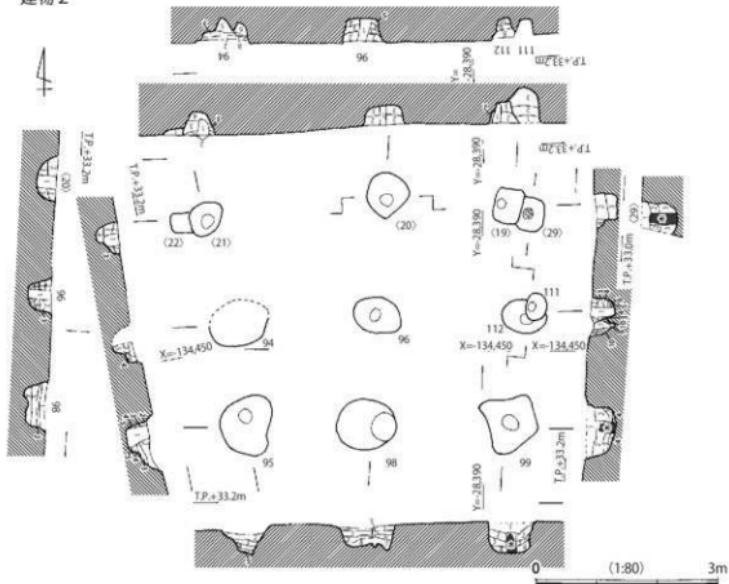
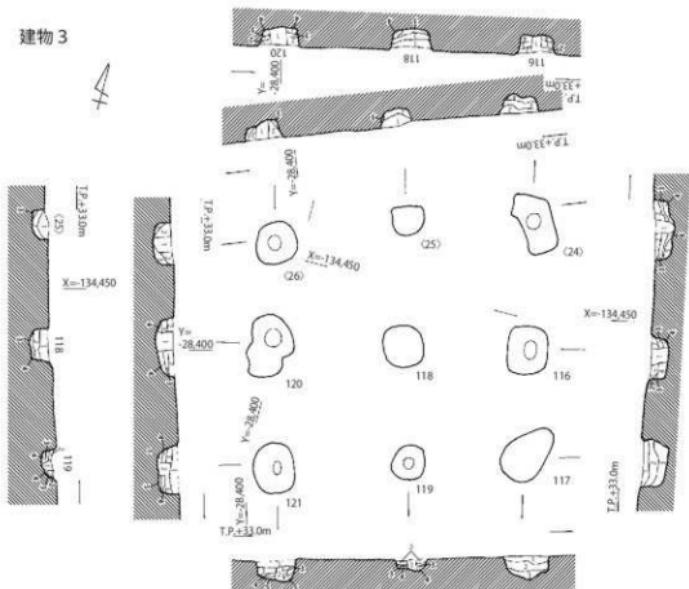


図9 建物 1・2実測図

建物 3



建物 4

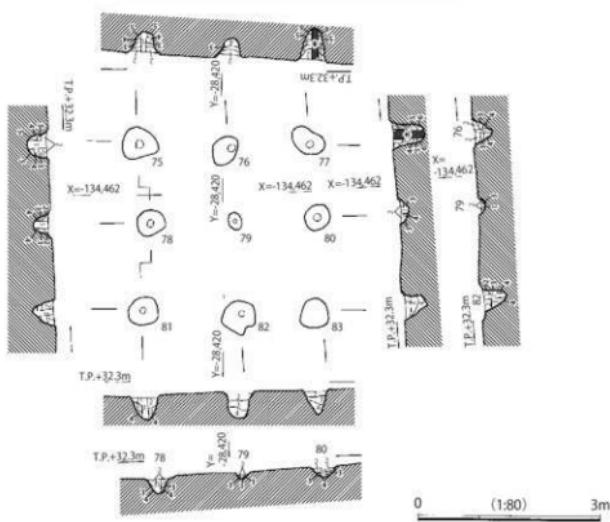


図 10 建物 3・4 実測図

cmに含まれる。ただ中央の79柱穴は長軸30cm、短軸20cm強と、他に比べて極端に小さい。柱痕径は10cm前後である。深さは北側辺および南側辺の柱穴がやや深く、おおむね40~50cmに含まれるのに対し、それ以外の柱穴は10~30cmと浅い。

建物4の南側に位置する26溝は、上私部遺跡（その2）の調査で検出された南北溝群の西端に位置する溝の延長部にあたり、南北方向からゆるやかに東西方向へ方向を転じるとみられる。南北方向を指向する29・30・127溝より西側に位置する建物のうち、26溝を経て154溝にいたる、東西方向溝の北側に位置する唯一の建物である。この東西方向溝より北側における遺構の分布密度は概して低いが、建物4の存在からその北側にも居住域が広がっていた可能性が残る。76・77・78柱穴で柱材が残存していた。

#### 建物5（図11）

1調査区中央西寄りで検出した東西2間、南北2間の総柱建物である。東西3.3m、南北2.8mと東西にやや長い。床面積は9.2m<sup>2</sup>で建物4よりはやや大きいが、概して小規模な部類に入る。主軸方向の振れはN-6°-Eである。柱穴の平面形は不整形な隅丸方形および円形で、一辺もしくは長軸の長さはおおむね50~60cmに含まれる。柱痕の直径は約20cm。建物5を構成する柱穴を切るか、接している柱穴に関しては、他の建物や柱穴列を構成する可能性もある。ただそれらは、他のピットと明確な規則性をもって関連付けられなかったため、修復もしくは補強のために設けられたものである可能性を勘案して平面図に含めた。

西側辺中央の柱穴は、271柱穴掘形の残存がわずかなことからみて、削平された可能性も考えられる。ただ西側辺の柱穴列に並ぶ位置で、北西角の柱穴に近い位置に312柱穴の掘形がわずかに残存することから、これがそれに換わる可能性が高いと考えた。柱穴の残存深度は10~40cmとややばらつきがあるが、柱穴底部の標高を見ると、四隅の柱穴がやや低いものの、それ以外はおおむね等しい。

出土遺物は273柱穴から出土した柱材のみである。

#### 建物6（図11）

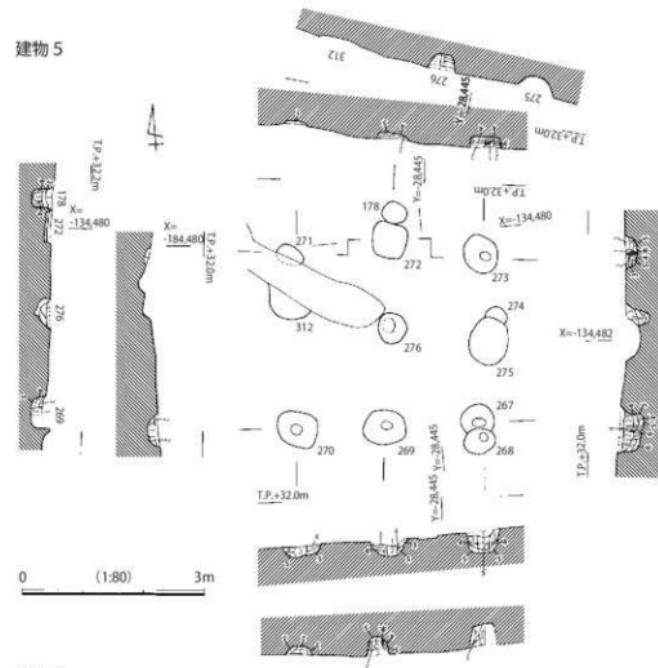
1調査区西寄りで検出した南北4間、東西2間の掘立柱建物である。建物5の南隣に西側辺をそろえるように並んで位置するが、こちらの柱穴列がわずかに東に寄る。建物8からは6.4mほど離れるが、長軸方向を直交させ北側辺がそろう。主軸方向の振れはN-8°-Eである。南北5.9m、東西3.7m、やや平行四辺形気味の平面形で、床面積は21.8m<sup>2</sup>である。南西角部分の柱穴は、中世段階の棚田造成の際に削平されたとみられる。柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形および隅丸長方形で、一辺40~60cmである。柱痕の直径は約20cm。柱穴底部の標高は四隅の柱穴が他に比べて15~20cmほど低いものの、それ以外はおおむね等しい。254柱穴は底に板材を敷き、その上に柱を据えたとみられる。

東側辺・西側辺の柱間に長短があり、不整合な印象を受けるが、隅柱からの一間分と北側辺・南側辺の柱間とはおおむね1.8m前後に収まる。つまり249-250柱穴間・252-251柱穴間・254-255柱穴間の距離と、北側辺・南側辺の柱間の長さはおおむね等しい。このように柱を配置すると、東側辺・西側辺の中央の柱間に間隔が埋まることになる。そのため中央に256・295柱穴を配したのではないかと考えられる。したがって削平されて欠落した柱穴は、南西隅柱とその隣の柱の計2基分だったと考える。出土遺物は254柱穴から出土した礎板のみである。

#### 建物7（図12）

1調査区南半部西寄りで検出した南北2間、東西2間の掘立柱建物である。南北3.7m、東西2.9m

建物 5



建物 6

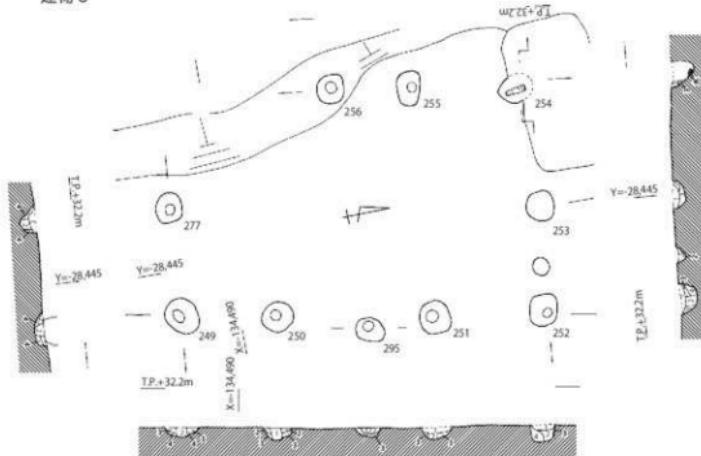
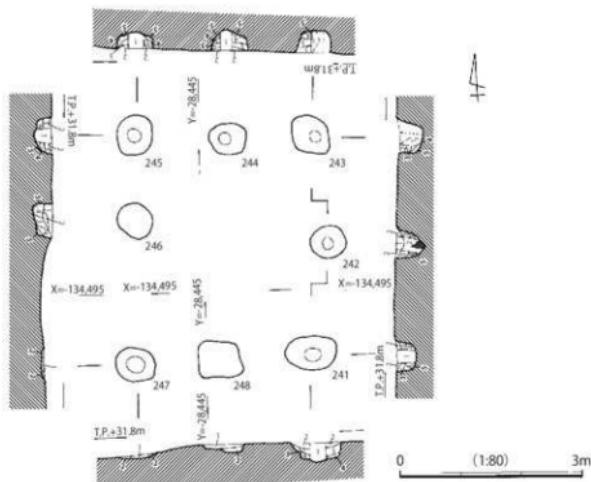


図 11 建物 5・6実測図

建物 7



建物 8

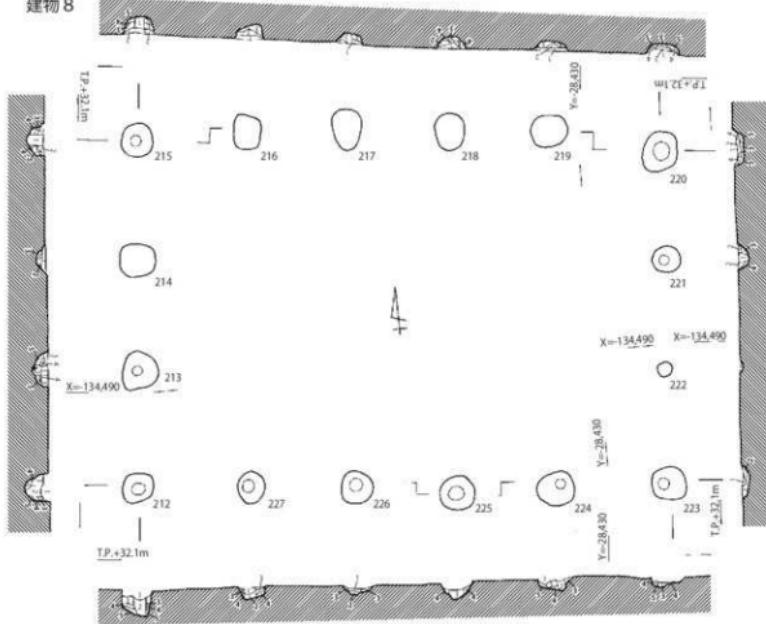


図 12 建物 7・8 実測図

と南北にやや長く床面積は 10.7 m<sup>2</sup>、主軸方向の振れは N - 2° - E である。柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形ないし隅丸長方形で、一辺の長さはおおむね 40 ~ 60 cm に含まれ、柱痕の径は 20 ~ 30 cm である。

建物の床面積に比して、柱穴および柱痕の規模がやや大きい印象を受ける。建物の南西隅柱の部分は、中世における棚田造成の際に削平されて残存深度はわずかだが、柱穴底部の標高でみるとむしろ 248 柱穴の方がもとは掘削深度がやや浅く、それ以外はほぼ等しかったとみられる。したがって隅柱だけ柱穴を深めに掘り、柱を据え付けるということとも無かったようだ。

建物 5・建物 6 間と同じような距離で建物 6 の南側に位置するが、建物 7 はほぼ 1 間分、2 棟より東に寄る。242 柱穴より柱材が、243 柱穴から土師器の細片 2 点が出土した。土師器はいずれも摩滅しており器種等の判別はできなかった。

#### 建物 8（図 12）

1 調査区南半部東寄りで検出した東西 5 間、南北 3 間の掘立柱建物である。東西 8.5 m、南北 5.6 m、床面積は 47.6 m<sup>2</sup> で、これまでの上私部遺跡の調査で検出された中でも最大規模の建物である。主軸方向の振れは N - 5° - E である。建物 6 とは主軸方向を直行させつつ、建物北側辺の並びを揃えるように位置する。建物 8 が位置する部分は、中世以降に行われた水田造成の際に大きく削平を受けたと見られ、柱穴の残存深度は東側辺と南側辺でとりわけ浅い。ただ柱穴底部の標高で比較すると、西側辺でやや低く、それ以外ではほぼ等しい。

柱穴の平面形は隅丸方形もしくは梢円形で、一辺もしくは長軸の長さは 40 ~ 60 cm に含まれる。柱痕の径は 20 ~ 30 cm である。223・226 柱穴は掘形を段掘りして柱材を落とし込み、固定している。

前回の調査で検出された、古墳時代集落の中心部と見られる掘立柱建物群の中にも、これと同規模の掘立柱建物が数棟検出されている。南北方向溝を挟んでその西側にも、大型の掘立柱建物が存在したことが明らかとなった。

218・224 柱穴から土師器の細片が各 1 点出土したが、時期比定できるものはなかった。

#### 建物 9（図 13）

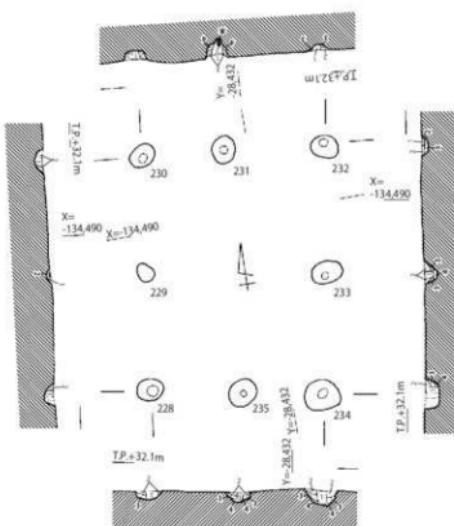
1 調査区南半部東寄りで検出した南北 2 間、東西 2 間の掘立柱建物である。南北 3.9 m、東西 2.9 m と南北にやや長く、床面積は 11.3 m<sup>2</sup> である。建物 8 と主軸方向を直交させつつ、重なるように位置するが、床面積は建物 8 の 4 分の 1 に満たない。この建物の南側辺は建物 6 の南側辺とほぼ同じライン上に乗る。主軸方向の振れは N - 9° - E である。柱穴底部の標高を比較すると、232・229 柱穴がやや高いのを除けば、ほぼ等しい。

柱穴の平面形はややいびつな梢円形もしくは隅丸方形で、長軸ないし一辺の長さは 30 ~ 50 cm に含まれる。柱痕の直径は 10 ~ 20 cm で、柱穴及び柱痕の規模は他に比べて概して小さい。231 柱穴は柱の部分が若干沈み込んでいる。230 柱穴で土師器細片と須恵器杯の破片が各 1 点、232 柱穴から土師器細片 3 点と須恵器細片が 1 点、231 柱穴では柱材を検出したが、時期比定の可能なものは無かった。

#### 建物 10（図 13）

1 調査区南寄りで検出した東西 4 間、南北 2 間の掘立柱建物である。東西 5.7 m、南北 4 m で床面積は 22.8 m<sup>2</sup> である。主軸方向の振れは N - 14° - E である。建物 9 の主軸方向とおおむね直交し、建物 9 の西側辺と建物 10 の東側辺の柱筋がほぼそろう。南北の柱間に比べて東西の柱穴の間隔が狭く、北側辺・南側辺の長さは南北の柱間のちょうど 3 間分に相当する。

建物 9



建物 10

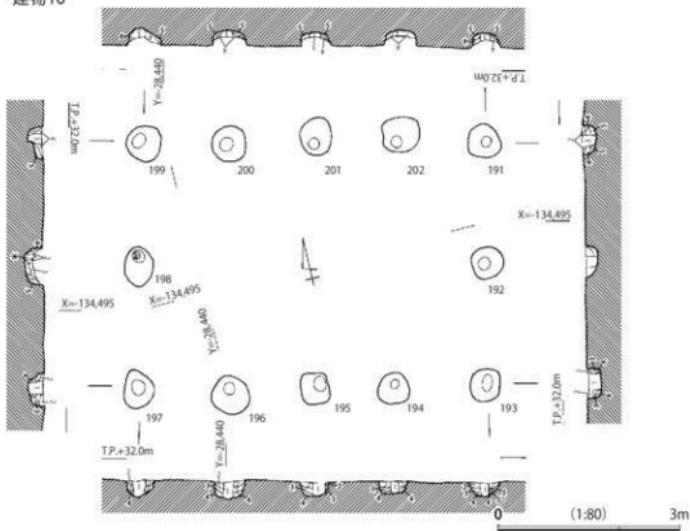


図 13 建物 9・10 実測図

柱穴の平面形はいびつな楕円形で、長軸の長さは40～60cm、柱痕の径は約20cmである。199柱穴は柱穴掘形を段掘りして柱材を落とし込み、固定している。また198柱穴は柱を掘形の壁にもたせかけて固定している。198柱穴から柱材・須恵器細片1点と土師器細片2点、199柱穴から須恵器片と土師器細片を各1点、200柱穴から土師器細片を1点検出した。

#### 建物11(図14)

1調査区南端部で検出した東西3間、南北2間の掘立柱建物で、東西4.8m、南北4.2mで床面積は20.2m<sup>2</sup>である。主軸方向の振れはN-1°-Eである。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、柱穴の直径もしくは長軸は20～60cm、柱痕の径は10～20cmで、柱穴の規模は他に比べて概して小さい。西側辺中央に位置する柱穴は土坑掘削時に削平され、欠落する。南側辺のすぐ南側は、上私部遺跡(その2)調査区から続く谷の落ち口にあたっている。後述する建物12とともに、古墳時代集落が乗る微高地先端の、南端に位置する。床面積の大きさも、建物12に近いが、両者の主軸方位は若干異なる。柱穴からの出土遺物はなかった。

#### 建物12(図14)

1調査区南端部で検出した南北3間、東西2間の掘立柱建物で、今回の調査区と上私部遺跡(その2)調査区にまたがる。建物の東側辺と南側辺は、上私部遺跡(その2)の調査で「建物19」として調査している。東西方向は北側辺3.5mに対して南側辺が3.2mとやや短く、南北方向は東側辺5.3mに対して西側辺4.9mと短い。平面形は台形状でややいびつである。柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は直径25～40cm、深さは20～30cmである。柱痕の直径は約10cmで、主軸方向の振れは東側辺と西側辺で平均するとN-10°-Eである。柱穴からの出土遺物はなかった。

#### 建物13(図15)

2調査区東端で検出した東西3間、南北3間の掘立柱建物で、今回の調査区と上私部遺跡(その1)の調査区にまたがる。建物の東半分は(その1)の調査で「建物3」として調査している。北東角はほぼ90度だが、南東隅は鈍角、南西隅は鋭角気味であり、平面形は台形気味を呈するとみられる。東西5.1m、南北4.6mで東西にやや長く、床面積は23.5m<sup>2</sup>である。

柱穴の平面形は円形もしくはいびつな楕円形で、直径もしくは一边の長さは40～60cmである。隅柱の38柱穴は突出して大きいが、柱痕が認められないことから、柱を抜き取る際に大きく掘り窪められたものと考える。主軸方向の振れはN-7°-Wで、建物1と南側辺をそろえて並ぶ位置である。前回、今回の調査を通じて出土遺物はなかった。

### 3 柱穴列

何らかの規則性に則って関連付けられる柱穴群のうち、明らかに掘立柱建物となるものを除いた柱穴群を「柱穴列」としてとらえる。したがってその中には、前回の調査で検出した柵2・3・4の延長部分にあたり、柵ととらえられるもの、配置が不完全なため断定はできないが、おそらく建物の一部になるとみられるものなどが含まれる。柱穴相互の関係をより明確にできるよう、柵としてみる場合には横方向のプレ幅が小さく、柱穴の間隔がより均一なものに限定するよう努めた。なお柱穴列断面実測図の土層観察については、一括して観察表を掲載する。

#### 柱穴列1(図15)

2調査区東寄りで検出した。柱穴がL字状に連続して並んでおり、掘立柱建物の一部とみられるが、東側辺にあたる柱穴列を特定することができなかった。柱間の距離や並びが不揃いになるが、1024・

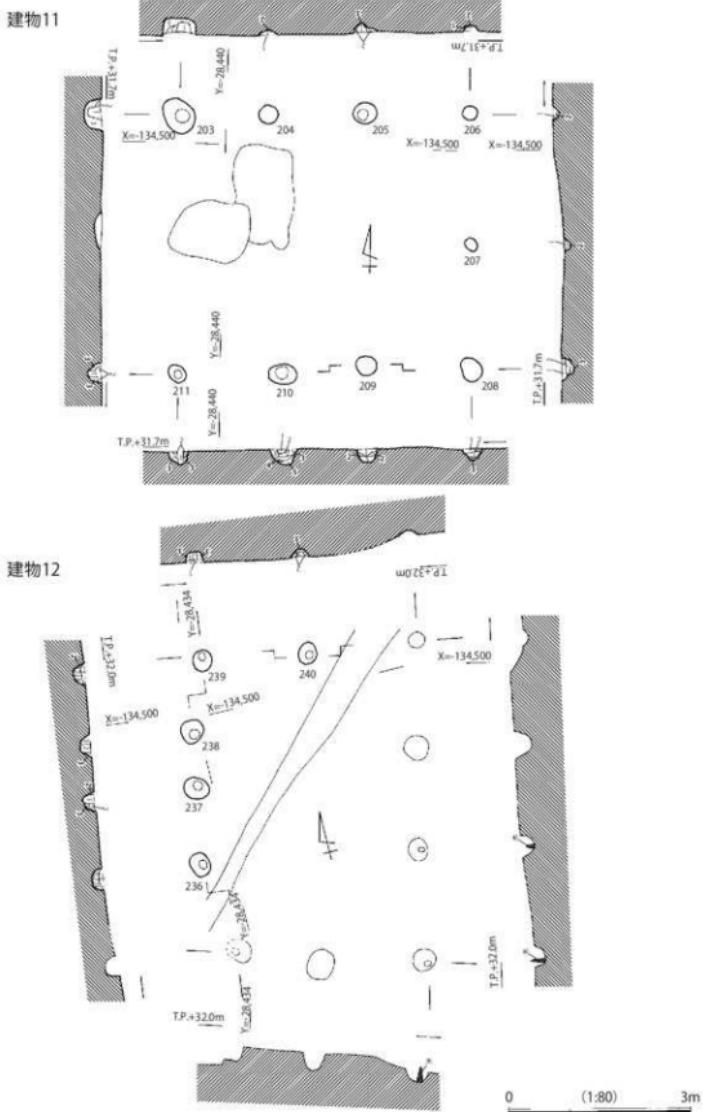
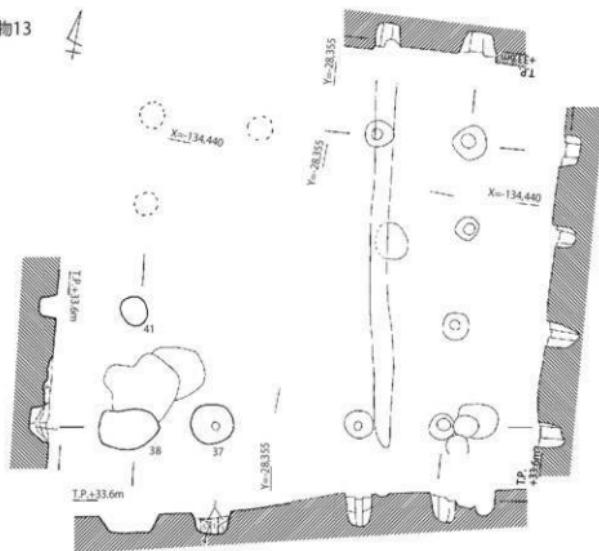


図 14 建物 11・12 施測図

建物13



柱穴列 1

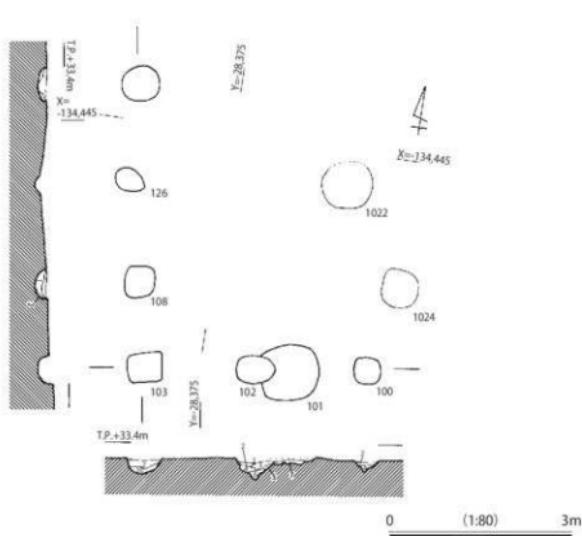


図 15 建物 13・柱穴列 1 実測図

1022 柱穴がそれにあたる可能性もある。そうであれば東西2間、南北3間以上の南北棟ととらえられる。東西方向に伸びる部分が柱穴列3とほぼ並列する。

南北4.7m、東西3.7mで、柱間は南北が1.6mなのに対し、東西の柱間が1.8mとやや大きい。主軸方向の振れはN-9°-Wである。柱穴の平面形は梢円形もしくは隅丸方形で、長軸もしくは一辺の長さは40~60cmである。108柱穴で土師器細片を1点検出したが、時期比定はできなかった。

#### 柱穴列2(図16)

2調査区東部で、柱穴列1に近接する位置で検出した。92柱穴が、柱穴列1に含まれる101柱穴もしくは102柱穴で切られており、柱穴列1に先行するものである。つまり柱穴列1は、柱穴列2廃絶後にやや位置をずらして設けられたものと考えられる。東西4間(6.3m)、南北1間(1.5m)以上と見られ、東西の柱間には1.4~1.8mとややばらつきがみられる。南北方向の柱間も勘案すると、1間1.5m前後で柱を配置したものと見られる。主軸方向の振れはN-12°-Wである。柱穴の平面形は梢円形もしくは隅丸方形で、長軸もしくは一辺の長さは35~60cmである。

柱穴が逆L字状に連続して並んでいること、柱穴列の東西列と建物1の南側辺の柱筋がおおむね通っていることから、建物1に並立する掘立柱建物の一部である可能性が高いが、西側辺にあたる柱穴を検出しなかった。これが東西4間の掘立柱建物に伴うものだとすると、建物1の東西長と似た規格のものということができる。110柱穴から須恵器杯身の口縁部の破片が出土した。細片のため実測できなかつたが、受部は上向き加減で直線的に伸び、下面にやや強い回転ナデを施す。立ち上がりはやや内傾し、全体に器壁は薄く、受部・口縁端部はいずれも丸くおさめ、華奢な印象を受ける。

#### 柱穴列3(図16)

2調査区東部で、建物1や柱穴列1・2に近接して位置する。東西方向に3間伸びる全長5.6mの柱穴列で、柱穴列1の東西方向列の延長線上に乗る。中央の柱間がやや長く2.6mあり、それ以外は1.5mである。柱穴の平面形は円形およびいびつな隅丸方形で、直径ないし一辺の長さ35~60cmである。主軸方向はN-12°-Wで、柱穴列1・2と近似する。出土遺物はなかった。

#### 柱穴列4(図16)

1調査区中央北寄りで検出した。南北2間(3.3m)、東西1間(1.75m)の矩形に並ぶ柱穴列で、主軸方向が柱穴列7とほぼ一致する。154溝の南側で検出した柱穴列もしくは掘立柱建物群の中で、最も北側に位置する。後述する柱穴列7とは西側辺の柱筋を揃えて南北に並立する位置関係である。

おそらく掘立柱建物の一部と考えられるが、建物全体の規模は不明である。ただ柱穴列7と同様、建物の東側がより強く削平されているととらえるなら、さらに東へ柱穴列が伸びていた可能性もある。加えて南側にも延長していた可能性がある。柱間は東西1.65m、南北1.75mで主軸方向はN-12°-W。柱穴の平面形は円形もしくはいびつな梢円形で、直径もしくは長軸は35~50cm、柱痕の径は10cm弱である。出土遺物はなかった。

#### 柱穴列5(図16)

1調査区北端部で検出した。南北方向を指向し、流末が調査区北西隅の谷にいたる156溝の東肩に平行して南北に2間伸び、全長は約4mである。293柱穴から南に2間分延長したところに163柱穴があること、157柱穴が調査区北端際にちかいことから、156溝の東肩にそって南北にさらに延長する柵の一部である可能性が高い。柱間は2mで主軸方向はN-9.5°-W、柱穴の平面形は円形で直径は30~40cmである。出土遺物はなかった。

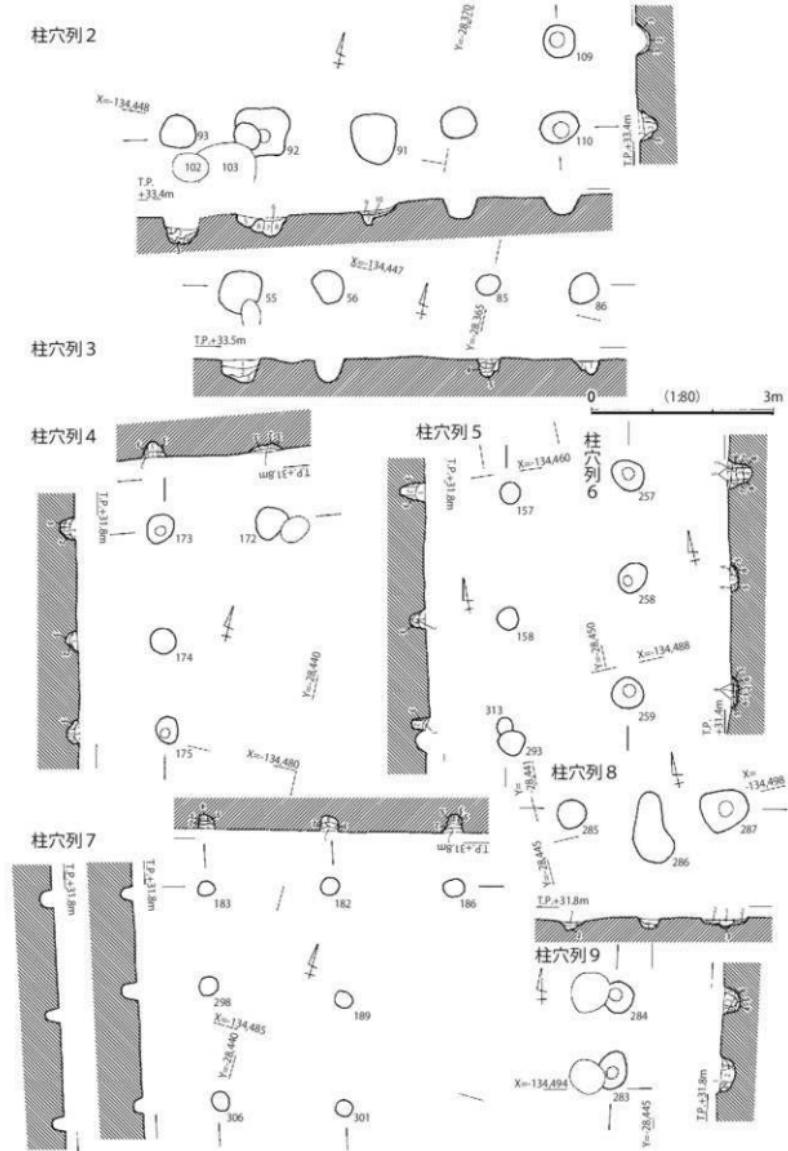


図 16 柱穴列 2 ~ 9 対測図

#### 柱穴列6（図16）

1 調査区中央西端で検出した。建物6の西側辺に平行して西側に位置する。南北に2間伸び、全長は3.5mである。柱間は1.8mで、建物6の西側辺の柱間より長い。主軸方向はN-12°-Eで、建物6・9・10・12などに近似する。位置的にみて、建物6に伴う柵の可能性がある。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で、直径は45~55cm、柱痕の径は10cm前後である。出土遺物はなかった。

#### 柱穴列7（図16）

1 調査区中央で検出した。おそらく東西2間(4.05m)、南北2間(3.55m)の総柱建物と見られるが、そうであれば欠落する柱穴が複数あるため、建物としては完結しない状態である。これより東側では遺構の検出密度が極端に低いため、もともとこの部分の標高が周囲よりもやや高く、水田造成の際に強い削平を受けたことが考えられる。したがって東西方向の柱穴列はさらに東に伸びる可能性もある。柱穴の直径は25~35cmと概して小さい。東西方向の柱間2.05m、南北方向の柱間は1.80mである。主軸方向はN-19°-Wで、西側辺は柱穴列4の南北柱穴列と柱筋が通る。298柱穴から須恵器高杯の杯部破片が出土した。

#### 柱穴列8（図16）

1 調査区南西部で検出した東西2間(2.5m)の柱穴列で、柱間は1.25m。建物7・建物10南側辺の南側に位置する。主軸方向はN-14°-Eで柱穴列6と近似する。出土遺物はなかった。

#### 柱穴列9（図16）

1 調査区南部西寄りで検出した南北方向を指向する柱穴列である。いずれも建物7西側辺の柱穴に切られている。したがって、柱間の長さや主軸方向は建物7と一致する。これらの東側には他にも多数のピットが散在することから、柱穴列9とセット関係をもち、建物7に先行する掘立柱建物があった可能性もあるが、柱間や柱筋の通りから、これらと明確に関連付けられるものを特定できなかった。出土遺物はなかった。

#### 柱穴列10（図17）

2 調査区中央東寄りで、19溝に平行してその東側に位置する。南北方向に3間(4.3m)並ぶ。これらの柱通りに対してやや東に寄るが、〈15〉ピットに連なってさらに北側に延長する可能性もある。南北方向を指向する29溝や156溝の東側でも同様の柱穴列を検出していることから、それらは柵の痕跡と考えられる。主軸方向はN-3.5°-Eで、柱穴列10の南側に位置する、上私部遺跡(その2)で検出した「建物23」の西側辺延長上に乗る。柱穴の平面形はややいびつな隅丸方形で、一辺の長さは約30cm、柱痕の径は10cm前後と概して小さい。132柱穴から土師器の細片が1点出土したが、時期比定はできなかった。

#### 柱穴列11（図17）

2 調査区中央東寄りで、柱穴列10に先行してほぼそれと同じ位置に設けられていた柵の痕跡と考えられる。2間(3.7m)分を検出した。柱穴列10と同様、上私部遺跡(その2)で検出した「建物23」の西側辺延長上に乗る。柱穴の平面形はややいびつな楕円形もしくは隅丸方形で、長軸もしくは一辺の長さは35~80cmとややばらつきがある。柱痕径は20cm前後である。出土遺物はなかった。

#### 柱穴列12（図17）

2 調査区中央やや東寄りで、20溝に平行してその東側に位置する。南北方向に2間(3.8m)検出したが、130-131柱穴間の距離が間違であり、129-130柱穴間の距離を勘案すると、全長は3間

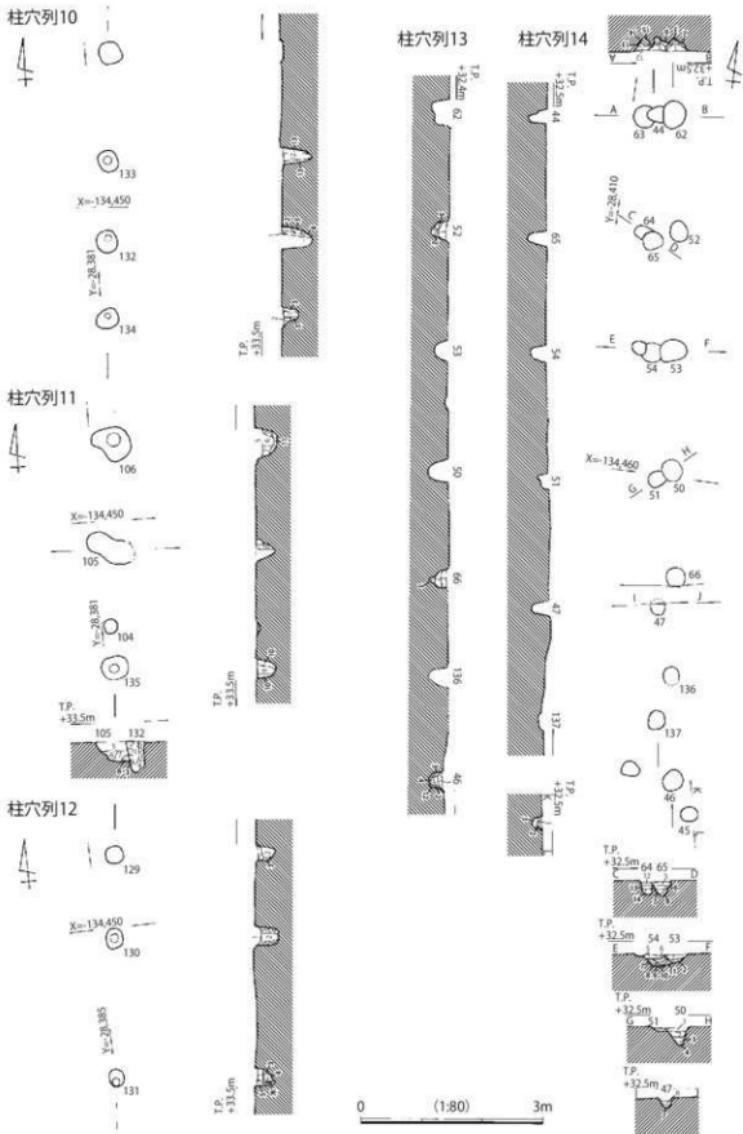


图 17 柱穴列 10 ~ 14 実測図

分に相当する。20 溝とともに、調査区北側へさらに延長する可能性がある。柱穴の平面形は一辺 20 ~ 30 cm の隅丸方形で、柱痕径は約 10 cm と概して小規模である。出土遺物はなかった。

#### 柱穴列 13 (図 17)

2 調査区西寄りで 29 溝に平行してその東側に位置する。今回の調査区に限れば南北方向に 6 間 (10.9 m) 並ぶ。柱間の距離は平均で 1.85 m である。溝の延長に伴い、柱穴列も北に延長する可能性が高い。また南側の延長は、上私部遺跡（その 2）の調査で検出された「柵 2・3・4」のいずれかに該当する。柱穴の切り合いからみると、「柵 3」と一連ものである可能性が高いと考える。

柱穴の平面形は梢円もしくはややいびつな隅丸方形で、長軸ないし一辺の長さは 20 ~ 45 cm と概して小さい。45 柱穴は 46 柱穴に近接しており、補修もしくは補強のために設けられた可能性がある。62 柱穴から土師器の細片が 1 点出土したが、時期比定はできなかった。

#### 柱穴列 14 (図 17)

2 調査区西寄りで、29 溝に平行してその東側に位置する。柱穴列 13 に先行して設けられたもので、柱間の距離は平均 2.0 m と柱穴列 13 よりやや長い。溝の延長に伴ってさらに北へ延長する可能性が高い。また南側の延長は、上私部遺跡（その 2）の調査で検出された「柵 2・4」のいずれかに該当すると考えられる。柱間の間隔がやや近いのは柵 4 だが、それぞれの柱穴間の距離にややばらつきがみられるため断定はできない。また柱穴列 14 の、44 柱穴と 65 柱穴はそれぞれビットを切っており、これに先行する別の柱穴列があった可能性がある。ただこれに対応しそうな柱穴の数がわずかで、柱穴間の間隔も一定しないことから、断定するには至らなかった。柱穴間の距離が間違な部分においては、削平されたものがあったのかもしれない。

柱穴の平面形は梢円形もしくはややいびつな隅丸方形で、長軸ないし一辺の長さは 30 cm 前後と概して小さい。44 柱穴から土師器甕口縁部の破片が出土した。残存率が低く実測はできなかったが、口縁部～胴部上端の破片で体部は丸みを帯びるとみられる。口縁部はゆるやかに外反させて立ち上がり、内面では体部と口縁立ち上がり部分との境が明瞭に屈曲する。口縁端部は欠損するが、端部にむけて器壁が薄くなるので、やや華奢な印象のものと考える。体部外面は縱方向のハケ調整、内面はユビオサエ後ナデ調整で仕上げる。

### 4 溝

上私部遺跡（その 2）の調査で検出された建物群を区画する溝の延長部、およびそれらと関連性をもつ溝を検出した。これにより溝で区画された方形区画への出入り口が存在したこと、その北側にも別の区画溝を伴う掘立柱建物群が存在した可能性があることも明らかになった。ここではそれらの溝と切りあい関係をもつ土坑や、溝の機能と密接な関連性を持つ土坑にもふれる。

#### 15 溝

2 調査区東端部で検出した。39 土坑を切って、およそ南北方向にかかるく蛇行して約 5 m 伸びる。溝幅約 62 cm、深さ 15 cm 前後で、建物 1 の南東隅柱に切られる。溝の形状から推して、区画溝のように何らかの規格にのっとって、計画的に掘られたものとは考えがたい。ただ遺構の規模の割には、溝埋土から須恵器・土師器片が比較的多く出土した。

#### 19 溝 (図 18)

2 調査区中央に位置する、おおむね南北方向を指向する溝で、調査区北側へさらに延長する。南側への延長部分は、上私部遺跡（その 2）の調査区で検出された「建物 23」の西側に位置する、南北方向

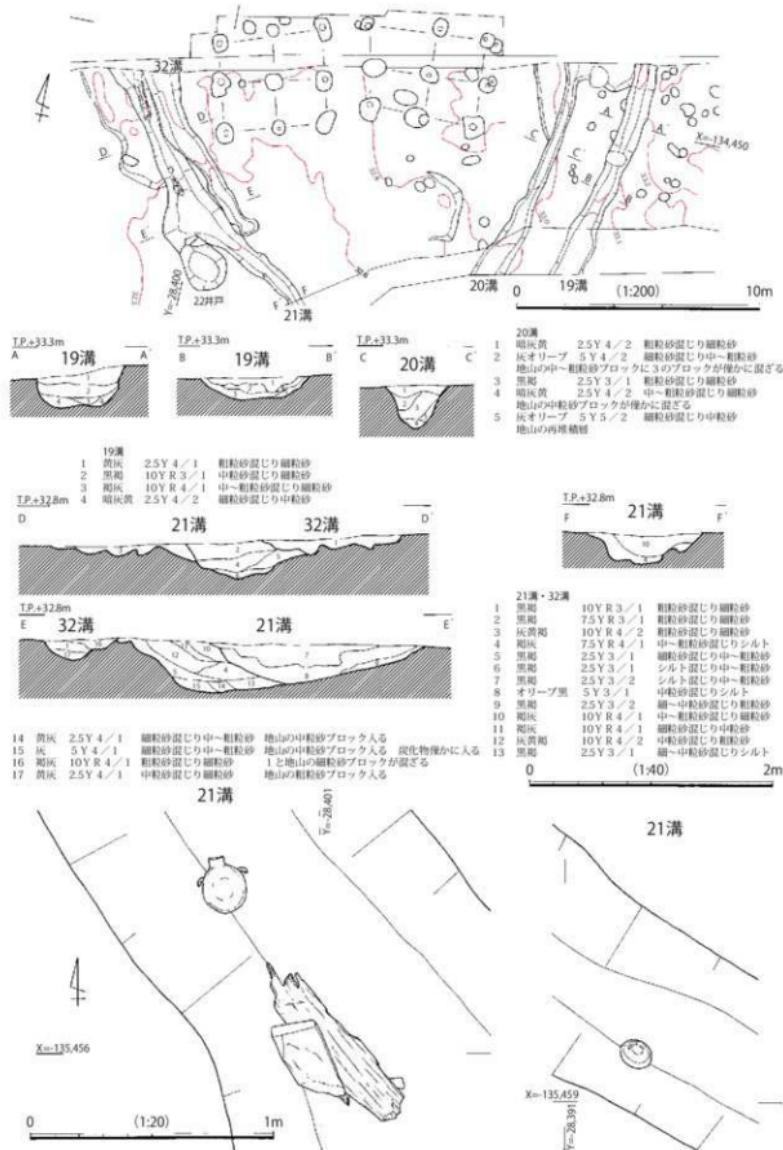


図 18 19・20・21・32 溝実測図、21 溝遺物出土状況図

溝である。後述する 20 溝の東側に平行して位置する。両者とも南北部は北に対して東に約 10° 振るが、北に向かうほど真北に近づくため、全体としては軽く湾曲する。これは前回の調査で検出された方形区画の北側を限る東西溝が、緩やかに湾曲しつつ方向を転じる部分に対して、おおむね直行するようにそれらの溝を配したためとみられる。南側への延長部分は、「建物 23」の南側辺のあたりまで、南端部がわずかに東に屈曲する。またその延長上には東西方向溝が断続的に伸びる。したがって、19 溝が東西溝の手前で途切れる部分、もしくは断続的に東西方向へ伸びる溝に挟まれた部分が、19 溝より東側に展開する掘立柱建物群によって構成される区画への出入り口だった可能性がある。古墳時代集落の中心域とみなされる方形区画の北側で、豊穴住居もしくはその可能性のある土坑の検出範囲はこの溝の東側に限られることから、集落構造を規定する役割を負っていた可能性が示唆される。

溝幅は 70 ~ 90 cm、深さは 20 ~ 30 cm で、溝内に溜まった水は北へ流れる。溝埋土から細片を含めると須恵器 4 点、土師器 9 点が出土したが、実測可能な遺物はなかった。須恵器は甕の胴部片が 1 点、かなり粗雑に作られた杯とみられるものが 1 点、器種不明 1 点からなる。土師器は甕・甕等の煮沸具と見られるものが 4 点、器種不明のものが 5 点である。近接した位置に平行して伸びる 20 溝から多量の土器が出土しているのとは対照的である。

#### 20 溝（図 18）

2 調査区中央に位置する、おおむね南北方向を指向する溝で、前述の 19 溝の西側に位置し、両者はほぼ平行する。溝南北部は北に対して東に約 9° 振り、全体的に見ると溝が軽く湾曲しながら北を指向する点も、19 溝に似る。溝底の標高はおおむね平坦で、厳密には北から南にかけて低くなっている。溝の南端は東西方向溝の手前で途切れるので、排水は特に意識していないことがうかがえる。また調査区北端部では溝の東肩が東側に屈曲するように張り出し、19 溝に切られる。したがって 20 溝が北に向かってさらに延長するか、調査区北端部で屈曲して途切れるかは現時点では判断できない。南側は上私部遺跡（その 2）で検出された「1090 溝」に連続する。したがって 20 溝が東西溝の手前で途切れる部分が、その東側に展開する掘立柱建物群によって構成される、区画への出入り口の一つだったと考えられる。溝幅は 50 ~ 80 cm、深さは約 35 cm で、19 溝より幅は狭いが、溝埋土から須恵器・土師器などが比較的多く出土した。その中で全体の器形が復元可能なもの、時期比定等の参考になるものを中心に実測した。

#### 21 溝（図 18）

2 調査区中央で検出した区画溝の一部で、上私部遺跡（その 2）の調査で検出した「136・138 溝」の北側延長部にあたる。今回の調査区内で東西から南北に、ゆるやかに方向を転じる。調査区北側に伸びる延長部分では、南北溝群と平行するとみられる。21 溝と南北溝群に挟まれる部分で、建物・土坑などの遺構を検出しなかった。したがってこの部分が前回の調査で検出した、掘立柱建物群と区画溝からなる方形区画へ至る出入り口と考えられる。

溝埋土の断面観察により、少なくとも 2 時期の切り合いを認めた。溝幅は 50 ~ 250 cm と場所により差があるが、1 時期の溝幅は最大でも 2 m には達しないと考える。深さは 10 ~ 40 cm と一定しない。おそらくはじめの溝が掘られた段階では溝底の浅い部分があり、水が溜まるか場合によっては溢れたとみられる。掘り直された溝は底までの深さが比較的一定しており、溝底の標高は南から北に向けて徐々に下がる。この段階で溝の排水機能が強化されたとみられる。溝埋土から須恵器・土師器・板石状の角礫・木器など、比較的多種・多量の遺物が出土しており、完形品も含まれる。21 溝がほぼ埋まつた段階で、

後述する 32 溝と 22 井戸が掘削された。

21 溝の延長部分は上私部遺跡（その 2）の調査で検出されている。「138 溝」とそれを切って新たに掘削された「136 溝」がそれである。21 溝から出土した遺物を比較すると、「136 溝」出土の遺物群と様相がほぼ一致する。「136 溝」に切られる「138 溝」出土の遺物からは、6 世紀前半と見られる古い様相を有する須恵器が出土するが、21 溝ではそのような須恵器は出土していない。

のことから 21 溝は「136 溝」と一連のもので、その前に掘削された「138 溝」は調査区境の部分までであった可能性が高い。つまり 6 世紀前半の段階では、掘立柱建物群を伴う方形区画北側の区画溝は、東西方向の部分だけだったと考えられる。その後それを再掘削する段階で、溝を湾曲させながら方向を変えつつ、北側に延長したものと考える。

## 22 井戸

2 調査区中央で検出した。21 溝が埋まつた段階で新たに掘削された素掘りの井戸で、平面形は椭円形である。長軸 2.2 m、短軸 1.8 m で深さは 1.5 m 以上である。当遺構の北肩で、平らな面を水平にして据えた状態の踏み石状の角礫を検出した。周囲の川が天井川化した影響もあるが、掘り下げるときよく水が染み出す状況が見られた。埋土より須恵器・土師器片のほか、多数の種子類を検出した。

## 32 溝（図 18）

2 調査区中央で検出した、21 溝がほぼ埋まつた段階であらたに掘削された溝で、21 溝とほぼ同じラインを描く。調査区北側へはさらに延長するが、南端は方向変換部で途切れてしまう。出土遺物によつて時期の比較ができないため断定できないが、上私部遺跡（その 2）の調査で検出された「1094 溝」や「1099・1100 溝」等の、東西溝の北で断続的に連なる東西方向溝と一連のものである可能性もある。幅は 40 ~ 115 cm、深さは 10 ~ 15 cm と極めて浅い。溝埋土より土師器・須恵器・木材を検出した。土師器は杯もしくは高杯の破片が 1 点、甕・瓶等の破片が 3 点、器種不明の破片が 4 点である。須恵器は杯類の破片が 2 点、器種不明の破片が 1 点である。前者の中でかろうじて受部の形状をとどめるものを見ると、6 世紀後半以降のものと考えられる。

## 29 溝（図 19）

2 調査区西部で検出した南北方向溝である。上私部遺跡（その 3）の調査で検出した方形区画の西限となる南北溝群の内、最も東側に位置するもので、この東側では溝の東肩に平行する柵の柱穴を検出している。溝の西肩は 127 溝に切られる。溝幅は 50 cm から 1 m 前後に含まれると見られ、深さは 30 ~ 45 cm。溝底部はほぼ平坦で、いずれかの方向に水を落とすという明確な意図は感じられない。溝埋土より数点の円礫と、多量の須恵器片・土師器片が出土した。

## 127 溝（図 19）

2 調査区西部で検出した南北方向溝である。上私部遺跡（その 3）の調査で検出した方形区画の西限となる南北溝群の中央に位置する。土層断面観察により少なくとも 2 時期あることがうかがえる。1 時期の溝幅は 1 ~ 1.6 m に含まれ、深さは 30 cm 前後である。溝底の標高は、厳密には調査区北端部でやや低いが、ほぼ平坦でいずれかの方向に水を落とすという明確な意図は感じられない。

## 30 溝（図 19）

2 調査区西部で検出した南北方向溝である。上私部遺跡（その 3）の調査で検出した掘立柱建物群の西限となる南北溝群の内、最も西側に位置する。土層断面観察により少なくとも 2 時期あることが伺える。1 時期の溝幅は 1 ~ 2 m に含まれ、今回検出した南北方向溝群のうち最も幅が大きい。深さは 10

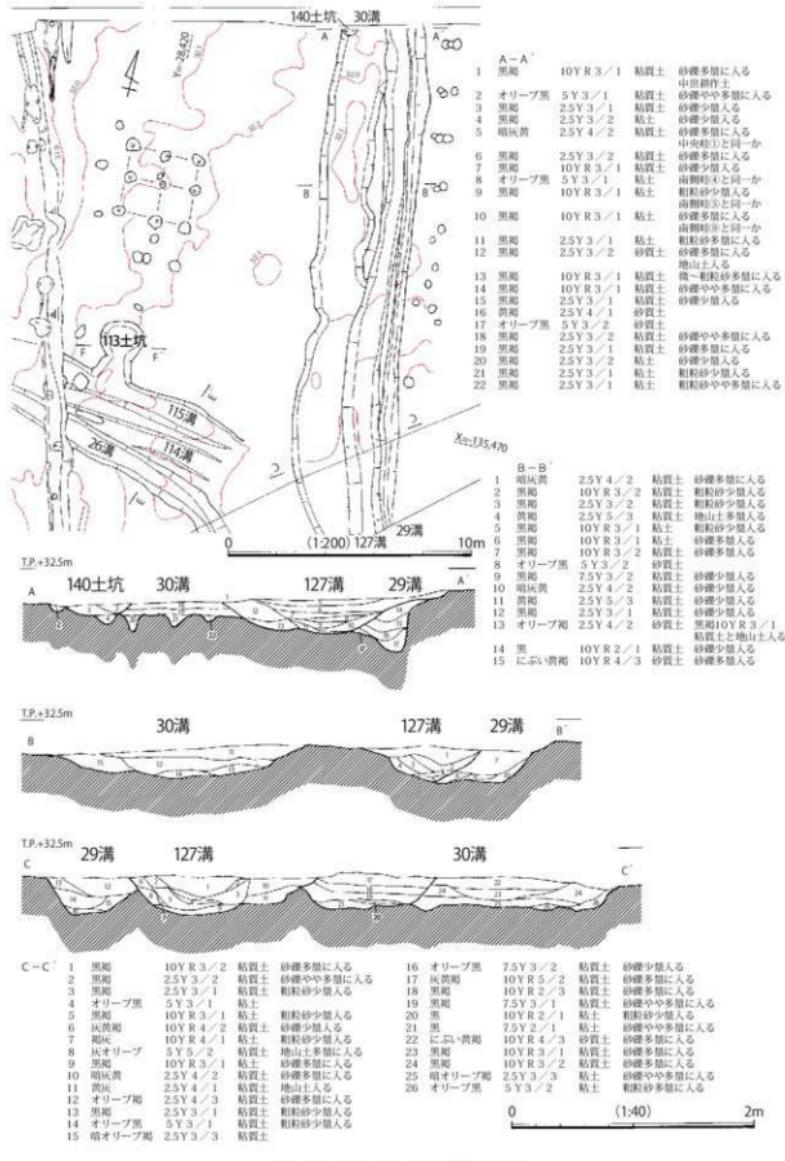


図 19 29・30・127 溝断面図

～30 cmで、溝底部はほぼ平坦である。北もしくは南への明確な高低差は認められない。溝の東肩は127溝に切られる。溝埋土より比較的多量の須恵器片・土師器片を出土した。

#### 140 土坑（図19）

2調査区西部で検出したおそらく円形の土坑で、調査区北端際で30溝の西肩を切っている。直径70 cm、深さ約15 cmである。遺構埋土から須恵器甕胴部片と土師器片が各1点出土した。

#### 26溝（図19・20）

2調査区南西端で検出した南東から北西方向へ湾曲しながら伸びる溝である。南への延長は、前回の調査で検出された、方形区画の西を限る南北方向溝群に至ると見られる。位置的に見れば、上私部遺跡（その2）調査の「844溝」がそれである可能性が高い。「844溝」は少なくとも2時期の切り合いが認められる。それと同様に26溝と切り合うか、もしくは平行する溝は他に2本認められた。2調査区西端部分は中世以降の水田造成の際に段状に削られているため、一段下がる部分では延長部分を検出しなかつたが、154溝にいたるとみられる。このことから南北方向を指向する溝群西端の溝が、今回の調査区内で東西に方向を転じることがわかった。

方向転換箇所で数度の掘り直しが行われるのは、屈曲部分に土砂が溜まりやすかったからと考えられる。溝内の水は、南から東へ向けて流れるように緩やかな斜度をもつ。「844溝」の場合、旧段階の溝底はおむね平坦で南への排水を意識しつつも、厳密には排水方向を定めていなかった可能性が高いことが報告されている。それに対して新段階では南から北へのゆるやかな傾斜が設けられるということである。したがって、今回の調査で検出した26溝は新段階の「844溝」延長部にあたると考える。

溝幅は1.0～1.3 m、深さは約30 cmで、須恵器片・土師器片が比較的多量に出土している。

#### 114溝（図19・20）

前述の26溝に切られる溝で、2調査区南西端で検出した。溝幅は1 m前後で26溝と近似するが、深さは20 cm弱とやや浅い。南北から東西へ方向を転じる溝の屈曲部分のみを検出したものとみられる。関連する遺構の詳細については26溝の項を参照されたい。出土遺物はなかった。

#### 115溝（図19・20）

2調査区西端で検出した。26溝や114溝と切り合いは認められないが、これらはほぼ平行しており、相互に関連すると見られる。溝幅は1.10～1.35 cmと114溝に比べてやや広いが、深さは近似する。115溝の北側に近接して113土坑が位置するが、それにむけて南北方向に短く分岐して連なる。南北から東西へ方向を転じる溝の、屈曲部分を検出したものとみられる。関連する遺構の詳細については26溝の項を参照されたい。

須恵器3点と器種不明の土師器2点が出土した。須恵器は高杯脚部片、甕胴部片、杯蓋の破片が各1点である。高杯脚部は長方形の透かしが2段あり、透かしの間に浅い凹線が1条巡らせている。杯蓋には凹線を巡らせて稜線が表現されている。

#### 113土坑（図19・20）

2調査区西部西端で検出した。前述の115溝の北側に近接して位置し、その短い分岐箇所に連なる。直径1.63 mのほぼ円形で、深さは30 cm前後、底部はほぼ平坦である。出土遺物はなかった。

#### 154溝（図20）

1調査区中央北寄りで検出した東西方向の溝である。2調査区で検出した26溝の延長部分である。この溝より北側では南北溝群寄りで総柱建物1棟を検出したのみであることから、この南側に展開する

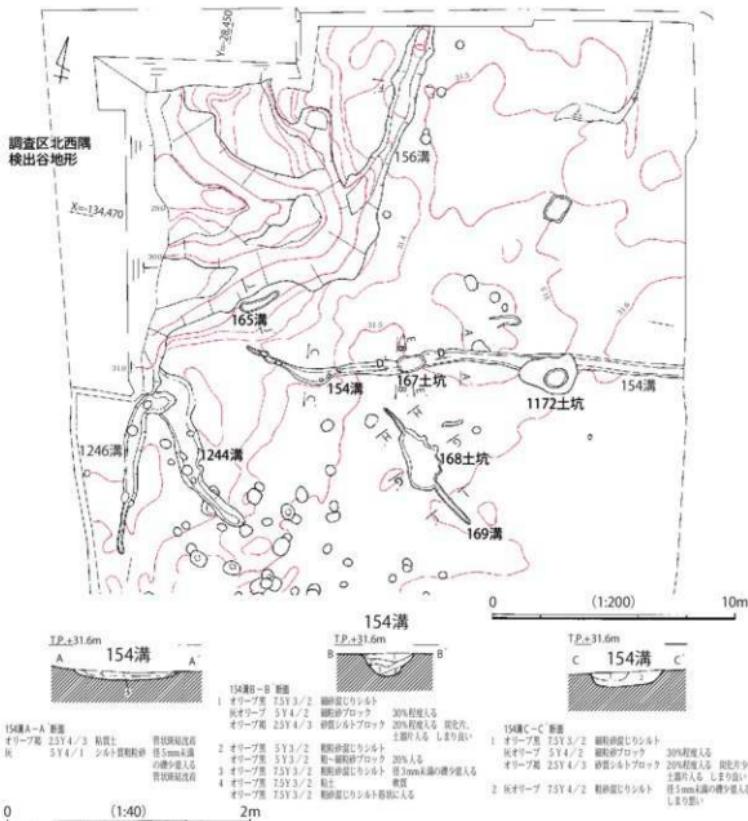
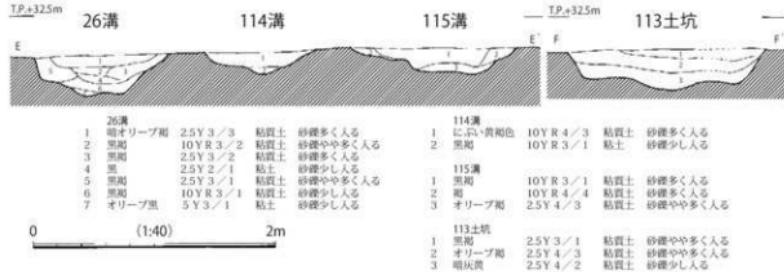


図 20 26・113～115・154溝実測図

掘立柱建物群の、北を限る区画溝の役割も果たしていたと考える。

溝底の標高は東から西に向かって徐々に傾斜する。流末が谷の肩部に近接しており、溝内の水を最終的には谷に落としていたとみられる。溝幅 45 ~ 80 cmで深さは 8 ~ 20 cmである。溝埋土より須恵器・土師器の破片が各数点出土したが、時期比定できるものはなかった。

#### 1172 土坑（図 20・21）

1 調査区中央北寄りで前述の 154 溝を切るような状態で検出された。土坑の掘形は最大で長軸 2.32 m、短軸 1.76 m の楕円形で、深さは 44 cm である。土坑埋土は地山のシルトブロックを含み、硬くしまった土（VI 層）と粘りを帯びた細粒砂もしくは極細粒砂をベースとする黒色化が顕著な層（I ~ V 層）、両者の中间的な層に大きく分けられる。VI 層内で細分される土層は、シルトブロックの含有量や土壤の粒度に違いは見られるが、土質はおおむね均一で、それらがつき固められたように硬く水平に堆積する。このことから VI 層は、土坑掘形掘削後に意図的に埋め戻されたものと考える。したがってこの土坑の機能箇所は、I ~ V 層を除去し、VI 層上面まで掘り下げた段階で検出される、土坑掘形の中央やや南東よりに位置する、一辺約 90 cm 前後の隅丸方形土坑およびその中央に据えられた須恵器壺と楕状木製品等にあると考えられる。

隅丸方形土坑には須恵器壺の下半部を固定するように、地山ブロックを含んだ均質な土が込められていた。壺の内面には「V」字状の線刻が施されおり、それが南側にくるように据えられていた。さらに隅丸方形土坑の西肩と、32 層の上面にもたせ掛けるようにして、楕状木製品や柱状の花崗岩礫が置かれる。木製品の上には炭化物含みの細～極細粒砂が堆積するが、木製品に接する部分には流水性堆積と見られる粗粒砂の薄い堆積を認めた。したがってこれが機能していた段階で、154 溝も機能していた可能性が高いと考える。おそらく 154 溝を通じて東から西に運ばれてきた水を、隅丸方形土坑もしくはその中央の須恵器壺に落とす機能を有していたと考える。隅丸方形土坑西肩に置かれた木製品や花崗岩礫は、土坑の肩が水流の侵食で抉られるのを防ぎ、あふれた水を溝に導く役割を果たしたのだろう。隅丸方形土坑は図 21 中の 7 ~ 9 層、5・15・32 層、4・32 層の堆積のまとまりからわかるように、数度にわたって掘り直されたものである可能性がある。また VI 層にも中位に、22 層にみられるような流水性堆積層が含まれることから、機能した面は一面だけではなく、補修もしくは積み直しが施された可能性がある。

なお I ~ V 層と大別した層は、隅丸方形土坑が埋積していく過程で堆積したものと考えられる。隅丸方形土坑埋土もしくはその上面付近から、比較的まとまった土器の破片を検出した。それらの中で、完形になるのは中央に据えられた須恵器壺とその東側部上半に寄せ掛けるように検出された土器器皿のみで、それ以外は複数固体分の土器の、胴部や口縁部もしくは脚部の破片である。出土量や器種の多様さに比べて必ずしも完形土器の点数が多くないことから、おそらく部分片として出土した土器は、隅丸方形土坑部分が機能を失った後に投棄されたものと考えられる。

遺構埋土をサンプルとした古環境分析結果は、付章第 1 節を参照されたい。

#### 167 土坑（図 20・21）

前述の 1172 土坑の西側で検出した、長軸 1.07 m、短軸 60 cm の楕円形の土坑である。底部はほぼ平坦で、深さは 10 cm である。154 溝を切るような状態で検出した。遺物は出土しなかった。

#### 156 溝（図 20・22）

1 調査区北端部で検出した南北方向を指向する溝である。調査区より北へさらに延長し、溝南端は調

## 1172土坑

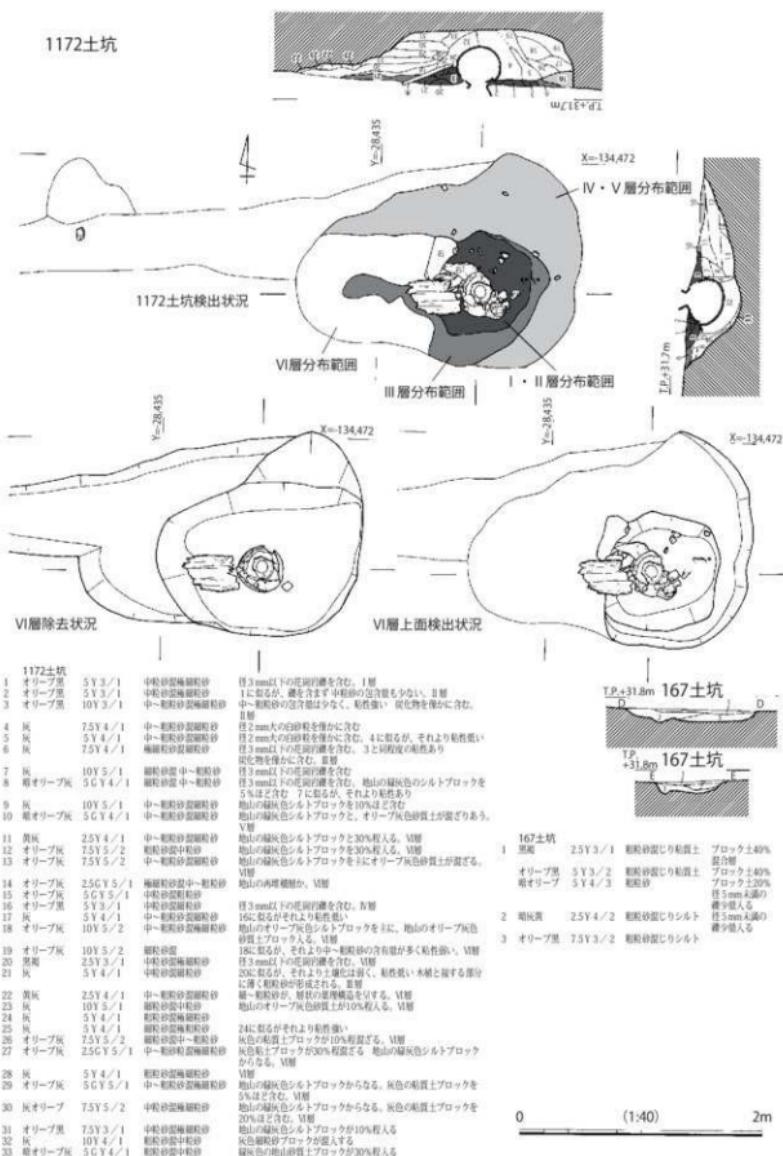


図 21 1172 土坑実測図・167 土坑断面図

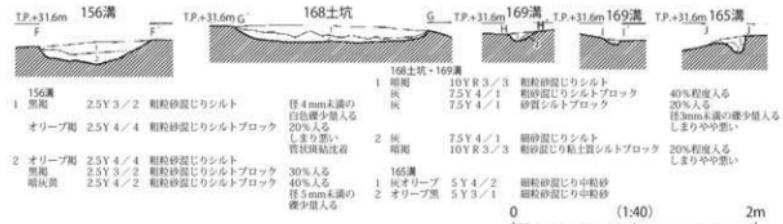


図 22 168 土坑、156・165・169 溝断面図

査区北西隅の谷地形の肩に取り付く。溝底の標高はほぼ平坦で、谷に取り付く部分でのみゆるやかに谷に向かって傾斜している。したがって溝内の水は最終的には谷に向けて、つまり北から南に落とされていたとみられる。

溝の東側ではこれと平行する柱穴列 5 を検出した。その詳細は柱穴列 5 の項を参照されたい。出土遺物はなかった。

### 168 土坑 (図 20・22)

1 調査区中央やや北寄りで検出した。北西から南東を指向する 169 溝の中ほどに位置する。平面形は長軸 2.6 m、短軸 1.5 m のいびつな楕円形である。深さは 13 cm と浅く、底部は平坦である。遺構埋土は 2 層からなり、上層は 169 溝埋土と一致する。したがって 168 土坑がある程度埋まった段階で、土坑を長軸方向に延長するように、169 溝が掘り足されたとみられる。土師器の細片が一点出土した。

### 169 溝 (図 20・22)

1 調査区中央北寄りで検出した。北西から南東に 6 m 伸び、幅 10 ~ 20 cm、深さ 5 cm 前後である。溝埋土が、中央に位置する 168 土坑埋土上層と一致する。主軸方向は N - 43° - E で、この溝と主軸方向が一致する建物もしくは柱穴列は認められない。

周辺の等高線とほぼ直交することから、簡易に設けられた排水施設とも考えられる。この西側に位置する 1244 溝や 1246 溝も同様な機能を負っていたと考えられる。出土遺物はなかった。

### 165 溝 (図 20・22)

1 調査区やや北寄りで検出した小規模な溝である。調査区北西隅の谷の肩際に位置する。溝幅は最大で 30 cm、深さは 13 cm である。出土遺物はなかった。

### 5 土坑・ピット

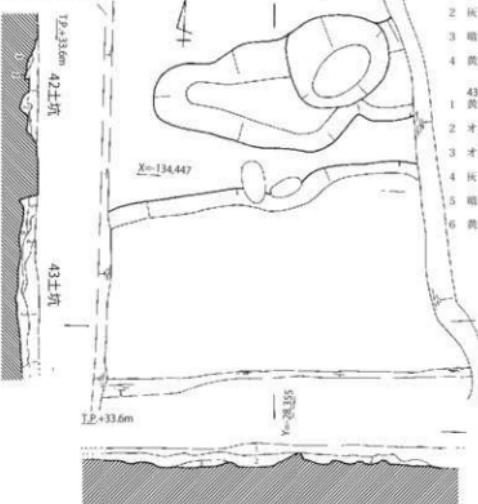
井戸や竪穴住居、掘立柱建物あるいは柱穴列の他に、機能を特定できない不整形な土坑やピットを多数検出した。そのうち柱穴の可能性が高い小規模な円形の窓みをピットとし、それ以外のやや大きい窓みを土坑としたが、両者を分かつ厳密な基準は設けていない。また後述するが、土坑には竪穴住居の可能性のあるものも含まれる。

### 42 土坑 (図 23)

2 調査区東端で検出した東西に長いいびつな楕円形の土坑である。当遺構の東への延長部は、上私部遺跡（その 1）の調査区で検出された、「建物 13」の南側で検出されている。

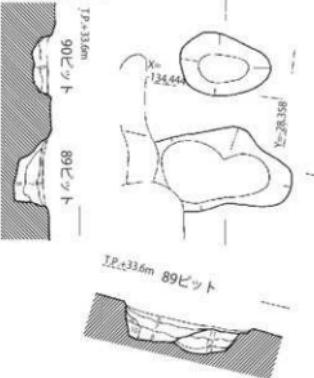
建物の東側邊のほぼ延長線上で土坑が取まっている。したがって長軸は約 4 m とみられる。短軸は 0.8 ~ 1.0 m、深さは 10 cm 前後。主軸方向は N - 11° - W で、あえて言うなら北側に並ぶ建物 1 の主軸

42・43土坑



43土坑	1 黒泥	2.5Y 4 / 1	粗粒砂～礫混じり 混化物含む 細粒砂
	2 オリーブ黒	5Y 3 / 1	粗粒砂混じり 1より粘性低い 細粒砂
	3 オリーブ黒	5Y 3 / 2	粗粒砂混じり 地山の粘土ブロック入る 細粒砂
	4 灰	5Y 4 / 1	粗粒砂混じり 地山の粗粒砂ブロック入る 細粒砂
	5 噴灰黄	2.5Y 4 / 2	中粒砂混じり 混化物微かに入る 細粒砂
	6 黄灰	2.5Y 4 / 1	中粒砂混じり 混化物微かに入る 細粒砂

89・90ピット

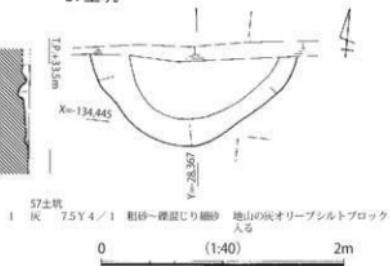


36ピット  
9 黒泥 2.5Y 3 / 2 粗粒砂混じり細粒砂 1に似るがそれよりやや粘性あり  
10 黄灰 2.5Y 4 / 1 中粒砂混じり細粒砂 9に似るが粗粒砂は混じらない  
地山ブロック僅かに入る

89・90ピット



57土坑



0 (1:40) 2m

図23 36・89・90ピット、42・43土坑実測図

方向に近似する。出土遺物はなかった。

#### 43 土坑（図 23）

2 調査区東端で、42 土坑のすぐ南側で検出した。遺構の北肩のラインのみが確認できたため、全体の形状は不明である。遺構の東側は上私部遺跡（その 1）調査区、南側は上私部遺跡（その 2）調査区にまたがる。しかし隣接する調査区では延長部分が検出されていないため、調査区境の側溝掘削時に削平されたとみられる。底部はほぼ平坦で、壁面は直線的に立ち上がる。土坑埋土の堆積状況はほぼ水平で、埋土上層に炭化物が含まれる。出土遺物はなかった。

#### 89 ピット（図 23）

2 調査区東部で建物 13 と建物 1 の隅柱にはさまれる位置にある。89 ピットは建物 1 の南東隅柱である 68 柱穴に切られる。長軸 1.15 m 以上、短軸 64 cm のややいびつな楕円形を呈する。深さは 30 cm 程度で、底部は平坦である。東西方向断面から、同規模の別のピットを切っていることがわかる。はじめのピットがほぼ埋まった段階でその東半分に重なるように 89 ピットが設けられた。近辺には 89 ピットと同様、建物 13 の南西隅柱に切られる 67・36 ピットがあることから、建物 1 や建物 13 に先行する建物が存在した可能性があるが、これらのピットとセット関係をもつ柱穴もしくは建物の痕跡は確認できなかった。遺構埋土より須恵器の細片が 1 点出土した。

#### 90 ピット（図 23）

2 調査区東部で建物 13 と建物 1 の隅柱に挟まれて、89 ピットの北側に位置する。長軸 75 cm、短軸 50 cm の楕円形で、深さは約 15 cm である。89 ピットと同様、大型の柱穴が密集する場所にあり、掘立柱建物を構成する柱穴の可能性があるが、これとセット関係を持つ柱穴を特定することができなかった。

遺構埋土から須恵器 1 点、土師器細片 6 点が出土した。

#### 36 ピット（図 23）

2 調査区東部にあり、67 ピットに切られる。67 ピットは建物 13 の南西隅柱である 83 柱穴に切られる。平面形はややいびつな隅丸方形もしくは楕円形とみられ、83 柱穴とほぼ同規模とみられる。深さは 20 cm 前後で、底部は平坦である。建物 13 に先行する掘立柱建物の存在が伺えるが、これとセット関係を持つ柱穴を特定することができなかった。遺構埋土から土師器細片が 1 点出土した。

#### 57 土坑（図 23）

2 調査区東部にあり、建物 1 と柱穴列 2 との間に位置する。円形の土坑と見られるが、北半部は側溝により削平される。直径 1.7 m、深さは 10 cm 前後と極めて浅い。遺構埋土からの出土遺物はなかった。

#### 39 土坑（図 24）

2 調査区東部で、建物 1 のすぐ南側に位置するいびつな隅丸方形の土坑である。土坑の西辺は直線的だが、対照的に東辺は東に向かって凸状に張り出す。土坑の南側は上私部遺跡（その 2）調査区に接するが、その際の調査ではこの土坑の延長部分が検出されていないことから、調査区境の側溝掘削時に削平されたとみられる。したがって大きさは東西方向 4.6 m、南北方向は約 3～4 m とみられる。深さは 20 cm と浅く、土坑底部にはやや凹凸がみられた。土坑東辺が最も外側に張り出す部分では、埋土上層に焼土や炭化物が含まれるのを認めた。出土遺物はなかった。

#### 14 土坑（図 24）

2 調査区東部で、柱穴列 3 の南側に位置する。東西 3.6 m の隅丸方形で、南側延長部は上私部遺跡（その 2）の調査区に含まれるが、別の隅丸方形の土坑に切られており、土坑の南北方向の長さは不明である。

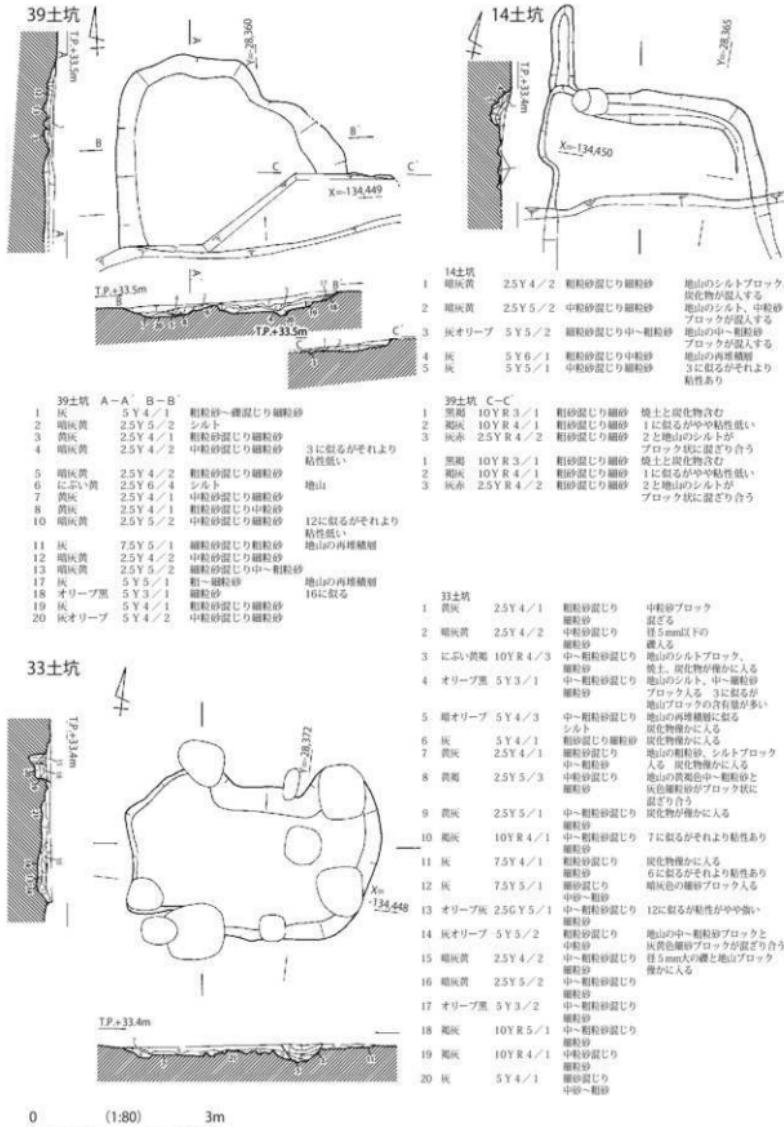


図 24 14・33・39 土坑実測図

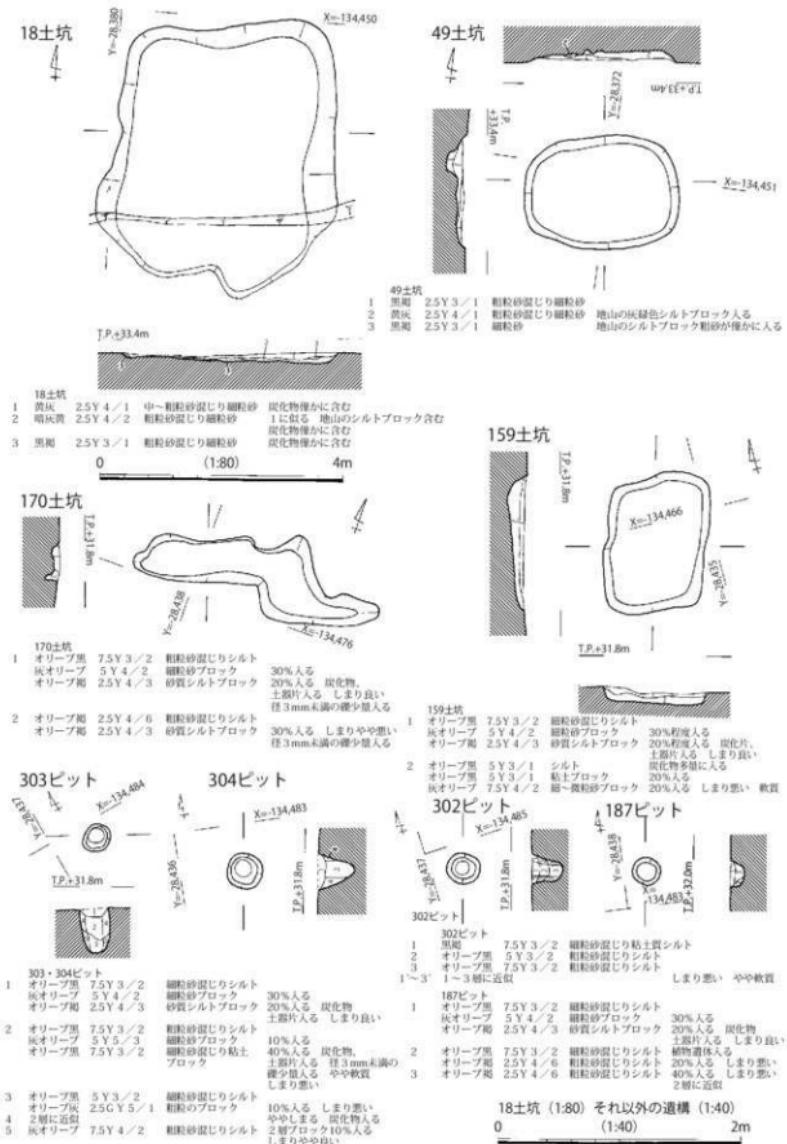


図25 18・49・159・170土坑、187・302～304ピット実測図

る。土坑北辺の西端から南北方向に短い溝が延びる。平面形が隅丸方形であること、北辺に壁溝状のくぼみが認められること、埋土に地山ブロックと炭化物が混入すること、また北辺から南北方向に溝が伸びる様子が12竪穴住居に似ることから、竪穴住居である可能性が高いが、柱穴を検出しなかったため、確定できなかった。竪穴住居であれば12竪穴住居と同様、平面積が小規模なものと考えられる。出土遺物のうち全体の形態を復元できる1点を実測した。

### 33 土坑（図24）

2調査区東部で、12竪穴住居のすぐ東側で検出した。土坑の長軸は約4m、短軸2.5～2.8mで、深さは20cm前後と浅く、立ち上がりはなだらかである。底部にやや凹凸がみられる。平面形は全体をみると、東西に長い不整形な隅丸長方形もしくは楕円形だが、南辺および西辺は直線的で、すぐ西に位置する12竪穴住居とほぼ同じ幅である。また両遺構の南辺はほぼ同じラインでそろう。

33 土坑の底部が、12竪穴住居と同じく細粒砂混じり中～粗粒砂層まで掘り抜かれていること、遺構埋土に地山のシルトブロックおよび炭化物が含まれる点も12竪穴住居と一致しており、竪穴住居の痕跡である可能性が高いと考える。そうであれば、遺構の北半分は掘形が浅いために削平されて残らず、深い部分のみが残ったと理解される。なおこの遺構は柱穴列1・2の柱穴や、その他のピットに切られる。出土遺物はなかった。

### 18 土坑（図25）

2調査区中央部やや東寄りで、12竪穴住居の南側に位置する。東西4m、南側の延長部分が上私部遺跡（その2）調査区でも検出されており、それをあわせた南北長は4.6mである。深さは10cmと浅く、底部は平坦である。平面形はほぼ隅丸方形だが、南辺がやや不整形である。土坑の規模・形状、埋土に地山のシルトブロックと炭化物が含まれる点が12竪穴住居に近似する。したがって18土坑は竪穴住居の可能性があるが、土坑内部に柱穴等が検出されなかつたため、確定するにはいたらなかった。

須恵器細片と土師器細片が各4点出土した。いずれも小片で、前者はおそらく甕と杯類が2点ずつとみられ、後者は器種の特定ができない。

### 49 土坑（図25）

2調査区東寄りで検出した東西に長い隅丸長方形の土坑である。長辺1.27m、短辺94cmで、遺構埋土に地山のシルトブロックが混入する。深さは5～18cmで底部にやや凹凸がみられる。

出土した土師器・須恵器の小片のうち、須恵器杯蓋を実測した。

### 170 土坑（図25）

1調査区中央北寄りで検出した東西に長いいびつな楕円形の土坑である。東西長2.05m、南北長40cm前後、深さは10cm前後である。遺構埋土にわずかに炭化物が混じる。

土師器細片1点が出土したが、時期比定はできない。

### 159 土坑（図25）

1調査区北部、154溝より北側に位置するややいびつな隅丸長方形の土坑である。長辺1.1cm、短辺83cm、深さは10cm前後と浅く、底部は平坦である。遺構埋土は上下2層に分けられる。いずれの層にも炭化物が含まれるが、特に下層に多く含まれる。土坑壁面に焼け締まりは認められなかった。出土遺物はなかった。

### 303 ピット（図25）

1調査区中央部で、柱穴列7の東側に近接して位置する。平面形は直径約22cmの円形もしくは隅丸

方形で、柱痕径は約 13 cm の柱穴である。深さは 36 cm で、190 ピットと 304 ピットをつなぐライン上に位置する。したがってこれらのピットと柵もしくは掘立柱建物を構成する可能性がある。ただ周囲のどの建物とも主軸方向が一致しないこと、セット関係をとらえられるピットの数が少ないとから、それらを柱穴列と確定するにはいたらなかった。

出土遺物はなかった。

#### 304 ピット（図 25）

1 調査区中央部で柱穴列 7 の東側、前述の 303 ピットの東側に位置する。平面形は一辺約 25 cm の隅丸方形で、深さは 30 cm、柱痕径は 14 cm である。これと関連付けられそうな遺構の詳細については 303 ピットの項を参照されたい。

出土遺物はなかった。

#### 302 ピット（図 25）

1 調査区中央部で、303 ピットの南側に近接して位置する。直径約 26 cm の円形もしくは隅丸方形で、柱痕径 11 cm、深さは約 25 cm である。187 ピットと 1243 ピットを結んだライン上に位置することから、それらとセットを成して柵もしくは掘立柱建物を構成する可能性がある。ただ柱穴間の距離が不揃いなこと、セット関係をとらえられるピットの数が少ないとから特定にはいたらなかった。ちなみに 1243 ピットは長軸 45 cm、短軸 30 cm の楕円形で、深さは 15 cm 弱と浅い。

出土遺物はなかった。

#### 187 ピット（図 25）

1 調査区中央部で 303 ピットの北西に近接して位置する。直径約 23 cm の円形、深さは 11 cm である。出土遺物はなかった。これと関連付けられそうな遺構の詳細については 302 ピットを参照されたい。

#### 181 ピット（図 26）

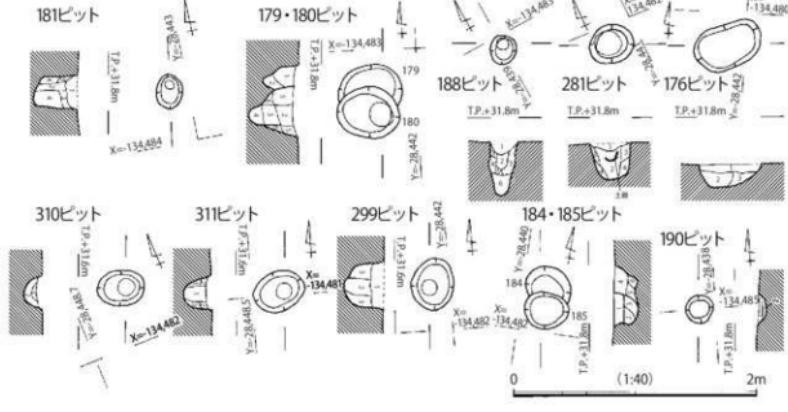
1 調査区中央部で、建物 5 の南東隅柱の南東側に近接して位置する。平面形は楕円形で、長軸 30 cm、短軸 22 cm、深さは 36 cm である。柱痕の直径は 8 cm である。1 調査区において、ピットの検出密度が高い箇所に位置しており、柵もしくは建物を構成する柱穴の一つである可能性があるが、これと明確なセット関係を持つ柱穴を特定することができなかった。出土遺物はなかった。

#### 179・180 ピット（図 26）

1 調査区中央部で、柱穴列 7 に含まれる 183 柱穴の西側で検出した。180 ピットが 179 ピットを切る。180 ピットは長軸 52 cm、短軸 42 cm、東西に長い楕円形で、柱痕径は 20 cm 弱、深さは 36 cm である。179 ピットは 180 ピットと同規模とみられるが、深さは 25 cm とやや浅い。299 ピット・176 ピットと当ピットがおむね直線上に乗ることから、それらとセットを成して柵もしくは掘立柱建物を構成する柱穴である可能性がある。

これらのピットが建物 5 の東側辺とほぼ平行することから、建物 5 に含まれる可能性も考えた。しかし東側辺からこれらピット列までの間隔が、他の柱間と比べて間違であること、建物 5 の柱間とこれらピット間の距離とでは後者の間隔の方が大きく、これらを含めると建物 5 の東西方向の柱筋がいびつになることから除外した。

一方、建物 5 の東側辺にあたる柱穴によって切られているピットと、これらのピットがセットをなし、掘立柱建物を構成する可能性もある。ただそのように見た場合、1 間 × 2 間という建物の規格がややイレギュラーであること、柱穴配置がいびつであることから、断定するにはいたらなかった。ただこれら



<b>181ピット</b>									
1 級面	7.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	1 176ピット	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	1 3mm未満の塵少侵入の 10%人る			
2 オリーブ灰	5 Y 4/2	細粒砂シルトブロック	2 オリーブ男	5 Y 3/2	粘土ブロック	2 10%人る			
オリーブ灰	25Y 4/3	シルトブロック	3 オリーブ男	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト ブロック	3 30%人る			
			4 オリーブ男	7.5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト ブロック	4 20%人る			
<b>179・180ピット</b>			5	25Y 4/1	粗粒砂混じりシルト ブロック	5 10%人る			
1 級面	7.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	6	25Y 4/1	粗粒砂混じりシルト ブロック	6 10%人る			
2 オリーブ灰	5 Y 3/2	細粒砂混じりシルト ブロック	7	25Y 4/2	粗粒砂混じりシルト ブロック	7 5mm未満の塵少侵入の 10%人る			
オリーブ灰	5 Y 3/2	細粒砂混じりシルト ブロック	8	310ピット	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	8 30%人る		
			9	311ピット	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	9 20%人る		
<b>299ピット</b>			10	299ピット	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	10 30%人る		
1 級面	7.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	11	299ピット	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	11 20%人る		
2 オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	12	184・185ピット	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	12 3mm未満の塵少侵入の 10%人る		
オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	13	184・185ピット	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	13 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
			14	184・185ピット	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	14 3mm未満の塵少侵入の 10%人る		
<b>188ピット</b>			15	190ピット	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	15 3mm未満の塵少侵入の 10%人る		
1 級面	7.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	16	190ピット	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	16 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
2 オリーブ灰	5 Y 3/2	細粒砂混じりシルト ブロック	17	190ピット	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	17 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
3 級面	7.5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	18	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	18 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
			19	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	19 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
<b>310ピット</b>			20	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	20 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
1 級面	7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	21	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	21 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
2 オリーブ灰	5 Y 3/2	粗粒砂混じりシルト ブロック	22	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	22 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	23	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	23 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
			24	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	24 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
<b>311ピット</b>			25	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	25 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
1 級面	7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	26	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	26 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
2 オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	27	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	27 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	28	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	28 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
			29	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	29 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
<b>299ピット</b>			30	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	30 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
1 級面	7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	31	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	31 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
2 オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	32	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	32 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	33	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	33 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
			34	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	34 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
<b>184・185ピット</b>			35	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	35 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
1 級面	7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	36	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	36 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
2 オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	37	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	37 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	38	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	38 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
			39	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	39 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
<b>190ピット</b>			40	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	40 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
1 級面	7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	41	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	41 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
2 オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	42	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	42 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	43	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	43 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
			44	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	44 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
<b>281ピット</b>			45	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	45 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
1 級面	7.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト	46	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	46 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
2 オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	47	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	47 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
オリーブ灰	25Y 3/2	粘土シルトブロック	48	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	48 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		
			49	190ピット	5 Y 4/1	粗粒砂混じりシルト	49 5mm未満の塵少侵入の 10%人る		

図 26 176・179～181・184・185・188・190・281・299・310・311 ピット実測図

の可能性を排除したとしても、176 ピット - 299 ピット - 179・180 ピットの構成する柱穴列が、建物 5 に伴う柵である可能性は残る。いずれのピットからも出土遺物はなかった。

#### 188 ピット（図 26）

1 調査区中央部で、柱穴列 7 に含まれる 182 柱穴と 189 柱穴の中間に位置する。掘立柱建物の束柱である可能性もあるが、これと対になる柱穴を検出しなかったため、断定はできなかった。長軸 24 cm、短軸 21 cm の楕円形で柱痕径は 10 cm、深さは 44 cm である。

出土遺物はなかった。

#### 281 ピット（図 26）

1 調査区中央部で、柱穴列 7 に含まれる 183 ピットの北側に位置する。長軸 37 cm、短軸 32 cm の東西に長い楕円形で、柱痕径は 20 cm 強、深さは 30 cm である。

土師器杯の破片が 2 個体分出土した。大小の別があるようだがいずれも断片で、口縁の大部分を欠いているため正確なことはわからない。

#### 176 ピット（図 26）

1 調査区中央部やや北寄りで、柱穴列 4 を構成する 175 ピットの南側に近接して位置する。長辺 58 cm、短辺 36 cm の隅丸長方形で深さは 19 cm、柱痕は認められなかった。出土遺物はなかった。

これと関連付けられそうな遺構については 179・180 ピットの項を参照されたい。

#### 310 ピット（図 26）

1 調査区中央部西寄りで、建物 5 を構成する 267 柱穴と 312 柱穴の間に位置する。長軸 39 cm、短軸 29 cm の楕円形で、柱痕径は 15 cm、深さは 16 cm と浅い。出土遺物はなかった。

#### 311 ピット（図 26）

1 調査区中央部西寄りで、建物 5 の北東隅柱である 273 ピットの、南西そばに位置する。長軸 42 cm、短軸 32 cm の楕円形で柱痕径は 13 cm、深さは 24 cm である。

出土遺物はなかった。

#### 299 ピット（図 26）

1 調査区中央部やや北寄りで、建物 5 の東側辺を構成する 275 柱穴の東側に位置する。長軸 43 cm、短軸 35 cm の南北方向に長い楕円形で、柱痕径 12 cm、深さは 33 cm である。出土遺物はなかった。

なおその他の所見は 179・180 ピットの項を参照されたい。

#### 184・185 ピット（図 26）

1 調査区中央部やや北寄りで、柱穴列 7 を構成する 182 柱穴の北東側で検出した。184 ピットが 185 ピットに切られる。185 ピットは長軸 36 cm、短軸 31 cm の楕円形、深さは 20 cm である。184 ピットはおそらく直徑 38 cm の円形とみられる。深さは 20 cm で前者とほぼ同じである。

185 ピットから土師器細片が 1 点出土したが、時期比定できるものではなかった。184 ピットからの出土遺物はなかった。

#### 190 ピット（図 26）

1 調査区中央部で、柱穴列 7 の 189 柱穴と 301 柱穴の間に位置する。直徑 20 ~ 25 cm の円形で、深さは約 5 cm と浅い。出土遺物はなかった。

なおこれと関連付けられそうな遺構については 303 ピットの項を参照されたい。

#### 278・279 土坑（図 27）

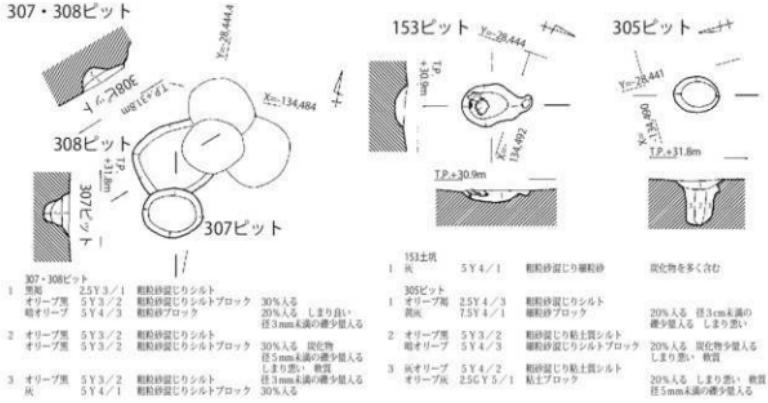
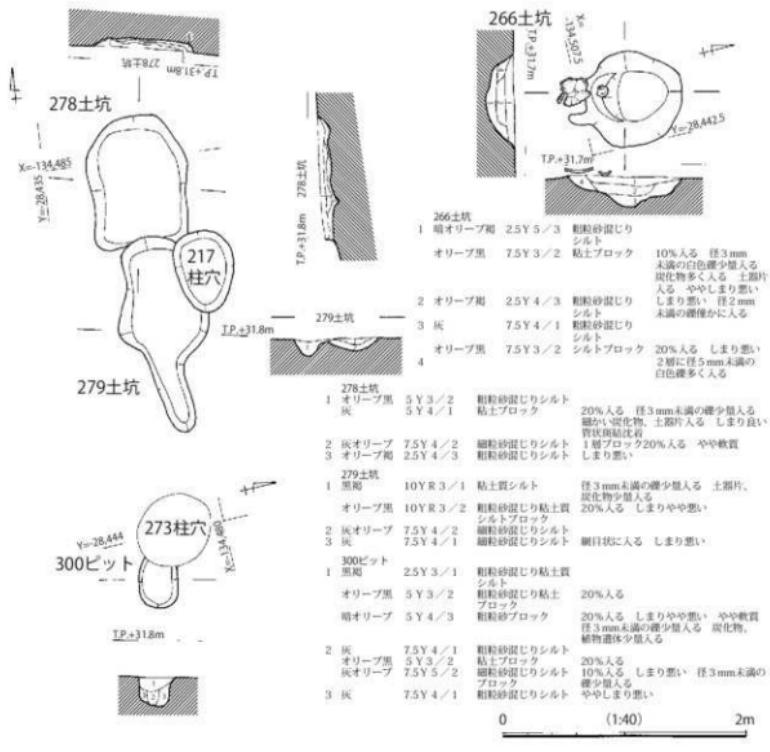


図 27 153 ピット、266・278・279 土坑、300・305・307・308 ピット実測図

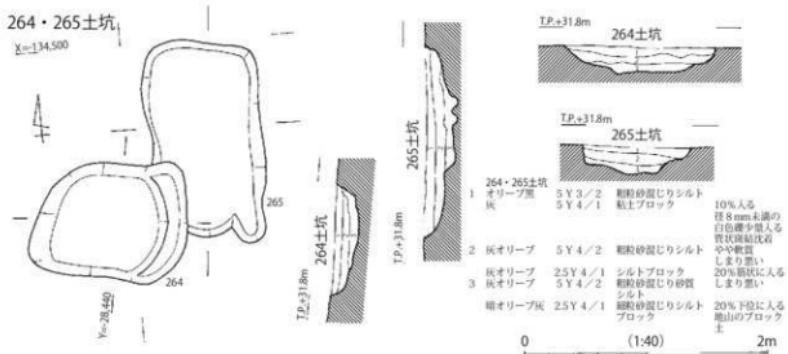


図 28 264・265 土坑実測図

1 調査区南半部東寄りで検出した。278 土坑は 279 土坑に切られる。279 土坑は建物 8 の北側辺に含まれる 217 柱穴で切られることから、それに先行して存在したことがわかる。278 土坑は南北に長い隅丸長方形で、長辺 1.04 m、短辺は 87 cm、深さは 10 cm 前後で底部は平坦である。279 土坑は全体に見ると南北に長いいびつな楕円形だが、長辺 1 m 前後、短辺 64 cm の隅丸長方形の南辺が、部分的に南に張り出しているようにとらえられる。全長は 1.63 m、深さは 10 cm である。隅丸長方形の部分で比較すると、278 土坑と 279 土坑の規模や形状は近似する。両遺構とも埋土上層に細かい炭化物が少量混じる。

出土遺物のうち実測と器形復元が可能な須恵器杯蓋 1 点を実測した。279 土坑から遺物は出土しなかった。

### 266 土坑（図 27）

1 調査区南端部で、建物 11 の西側辺の西側に位置する。長軸 94 cm、短軸 75 cm の南北に長いいびつな楕円形で、遺構検出時に土坑の南肩付近で甕の破片を検出した。深さは 24 cm である。

甕は 2 個体分あり、一つは中期後葉のもので体部下半部、他方は弥生後期の底部付近の破片である。遺構埋土中、もしくは埋土上面で弥生時代の遺物を検出した遺構は 266 土坑の他にはない。ただこれら 2 つの土器は明らかに時期が異なるので、後世の人間が何らかの意図で持ち込み、並べ置いたものと考えられる。

### 300 ピット（図 27）

1 調査区中央北寄りで、建物 5 の北東隅柱 273 柱穴に切られる。長辺 40 ~ 50 cm、短辺 30 cm の東西に長い隅丸楕円形で、柱痕径は 10 cm、深さは 23 cm である。

このピットと関連付けられそうな遺構については 179・180 ピットの項を参照されたい。

出土遺物はなかった。

### 307・308 ピット（図 27）

1 調査区中央西寄りに位置する。308 ピットは 307 ピットに切られる。また 308 ピットは建物 5 の南東隅柱 267 柱穴に切られる、268・297 ピットに切られる。308 ピットは一辺 60 cm の隅丸方形とみられ、深さは 15 cm である。307 ピットは長軸 50 cm、短軸 41 cm の東西にやや長い楕円形で、深さ

は21cmである。これらのピットと関連付けられそうな遺構については179・180ピットの項を参照されたい。

いずれの遺構からも出土遺物はなかった。

### 153ピット(図27)

1調査区南半部東寄りで、建物8の南側辺に含まれる226柱穴と225柱穴のほぼ中間に位置する。長軸58cm、短軸34cmの南北に長いいびつな楕円形で、深さは10cmとやや浅い。遺構埋土から土師器高杯や甕、杯数個体分の破片など、複数の器種にまたがる遺物を検出した。遺物はいずれも破片で、完形品は含まれなかった。出土した遺物のうち、器形の復元が可能なもの2点を実測した。

### 305ピット(図27)

1調査区南半部で検出した。建物6の南東隅柱と建物8の南西隅柱の中間辺に位置する。1調査区において比較的ピットの検出密度が低い箇所に位置しており、周囲にこれとセットを成して柵もしくは掘立柱建物を構成する可能性のある柱穴を認めることはできなかった。長軸38cm、短軸29cmの南北にやや長い楕円形で、柱径8cm、深さは37cmである。出土遺物はなかった。

### 264・265土坑(図28)

1調査区南端部に位置し、264土坑が建物11の西側辺中央の柱を削平していることから、建物が廃絶した後に形成されたことがわかる。264土坑が265土坑を切っている。265土坑は長辺1.58m、短辺95cmの南北方向に長い隅丸方形の土坑で、深さは22~25cmである。底部にやや凹凸がみられ、断面形状は皿型である。遺構埋土は3層あり、ほぼ水平に堆積する。

264土坑は長辺1.29m、短辺1mの東西方向に長い隅丸方形の土坑で、深さは20cmである。底部はほぼ平坦で、断面形状は皿型である。遺構埋土は3層あり、ほぼ水平に堆積する。

遺構の長軸方向は直行するが、両者の形状・規模・埋土およびその堆積状況が近似することから、両者は同じ機能を有していたと推定される。ただ出土遺物等は検出されず、具体的な機能は不明である。

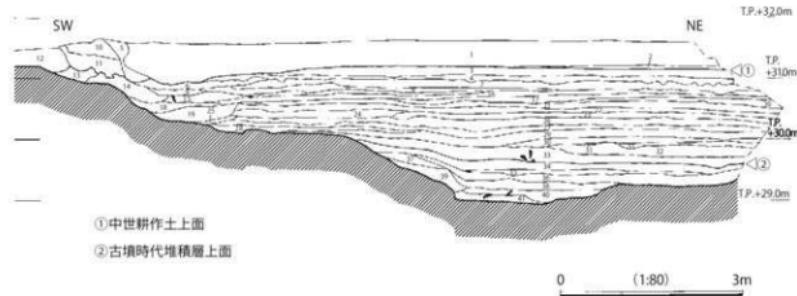
## 6 谷

調査区の南西隅と北西隅で谷地形を検出した。前者は上私部遺跡(その2)調査区の南西コーナー部分で検出された谷の北肩の延長部分をとらえたもので、住宅造成時に生じたかく乱により、落ち際の形状が確認されたにとどまる。したがってそれに関しては、前回の調査成果を中心に概要を述べることとする。後述するように、調査区南西隅検出谷地形の南側延長部分は谷頭に近いと見られるのに対し、調査区北西隅検出谷地形には、谷状地形の形成を促したと見られる侵食部分が認められないことから、前者と一連のものである可能性もある。

### 調査区南西隅検出谷地形北肩部分

上私部遺跡(その2)調査区では、南西コーナー部分を南東から北西にむかって谷筋が延びるが、その北側にあたる今回の調査区では、谷筋が北に向かってゆるやかに方向を転じることがわかる。上私部遺跡(その2)の調査では谷底部で「43溝」が検出されている。東の調査区外から西に向けてのびる幅30~50cm、深さ10cm弱の小溝が、北西に短く方向を転じながら広く・深くなり、大溝の形状をとりながら西へ向きを変えて流れる。大溝部分の最大幅は4m、深さは最大で約60cmあり、溝底の標高は東から西にむけて緩やかに下がる。小溝部分が谷状地形の形成を促した侵食部分ととらえられるこから、前回の調査区で検出されたのは、谷頭にあたる部分と考えられる。

「43溝」からの出土遺物は少なく、須恵器杯身・堤瓶・韓式系土器瓶底部片・甕胴部片や、土師器甕・



1	灰白~灰オリーブ	SY7.7~2~5/4	粗粒砂	水平方向にラミナ入る。頂部5cm未満の細少植入る。しまり悪い。(近井耕作跡)
2	灰オリーブ	7.5Y5.~2	シルト	0.3cm未満の細少植入る。上部より悪い。きめ細かい。水平方向のラミナあり。
3	灰オリーブ	5Y4.~2	粗粒砂混じり粘土~シルト	0.1cm未満の細少植入る。上部より悪い。植物遺体僅かに沈着。教質。しまりやや悪い。
4	灰	5Y4.~1	粗粒砂混じりシルト	同じくアマ入り。
5	灰	7.5Y5.~1	粗粒砂混じり粘質シルト	同じくアマ入り。10%程度入る。
6	灰 に似し黄	2.5Y6.~3	粗粒砂	黒色土ロック 10%程度入る。
7	灰	5Y4.~1	粗粒砂混じりシルトと 312号標の混合層	ブロック々々入る。径1cm未満の炭化片僅に入れる。
8	灰オリーブ	7.5Y4.~2	粗粒砂混じりシルト	312号40%程度入る。しまり悪い。径0.5cm未満の難解に入る。
9	灰	7.5Y4.~2	粘土	径1cm未満の細少植入る。
10	灰白	SY7.7~1~7/2	粗粒砂混じり粘質シルト	10%程度入る。
11	灰	7.5Y4.~2	中粒砂混じりシルト	径2mm未満の円錐入る。
12	灰灰黄	2.5Y4.~2	粗粒砂	粗粒砂ブロック僅に筋状に入れる。
13	灰白~灰	SY7.7~1~6/1	粗粒砂	径0.5%未満の難解入る。同色粘土ブロック 30%程度入る しまりやや悪い。やや教質。
14	灰	7.5Y4.~2	粗粒砂混じり粘土	ブロック20%程度入る。管状隙間沈着 部分的に細砂の流入あり。
15	灰 に似し黄	5Y6.~1	粗粒砂	径1cm未満の細少植入る。
16	灰 に似し黄	5Y6.~1~6/2	粗粒砂混じりシルト	10%程度入る。
17	灰	2.5Y6.~3	粗粒砂	100%未満の細少植入る。
18	灰	5Y4.~1	粗粒砂混じりシルト	ブロック40%程度入る。上位複乱痕跡あり。下位に倒いアマあり。机あり。
19	灰	5Y4.~1	粗粒砂混じりシルト	しまりやや悪い。
20	灰 に似し黄	5Y6.~1~6/2	粗粒砂	径0.5cm未満の難解入る。
21	灰灰黄	2.5Y4.~2	粗粒砂混じりシルト	ブロック30%程度入る。植物遺体少植入る。
22	灰 灰黄	2.5Y4.~2	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の難解入る。
23	灰 オリーブ黒	5Y4.~1	粗粒砂混じりシルト	ブロック10%程度入る。植物遺体少植入る。
24	灰	5Y4.~1	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の難解入る。
25	灰 オリーブ黒	10Y5.~1	粗粒砂混じり粘土	径0.5cm未満の難解入る。非常に教質。
26	オリーブ黒	5Y3.~2	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の難解入る。植物遺体少植入る。
27	オリーブ黒	2.5Y6.~2	粗粒砂	ブロック10%入る。
28	灰 灰黄	5Y3.~1	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の難解少植入る。
29	オリーブ黒	100.5Y1.~1	粗粒砂	ブロック30%程度入る。よじこまる。植物遺体僅かに入る。
30	オリーブ黒	5Y3.~2	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の難解少植入る。下部に倒いアマあり。
31	オリーブ黒	5Y3.~2	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の難解少植入る。しまりやや悪い。
32	オリーブ黒	2.5Y6.~2	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の難解少植入る。下部、下層の巻き上げあり。植物遺体僅かに入る。
33	オリーブ黒	SY3.~2~2/2	粗粒砂混じりシルト	ブロック30%程度入る。植物遺体少植入る。
34	オリーブ黒	5Y3.~2	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の難解少植入る。表面物、土壌片含む(古墳時代遺物包含層)。
35	オリーブ黒	SY3.~2	粗粒砂混じりシルト	水平方向に巻き上げあり 植物遺体少植入る(古墳時代遺物包含層)。
36	灰 黑	SY3.~2~4/1	粗粒砂混じりシルト	径1cm未満の難解少植入る。表面物、土壌片含む(古墳時代遺物包含層)。
37	オリーブ黒	SY4.~1~3/1	粗粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の難解少植入る。しまりやや悪い。下部に微砂状状に入る。植物遺体僅に入れる(古墳時代遺物包含層)。
38	黑	5Y2.~1	粗粒砂混じりシルト	0.5cm未満の難解少植入る。しまりやや悪い。下部に向かって砂の混入度高くなる。
39	オリーブ黒	5Y2.~1	粗粒砂混じりシルト	径2mm未満の難解少植入る。植物遺体少植入る(古墳時代遺物包含層)。
40	黑	5Y2.~1	粗粒砂	ブロック20%程度下に入れる。植物遺体 多量入る(古墳時代遺物包含層)。
41	黑	5Y2.~1	粗粒砂混じりシルト	非常に教質。同色細砂状少植入る。植物遺体 多量入る(古墳時代遺物包含層)。
	灰	5Y5.~1	粗粒砂混じりシルト	ブロック10%程度入る。しまり悪い(古墳時代遺物包含層)。

図 29 調査区北西隅検出谷土層断面図

壺・小型広口壺の破片が出土した。

#### 調査区北西隅検出谷地形（図 29）

逆L字状に谷肩部のラインが入り込み、北西へ向けて急激に落込む。谷肩部のラインが最も内側に入り込む部分では、谷地形の形成を促したと見られる侵食部分を認めなかった。また前述した谷では、谷の肩に向かって微高地上でもゆるやかな傾斜が見られ、谷斜面の傾斜も比較的なだらかなのに対し、こちらでは肩部から急傾斜を呈して落込む点も対照的である。これらのことから斜面が大きく窪む部分は、南西—北東方向から北に向かって谷筋が大きく蛇行する部分の可能性がある。

2.6 m強におよぶ谷埋積土のうち、古墳時代に形成された埋土は図 29 中の 34 層以下の層で、最深部で 70 cm 程度の厚みがある。これより上の堆積土壤に比べ、粒子が細かく均一で、粘性が強く、炭化物や植物遺体が多く混じる傾向がある。

古墳時代堆積層を仔細に観察すると、止水性堆積物の中にところどころ流水性堆積物がみられることがから、増水時にのみ一時に水が流れる状態だったことが推定される。また古墳時代堆積層の下部では植物遺体が多く含まれることから、当初は増水時以外には當時水が淀んでいる状況で、溝底に落込んだ植物の腐食・分解が進まなかつたとみられる。古墳時代堆積土上部では混入する植物遺体量が徐々に減少することから、谷の埋積が進むにつれ、徐々に谷底部も乾燥し、それにつれて植物の分解が促される状態だったことがうかがえる。

古墳時代堆積土壤中からは、須恵器・土師器・移動式竈の破片・U 字状土製品・木器等、比較的多量の遺物が出土した。古墳時代集落の居住域から投棄された日用品があまり流下せず、谷底にとどまった結果ととらえられる。

谷の傾斜面に所々平場がみられるのは、中世以降に行われた水田造成の際、谷の斜面際も削りこんで水田面を作り出した結果とみられる。古墳時代堆積層より上の堆積土壤は、水田造成および耕作に伴つて生じたもので、古墳時代堆積土壤に比べ、土壤化が著しい。なお中世以降の谷部の耕地利用に関しては次節で詳述する。

### 第3節 古代から中世の遺構

古墳時代遺構面の上層では、第1節の基本層序で述べたように、中世以降の耕作土層が堆積する。古墳時代の遺構群が廃絶した後の、このあたりでの人々の居住を示す遺構は検出されておらず、少なくとも中世から現代に至るまでは稻作を中心とする生産地としての土地利用が連續と続けられたことがうかがわれる。中世遺構面として、中世における水田開発の二期ととらえられる段階の水田面を調査し、水田関係遺構を調査した他、古墳時代遺構面でも、それより遡る時期の鋤溝等を確認している。それらは古墳時代に属する遺構と比べ、遺構埋土が粒度の細かい砂質土からなり、粘性に乏しいなど、土質に明らかな違いを認めた。したがってここでは、古墳時代遺構面で検出した耕作関係遺構群を、時期不明であるが「古代～中世の遺構」として報告し、上層第1面で検出した遺構を「中世の遺構」として項を分けて報告する。

#### 1 古代～中世の遺構（図30）

古墳時代遺構面で検出した、耕作に関わって形成されたとみられる溝群である。全て古墳時代の遺構を切っており、古墳時代の集落が廃絶した後に形成されたことは確実である。ただ前回の調査結果と併せてみても、遺構の帰属時期を示す遺物は検出されておらず、時期は特定できない。現状では水田利用が開始された当初の状況を示す遺構群として把握する。

坪境畦畔の位置で検出した1130溝をはじめとする南北方向の溝と、それに直行する溝を検出した。南北方向溝は中世遺構面で検出した畦畔と重複するか、もしくはそれに近い位置で検出している。

ちなみに前回の調査では調査区の北半と南半で溝の検出状況が異なることが報告されている。調査区北半で検出される溝はおむね東西もしくは南北方向を指向するのに対し、南半では東西方向から南北方向へと緩やかに湾曲する「75・76溝」を機軸として、溝が湾曲する状況が認められる。このような状況は、この部分に小さな谷が入り込んでいたためと推測されている。

前回の調査区の北側にあたる今回の調査区では、前回の調査区北半の状況と同じく、東西もしくは南北方向を指向する溝で、整然とした土地区画が行われている。水田の東西もしくは南北幅を示すと考えられる溝間の距離は、18～20mの中に含まれるが、143溝から149溝までの幅は12m強とやや狭い。

#### 2 中世の遺構（図31）

中世遺構面の基盤層は調査区全面に広がるものではなく、2調査区西半や1調査区北西端の谷地形に向けて微高地の標高が緩やかに下がる部分で見られた。このことから中世遺構面基盤層は水田面積を広げるために造成されたとみられる。この面で検出した畦畔の位置は、その後の畦畔にはほぼ踏襲される。

中世遺構面ではほぼ南北方向を指向する畦畔と、それに平行もしくは直行する溝、鋤溝等を検出した。畦畔はその裾に平行する溝とセットをなして、構築されたことがうかがわれる。これらの溝は取水・排水を担っていた水路として機能していたと考えられる。

中世の耕作土に含まれる遺物は大半が古墳時代のもので、中世土器の出土数は必ずしも多くない。中世遺構面より上の、中世耕作土層では、土師器皿の破片や瓦質土器の破片等を検出した。またそこからは南北朝時代のものとみられる斧や、瓦質火鉢の破片等も出土している。

一方、中世遺構面基盤層以下の中世耕作土からの出土遺物も、大半を古墳時代の遺物が占め、中世の遺物はそれほど多くない。瓦器や土師器の細片が少量含まれるにとどまる。またそれらは大半が時期比定の困難なものだった。ただ中世遺構面を精査している時に検出した瓦器椀の破片は、それより上の層

上私部遺跡 (その3) 07-1



図30 古代～中世遺構配置図

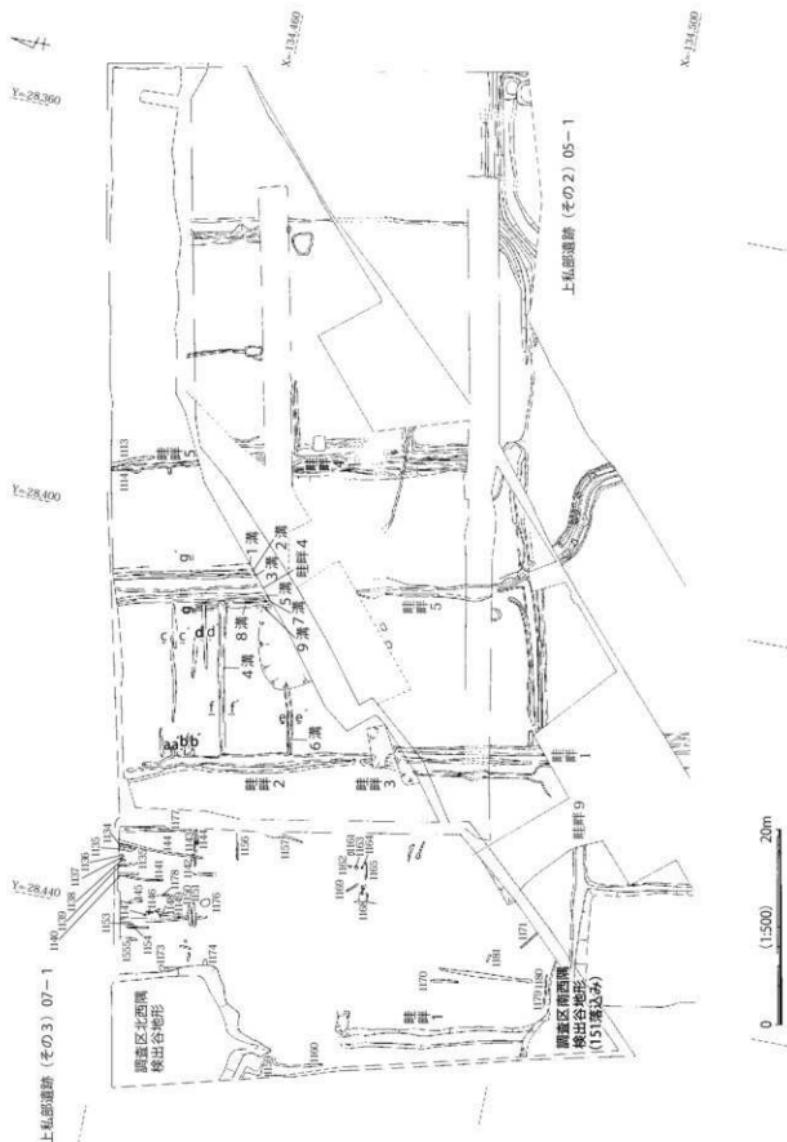


図31 中世遺構配置図

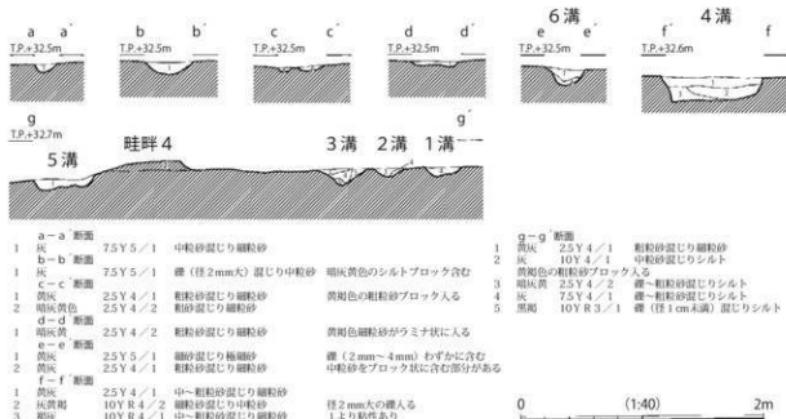


図32 中世溝・畦畔断面図

から出土した遺物と比較して、やや時期が遡ると考えられるものである。瓦器碗の口縁部が、端部から2.5 cmの長さでわずかに残存するのみなので確定はできないが、幅1 mm程度のミガキが内面に密に施されるのに加え、外面にもそれよりはややまばらだがミガキが施される。口縁端部は丸くおさめられており、器壁の厚さは3 mm程度である。おそらく12世紀後半から13世紀初頭に属するものとみられる。

中世遺構面で検出した溝の埋土からは、内面にわずかにミガキを施した瓦器碗が出土している。中世遺構面で検出した遺構に内包されていた遺物はいずれも細片であるため時期を特定するのは難しいが、高台断面が三角形を呈し、内面のみに施されたミガキもまばらな、退化傾向が顕著な時期のものである。

これらのことから中世遺構面の基盤層は、12世紀後半～13世紀初頭を上限とし、13世紀後半から14世紀を下限とする時期に形成されたことがわかる。この造成に伴い、水田の区画がそれ以前より広げられていることから、この段階に水田造成の規模が変化したことがうかがえる。またこの区画が以降の水田区画に踏襲されていることから、中世遺構面が形成された時期を、調査区域の中世における、耕作活動の一つの二期とみます。

### 畦畔1

1 調査区西端で検出した南北方向に伸びる畦畔である。調査区北西隅の落込みの手前で途切れる。南端は住宅造成時に生じたかく乱で削られるが、位置的にみて上私部遺跡（その2）調査区検出の「畦畔9」に直交して繋がるとみられる。

### 畦畔2・3

2 調査区西端で検出した南北方向に伸びる畦畔である。畦畔2と3の間がわずかに途切れるが、两者はもともと一連のものととらえるべきだろう。これら畦畔の西側は壇状に下がっている。またその東側には畦畔に沿うように溝が掘り込まれており、その間の相対的に盛り上がった部分が畦畔2・3である。南側の延長部は上私部遺跡（その2）調査区で検出した「畦畔1」に繋がる。畦畔の東側に設けられた溝は、水田区画への給排水のために設けられたものと考えられる。

#### 畦畔 4

2調査区中央やや西寄りで検出した、南北方向に伸びる畦畔である。すぐ西側を畦畔に沿わせて、5溝が掘りこまれている。また西側には1mほど離れて畦畔4と平行する1~3溝を検出した。それらの溝は切りあっており、わずかに位置をずらしながら掘り直されたものとみられる。南側延長部は位置的にみて、上私部遺跡（その2）調査区で検出された「畦畔5」に至るとみられる。

1~3溝埋土より瓦器・土師器の細片が10点弱出土した。いずれも摩滅の著しい小片だったが、かろうじて実測可能なものが1点あった。5溝の埋土からは瓦器椀と青磁椀の剥片が各1点出土した。

#### 畦畔 5

中世遺構面の基盤層が検出されたのは主に畦畔4から西の部分で、この遺構のあたりでは痕跡的にしか認められなかった。したがって畦畔の形状としても不完全な形でしか検出できなかった。南北方向を指向して近接して伸びる1113溝と1114溝に挟まれ、相対的に高く残る部分を畦畔5ととらえる。南側の延長部は上私部遺跡（その2）調査区で検出された「畦畔4」に至るとみられる。

#### 4溝

畦畔4と畦畔2東側の溝を結ぶように東西方向に伸びる。幅33cm、深さ13cmで、断面形はU字状である。出土遺物はなかった。

#### 6溝

4溝の南側で、それに平行して東西方向に伸びる溝である。溝の東半部はかく乱で削平されるが、おそらく4溝と同様、畦畔4の手前まで伸びていたものと考えられる。幅83cm、深さ20cmで、断面形は皿形である。

遺構埋土より瓦器椀・土師器の細片が出土した。うち、瓦器椀の方は口縁部付近が残存しているが、丸みの無い形態で、口縁部外間に強いヨコナデによる段が生じており、最終段階の形態の特徴を有している。

#### 鋤溝

主に畦畔4より西側の範囲で検出した。幅はおおむね20cm前後で、深さは5~10cm程度である。畦畔4と畦畔2・3に挟まれた部分では鋤溝の切り合からみて、南北方向から東西方向に耕起もしくは畠立ての方向が変化することがわかる。それに対して畦畔2・3より西側では、南北方向から東西方向に変化する。

#### 調査区南西隅検出谷地形（151落込み）

旧地形で谷を検出した部分は中世以降の水田造成に伴い、徐々にかさ上げされていく。ただ旧地形の影響で周囲よりも低くなってしまい、この段階の水田区画にも影響を与えたことがうかがえる。前回の調査で検出された「畦畔9」はこの谷の落ち際をかすめるように設置されたものだろう。谷部分の水田耕作土から出土した遺物は必ずしも多くないが、瓦器椀の底部や体部上半、土師器皿などがある。うち、瓦器椀底部の高台は、端部がやや外側に張り出した、断面逆台形状のしっかりしたものだが、13世紀を遡る時期のものではなさそうである。したがって、微高地状の耕地開発と相前後して、この部分の耕地開発も進められたと考えられる。

#### 調査区北西隅検出谷地形

古墳時代堆積土上面から中世耕作土上面にいたるまでには、おびただしい耕作土層の累積がみとめられる（図5・29参照）。耕作土層はほぼ水平に堆積し、V字状の谷断面に呼応して、耕作面の標高が高

くなるにしたがって谷水田の耕作面積も拡がった。また耕作面と斜面際、もしくは肩部に溝や畦畔がめぐらされたこともうかがえる。土層断面で見て、中世耕作土下半部分の堆積層が、中世水田面基盤層の堆積時期よりも前なのか後なのか、つまり谷地形の耕作地利用が、水田造成の大規模化の前か後かを、土層断面から判断することはできない。

中世耕作土からの遺物の出土量は必ずしも多くないが、その中で明らかに13世紀後半を遡る時期の遺物は出土していない。したがって、微高地状の耕地開発と相前後して、この部分の耕地開発も進められたと考えたい。

中世耕作土の上半部は、明らかに中世遺構面の形成よりも後の時期に堆積したものである。中世の終末期においても、かつての谷地形の影響を受け、隣接する耕作面より50cm近く低い状態だった。近世以降にその宿地をめがけて洪水砂が集まつたことにより、隣接する水田面との比高差が解消され、それ以降は一つの区画とされるに至ったようだ。

## 第4章 遺物

### 第1節 古墳時代の遺物

#### 1 土器・土製品・石器等

今回の調査で出土した土器の時期的な様相や、器種構成は上私部遺跡（その2）の調査成果として報告された内容とおおむね一致する。古墳時代の遺物は建物群を区画する溝や土坑、調査区北西隅で検出した谷地形の古墳時代堆積層等の他、中世以降の耕作土層からも出土した。

古墳時代遺物の大半を占めるのは須恵器と土師器で、木器がそれに次ぐ他、砥石や鉄滓もわずかながら出土した。須恵器では大半を杯や、甕・壺の胴部片が占める。土師器では甕や瓶などの煮沸具が多く出土しており、甕胴片では高杯も多く出土している。鉢は少量の出土にとどまるが、完形品が数点出土した。接合の後、全体の形状がうかがえ、時期比定が可能なものを中心に実測したため、実測図を作成したのは必然的に杯類や、壺・甕の口縁部が多くなった。したがって実測対象からもれた遺物の器種組成や、特徴に関しては、極力文章中に盛り込むよう考慮した。

出土遺物の帰属時期はおおむね6世紀前葉から7世紀初頭に含まれ、の中でも6世紀後半の遺物が大半を占める。ただそれらに混じて弥生土器や古代の須恵器もわずかながら出土しており、それらもこの節で提示する。

時期比定の主たる判断材料となった須恵器杯類は、いくつかの生産地からもたらされたものからなるとみられ、複数の系統がとらえられる。同一遺構から出土した杯類に複数の要素が見られる場合、それを生産地の違いから生じたほぼ同一時期の遺物群とするのか、時期差ととらえるのかで、遺構や遺跡の解釈にも影響が生じることになる。一方、甕・瓶・提瓶、壺類では吹田窯や桜井谷窯を包括した千里古窯群の須恵器との共通性を指摘できそうである。したがって出土遺物から遺構の帰属時期を判断する場合は、全体的な遺物の組み合わせにも充分目を配るよう努めた。

実測図に掲載したすべての個体の説明は、観察表の記載をきめ細かくすることでおおむね網羅することとし、ここでは全体的な遺物の様相や、実測図に盛り込めなかった遺物の様相を補足説明することに主眼を置く。

#### 12 穫穴住居（図33）

建物関係の遺構の中では、最も遺物の出土量が多い。実測図に掲載した遺物の他、土師器では甕の破片が2個体分、器種不明の細片が10点強出土しており、それらはいずれも摩滅が著しい。須恵器では杯の破片が5点、甕の胴部片が3点、高杯蓋の破片が1点出土している。杯破片は底部もしくは天井部とみられ、回転ヘラケズリが施されており、ヘラ切り痕跡の残るものはない。いずれも胎土中に白砂粒が多く含まれる。3点の甕胴部片はいずれも外面には平行叩き、内面に同心円文の当て具痕跡が認められる。そのうち最大径付近とみられる破片には、頸部から肩部にかけて外面にカキメが施されていたとみられる。有蓋高杯の蓋は中央に凹面を呈するつまみの部分のみが残存するものである。

1は底部の延長として受部が作り出されており、底部と受部との区分はできない。立ち上がりは短く内傾し、口径は12cmと小型化傾向がみられる。土師器甕は体部の大半が欠損するが、両者はほぼ同じ器形とみられる。比較的薄手で肩部は丸みを帯び、口縁端部はわずかに上方につまみあげるように丸く

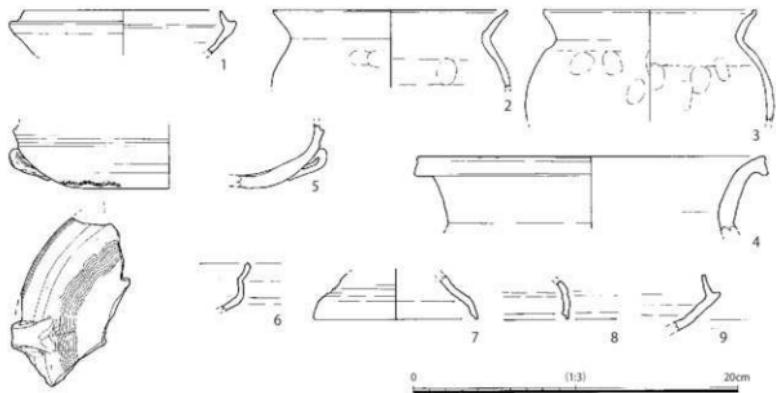


図33 12 穫穴住居〔1～4〕、298 柱穴(柱穴列7)〔5〕、<sup>(25)</sup>柱穴(建物3)〔6〕、121 柱穴(建物3)〔7〕、199 柱穴(建物10)〔8〕、37 ピット(建物13)〔9〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号

おさめる。以上、この遺構の出土遺物はおおむね6世紀後半の様相を呈するとみて大過ないと考える。

### 建物3

図化した遺物の他に120柱穴と121柱穴のそれぞれで、土師器と須恵器杯の破片が1点ずつ出土している。121柱穴出土の須恵器杯では、回転ヘラケズリの範囲は底部もしくは頂部付近のみで、中央にケズリの及ばない部分がみられる。

7は短脚高杯の脚部片で、裾部で屈曲して段を成すものと見られるが、製作手法の退化が進み、本来は明瞭に作り出されていた張り出しがなだらかな稜線に退化している。脚端部は内側に向けて傾き、わずかに凹面を呈する面が作り出されている。出土遺物がわずかなことに加え、柱穴埋土に含まれる遺物をもって、建物の帰属時期を明確に判断することはできないが、おおむねこれらの遺物は12建物出土遺物とほぼ同時期か、それよりやや降る時期の様相を示すと考える。

### 建物10

198・199・200柱穴からいずれも複数の土器片が出土したが、図化したもの以外に器種の判別ができるものはない。8は器壁が薄くて華奢な印象を受ける。体部外面に凹線をめぐらせて稜線を表現する。口縁端部には内側に傾く凹面が作り出されているが、全体的にみて製作手法には簡略化が認められる。

### 建物13

図化した遺物の他、38柱穴から土師器の細片が2点出土するが、いずれも器種等の判別はできない。

9は口縁部がわずかに残存するにとどまる。底部の延長として受部が作りされており、底部と受部との区分はできない。立ち上がりは短くわずかに内傾し、当古墳時代集落の最終段階の須恵器の様相に類似する。口径復元ができないため時期判断の決め手に欠けるが、いずれにせよ6世紀後半を廻るものではない。

### 柱穴列7

5は柱穴列7から出土した唯一の遺物である。無蓋高杯の杯部の破片で、内外面に自然軸がかかって

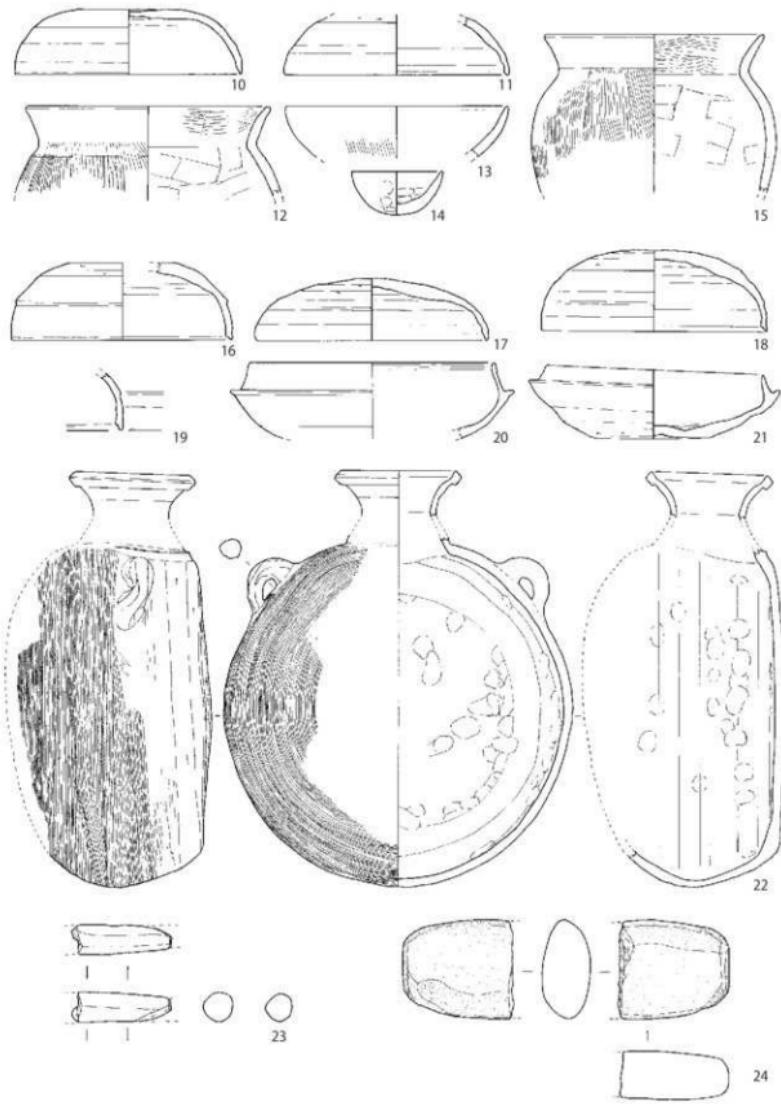


図34 15溝〔10～15〕、20溝〔16～24〕出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

光沢を帯びる。底部付近に一部火ぶくれがみられる。底部は平らで、器高もそれほど高くないと見られ、全体に扁平な印象を受ける。口縁部と体部を画する稜線の下に、浅い四線を2条めぐらせている。

長方形の粘土板を折り曲げるようにして把手が付けられており、その上端は四線の下に位置し、下端は底部近くに達する。体部に施された一条の波状文は、その把手よりも下に付されているため、底部の輪郭をなぞるような位置で、真横からはわずかにしか見えない。把手を貼り付けた後に波状文を付しているため、把手の下部が波状文の原体でわずかに削られている。このタイプの高杯に文様が付される場合、通常は把手より上かもしくは把手の位置に文様帶が置かれることを考えると、施紋の位置がややイレギュラーであるという印象を受ける。

### 15溝

遺構の規模に比べて出土遺物が多く、実測図を掲載した遺物以外には、細片を含めると須恵器片が6点、土師器片は35点出土している。実測できなかった遺物のうち、須恵器では杯類の破片が2点あり、それ以外は甕の胴部片とみられる。うち1点だけ含まれていた口縁部片は、体部との明瞭な区別のない短い受部から、内傾する短い立ち上がりを有するものである。土師器はおむね摩滅が著しく、器種特定の困難なものだが、おそらく甕・甕等の煮沸具が大半を占めると考える。

実測した遺物のうち、2点ずつ出土した須恵器の杯蓋と土師器の甕は、それぞれ形態的な特徴が一致しており、比較的時期的なまとまりのある遺物ととらえられる。10・11はいずれも稜線が退化し、本来それが施される部分にわずかな張り出しがもたらせるにとどまる。ただ口径はそれほど小型化しておらず、器形も稜線が退化寸前のものと共通する。10は口縁端部に、内側に傾くやや幅広の凹面がありだされるのに対し、11の口縁部内面には強い回転ナデが施されて幅広の段をなし、端部は丸くおさめられる。また前者には天井部に回転ヘラケズリが施されるのに対し、後者は天井部にヘラ切りの痕跡をとどめることから、後者は前者に比べてより製作上の簡略化が進んでいると言える。14は手づくねのミニチュア土器で、内外面共にユビオサエの痕跡が顕著である。

実測できなかった土器の様相も含めて、これらの土器はほぼ6世紀後半に含まれると考える。

### 20溝

実測図に掲載した土器以外にも比較的多量の遺物が出土した。実測遺物以外に須恵器13点、土師器60点があり、大多数を占める後者のほとんどは器種も特定できない摩滅した細片である。そのうち甕・甕等の煮沸具とみられるものが8点で、唯一の甕口縁部片は、口縁端部をわずかにつまみあげるように丸く肥厚させている。須恵器では杯類の頂・底部片が5点、甕胴部片が7点、不明が一点である。甕胴部片の中には外面に平行叩き、内面は当て具痕の擦り消しを行うものが1点含まれる。それ以外の胴部片では内面に同心円文の当て具痕、外面には平行もしくは格子目叩きの痕跡がみられる。

実測図に挙げた須恵器のうち最も古い様相を帯びるのは20で、ほぼ水平に張り出した受部からやや内傾して伸びる立ち上がりは長い。口縁端部よりやや下がる内面に浅い四線をめぐらして、かろうじて段を表現する。これに比べて21は口径が小さく、立ち上がりは短く、全体に粗雑なつくりである。杯蓋の16と18は口縁部側をわずかに一段下げて外面に鈍い稜線を作り出す。19は口縁部側を幅広の凹線状にくぼませて、17はその半分にも満たない細い幅の凹線をめぐらせてかろうじて稜線を表現している。つまり稜線のみに着目すれば、16・18→19→17の順に退化傾向が進む。16と18は天井部が丸みを帯びる点でも共通するのに対し、17は器高が低く扁平な印象を受ける。ただ口径を比較すると16・18と17とでは、ほぼ同じか前者の方が小さく、回転ヘラケズリの範囲も前者の方が狭い。

いずれのタイプにせよ、口縁端部には沈線をめぐらせたり凹面状にくぼませたりして、かろうじて段を表現している。23は棒状の土製品で、用途は不明である。24は硬質な石材で、特に使用痕は認められないが、ちょうど手のひらにおさまる大きさで、形も整っていることから、何らかの目的で意図的に持ち込まれたものの可能性がある。

20溝の南側の延長部分は上私部遺跡（その2）の調査で1090溝として調査され、遺物も報告されている。<sup>注1)</sup>それによると比較的まとまった量の遺物が出土しており、杯蓋では稜線を持つものと稜線のないものがあるが、稜線が無く、かつ小型化したものは認められない。杯身では口径12cm前後で立ち上がりの長いものと、口径13~14cmで立ち上がりが短く全体に扁平なもの二者がみられる。実測図を比較すると前者は図34の20と比較的器形が似るが、今回出土したものに比べて底部から体部にかけての立ち上がりがやや直線的で、わずかに作りが粗い印象を受ける。

以上を勘案すると、20溝の埋土に含まれる遺物にはやや時間幅を持つものが含まれると言うことができる。ただいざれにせよ、6世紀の中でとらえられるものと考える。

## 21溝

比較的多量な土器が出土した。新旧2時期の溝の重なりが認められるが、出土遺物から明確な時期差はとらえにくい。須恵器杯類の形態からとらえられる時期幅は6世紀中頃~7世紀初頭にかけての期間に相当すると考えられる。また後述する、21溝が埋まつた後に掘削されたと考えられる、22井戸出土遺物との時期差も、土器の形態からだけでは明確にはとらえられない状況である。

実測した土器以外では、細片を含めると土師器109点、須恵器31点が出土した。前者が大半を占めるが、うち62点が器種を特定できない摩滅した細片で、それ以外はほとんどが甕・櫃等の煮沸具が占め、杯もしくは高杯とみられるものは1点だった。須恵器は杯類が8点、甕の胴部片が18点、器種不明の細片が5点である。杯類には稜線の無い杯蓋1点、ヘラ切り後無調整のもの1点が含まれる。甕胴部片では外面に平行叩き、内面には同心円文の当て具痕跡をとどめるものが大半を占めるが、内外面とも粗い擦り消しを施すもの、外面に格子目叩きの痕跡をとどめるもの、平行叩きの後カキメを施すもの、逆にカキメの後平行叩きを施すものが少數ずつ見られた。それらの内面には同心円文の当て具痕がみられ、内面の当て具痕跡のみを擦り消すものはなかった。

実測図に挙げた須恵器杯類をみると、杯身は薄手のものとやや厚手のものに分けられる。さらに薄手のものには底部から外方へ直線的に伸びる体部の延長部分を受部とし、内傾する短い立ち上がりを作るもの（36・40）と、体部から口縁を内側に逆「く」の字形に折り曲げるようして内傾の著しい短い立ち上がりを有するもの（30）の2者に分けられる。40は底部が平坦で、ヘラ切り後、底部の中心部分に「の」の字を書くような、しるし程度の回転ナデが加えられている。一方、30は口縁部径が小さく受部および立ち上がりの簡略化が進むが、底部外面の回転ヘラケズリは省略されない。

杯蓋では28と31が薄手の作りで、前者は外面にやや幅広の凹線を一条巡らせてかろうじて稜線を表現するが、後者は稜線をもたず扁平である。これら薄手の杯身と杯蓋は、形態的な特徴からみて近い時期のものと見てよいだろう。口径を比較すると31は30のタイプと、28は36・40のタイプとセットをなすという想定も可能である。杯身のみを見た場合、口径の縮小と製作手法の簡略化は一概にリンクしないため、いずれかの要素をとらえて形態の新旧を判断することはできないが、杯蓋とのセット関係も考慮すると、30の方がやや時期が降る可能性があろう。いざれにせよこれらの杯類は当遺跡出土の須恵器杯の中では、最も新しい様相を帯びるものであると言えるだろう。

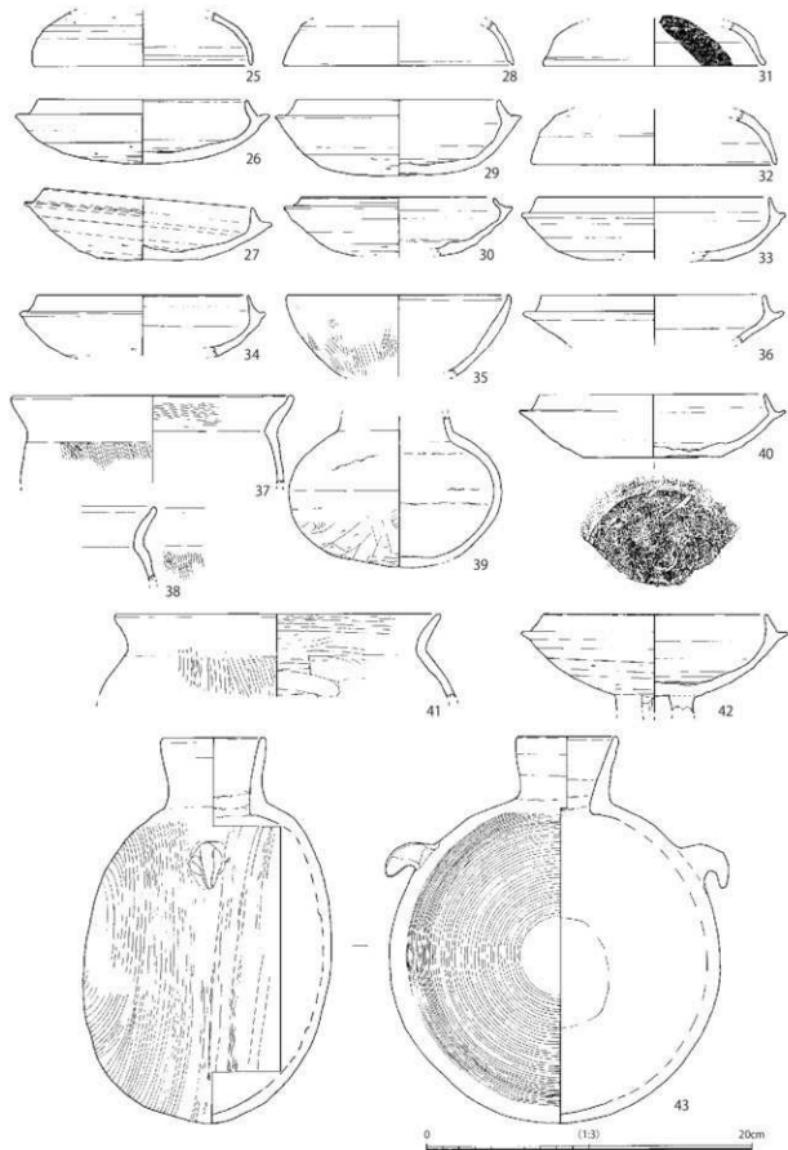


図35 21溝・22井戸〔25～27〕、21溝〔28～43〕出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

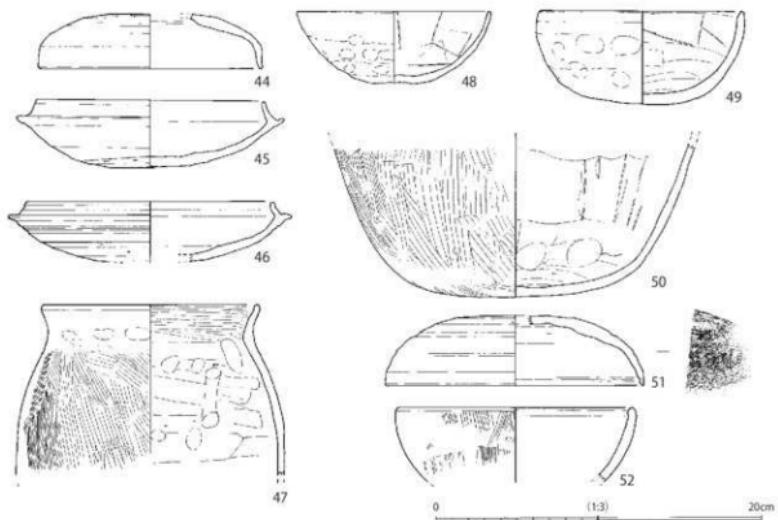


図36 22井戸〔44～50〕、32溝〔51・52〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号

やや厚手の杯身のうち、33と34は全体が扁平な形状や、受部および立ち上がりの作り出し方、整形方法にいたるまで、非常に類似性が高い。これらは、体部の器壁はやや厚ぼったいが、受部は器壁の一部をわずかに水平方向に引っ張り出して作り出したような形状である。また短く直立する立ち上がりは薄くて華奢な印象を受ける。内面においては体部と立ち上がりの境界が判然としない。有蓋高杯42の杯部の形態も、これらと類似性が高いと考える。一方、29は底部から口縁部にいたるまで、全体に器壁が厚く、底へ体部は全体に丸みを帯び、回転ヘラケズリも比較的丁寧に施されるが、口径は12.3cmと小さい。22井戸との掘り分けが厳密にできず、結果的には21溝遺物と混ざって出土した遺物を21溝・22井戸出土遺物として掲載したが、その中の杯身26・27は29の形態的特徴を残しつつも全体に器形が扁平になり、立ち上がりの退化傾向も進んでいる。これらは29に後続して現れる形態とみられる。

土師器壺では全体の形状がわかるものはないが、口縁端部を丸くおさめるものと、ややつまみあげるようにして丸くおさめるものの2者がある。

43は口縁が直立するように立ち上がり、胴部は円形を呈して両面共にふくらみを持ち、把手は鉤状を呈する。この器種では最終段階の形態ととらえられる。

前章でも述べたように21溝出土遺物は、上私部遺跡（その2）の「136溝」の遺物群と様相が一致している。したがってその前身の「138溝」を再掘削した段階で、さらに北側に延長された部分が21溝であると考えられる。

## 22井戸

実測図にあげたもの以外では土師器4点、須恵器3点がある。前者は壺が1点と器種不明品3点、後者はすべて腹脛部片である。その中に、外面に格子目叩きの痕跡、内面は当て具痕の痕跡を丁寧に擦り

消したもののが認められた。遺物の出土数はそれほど多くないが、その中に点数の限られる土師器杯が完形で2点出土したのは特筆される。

須恵器杯類はすべて薄手のもので、前述した21溝出土の薄手の杯類と同様のものである。22井戸が21溝の埋積後に掘削されていることを考慮すると、厚ぼったい形状の杯が姿を消し、極めて器壁の薄い粗雑な作りの杯のみが残るのが、集落の最終段階の須恵器杯類の様相ととらえ得る。46は口径が15cmあり小型化傾向は認められないが、きわめて短い立ち上がりは内傾化が著しい。また胎土は砂粒の混入の著しい粗雑なものである。口径が小型化する杯蓋44は、本来稜線が作りだされる場所にやや肩をもたせているが、稜線は退化している。土師器甕47・50は大きさが異なるが、体部外面に粗いハケが明瞭に残り、内面には横方向のケズリとユビオサエの痕跡が顕著に残る点は共通する。

### 32溝

実測図を掲載した遺物の他に土師器片が9点、須恵器が3点出土している。土師器は甕と、杯もしくは高杯片が各1点でそれ以外は器種不明の細片である。須恵器は杯類の破片が2点、甕の胴部片が1点である。

51は外面に凹線をめぐらせてかろうじて稜線を表現する。また口縁部内面にも凹線をめぐらせて口縁端部の段を表現している。体部外面に、ハケ状の工具を押し当てたような痕跡がわずかに残る。52は口縁端部をわずかに肥厚させて丸くおさめる。

### 29・30・127溝

それぞれが重なるように切りあっており、厳密に掘り分けることができず、複数の溝の遺物が混ざる場合もあったため、ここでは図37と図38を通覧しながら出土遺物の様相にふれたい。また上私部遺跡（その2）の調査で、これらの溝の南側延長部を調査しており、その際の出土遺物も紹介されているので、それらも併せて概観したい。

これらの溝からの出土遺物を一覧すると、6世紀全般の遺物が出土しているが、21溝や22井戸でみられる集落の最終段階にあたるとみられる器壁のきわめて薄い、粗雑化の進んだ須恵器杯はほとんど認められない。したがってこれらの溝は、集落の最終段階にはその機能をほぼ終え、痕跡程度のものになっていたと見て問題ないと考える。

〔29溝〕実測図を掲載した遺物以外では土師器が16点、須恵器が9点出土した。前者には甕片が1点含まれ、それ以外は器種が特定できない破片である。後者は高杯の脚基部片が1点、杯類の破片が3点、甕口縁部片が1点、甕胴部片が4点である。甕胴部片では外面に平行叩きの後にカキメを施し、内面に同心円文の当て具痕を残すものが1点、それ以外は外面にカキメ調整後平行叩きを施し、内面には同心円文の当て具痕跡を残す。後者には内面に粗い擦り消しを施すものが1点含まれていた。

67は内傾ぎみに伸びる立ち上がりがやや短いものの、口径は14cmあり、受部や立ち上がりの作り出し方に顕著な簡略化は認められない。68は口縁端部からやや下がった外面に粘土を貼り足して、口縁端部全体を肥厚させたように見せている。

70は残存部を見る限り、表面は摩滅してかるく光沢を帯びる。もとは平面が楕円形の礫とみられ、長軸方向の先端には敲打痕が認められる。礫はこのほかに72があるが、こちらは硬質な石材で、使用痕は特に認められない。ただちょうど手のひらに収まる大きさで、何かに使う目的で人為的に持ち込まれた可能性はあると考える。

この溝の延長部と考えられる、上私部遺跡（その2）調査時に検出された「842溝」では、67と同

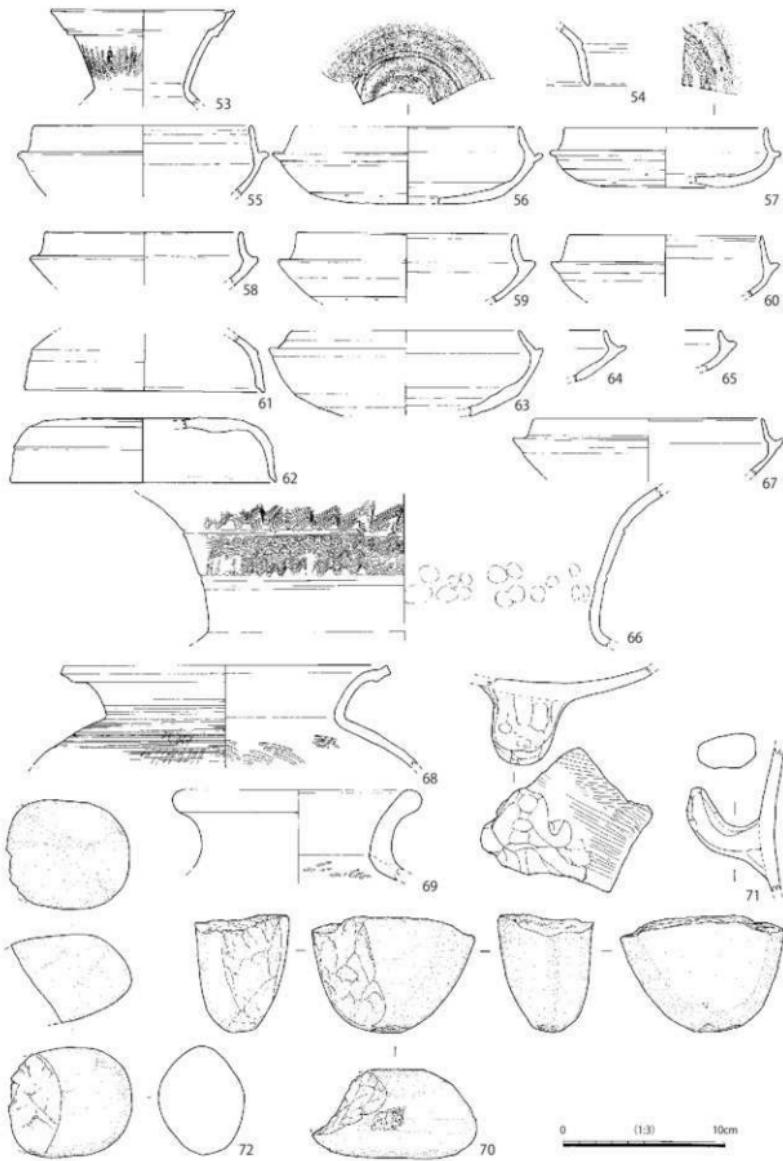


図37 29・30溝〔53～60・66・72〕、29・30・127溝〔61～65・71〕、29溝〔67～70〕出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

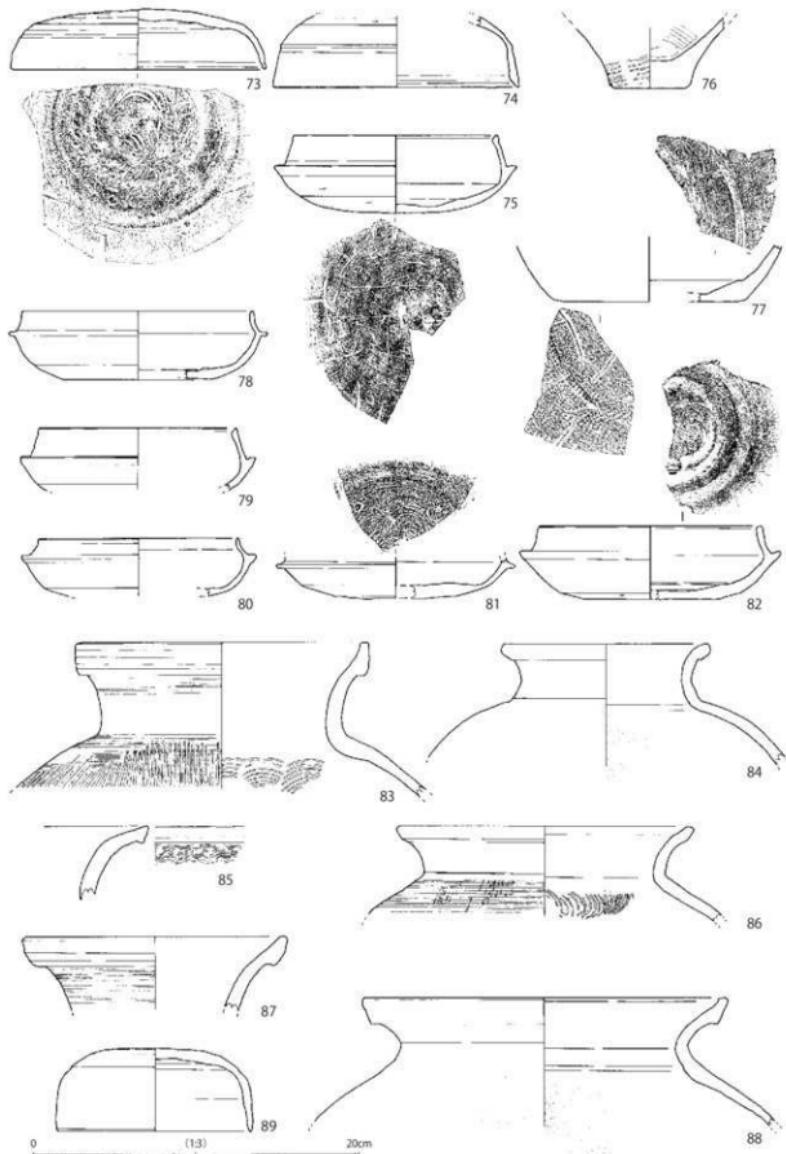


図38 30溝〔73～84〕、26溝〔85～88〕、154溝〔89〕出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

タイプの須恵器杯の他、稜線を失って中央部にヘラ切り痕を残す杯蓋や、口縁が小型化した杯身が出土しており、存続期間の長さが想定されている。ただその中で比較的古い様相をもつとされる杯類に関しては、口縁端部に段を作りだすものはみられないことから、6世紀中頃から後半の範疇でとらえられると考える。

〔30溝〕南北方向を指向する29・30・127溝の中で、30溝は最も遺物の出土量が多かった。したがって溝ごとに掘り分けることができなかった遺物に關しても、30溝の土器組成の様相が最も強く反映されていると考えられる。実測遺物以外では土師器が35点、須恵器が52点で、他の遺構とは異なり、須恵器の占める比率が大きい点も特筆される。土師器は甕・壺等の煮沸具とみられる破片が12点で、それ以外は器種不明である。須恵器は杯類が31点、甕胴部片が16点、無蓋高杯1点、壺1点、器種不明が3点である。胴部片では外面に格子目叩き、内面には同心円文の當て具痕の残るもののが8点、外面に平行叩き、内面同心円文の當て具痕の残るもののが2点、外面は平行叩き痕で内面を丁寧に擦り消したもののが5点、それ以外は外面を平行叩きの後にカキメ調整、もしくはカキメ調整後平行叩きで、内面同心円文の當て具痕を残すものであった。

他の遺構に比べて、内面の當て具痕跡を擦り消すものの比率が高いと言える。さらに杯蓋では稜線が明瞭に作り出され、杯身では受部が明瞭で立ち上がりが長く、口縁端面に段を作り出すなど、比較的古い様相を帯びる遺物が大半を占める。全体に扁平で立ち上がりが短く、やや粗雑なつくりの杯身も3点含まれていたが、口径が小型化するには至っていないものとみられる。杯類の天井部もしくは底部のみが残存するものに關しても、回転ヘラケズリを省略したものは見られない。

実測図を掲載した遺物をみても、杯身ではおおむね底～体部の形状は丸みを帯び、やや内傾しつつ上方に長く伸びる立ち上がりをもつ。特に75・79は口縁端部に退化傾向はみられるものの、段が作り出されており、古い様相を残す。底部が平坦で立ち上がりがやや短いもの（78・80）についても、ほぼ水平方向に短く伸びて体部と明瞭に区別される受部がつくりだされ、腰が張る特徴的な形態を呈する。81もおそらくこれと類似する形態ととらえられるだろう。さらに図37-56・57もこのタイプに含まれるとみられることから、この時期の須恵器杯身に一定量含まれる型式ととらえられる。

74は明瞭な稜線が作り出され、やや肥厚する口縁端部には凹線を巡らせて、退化傾向のある段が表現されている。前述したように実測できなかった遺物中でも、杯蓋ではこのタイプが主流だが、73のように扁平で屈曲部分に凹線を巡らせてからうじて稜線を表現したものも認められる。ただその口縁端部には明瞭な段が作りだされる。74のように天井部が平坦で全体に扁平な器形は、稜が退化し、口径が小型化するものにはよくみられる。しかし図37-62のように、稜線が明確に作り出されるものの中にも平坦な天井部を有するものがあることから、73もこのタイプの流れをくむものと理解できる。

このように須恵器の杯類を概観すると、全体に今回の出土遺物の中では古相を示す。須恵器杯類の内面に當て具痕の残るもののが少量含まれる点も、これと合致する。また平底鉢（77）も出土している。

83は口縁端部付近を内湾気味に直立させ、口縁端部からやや下がったところに粘土を貼り足して、口縁部全体を肥厚させたようにみせるもので、体部外面はカキメ調整の後に平行叩きを施す。75は底部外面に格子状のヘラ書きを施す。76は転入品とみられる弥生土器の底部で、表面は全体に摩滅する。

30溝の南側延長部と考えられる「844溝」出土遺物に關しては型式のまとまりが強く、29溝の南側延長部に当たるとみられる「842溝」よりも古い様相をもつと報告されている。時期判断に有利な須恵器杯類を中心にその内容を具体的にあげると、須恵器杯蓋は口径15cm前後のものが主流で、凹線

状に稜線を表現するタイプと、不明瞭な段や稜で稜線を表現するタイプがあることである。また杯身は口径 13 センチ前後で、やや内傾する立ち上がりを有するとのことで、今回の出土遺物の様相とおむね合致する。

〔127 溝〕今回、127 溝単体の出土遺物として遺物を取上げることはできなかったが、29・30・127 溝の弁別ができない状態で取り上げた遺物の中に、29 溝もしくは 30 溝単体で取り上げた遺物の中には含まれない時期のものがある。それは立ち上がりが受部とほぼ同じ長さまで短くなり、全体の作りも粗雑化した 64・65 のタイプの須恵器杯である。実測できなかった遺物の中にも、これらと同時期のものが他に 2 点認められた。これらは 21 溝や 22 戸井で見られるように、上私部遺跡で検出される古墳時代集落において最終段階の時期のものと位置づけられる。これは 127 溝が 29 溝や 30 溝を切って成立していることとも矛盾しない。換言すれば、127 溝は南北方向の区画溝が主たる役割を終えた後に成立する遺構ととらえうる。

以上、29・30・127 溝出土の土器の様相を概観した。最後に 29 溝と 30 溝との弁別ができなかった 66 についてふれたい。これは大型の甕の頸部で、近接して平行する 2 条の凹線に区画された中に、波状文を施す。2 条の凹線の間に帯状に残る部分は、凸帯の簡略表現ととらえられる。本例のように凸帯が退化する段階では、その間に付される文様も簡略化し、無文化する場合もあるのに対し、この場合は複数の波状文を重ねて区画全体を文様で埋めている。このような部分に土器製作上の古い様相を残す点が、この地域の土器の一つの特性を示しているかもしれない。

## 26 溝

実測図に挙げている遺物以外に、土師器 8 点、須恵器 45 点が出土した。前述した南北方向溝群と同様、須恵器が出土遺物の大半を占める点は特筆される。それらの組成をみると、須恵器は杯類が 12 点、甕胴部片が 24 点、壺 1 点、器種不明が 8 点である。杯類の天井なし底部分には、ケズリが及ぼずヘラ切りの痕跡が残るもののが 3 点含まれる。甕胴部片では外面に平行叩き、内面に同心円文の当て具痕を残すものが 4 点、外面に格子目叩き、内面に同心円文の当て具痕を残すものが 3 点、外面に平行叩き、内面は当て具痕の擦り消しを行うものが 2 点あった他、外面に叩き調整とカキメ調整を併用するものがみられる。叩きとカキメ調整を併用するものでは、平行叩きの後にカキメを施すものと、その逆がみられるが、後者の点数の方が上回る。それらのなかに、内面の当て具痕跡を擦り消すものは認められなかった。

実測図に上げた 85～88 はいずれも甕の口縁で、これまでみたものと同様、口縁端部付近を内湾気味につまみ上げ、下端部にやや粘土を張り足すなどして口縁部全体を肥厚させたような効果をもたらしている。ただ口縁端部全体に粘土を貼り足して、肥厚させたものは認められない。

## 154 溝

実測図にあげた遺物の他に須恵器 7 点と土師器 14 点が出土した。組成をみると須恵器は杯類と甕胴部片が各 3 点、壺 1 点で、土師器は甕が 5 点、器種不明が 9 点である。須恵器杯には底部もしくは天井部にヘラ切りの痕跡が残るもの 1 点が含まれる。

実測図に挙げた 89 は完形品で、横倒しの状態で検出された。天井部に回転ヘラケズリが施され、口縁端部は丸くおさめる。

## 1172 土坑

遺構埋土 I～VI 層と、中心に須恵器大甕を据えた小土坑部分の埋土、須恵器大甕内の埋土は遺構から

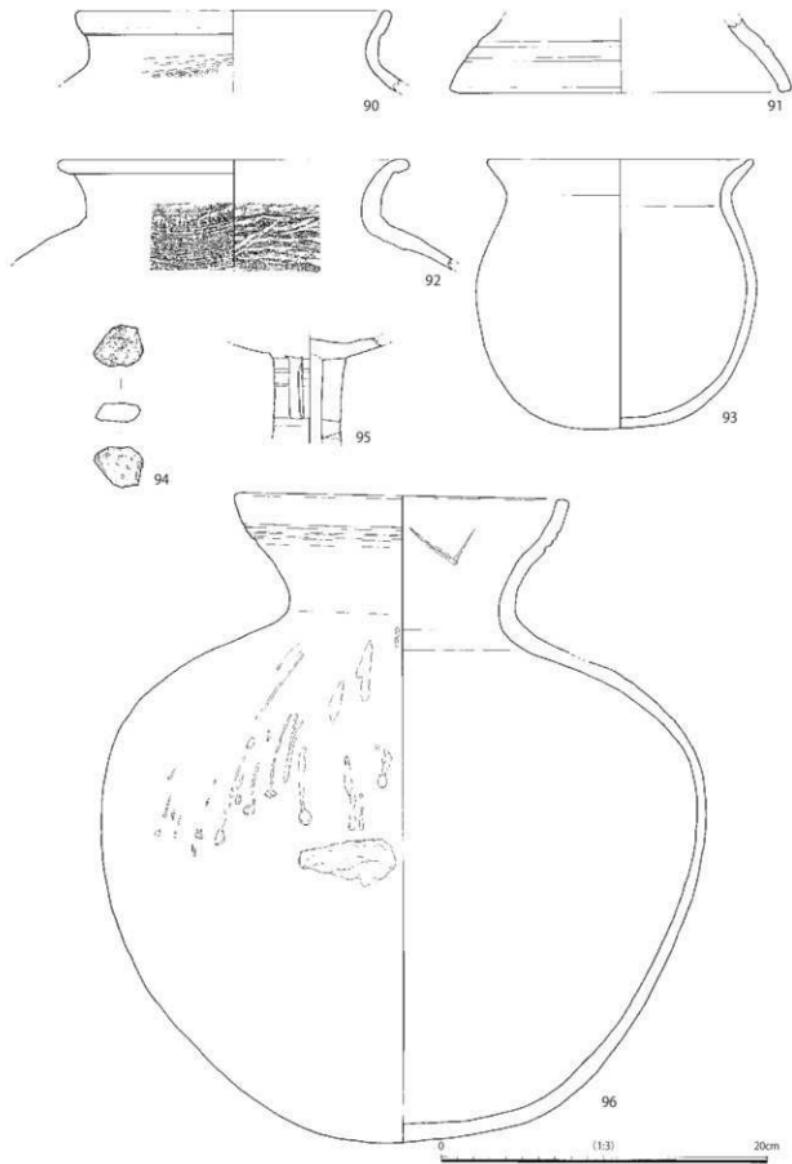


図39 1172土坑〔90～96〕出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

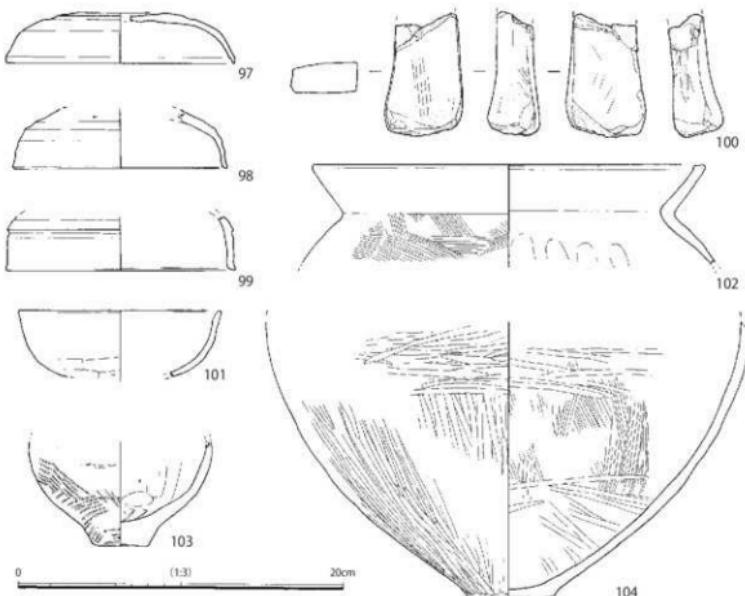


図40 14土坑〔97〕、49土坑〔98〕、278土坑〔99〕、1009土坑〔100〕、153土坑〔101・102〕、  
266土坑〔103・104〕出土遺物実測図 □内は遺物掲載番号

取上げたあと、水洗選別を行い、さらに微小遺物の取り上げに努めた。遺構埋土からは多量の土器片が出土したが、その大半はⅠ～Ⅳ層から出土したもので、V層以下で取上げた遺物は、ほぼ水洗選別中に検出したもので占められる。それらはおむね、微小な炭化物もしくは最大辺2cm程度の摩滅した土師器の小片が占める。

水洗選別中に検出した微小な土器片を除くと須恵器57点、土師器81点が出土した。その内訳は須恵器で見ると甕の胴部片が45点、杯類が4点、壺1点、器種不明が7点である。甕胴部片には、格子目叩きの後で、粗いカキメを施しており、明らかに同一個体と判断できるものがあった。それらは2個体分あり、破片の点数で言うと20点弱である。ただこれらにしても接合するものは5～6片と限られるのに加え、口縁部や底部の破片は含まれない。土師器では甑・甕等の煮沸具とみられるものが15点、高杯3点、甑1点で、それ以外は器種不明である。このほかに、被熱して風化の進んだ花崗岩礫1点、窯片とみられる高熱をうけて発泡した土器片も1点含まれる。

実測図に挙げた遺物を見てもわかるように、出土点数が多いものの全体の形状のわかる土器は2点にとどまる。また遺物の大半は遺構埋土上部から出土していることをふまえると、出土遺物の大半はこの遺構が機能を失ってから廃棄されたものと考えられる。

90・92は口縁部外面に粘土をわずかに貼り足したり、口縁部を外方に折り返したりして、口縁部に

変化をつけています。96は口縁部付近をやや張り出させるように湾曲させ、変化部分に3条の凹線を巡らせるが、口縁端部は直上気味に丸くおさめるのみで、形態変化のメリハリが弱い形状を呈する。

同様のことは91・95についても当てはまる。後者は一段目と二段目の透かし窓の間に施された凹線が極めて浅く、形骸化している。93は軽く胴部が張り、平底気味の底部を有する。

#### 14 土坑

実測図に挙げた遺物の他に、須恵器片4点と、土師器細片を1点出土した。土師器は器種不明の細片で、須恵器は全て杯類の破片である。後者には先端の鈍い稜線がわずかに残存する杯蓋が1点含まれる。

97は稜線がなく、天井部中心にヘラ切り痕跡を残し、器壁の薄い扁平な形態だが、口径は小型化しておらず、口縁端部に退化した段を有する。小型化する直前の形態ととらえられるが、いずれにせよこの段階まで口縁部端面に凹面を残すものがある点は、地域的な特性の一つととらえられる。

#### 49 土坑

実測した遺物以外では、須恵器片3点と土師器片4点が出土した。前者は杯類2点と器種不明品が1点とからなり、後者はすべて器種不明である。

98は口径がやや小型化し、稜線も退化寸前だが、天井部の2分の1強まで回転ヘラケズリを施し、口縁端部にわずかに面を作り出すなど、集落最終段階の須恵器の様相に合致しない点も有する。6世紀後半における杯蓋の形態的なバリエーションの中に含まれると考える。

#### 278 土坑

実測図掲載遺物のほかに10点程度の土師器片と須恵器1点が出土している。いずれも細片だが、土師器はおそらく甕・壺等の煮沸具と考えられる。99は断面V字状の幅広の沈線を一条めぐらせて、稜線を表現している。製作手法にやや簡略化傾向がみられるが、口縁端部の面はしっかりと作りだされる。

#### 153 土坑

実測図に掲載した土師器2点以外で、須恵器は極めて摩滅した器種不明品が1点あるだけで、それ以外はすべて土師器片である。101・102以外では2個体の高杯片、1個体の壺片、1個体の甕片があるが、それらはすべて残片で、器種不明のものも10点弱含まれる。

実測図掲載遺物も含め、廃棄されたものと考えられる。出土遺物はおおむね極めて摩滅しているが、102には比較的明瞭に調整痕跡が認められる。

#### 266 土坑

いずれも弥生時代の土器だが103は後期、104は中期後葉の土器である。古墳時代を遡る時期の遺物であるが、両者は明らかに帰属時期が異なる。また104は比較的器壁の残存状態が良く、調整痕は明瞭に残るが、103は摩滅が著しく器壁の剥落が進んでいる。

いずれにせよ両者は同時並存するものではないので、後世の人間が何らかの意図でこれらの遺物を持ち込み、併置した可能性が高いと考える。

#### 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層

土器・木器が多数出土した。土器に関しては器種が豊富なのに加え、完形品も數点含まれる。

実測遺物以外の出土品をみると土師器152点、須恵器72点と前者が多数を占める。そのうち土師器の組成は甕・壺等の煮沸具が65点、高杯が16点、杯2点、壺1点、それ以外は器種の特定ができないかった。煮沸具の割合が高いのは他の遺構と同様だが、それに加えて高杯の占める割合が高い。須恵器は甕の破片が45点、杯類が14点、高杯3点、壺・甕各1点で、それ以外は器種の特定ができないなかつ

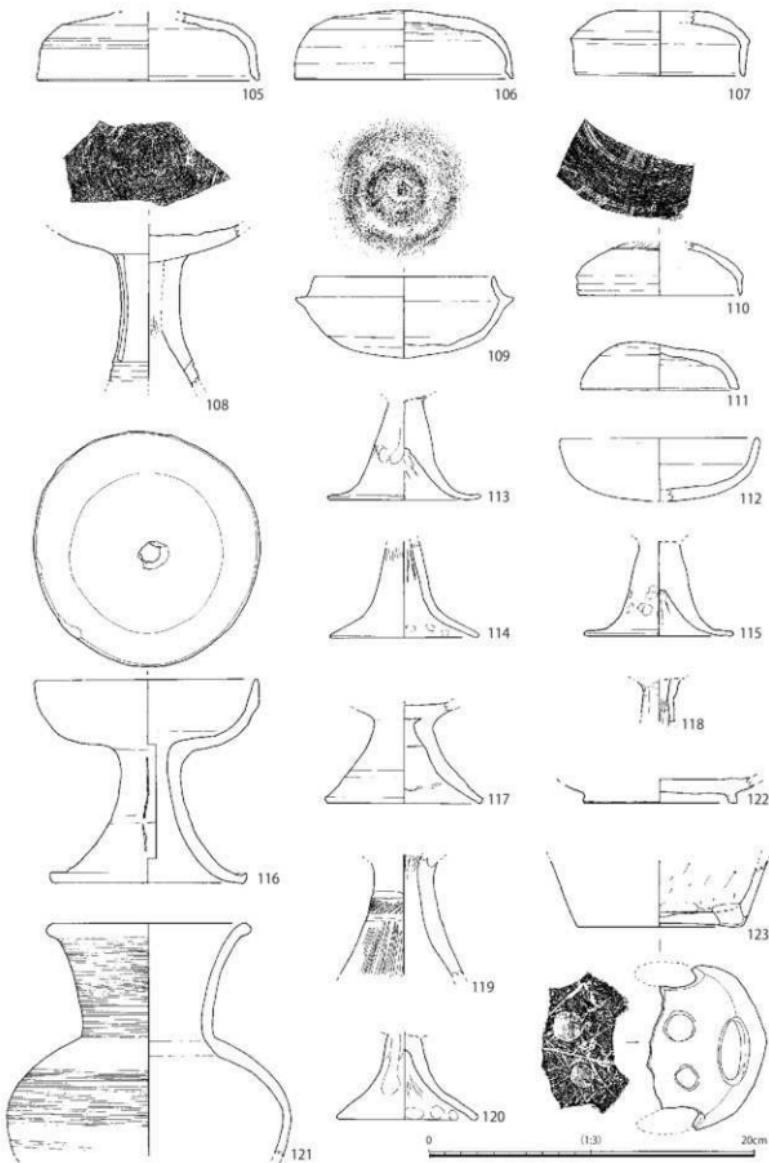


図 41 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土遺物実測図

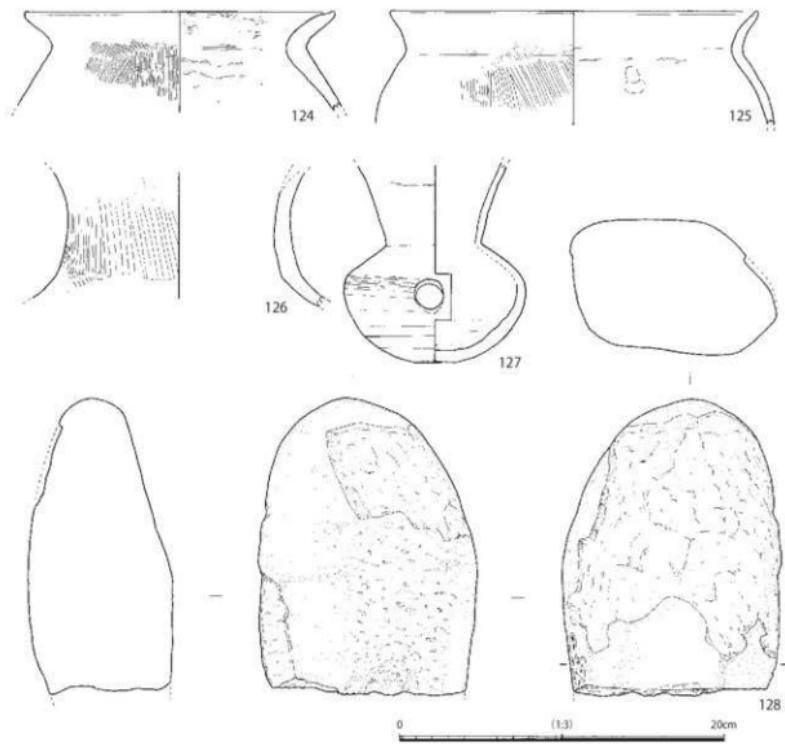


図42 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土遺物実測図

た。須恵器費脛部片では外面に平行叩き調整のみ、もしくは叩き後カキメ調整を施し、内面に同心円文の当て具痕跡を残すものが過半数を占めるが、内面に擦り消しを施すもの9点、内外面ともに擦り消しを施すものが1点と、擦り消し調整を施すものも一定量認められた。これらのはかに、加工・使用痕跡の認められない被熱した花崗岩礫が1点出土した。出土した木製品はすべて実測し、図面を掲載した。

次に実測図掲載遺物を中心に若干の説明を加えたい。107は須恵器杯蓋の製作手法によって作られた土師器である。にぶい稜線を作り出し、口径は10.3cmと小さい。105と106の器形は類似するが、前者は天井部から体部への屈曲箇所に2本の平行する凹線を巡らせて稜線を表現し、後者には稜線がない。残存箇所がわずかなため、実測しなかった遺物の中に、これらとは対照的に比較的明瞭な稜線をもち、口縁端部に段を作り出すものが1点認められた。109は口径が11cmと小型であるものの、立ち上がりは比較的しっかりしており、底～体部の形状も丸みを帯びる。残存箇所がわずかなため実測しなかったものの中に、立ち上がりの短い粗雑化の進んだ杯身や、中央部にヘラ切りの痕跡を残す、集落最終段階の須恵器杯の様相を帯びるものも認められる。

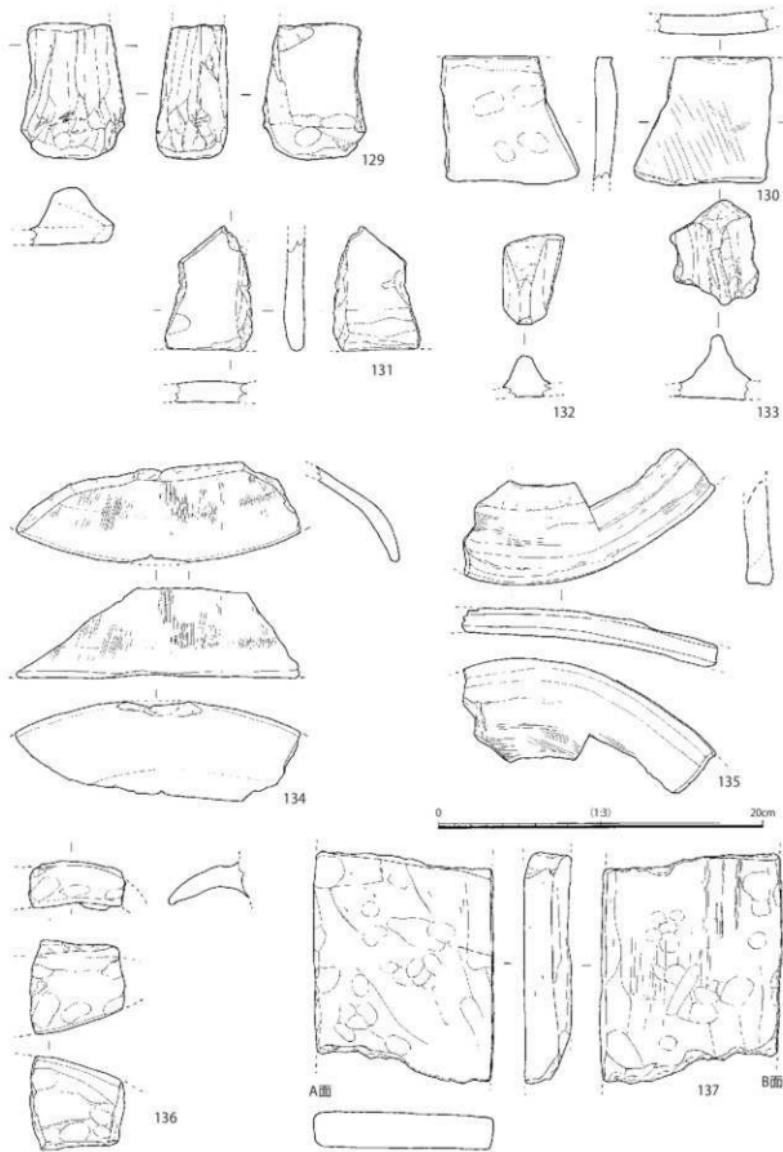


図43 移動式竈〔129～136〕・U字状土製品〔137〕実測図 □内は遺物掲載番号

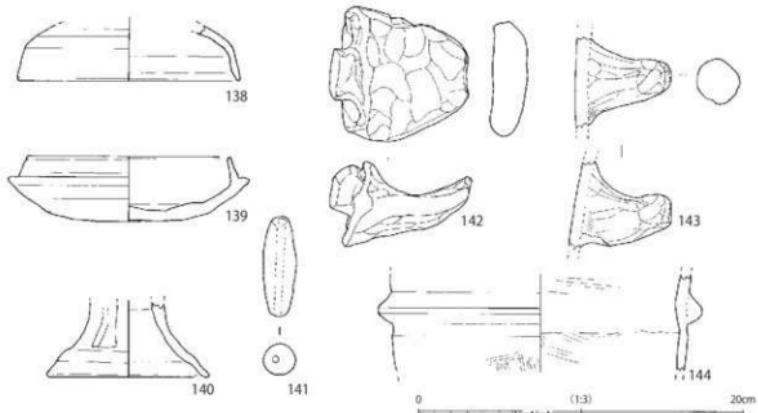


図44 古墳時代遺物包含層〔138・139・141〕、中世耕作土〔140・142～144〕出土遺物実測図 □  
内は遺物掲載番号

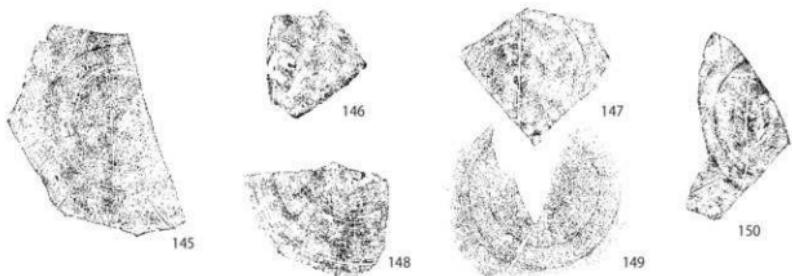


図45 須恵器杯外面線刻拓本図

実測対象から外した土師器高杯のうち脚部でみると、大半を114もしくは120のタイプが占める。また杯部は、屈曲部に稜線をもたない112のタイプのみが見られた。116は2箇所に2段透かしをもつ長脚高杯である。ただ透かし窓を開けた後に、整形のためか脚部をしぼったため、結果的には切り抜いた部分がふさがってしまっている。119は全体に厚ぼったく、杯部との接合部に近い部分にシボリメがみられることから、高杯の脚部と判断した。しかし装飾のパターンとしては竈の口頭部を思わせるもので、高杯脚部としてはイレギュラーなものである。118は高杯のミニチュア土器の脚部破片である。粘土の接合部に部分的にユビオサエを施す粗雑なつくりだが、胎土は緻密で硬質な印象を受ける。122は底部のみが残存する杯で、底部外面、とりわけ高台の内側の部分は全体に研磨されたように平滑である。123は丁寧なつくりで底部外面に木の葉の圧痕が残る。127は口縁部が打ち欠かれている。126は弥生時代中期の土器で、外面に残る粗いハケ調整の痕跡はかろうじて観察可能であるが、全体に極め

て摩滅が顕著である。128は全体に被熱して風化が著しく、表面が大きく剥離する。残存部分を見ると平坦面が研磨されて摩滅し、側面には敲打痕が顕著に残る。

#### 移動式竈

従前の調査に引き続き、今回の調査でもそれぞれ形態の異なる移動式竈の破片を検出した。出土した移動式竈の破片のうち、部位の特定が可能なものは実測図を作成して図43に、それ以外のものは写真図版27に掲載した。それらをみてもわかるように、今回出土したものはいずれも細片で、全体の形状がうかがえるものはなかった。

129は移動式竈の脚部で、外側に粘土を貼り足しながら縦方向にナデ上げて形を整える。130は掛け口部分の破片で、実測図の左上面に煮沸具を置いた際に生じた摩滅痕がわざかに認められた。131は基部の破片で、残片はわずかだが丁寧に整形される。134・135はいずれも底中央部分の破片で、後者は先端部に丁寧なナデ調整を施して面を作りだす。前者は後者に比べて器壁が薄く、全体に華奢だが、表面に丁寧なナデおよびハケ調整が施される。136は付け底の側面に近い部分と考えられ、内面・外面共にユビオサエの痕跡が顕著である。137はB面とその左側面にうっすらと煤が付着することから、A面を作り付け竈に接着して使用した、焚口の、向かって右側に当たる部分の破片と見られる。ただ両面とも丁寧な調整を施しており、竈への接着面を粗雑に仕上げることはしていない。

#### 古墳時代遺物包含層・中世耕作土出土遺物

138は天井部が丸い形状を呈するとみられるが、稜線の退化・口径の小型化に加え、口縁端部は面をなさず、丸くおさめる。139は底部から体部の立ち上がりに丸みをもち、受部や立ち上がりの作り出し方に簡略化は認められないが、全体に厚ぼったく、口径にも小型化傾向がみられる。

団化しなかった遺物の中にも壺の把手が10点弱出土したが、それらはおおむね142か143のいずれかのタイプにふくまれる。144は残存部分もわずかで、表面の摩滅が著しい。内面の箒の下端付近に大きく粘土の接合痕が認められるのに加え、全体に器壁が薄く、華奢で粗雑な印象を受ける。

#### ヘラ記号土器

ヘラ記号のある土器のうち、器形復元のできないものを拓本で掲載したのが145～150である。いずれも須恵器の杯身もしくは杯蓋で、記号は頂部もしくは底部外間に入れられている。器形復元ができないので、それぞれの時期を正確に把握することはできないが、いずれも中央部分まで回転ヘラケズリが施されているので、集落の最終段階の須恵器は含まれないと考える。

記号は単線の直線もしくは複数の直線の組み合わせからなる。148・149は施紋具が器壁をかすめる程度にしかあたっておらず、意図的に記号が施されているとみられるものの、細くて目を凝らさないと見えない程度のか細い線である。それら以外のものは力強く、器壁を切り込むように線が入れられている。147・150以外はすべて区画溝から出土したものである。

#### 2 木器類

151・152を除くとすべて、加工痕の明確でない板状の木器である。153は全体的に面取りされているように見受けられるが、枝の生え際の部分が一箇所、ほぼ未調整のまま残っている。154は21溝の底部にほぼ水平に据えられた状態で出土したもので、団化した面の上半中央部に長軸方向に粗くはつたような痕跡をわずかに認めた。断面形状でも中央部分がわずかに窪むことから、木樋の役割を果たしたものと理解する。156は薄い板状の木片で、木製品の製作途中に生じた残片と考えられる。

161は1172土坑の中央に据えられていた壺の西側に、近接して置かれていたもので、腐食が進み、

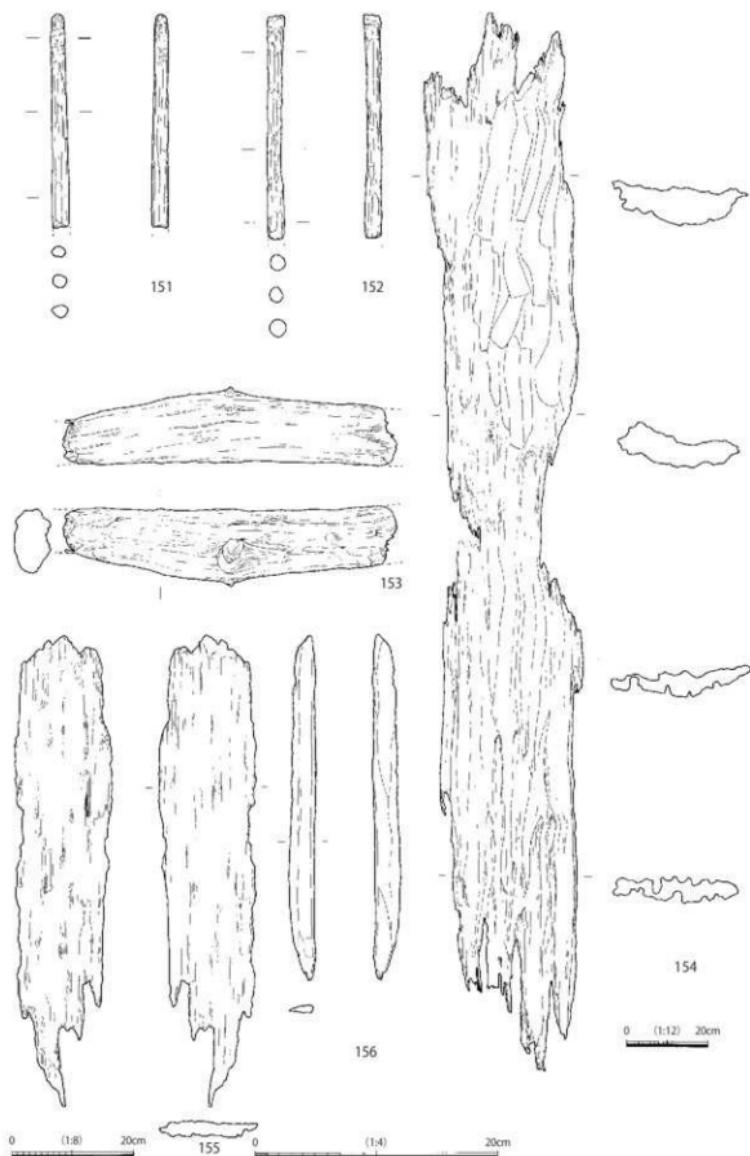


図46 21溝〔151～155〕、22井戸〔156〕出土木器実測図 □内は遺物掲載番号

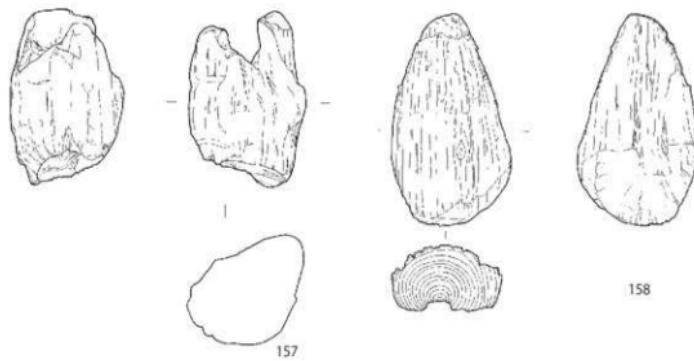
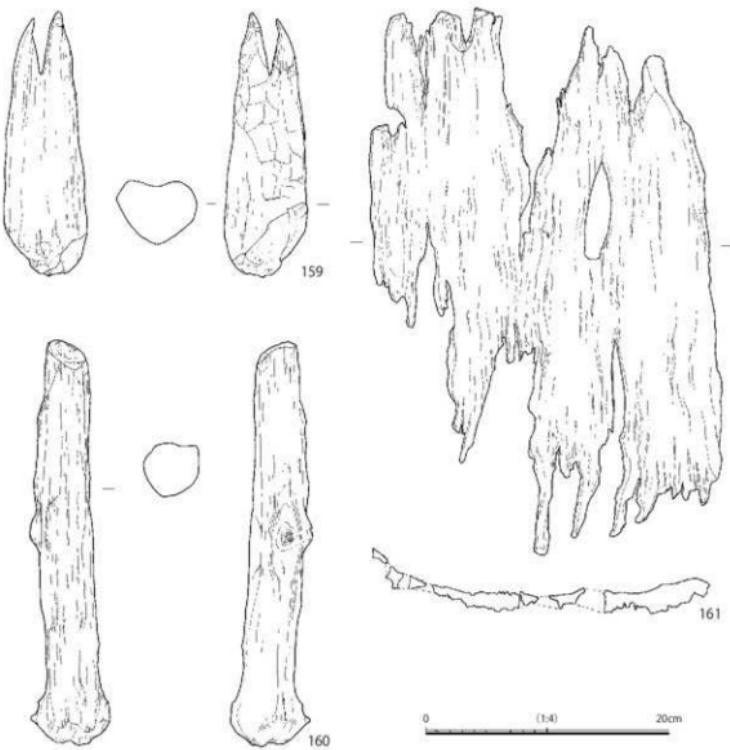


図47 242土坑〔157〕、273ピット〔158〕、231ピット〔159〕、254ピット〔160〕、1172土坑〔161〕  
出土木器実測図 □内は遺物掲載番号



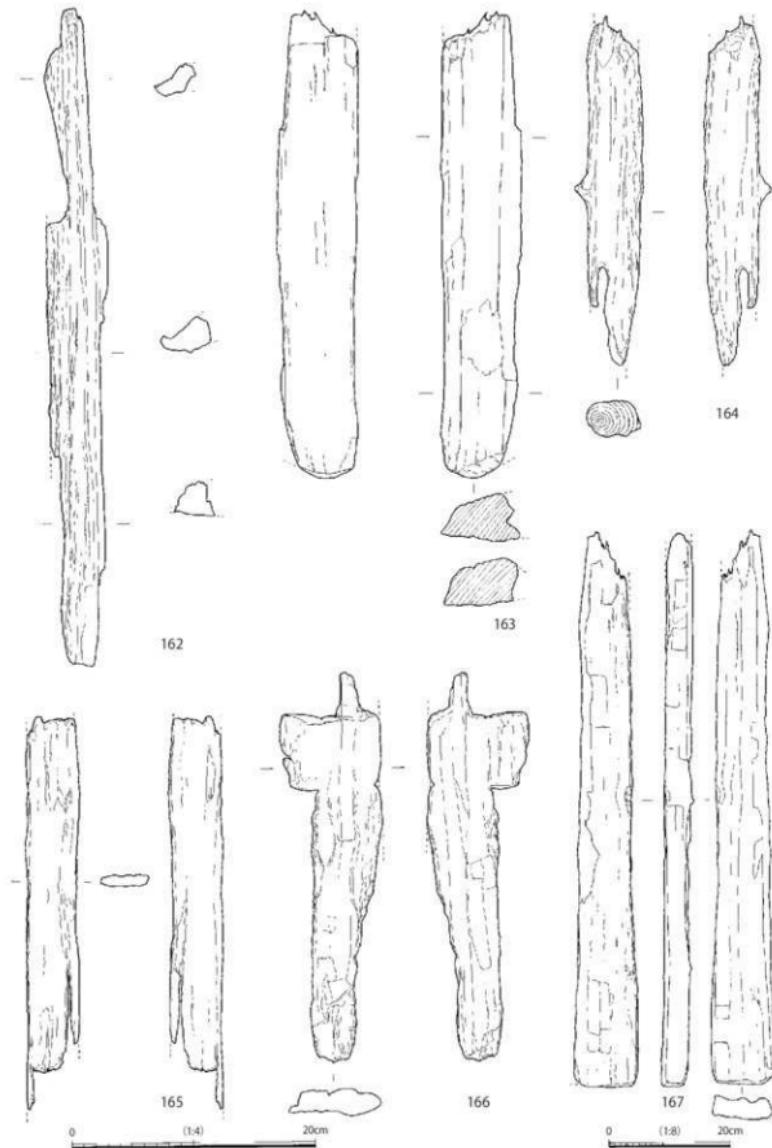


図48 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土木器実測図

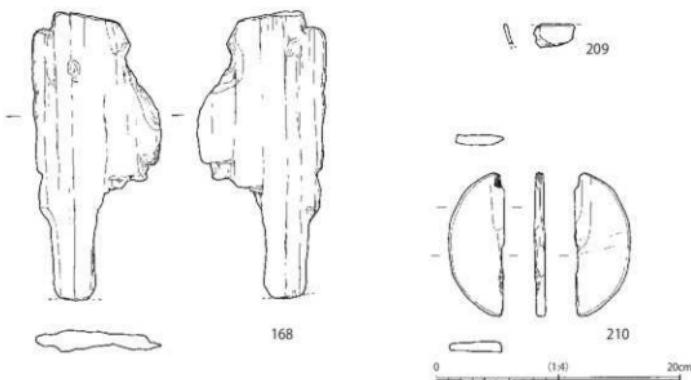


図49 調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層出土木器〔168〕、中世耕作土出土木器〔209〕、調査区北西隅検出谷地形中世耕作土出土木器〔210〕 実測図 □ 内は遺物掲載番号

本来の形状はとらえにくいが、わずかに湾曲した薄い柄状の木製品ととらえられる。157は下端部が金属器で断ち切られたような形状で、中央部に聃孔を切ったような加工痕が認められる。ただ全体には粗雑な整形である印象を受ける。それ以外の杭状の木器に関しては、159で部分的に面取りしたような加工痕が認められる以外は、明確な加工痕は認められない。

図48と、図49左側の遺物には調査区北西隅検出谷地形古墳時代堆積層から出土した木器を掲載した。板状もしくは角柱状の木器からなり、建築部材の可能性もあるが、163・167以外は面の作り出し方は粗く、明瞭な加工痕跡も認められない。なお167に対しては放射性炭素年代測定を行った。測定結果は付章第2節を参照されたい。図49右側の遺物は耕作土層から検出したもので、209は漆器の口縁部片、210は曲げ物の底もしくは蓋の再加工品とみられる。後者は本来円形だったものが、半分に折損したものと考える。折損部分は一部、両面からななめに削りだして端部を尖らせていることから、再利用するために破損箇所を加工したと考えられる。

## 第2節 中世の遺物

### 1 土器・金属器等

#### 調査区南西隅検出谷地形中世耕作土層

出土遺物はわずかである。169は瓦器椀の底部で、断面台形の高台が付されている。中世遺構面より上の層で検出された瓦器椀は、断面三角形の退化傾向の著しい高台がつか、もしくは高台を持たないタイプと考えられるので、それらよりは若干時期が遡る可能性がある。ただこの遺物のみをもって、この谷地形の耕作地としての開発が早いと判断するのは早計であろう。

#### 調査区北西隅検出谷地形中世耕作土層

実測図を掲載した遺物の他に、瓦器椀・羽釜・三足羽釜の脚部・火舎とみられる瓦質土器・備前焼擂鉢と大甕、東播系須恵器鉢の細片が出土した。瓦器椀はいずれも口縁部付近の破片で、全体的な形態

は復元できないが、残存部を見る限り図 50 の 173 と 174 に類似する形態と見られるものが含まれる。東播系須恵器鉢も口縁部付近が残存するものだが、176 と同タイプのものである。図 50 に挙げた、中世遺構面上層出土遺物より、明らかに時期の遡るものは認められなかった。したがって谷地形を利用した水田造成が始められたのは、中世遺構面基盤層の造成を端緒として、一帯の水田開発が本格化するのとほぼ期を一にする時期ととらえられる。

### 1～3溝

中世の遺物では実測した遺物の他に、瓦器椀の細片 2 点、土師皿の細片 5 点が出土している。前者はいずれも口縁部の破片で、全体の器形をうかがえるものではないが、173 の時期を遡る要素は一切見られない。したがって遺構の時期も、13 世紀後半を遡るものではないと考えられる。

### 6溝

実測した遺物の他に、土師器皿の細片が 2 点出土した。いずれも口縁部の破片だが一点は 182 と同タイプの小型の皿、他の一点は 178 に類する、高台が退化する最終段階の瓦器椀の形態を真似た土師器と考えられるものである。174 は体部の立ち上がりが直線的で口縁部外面に強いヨコナデを施す、製作手法の粗雑化が顕著なものである。これらのことから 6 溝は、14 世紀を遡るものではないと考える。

### 中世耕作土層出土遺物

中世遺構面基盤層以下の層からの出土遺物に関しては、時期比定および実測が困難な細片が少量出土したのにとどまるため、実測対象からはずした。ただ中世遺構面を精査している時に検出した瓦器椀の破片は、口縁部が端部から 2.5 cm の長さでわずかに残存するのみなので、明確な判断材料とは言いがたいが、内・外間に磨きが施され、それより上層から出土した遺物と比較して、やや時期が遡ると考えられるものである。幅 1 mm 程度のミガキが内面に密に施されるのに加え、外面にもそれよりはややまばらだがミガキが施されることから、遅くとも 12 世紀後半から 13 世紀初頭に属するものとみられる。

実測図に挙げた資料を基に概観すると、瓦器椀では 187・198 のように口縁端部に段状の沈線を施す、13 世紀前半に位置づけられるものをわずかに含むものの、13 世紀後半以降のものが主体となる。175 と 178 は高台が退化する前後の、最終形態の瓦器椀の形状を模したと見られる土師器である。175 は器高・口径ともに小型化しており、178 よりさらに時期の降るものと見られる。その他に出土した白磁・青磁・東播系須恵器鉢や古瀬戸の天目茶碗、備前焼の擂鉢、瓦質土器を含めてみると、中世の遺物は 12 世紀から 15 世紀の時期に含まれ、その中でも 13 世紀後半から 14 世紀の遺物が大半を占めることがわかる。

以上のことから当調査区においては、12 世紀後半に耕地開発の端緒を求めることができるが、13 世紀後半ないし 14 世紀に、それ以降の時期に引き継がれる土地区画を作り、大規模な耕地開発が行われたと考えられる。199 は焼きのあまい瓦質の獸足形土製品で、端部に小さな切込みを入れた後、切込みの部分を丁寧に而取りして爪先の形状を表現する。脚部は縱方向に丁寧にナデ上げて調整するが、足底部分の調整は雑である。192 は銅製の笄で表面に光沢を帯びる。体部中央に施された権定規に面して頸部と同じ幅の耳かきを作りだすという形態的な特徴から、14 世紀代までのものととらえられる。

### 2 瓦

中世耕作土層より、完形もしくはそれに近い丸瓦・平瓦が複数個体出土している。暗渠として付設されたものの残片の可能性が考えられる。ただ上私部遺跡（その 1）の調査で軒瓦の瓦頭が出土していることから、もとは瓦葺の建物に使用されていたものが転用された可能性もある。

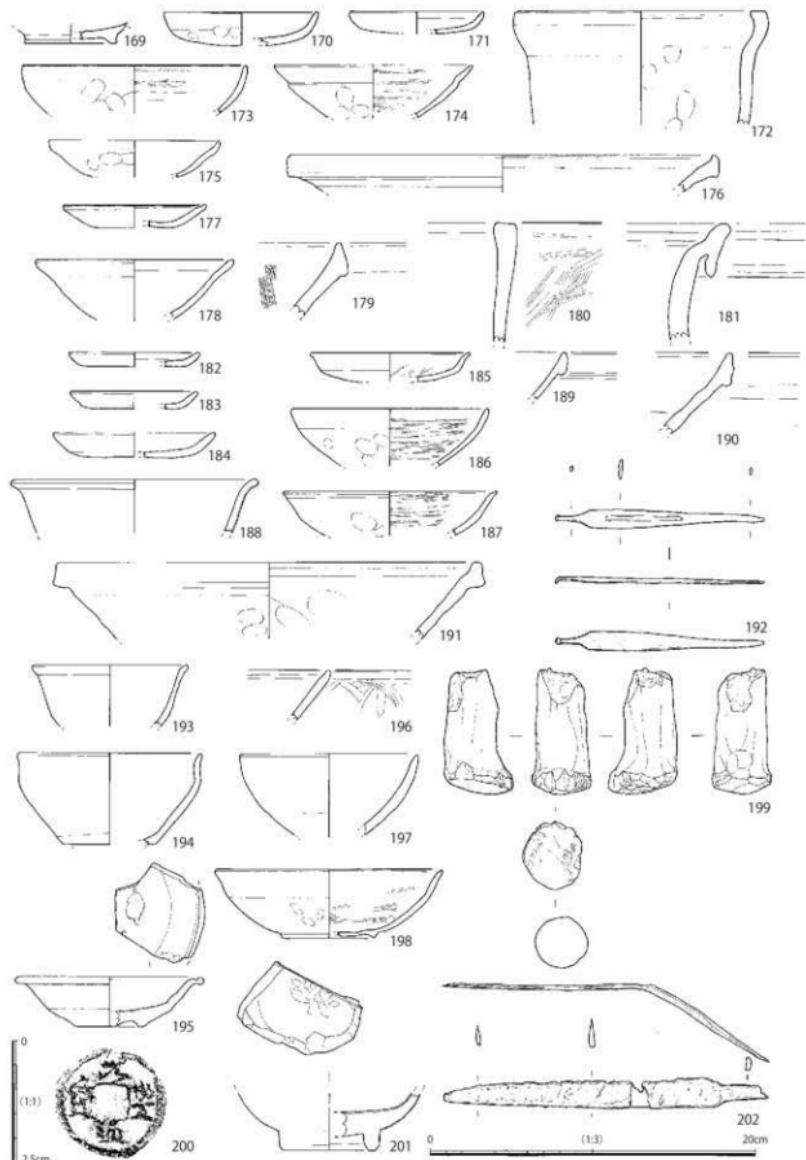
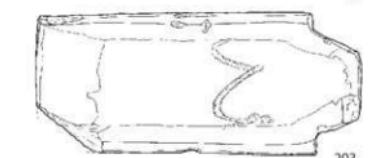
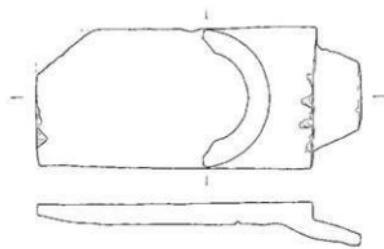
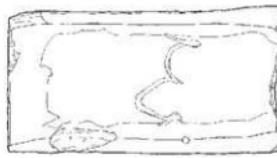
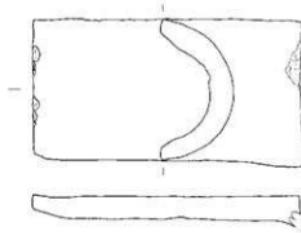


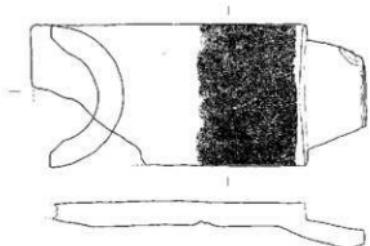
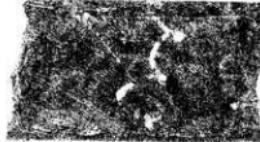
図 50 調査区南西隅検出谷地形中世耕作土〔169・170〕、調査区北西隅検出谷地形中世耕作土〔171・172〕、1～3溝〔173〕、6溝〔174〕、1～2～2層〔175・176〕、1～2～1層〔177～180〕、34ピット〔181〕、1～2層〔182～192〕、1～2層〔193～195〕、1～1～1層〔196～200〕、側溝掘削時〔201・202〕出土遺物実測図 □ 内は遺物掲載番号



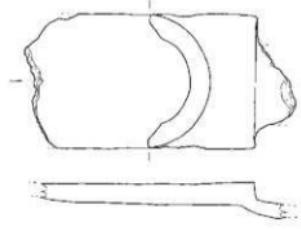
203



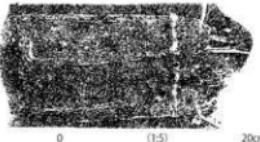
204



205



206

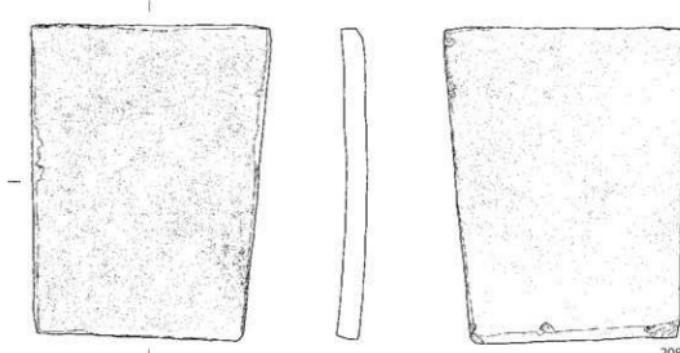


0 (1:5) 20cm

図 51 瓦実測図



207



208



0 (1:5) 20cm

図 52 瓦実測図

上私部遺跡（その2）の調査の際も、完形の丸瓦と平瓦が複数個体出土している。それらは今回の調査で出土したものと、平面形態や面取りの仕方に高い類似性が認められる。図51に挙げた丸瓦も、相互に共通点を多く有するが、凹面の釣り紐痕跡の有無もしくはその形状に、バリエーションが認められる。206は凹面に釣り紐の痕跡を認めず、長軸方向に枠板の痕跡が、短軸方向に粘土の接合痕が明瞭に残る。203は釣り紐の山の間隔とたわみが大きいが、204と205は山の間隔およびたわみが小さい。特に後者は隣同士のループが大きく重なる形状を呈するのに加え、釣り紐の位置が他の二者に比べて低い。203～205は凸面にタテ縄叩き後にナデ調整を施すが、206は丁寧なナデ調整を施すためか、タテ縄叩き痕跡は認められない。

以上、微小な相違点をもとに今回出土した瓦の比較を行ったが、前述したように形態や製作手法は類似性が高く、時期的には同一のカテゴリーに含めうると考える。

## 第5章 まとめ

今回の発掘調査では、南側に隣接する前回の調査区に引き続き、6世紀を中心とする掘立柱建物群と溝群等を検出した。集落全体を概観すると、5世紀初頭に竪穴住居を主体として成立した集落が、時期が降るに従って徐々に、集落が立地する微高地の先端部に近い西側へと居住域を拡大させる様子をとらえることができる。

今回の調査区は、6世紀代の集落の核をなしていたとみられる、掘立柱建物群の周囲に区画溝を配した方形区画の北および西側にあたっている。その結果、方形区画とその周囲で複合的に展開される集落変遷に関し、新知見を得ることができた。次にその具体的な様相を述べる。

今回検出した掘立柱建物・竪穴住居は、その可能性のある柱穴列や土坑も併せると、20基近くに達する。それらには重なるもの、極めて近接するものがある他、建物の主軸方向にいくつかのパターンがあり、すべてが同時期に存在したとは考えられない。したがってそれらの前後関係を把握し、同時に存在していた可能性の高い建物群をより分ける必要がある。

ただ建物の時期を、特に柱穴出土遺物を手がかりにして判別するのは非常に難しい。一つには柱穴から出土する遺物が限られることがある。またそれが柱穴の掘削時に落込んだものか、あるいは建物がその役割を終えた後、柱が引き抜かれたり朽ちた跡に、偶然落込んだもののいずれかであるにせよ、建物の存続期間と遺物の混入時期との間に時間差が生じることもある。ただ12竪穴住居と、柱穴列1・2との重なりからみて、今回検出された建物を少なくとも3時期に分けうるのは確実である。

前回の調査報告書では、「柱穴の切り合い関係や位置関係、振れの共通性などを考慮して、大きく3群4時期（A群、B-1群、B-2群、C群）の変遷を想定」<sup>(1)</sup>されている（括弧書きは筆者加筆）。今回の調査成果を、これまでの調査成果に積み足すという目的に鑑みて、今回検出した建物群に関しては、前回の区分基準ないし方法を参考とし、時期の岐別を図りたいと思う。

前回発掘調査の報告書によると、最も古い段階の建物群は北に対して西へ振った建物群（A群）である。これに含まれる建物群に対しては、区画溝の方位と大きく異なることから、区画溝の掘削以前に成立したものである可能性も示唆されている。ただ建物相互の配置に何らかの規則もしくは規制がはたらいていたとみられるため、何らかの形ですべて方形区画は存在していたととらえられている。一方、A群と対照的に、北に対して東へ振った建物群があり、それらが最も新しい建物群（C群）として位置づけられる。

それらに対してB群は、ほぼ正方位の建物群と位置づけられている。前回の調査で検出された建物群では、このカテゴリーに含まれるもののが最も多く、その中で重複関係を持つもの、もしくは近接するものを考慮しながら2時期に細分されている。その結果B-1群として、正方位からやや西へ振った、比較的振れの幅の小さい建物群が抽出され、切り合い関係や出土遺物から古段階と位置づけられている。他方のB-2群は、やや西に振りつつも、全体としては振れの幅が大きい建物群とされている。

ただ実際には、掘立柱建物の主軸方向の分布は分散的で、弁別の基準となる明確な区分線が引けるわけではない。他の遺構との切り合い関係や、建物相互の位置関係からみて、方向軸に触れがあつても同一の建物群と想定される場合があり、反対もしかりである。したがって掘立柱建物の主軸方向を一つの目安としながら、他の遺構との切り合い関係や、出土遺物の時期、建物の規模や柱間の距離、他の建物

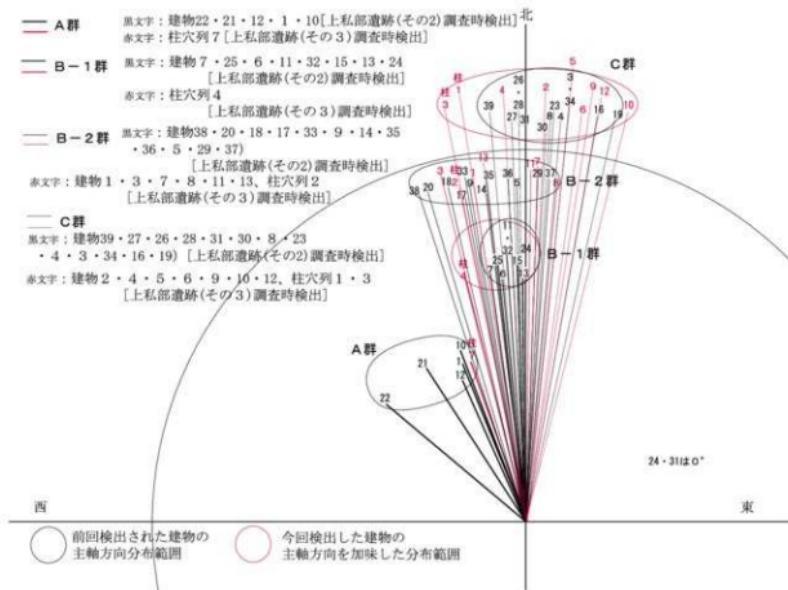


図 53 主軸方向分布図（註 1 より加筆・転載）

表 1 上私部遺跡小期対応表

期	年代	陶邑田辺編年	03-1 調査区		05-1 調査区	
				群		年代
I	～5 C 中葉	～TK208型式	～I 型式第3段階			
II	5 C 後葉～6 C 初頭	TK23～TK47型式 MT15型式	I 型式第4・5段階 II 型式第1段階			
III	6 C 初頭～6 C 中葉	TK10型式	II 型式第2・3段階	A群	6 C 初～6 C 前葉	
				B-1群	6 C 前半	
IV	6 C 後葉～7 C 初頭	TK43～TK209型式	II 型式第4・5段階	B-2群	6 C 後半	
V	7 C 前半	TK209～TK217型式	II 型式第5・6段階	C群	6 C 末～7 C 初頭	

（註 1 より転載）

との位置関係も含めて判断したい。

掘立柱建物の主軸方向をみると今回検出した建物には、北に対して大きく西に振るもの、もしくは正方位に近いがわずかに西に振るものあまり認めない。したがって B-2 類もしくは C 類に属するものが多く含まれることになる。

なお、前回発掘調査の報告書には、各建物群とそれに対応しうる時期区分が示されている。これは遺構出土遺物の時期幅が上私部遺跡（その 2）よりも大きく、重なり合う竪穴住居を多く検出した上私部遺跡（その 1）の発掘調査報告書で取られた時期区分との対応関係を明らかにする目的もあり、上私部

遺跡（その2）の発掘調査成果報告書において提示されたものである。

上私部遺跡（その3）の発掘調査においては、出土遺物の時期幅や様相が上私部遺跡（その2）調査区ときわめて類似することから、時期区分に関してもこれを援用し、区画溝と建物群との対応関係を図る手がかりとしたい。

#### I・II期

I期は5世紀前半～中葉に、II期は5世紀後葉～6世紀初頭に相当する。当該期に属する可能性のある遺構は、上私部遺跡（その2）・（その3）調査区では検出されていない。

I期は上私部遺跡に、本格的な古墳時代集落が展開し始める時期と位置づけられる。この時期には韓式系土器やそれを模倣した土器器も出土している。集落変遷図には当該期と確定できたものののみを示したので、すべて竪穴住居からなるが、当該期の可能性がある小型の掘立柱建物も数棟認められる。

その後の段階と比べて集落の居住域は狭く、最盛期の半分弱の範囲にまとまっているような印象を受ける。遺構の広がりは、II期になるとI期よりもやや南に拡大する。

#### III期・A群

III期は6世紀初頭～6世紀中葉に相当する。B-1群との時期的な区分は難しく、「A群の時期を特定することは困難である」とのことだが、上私部遺跡（その2）の調査成果において見られる、この時期における最も顕著な変化は、「大型の掘立柱建物を中心とする建物群を有する方形区画が出現することである」。また「これに呼応するかのように03-1調査区でも、前代までは遺構が検出されていない南部でも遺構が確認され」る。つまり前段階に比べて集落の居住域が大幅に拡大し、それに伴って集落構造にも変化が生じることが指摘されている。

今回検出した掘立柱建物、もしくは建物の可能性のある柱穴列の中で、北に対して建物の主軸方向が明確に西に振るのは柱穴列7のみである。12竪穴住居埋土からは、明らかに6世紀前半に遡る遺物は検出されていないが、柱穴列1に切られている関係性から、掘立柱建物に先行するものと想定し、竪穴住居の可能性がある土坑も含めてA群に含めた。

区画溝に関しては、方形区画の西を限る南北方向溝が北側へさらに延長することがわかった。その溝の東側には、柱穴列14に先行する柵が設けられ、上私部遺跡（その2）で検出された「柵2」と一連の施設を構成していた可能性がある。一方、方形区画の北側を限る東西方向溝は上私部遺跡（その2）と（その3）調査区境で途切れ、今回の調査区には延長しない。ただこの溝に直行する方向の20溝が掘り足されていることから、方形区画の北側にもそれとは別の居住区画が配されたことがうかがえる。20溝の東側に配置された柱穴列12もおそらくこの時期に対応するものだろう。

方形区画北側の調査域が限られることから、明確な定義付けはできないが、方形区画北側のエリアには、竪穴住居や小規模な掘立柱建物が配されていた可能性が指摘できる。方形区画内とその北側とで、建物の構成や密度に差があることは確実であろう。

ただ上私部遺跡（その1）調査区で検出された、当該期と判断される遺構をみると、竪穴住居を主体として小型の掘立柱建物が付随する様相がうかがえることから、方形区画内の状況がむしろ、集落全体からみて突出しているとするべきだろう。（その1）調査区においても、東西方向溝とそれにほぼ直交する溝に画された、ゆるやかな空間の単位を認めることができるが、その内部の建物配置はランダムで、前段階の状況と比べてそれほど大きな違いがあるようには思えない。このようにみると、空間的には連続する居住域の中に、階層差を思わせる集落構造が生じていることがうかがえる。

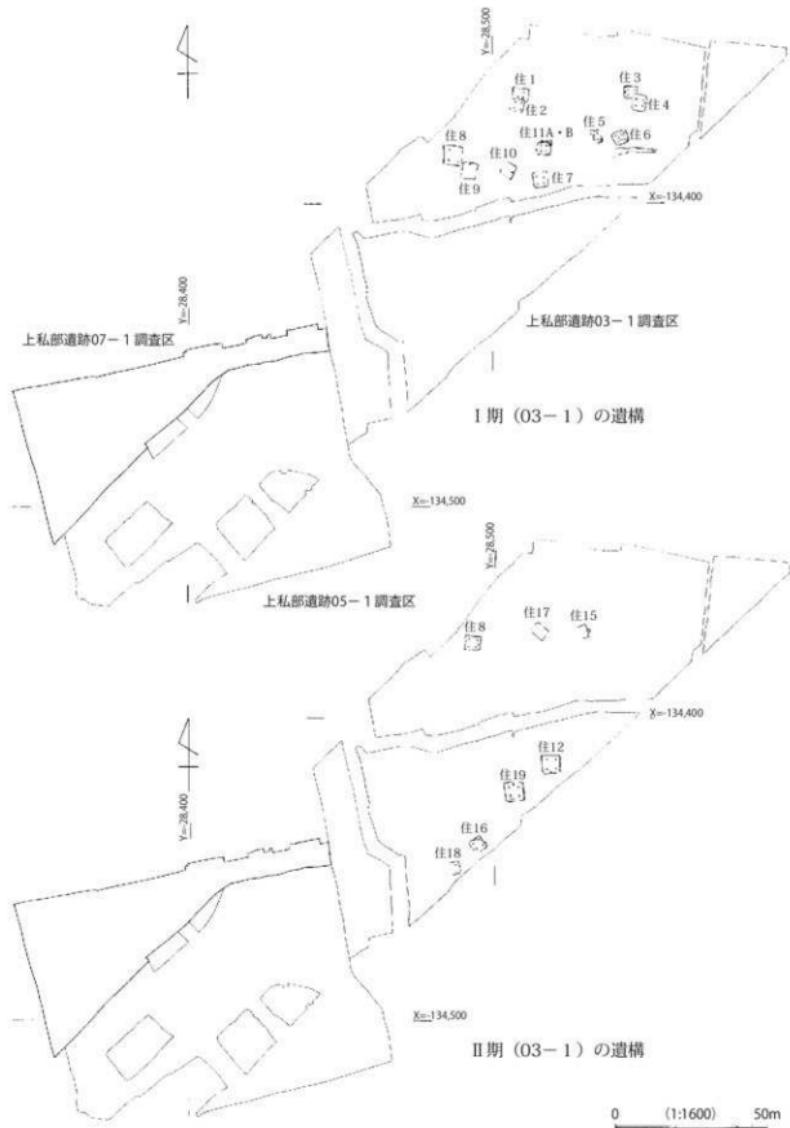


図54 上私部遺跡変遷図（1）

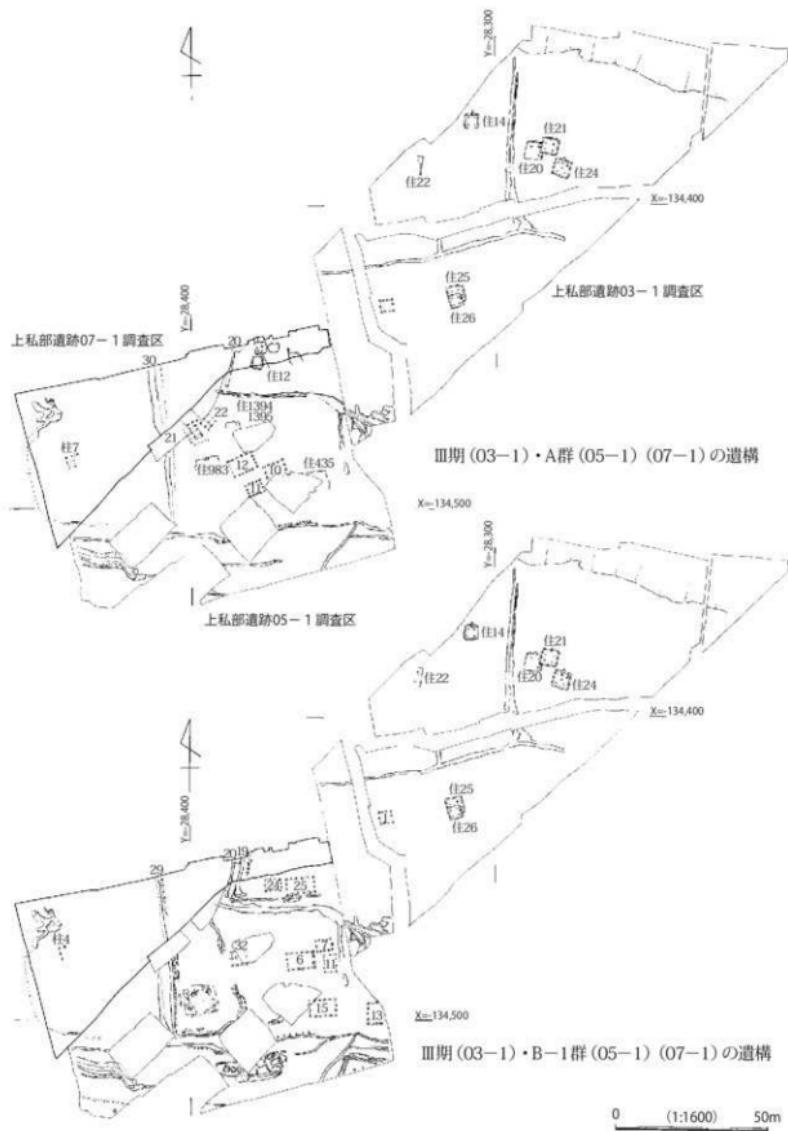


図 55 上私部遺跡変遷図 (2)

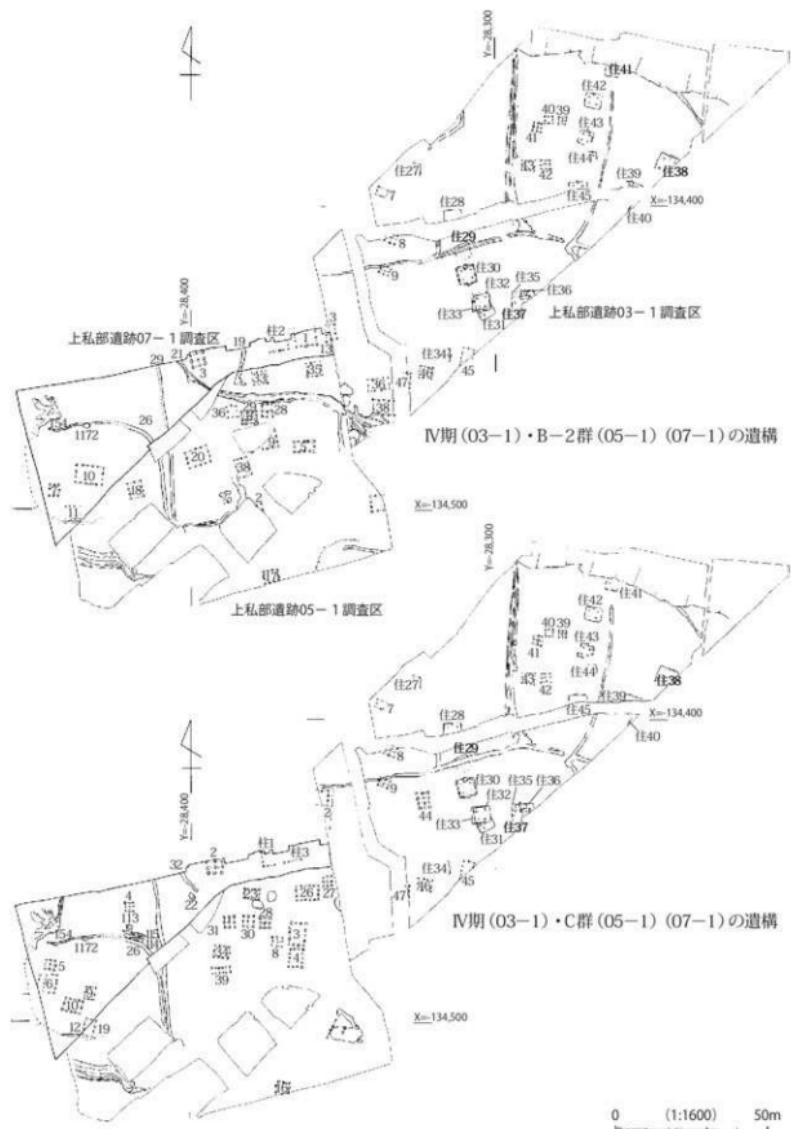


図56 上私部遺跡変遷図（3）

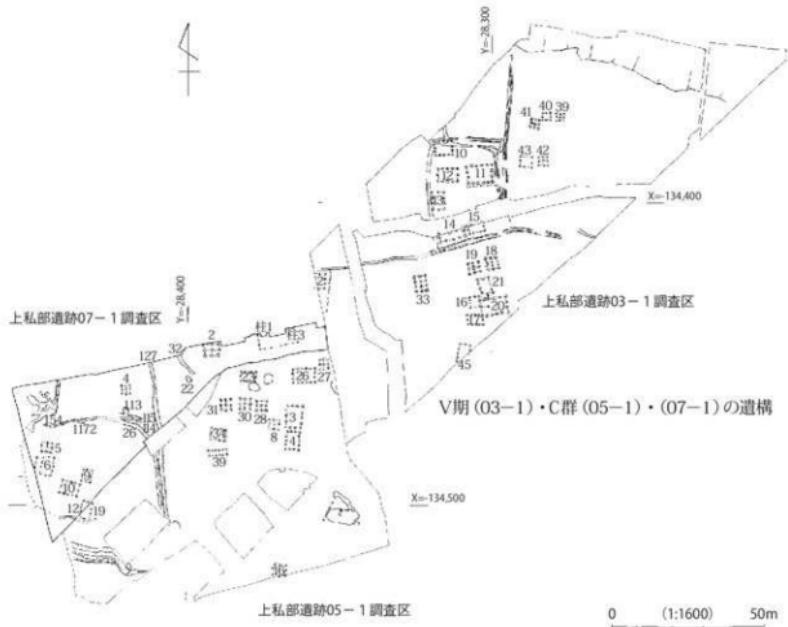


図 57 上私部遺跡変遷図（4）

以上、今回の調査で検出した建物には、A群に含まれる主軸方向の掘立柱建物がほとんど認められない結果となった。ただこれは前回の調査報告書に、「区画溝あるいは谷状遺構で一括廃棄された土器群を見ると、6世紀前半から中頃の土器が大半を占める」とされるのにに対し、今回の調査区では6世紀中頃から6世紀後半の土器が大半を占める状況と矛盾しない。したがってこの時期、集落域が南北方向に大きく拡大する一方、方形区画の部分が集落の最先端にあたる場所を占めており、その西もしくは南側を限る区画溝と柵が、集落の西限および南限を示していたと考えられる。

### III期・B-1群

当該期は6世紀前半～6世紀中頃で、A群に後続する。今回検出した建物もしくはその可能性のある柱穴列で、当該期のものとして抽出したのは柱穴列4のみにとどまる。ただしそれも、出土遺物や遺構の切り合い関係から積極的にこの時期と特定し得たものではない。柱穴列4は柱穴列7を北側にスライドさせたような位置関係で近接しており、振れの大きさは柱穴列7ほどではないにせよ、北に対して西に振ることから、柱穴列7の後にそれに変わるものとして再建されたものと考え、A群から間を置かない時期のB-1群に当てはめたものである。

29溝は方形区画の西を限る南北方向溝の北側延長部分にあたり、東側に配される柱穴列もこれに対応するものと考えられることから、それらを当該期の遺構とみなした。この見解は、29溝出土遺物の

時期とも矛盾しない。20溝は出土遺物と遺構の重なりから見て、この時期に機能を失い、それに替る19溝が掘削されたと考える。19溝の東側に配された柱穴列11が、この時期に対応する可能性もある。方形区画の北側で、19溝の東側には前回の調査で検出された「建物24」と「建物25」が、この時期の建物群として抽出されている。これらは同一の主軸方向で、建物の北側辺の柱通りをそろえていることから、規則性を意識して計画的に配されたものとみることができる。方形区画内の建物配置と比較すると、19溝の東側にも別の方形区画が存在していた可能性がある。

古墳時代集落の居住域の範囲は、A群の時期とそれほど変わらないと考えられる。

#### IV期・B-2群

IV期は6世紀後葉～7世紀初頭、B-2群は6世紀後半に想定される。この時期には、方形区画の西を限っていた南北方向溝の一つを分岐させるように、逆L字形に方向を転じる溝の延長部分が掘り足される。また方形区画の北限である東西方向溝の延長部分も掘り足される。こちらもゆるやかなカーブを描きながら、南北方向に近づくように方向を転じる。このように区画溝の配置は変化し、その東肩に沿って配されていた樋も姿を消す。

前述したように、今回検出した建物の主軸方向はB-2類とC類に含まれうるものが大半を占める。ただ2つのグループの主軸方向の分布には重なる部分も大きいので、客観的に見て明確な分類基準を提示しにくい。そこでまず、複数の根拠から当該期と推定できる建物についてふれたい。

建物3は柱穴より、おそらく集落の最終段階の時期に対応するとみられる遺物が出土していること、建物の主軸方向がB-2群の分布範囲以外にないことから当該期と判断した。

建物1は6世紀後半の遺物を含む15溝を切っていることから、その時期を建物の存続時期の上限とすると、B-2群かC群に含まれる。他方、柱穴列2は建物1の南辺と東西方向の柱筋が通ることから、両者は同時期に計画的に配置されたものと想定できる。柱穴列2は柱穴列1に切られていることから、後者を集落の最終段階にあたるC群と位置づけると、その前段階であるB-2群に位置づけることができる。それらを根拠として、建物1と柱穴列2を当該期に属するものととらえる。建物1の東辺は、上私部遺跡（その2）の調査で検出され、当該期に比定されている「建物35」の東辺と同一ライン上に乗るが、これも前述の想定と矛盾しない。建物13は前回の調査報告書で当該期と想定されるが、隣り合う建物1と柱穴列2、建物3の南辺と柱筋が同一ラインにのるように位置が揃えられており、当該期に計画的に配置されたものと想定すると矛盾がない。

建物2は建物3とほぼ同じ大きさで東西方向に隣り合う。したがって両者が同時期に存在していたととらえることも可能である。ただもしやうであれば、このように近接しながら両者の主軸方向が一致しない点に、やや不自然を感じる。両者が別の時期に属するとしても、時期の比較が可能な遺物が建物2から出土しなかったので、前後関係を判断しにくい状況である。建物の主軸方向を判断の基準にするなら、建物2は北に対して若干東に振るので、C群に含まれる可能性が高くなる。したがってここでは、建物3をB-2群に、建物2はC群に属すると想定する。

方形区画の西側に展開する建物群（建物6～12）は、柱穴列4・7を除くと程度の差はあれ、おおむね北に対して東に振る。建物8と建物9との重複からみて、それらの建物群が2時期に分かれるのは明らかだが、出土遺物や他の遺構との重複を手がかりとした、同時性もしくは前後関係の把握をしにくい状況である。したがって建物の大きさや柱間の長さ、位置関係なども考慮して分類する。

まず前回の調査で検出された方形区画内の建物群を概観すると、B-2群とC群とでどのような違い

が見られるだろうか。一見するとC群に含まれる建物群では、大型建物の面積が小さくなり、大型建物と小型建物の面積差も縮まる状況がうかがえる。今回の調査で検出した建物8は、C群に含まれる大型建物と比較すると、それよりもむしろ大きなものになってしまう。一方、B-2群に含まれる大型の「建物9」と比較すると、主軸方向は異なるが両者の大きさ、柱穴間の長さは極めて近似する。したがって、両者は共通の規格に則って作られたことがうかがえるのである。

建物8をB-2群に含まれるものとしてとらえると、これと近接する位置にあり、相互に主軸方向が近似する建物7と建物11も、同一時期の建物群としてとらえることが可能である。建物の主軸方向は若干異なるが、建物11と「建物18」の大きさや柱穴間の距離が近似する点もこれと矛盾しない。

以上を概観すると、この時期に集落の居住域が前段階よりも拡張することは明らかである。これと区画溝の延長、および溝と柵のセット関係の消滅はおそらく期を一にする現象ととらえられる。前回調査の報告書においても「西限溝では、少なくとも4時期にわたる溝の掘り直しが認められ、それに対応して南北方向の柵（柵2～4）が設けられ」、「南限溝である55溝や634溝にも柵が設けられており（柵6～8）、西方と南方とに対して閉鎖性の強いものであったことがわかる」とされている。

これは方形区画が成立した当初、それが集落の最先端に当たり、西側と南側を限る区画溝が、とりもなおさず集落全体の西限および南限を限る施設となっていたからと考えられる。20溝ないし19溝の東側に柵が作るのも、おそらく同様の理由によるものと考える。その後、南北方向溝群と19溝の西側に建物が建てられるようになると、区画溝と集落の境界が一致しないことになり、柵を併用した防護施設を継続して設ける必要性がなくなったものと考える。

154溝は南北溝の西側に、新たに付け加わった居住空間を区画するために延長されたものと考えられる。また21溝は19溝の西側に付け加わった区画と、本来の方形区画とを仕切る必要から、延長されたものと考える。結果的には21溝と南北方向溝にはさまれた部分が、方形区画内への出入り口としても機能したと考える。

一方、「建物17」が新たにつくられることにより、前段階まで方形区画の南側を区切っていた区画溝の必要性が薄れ、「81溝」のような、区画溝としてはやや不完全なものに置き換わっていくと考える。あるいは「柵9」の存在から、方形区画が前段階よりも南側に向けて拡張した可能性も考えられる。

なお今回検出された建物に関してみると、方形区画の北側と西側とで建物の主軸方向の振れが二分される。つまり北側のエリアでは北に対してやや西に振るのに対し、西側のエリアでは東に振る傾向をとらえることができる。このような差は、もともとは微地形を反映したものとみられるが、掘立柱建物群のまとまりを構成する集団ごとの独自性にも関わる可能性があろう。

#### IV期・C群

今回検出した建物群から、A群・B-1群・B-2群に想定した建物を除いたものである。今回の調査では当該期のものが最も多い。南北溝の西側に展開する建物5・6・9・10・12をみると、その東側に展開する建物群と同様、建物の大小差が縮まり、全体に建物の平面積は小規模化する。また前者が北向きに開口する建物は位置であるのに対し、後者が南向きに開口する配置であるという違いは有るものなの、それらが「コ」の字形の建物配置である点も共通する。

さらに建物5・6・9・10・12の建物配置を仔細に眺めると、相互に建物の辺を揃え、規則的な建物配置になるよう、意図していたことがうかがえる。具体的にみると、建物6の南側辺と建物10の北側辺、建物9の西側辺と建物10の東側辺、建物10の南側辺と建物12の北側辺が、柱筋が通るよう

に配されている。また建物5の東側辺は建物6の東辺より一間分西側の柱通りに揃えるような位置関係がみられる。他方、前段階までの方形区画の北側に位置する柱穴列1・3、建物2の配置では、南側辺がおむね同一ライン上に乗ることがわかる。これは前段階の建物1・3・13と柱穴列2の位置関係を踏襲したものととらえられる。

建物の主軸方向をみると、前段階までの方形区画の西側に位置する建物群は、北に対して東に振る。それに対して北側に位置する建物群は、北に対して西に振る。同様の傾向はB-2群の段階でもみられることは前述したが、当該期になるとそれぞれ振れがさらに大きくなるのが見てとれる。換言すれば、建物群の北に対する主軸方向の振れは、南北方向溝の西と東でそれぞれ前段階のあり方を踏襲しつつ、さらに増幅していることがみてとれるのである。一方、両者の間に位置する建物2・4の主軸方向は、より真北に近い。

なお建物4は、主軸方向だけを見ると、B-1群やB-2群に含まれる。それを当該期に含めた理由は、建物の大きさや柱間の長さが、建物5や「建物8」・「建物28」に共通するからである。

調査区の西端部に位置する156溝とその東側に配される柱穴列5は、出土遺物から時期を判断することはできない。ただB-1群の項目で述べたように、内側に柵をともなう溝は、集落の最前面における施設と考えられることから、建物4とセットを成すと考えられる。南北溝よりも西側に居住域が拡大すれば、その西側に施設を設ける必要が生じるからである。したがって、建物4が当該期に含まれると想定するなら、156溝と柱穴列5もこの時期に含まれると考える。なお建物5・6・9・10・12から成る建物群の西側は第3章第1節でも述べているように、谷地形がめぐっていたと考えられる。そのためこれが自然の防御施設となっていたと考える。

溝と柵を併用した防御施設が作られているのであれば、建物4の北側にも建物群が展開していた可能性は高いだろう。ただ156溝の埋土には、20溝や21溝、29・30・127溝とは対照的に、遺物が含まれていなかった。このことから156溝の東側にあるかもしれない建物群に関しては、建物の密度が低いか、もしくは存続期間が短いことが推測できる。

21溝とその延長部分は埋没し、変わって形骸化した32溝と井戸が掘削される。これにより南北溝の東側に展開する建物群は、その前段階のような、区画溝を介した建物群の区分が認められなくなる。

以上、集落全体としてみると掘立柱建物の面積は縮小傾向を見せ、大型建物・小型建物の面積差も縮小するが、居住範囲は当該期に最大になる可能性がある。

#### V期・C群

V期は7世紀前半に想定されている。ただ前回発掘調査の報告書ではC群と、上私部遺跡（その1）の調査報告書で言うV期は、同時期に廃絶したと想定される。出土遺物の様相から見て、前回の調査内容と変わることろは認められないことから、今回もその見解にならうこととする。

上私部遺跡（その2）・（その3）調査区でみられる集落構造の推移と対照的に、上私部遺跡（その1）調査区ではV期に、区画溝で囲まれた建物群が成立する。その中の大型建物は、当該期の集落の中で最も大きなものである。このことから集落の中心が、この時期に東へ移動した可能性のあることがうかがえる。ただその方形区画は、上私部遺跡（その2）調査区で検出された方形区画より面積は小さい。また前段階までの方形区画の北側に、連続的に建物が配置されていた可能性があり、もしそうであれば、建物の配置密度は集落の西側の方が高かったということができる。

したがってむしろこの時期に、集落が二極化するか、もしくは全体としての居住域は西側に圧縮され

て、方形区画を伴う集落の核となる部分だけが、飛び出るととらえるべきなのかもしれない。ただいざれにせよ、前段階に引き続いて掘立柱建物の縮小傾向が認められることから、方形区画の部分を除けば集落構造の格差は縮小化するととらえられる。

集落全体としては均質化が進みつつも、部分的な改変が行われる状況を経て、当地における古墳時代集落は廃絶に向かったことがわかる。

なお、上私部遺跡（その3）の発掘調査終了後、（その1）調査区内に残されていた未調査部分や、（その1）・（その3）調査区の北側に三角形もしくは台形状に残る未調査区域の発掘調査を行った。その発掘調査成果については、本書の第II部を参照されたい。

## 註

註1）財團法人大阪府文化財センター 2007 『上私部遺跡II』（財）大阪府文化財センター調査報告書第165集

表2-1 建物・柱穴列土層一覧表

造積名	造積番号	層番号	色	色	備考
建物1	68 71 72 73 74 84	1 柱穴	オリーブ黒	5Y 3/1	粗粒砂混じり細粒砂
		1'	灰	5Y 4/1	粗粒砂混じり細粒砂
		2	暗灰黄	2.5Y 5/2	中-粗粒砂混じり細粒砂
		3	灰	5Y 4/1	粗粒砂混じり中-粗粒砂
		4	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じり中-粗粒砂
		5	灰	5Y 4/1	粗粒砂混じり中-粗粒砂
		6	灰オリーブ	5Y 4/2	粗粒砂混じり粗粒砂
		7	灰	5Y 4/1	粗粒砂混じり粗粒砂
		8	灰オリーブ	5Y 4/2	粗粒砂混じり粗粒砂
		9	灰	7.5Y 4/1	粗粒砂混じり中-粗粒砂
		10	黒褐	2.5Y 3/1	中-粗粒砂混じり細粒砂
		11	暗灰	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり中-粗粒砂
		12	暗灰黄	2.5Y 5/2	粗粒砂混じり中-粗粒砂
		13	黄灰	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり細粒砂
		14	オリーブ黒	7.5Y 3/1	粗粒砂混じり中-粗粒砂
(3) 柱穴		15	灰	7.5Y 4/1	粗粒砂混じり中-粗粒砂
建物2	94柱穴	1	黄灰	30Y 4/1	粗粒砂混じり
		2	オリーブ黒	10Y 3/1	粗粒砂混じり
		3	暗灰黄	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり
		4	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じり
		5	黑	2.5Y 2/1	粗粒砂混じり
96柱穴		1	黄灰	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり
		2	オリーブ黒	8Y 3/1	粗粒砂混じり
		3	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じり
		4	黄灰	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり
		5	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じり
95・96柱穴		1	オリーブ黒	8Y 3/1	中-粗粒じり粗粒砂
		2	黄褐	2.5Y 5/1	中-粗粒じり粗粒砂
		3	オリーブ黒	8Y 3/1	粗粒砂混じり細粒砂
		4	黄灰	2.5Y 5/1	粗粒砂混じり細粒砂
		5	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じり細粒砂
		6	黄灰	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり細粒砂
		7	黒褐	2.5Y 3/1	粗粒砂混じり細粒砂
99柱穴		1	オリーブ黒	8Y 3/1	中-粗粒じり粗粒砂
		2	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じり細粒砂
		3	黄灰	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり細粒砂
		4	黒褐	2.5Y 3/1	粗粒砂混じり細粒砂
111・112柱穴		1	黄灰	2.5Y 5/1	粗粒砂混じり粗粒砂
		2	オリーブ黒	5Y 2/2	中-粗粒じり粗粒砂
		3	暗灰黄	2.5Y 5/2	中-粗粒じり粗粒砂
		4	黒褐	2.5Y 3/2	粗粒砂混じり細粒砂
		5	黄灰	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり細粒砂
		6	黒褐	2.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		7	黄灰	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり細粒砂
		8	オリーブ黒	8Y 3/1	中-粗粒じり粗粒砂
		9	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じり細粒砂
		10	黄灰	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり細粒砂
(19) 柱穴		1	灰	5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト
			灰	5Y 4/1	粘土ブロック20%入る
		2	灰オリーブ	5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
		3	灰	2.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		4	黒褐	5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
		5	黄灰	5Y 4/3	粗粒砂混じりシルト
		6	黒褐	2.5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		7	黄灰	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり細粒砂
		8	オリーブ黒	8Y 3/1	中-粗粒じり粗粒砂
		9	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じり細粒砂
		10	黄灰	2.5Y 4/1	粗粒砂混じり細粒砂
(20, 21) 柱穴		1	オリーブ黒	5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		2	暗灰黄	5Y 4/3	粗粒砂混じりシルト
		3	黒褐	2.5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		4	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		5	黄灰	5Y 4/3	粗粒砂混じりシルト
		6	黒褐	5Y 2/1	粗粒砂混じりシルト
		7	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		8	黄灰	5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト
		9	暗灰黄	2.5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト
		10	黄灰	5Y 4/1 ~ 4/2	粗粒砂混じりシルト
(22) 柱穴		1	オリーブ黒	5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
建物3	(24) 柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		2	黒褐	2.5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		3	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		4	暗灰黄	5Y 4/3	粗粒砂混じりシルト
		5	黒褐	5Y 2/1	粗粒砂混じりシルト
		6	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		7	黄灰	5Y 5/4	粗粒砂混じりシルト
		8	暗灰黄	5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		9	黒褐	2.5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		10	オリーブ黒	5Y 4/3	粗粒砂混じりシルト
		11	暗灰黄	5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		12	黒褐	2.5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		13	オリーブ黒	5Y 4/3	粗粒砂混じりシルト
		14	暗灰黄	5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		15	黒褐	5G 6/1	粗粒砂混じりシルト
(25) 柱穴		1	黒褐	2.5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		2	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		3	暗灰黄	5Y 4/3	粗粒砂混じりシルト
		4	黒褐	2.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		5	緑灰	5G 6/1	粗粒砂混じりシルト
		6	黒褐	2.5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		7	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		8	暗灰黄	5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		9	黒褐	5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
		10	オリーブ黒	5Y 4/3	粗粒砂混じりシルト
(26) 柱穴		1	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		2	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト

表2-2 建物・柱穴地土層一覧表

建物名	通構番号	層番号	色	土質	備考
建物3	116柱穴	1	オリーブ	S Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト
		2	オリーブ	S Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト
		3	オリーブ	S Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト
117柱穴	117柱穴	1	黄灰	S Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
		2	黒褐	S Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
		3	黒褐	S Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
118柱穴	118柱穴	1	オリーブ	S Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
		2	黒褐	S Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
		3	オリーブ	S Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
119柱穴	119柱穴	1	黒褐	10Y R 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
		2	黒褐	2.5Y 3 / 1	中疊混じり細粒砂
		3	黄灰	2.5Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
120柱穴	120柱穴	1	黄灰	2.5Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
		2	黒褐	2.5Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
		3	黒褐	2.5Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
建物4	75・76・77・78・79・81・82・83柱穴	1	黒褐	10Y R 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
		2	黄灰	2.5Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
		3	黒褐	2.5Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
80柱穴	80柱穴	1	オリーブ	S Y 3 / 1	粗粒砂混じり極細粒砂
		2	黒褐	2.5Y 3 / 1	中疊混じり細粒砂
		3	黒褐	10Y R 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
建物5	267・269柱穴	4	灰	S Y 4 / 1	粗粒砂混じり極細粒砂
		5	オリーブ	S Y 3 / 1	中疊混じり細粒砂
		6	黒褐	2.5Y 3 / 1	中疊砂混じり極細粒砂
268柱穴	268柱穴	1	灰	S Y 5 / 1	中疊砂混じり細粒砂
		2	オリーブ	S Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
		3	黒褐	2.5Y 3 / 1	中疊砂混じり極細粒砂
271柱穴	271柱穴	1	オリーブ	S Y 6 / 4	粗粒砂混じり細粒砂
		2	灰	S Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂
		3	灰オリーブ	S Y 6 / 2	粗粒砂混じり細粒砂
272柱穴	272柱穴	4	オリーブ	S Y 6 / 3	粗粒砂混じり細粒砂
		5	オリーブ	S Y 6 / 2	粗粒砂混じり細粒砂
		6	灰	10Y 6 / 1	粗粒砂混じりシルト
312柱穴	312柱穴	5'	5層に近似		シルトブロック10%程度入る
		1	黄灰	2.5Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト
		2	黄灰	2.5Y 5 / 1	粘土ブロック
270柱穴	270柱穴	3	オリーブ	2.5Y 4 / 3	砂利シルト・細粒砂ブロック
		4	オリーブ	S Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト
		5	オリーブ	S Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト
178柱穴	178柱穴	6	オリーブ	S Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト
		7	灰	S Y 4 / 1	シルト
		8	黒褐	2.5Y 3 / 2	シルト混じり粗粒砂
建物6	251・252柱穴	9	黒褐	2.5Y 4 / 3	砂利シルト・細粒砂ブロック
		10	オリーブ	S Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト
		11	オリーブ	S Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト
251・252柱穴	251・252柱穴	12	オリーブ	S Y 4 / 1	粗粒砂混じり粘土シルト
		13	灰	S Y 4 / 2	粗粒砂混じり粘土
		14	オリーブ	S Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト
251・252柱穴	251・252柱穴	15	灰	S Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト
		16	オリーブ	S Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト
		17	灰	S Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト

表2-3 建物・柱穴列土層一覧表

構造名	道番号	層番号	色	土質	備考
建物6		2 オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
		3 オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
		灰	5Y 4/2	細粒砂	10%入る
		4 灰	5Y 4/1	細粒砂混じりシルト	
		5 オリーブ	5Y 4/2	細粒砂	30%入る
		6 オリーブ	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	径0.2cm未満の繊少量入る
250・253柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/2	粘土ブロック	10%入る
		2 オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂	5%入る
		3 オリーブ	5Y 4/3	細粒砂ブロック	3割のマッシュ粒集結して褐色化 マッシュ粒少量入る 径0.2cm未満の繊少量入る
249・254・ 277柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
		2 オリーブ	7.5Y 4/2	細粒砂混じりシルト	30%入る 径0.2cm未満の繊少量入る
		3 オリーブ	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	粘質
		4 オリーブ	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
		5 オリーブ	5Y 4/2	シルトブロック	30%程度入る
255・256柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	径0.5cm未満の白色繊少量入る
		2 オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じりシルトブロック	20%程度入る
		3 オリーブ黒	5Y 3/2	粘土ブロック	10%入る
		4 オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト・細粒砂質シルト	径0.3cm未満の繊少量かに入る
		5 オリーブ	5Y 4/2	シルトブロック	
		6 灰	5Y 4/1	細粒砂混じりシルト	10%入る
		7 オリーブ黒	5Y 4/2	細粒砂	30%入る
		8 オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
295柱穴	1	オリーブ黒	2.5Y 4/1	細粒砂混じる粘土質シルト	粘土ブロック 10%入る
		2 オリーブ黒	2.5Y 4/1	粘土ブロック	10%入る 径0.3cm未満の繊少量入る
		3 オリーブ黒	2.5Y 4/3	細粒シルト	1割20%入る ややしまり悪い しまり悪い 粘質
		4 灰	7.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
建物7	241柱穴	1 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト	
		2 灰	7.5Y 4/1	細粒砂混じりシルト	10%入る 径0.5cm未満の繊少量入る
		3 精オリーブ黒	2.5Y 3/3	細粒砂混じりシルト	40%入る しまり悪い
		4 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト	しまりやや良い 径0.8cm未満の繊少量入る 同色 粘土ブロック
		5 オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じり砂質シルト	化物質 少量入る しまり悪い
		6 オリーブ黒	7.5Y 2/2	細粒砂混じりシルト	やや軟質 しまりやや良い
		7 オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
242柱穴	1 オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト		
		2 精オリーブ黒	5Y 4/4	細粒砂ブロック	30%入る
		3 灰	7.5Y 4/1	粘土ブロック	10%入る しまり悪い
		4 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト	10%入る しまりやや良い 径0.8cm未満の繊少量入る 同色 粘土ブロック
		5 オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じり砂質シルト	化物質 少量入る しまり悪い
		6 オリーブ黒	7.5Y 2/2	細粒砂混じりシルト	やや軟質 しまりやや良い
		7 オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
243柱穴	1 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト	248ピット埋に似るが、それより軟質(2~5厘も同じ)	
		2 灰	7.5Y 4/1	細粒砂混じりシルト	10%入る 径0.5cm未満の繊少量入る
		3 精オリーブ黒	2.5Y 3/3	細粒砂混じりシルト	40%入る しまり悪い
		4 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト	しまりやや良い 径0.8cm未満の繊少量入る 同色 粘土ブロック
		5 オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じり砂質シルト	化物質 少量入る しまり悪い
		6 オリーブ黒	7.5Y 2/2	細粒砂混じりシルト	やや軟質 しまりやや良い
		7 オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
244柱穴	1 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト		
		2 灰	7.5Y 4/1	細粒砂混じりシルト	10%入る 径0.5cm未満の繊少量入る
		3 精オリーブ黒	2.5Y 3/3	細粒砂混じりシルト	40%入る しまり悪い
		4 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト	しまりやや良い 径0.8cm未満の繊少量入る 同色 粘土ブロック
		5 オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じり砂質シルト	化物質 少量入る しまり悪い
		6 オリーブ黒	7.5Y 2/2	細粒砂混じりシルト	やや軟質 しまりやや良い
		7 オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
245柱穴	1 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト		
		2 灰	7.5Y 4/1	細粒砂混じりシルト	10%入る 径0.5cm未満の繊少量入る
		3 精オリーブ黒	2.5Y 3/3	細粒砂混じりシルト	40%入る しまり悪い
		4 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト	しまりやや良い 径0.8cm未満の繊少量入る 同色 粘土ブロック
		5 オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じり砂質シルト	化物質 少量入る しまり悪い
		6 オリーブ黒	7.5Y 2/2	細粒砂混じりシルト	やや軟質 しまりやや良い
		7 オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
246柱穴	1 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト		
		2 灰	7.5Y 4/1	細粒砂混じりシルト	10%入る 径0.5cm未満の繊少量入る
		3 精オリーブ黒	2.5Y 3/3	細粒砂混じりシルト	40%入る しまり悪い
		4 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト	しまりやや良い 径0.8cm未満の繊少量入る 同色 粘土ブロック
		5 オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じり砂質シルト	化物質 少量入る しまり悪い
		6 オリーブ黒	7.5Y 2/2	細粒砂混じりシルト	やや軟質 しまりやや良い
		7 オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
247柱穴	1 灰	7.5Y 4/1	砂質シルト		
		2 精オリーブ	2.5Y 3/3	細粒砂混じりシルト	10%入る 径0.5cm未満の繊少量入る
		3 精オリーブ	5Y 4/3	砂質シルト	40%入る しまり悪い
		4 灰	5Y 4/1	シルト	1割30%白色繊少量入る
		5 黒褐色	2.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	細目状に入る しまり悪い
		6 黒褐色	2.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	径0.3cm未満の繊少量入る
建物8	220柱穴	1 暗灰黄	5Y 4/2	細粒砂混じりシルト	40%程度入る
		2 黒褐色	2.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	灰岩物少量入る 径0.3cm未満の繊少量入る やや軟質 しまり悪く
		3 黒褐色	2.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト	
		4 黒褐色	5Y 4/3	砂質シルト	

表2-4 建物・柱穴地土層一覧表

建物名	道構番号	層番号	色	土質	備考
建物B	3	オリーブ黒	5Y 3/ 2	細粒砂混じりシルト	非常に軟質
		オリーブ黒	5Y 3/ 1	粘土ブロック	10%程度入る
	4	灰オリーブ	5Y 4/ 2	粗粒砂混じりシルト	しまりやや悪い 程0.3cm未満の細少量入る
		灰	5Y 4/ 1	シルトブロック	10%程度入る
	5	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	粗粒砂・粗粒砂混じりシルト	程0.5cm未満の細少量入る
		灰	5Y 4/ 1	シルトブロック	10%程度入る
221柱穴	1	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト・ヘシルト	化物少量入 程0.3cm未満の細少量入る
	2	オリーブ黒	5Y 3/ 1	粗粒砂混じりシルト	
	3	灰オリーブ	5Y 4/ 2	粗粒砂混じりシルト	程0.3cm未満の細少量入る
	4	オリーブ黒	5Y 3/ 1	細粒砂混じり粘土質シルト	
222柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	
	2	オリーブ黒	5Y 4/ 2	シルトブロック	30%入る
212柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	程0.3cm未満の細少量入る
	2	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粘土ブロック	20%入る
	3	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	程0.3cm未満の細少量入る
	4	オリーブ黒	7.5Y 3/ 1	粗粒砂・粘土質シルト	しまり悪い 軟質 程0.3cm未満の細少量入る
	5	オリーブ黒	5Y 3/ 1	粗粒砂混じりシルト	程0.3cm未満の細少量入る 非常に軟質 植物遺体少量入る
213柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粘・30%・粗粒砂混じりシルト 40%	混合層
	2	灰オリーブ	5Y 4/ 2	シルト	
	3	灰	10Y 4/ 1	砂質シルト	軟質 黒化する
	4	オリーブ黒	5Y 3/ 1	シルトブロック	程0.3cm未満の細少量入る
	5	暗灰黄	2.5Y 4/ 2	粗粒砂混じりシルト	網目状に入ら 10%入る
		黄	2.5Y 5/ 3	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る
	4	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	粗粒砂混じり粘土 同色粗粒砂混じり粘土ブロック	30%入る
	5	黑鶴	2.5Y 3/ 2	シルトブロック	10%入る 軟質 しまりやや悪い
214柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	
	2	暗灰黄	2.5Y 4/ 2	粗粒砂混じりシルト	程0.3cm未満の細少量入る
	3	暗鶴	2.5Y 5/ 3	シルト	網目状に入ら 10%入る
	2	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じり粘土	30%入る
	3	黒鶴	2.5Y 3/ 2	シルトブロック	10%入る 軟質 しまりやや悪い
	4	暗灰黄	2.5Y 4/ 2	粗粒砂混じりシルト	下位は粘質化する
	5	灰	2.5Y 5/ 3	シルトブロック	水平方向に10%入る 下位軟質
215柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト・ヘシルト	程0.3cm未満の細少量入る 下位軟質化
	2	暗灰黄	2.5Y 4/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	20%入る しまり悪い
	3	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	程0.3cm未満の細少量入る
	4	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る 軟質 しまりやや悪い
	5	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る 軟質 しまり悪い
216柱穴	1	黒鶴	2.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトシルト	網目状・土器片入る しまり良い
	2	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	細粒砂シルトブロック	30%入る
	3	黒鶴	2.5Y 3/ 2	シルトブロック	20%入る
	4	灰オリーブ	5Y 4/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る 軟質化物少量入 土器片あり
	5	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じり粘土シルト	30%入る
	2	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	30%入る
	3	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る 軟質 しまり悪い
	4	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	水平方向に10%入る 下位軟質
	5	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る 軟質 しまり悪い
218柱穴	1	黒鶴	2.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトシルト	網目状・土器片入る しまり良い
	2	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	細粒砂シルトブロック	30%入る
	3	黒鶴	2.5Y 3/ 2	シルトブロック	20%入る
	4	オリーブ黒	5Y 4/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る 軟質化物少量入 土器片あり
	5	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じり粘土シルト	30%入る
	2	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	30%入る
	3	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る 軟質 しまり悪い
	4	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	水平方向に10%入る 下位軟質
	5	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	10%入る 軟質 しまり悪い
219柱穴	1	黒鶴	2.5Y 3/ 2	粗粒砂混じり粘土シルト	網目状・土器片入る しまり良い
	2	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	細粒砂シルトブロック	30%入る
	3	黒鶴	2.5Y 3/ 2	シルトブロック	20%入る
	4	オリーブ黒	5Y 4/ 2	粗粒砂混じり粘土シルト	10%入る
	5	黒鶴	2.5Y 3/ 2	粘土質シルトブロック	20%入る
	4	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じり粘土シルト	10%入る 軟質
	5	黒鶴	2.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトシルト	40%入る
	2	オリーブ黒	2.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	30%入る
	3	黒鶴	2.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	程0.3cm未満の細少量入
	4	暗灰黄	2.5Y 4/ 2	粗粒砂混じりシルト	程0.3cm未満の細少量入 しまり悪い
	5	オリーブ黒	5Y 3/ 1	粗粒砂混じりシルト	程0.3cm未満の細少量入
	2	灰	5Y 4/ 1	粗粒砂ブロック	30%入る やや軟質
	3	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	20%入る
	4	オリーブ黒	5Y 4/ 2	粘土ブロック	10%入る
	5	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	10%入る
223柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	網目状・土器片入る しまり良い
	2	灰オリーブ	5Y 4/ 2	粘土ブロック	20%入る
	3	灰	7.5Y 3/ 1	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い 軟質
	4	オリーブ黒	7.5Y 3/ 1	粗粒砂混じりシルト	程0.3cm未満の細少量入 軟質化物片 多量に入る しまり悪い
	5	灰	7.5Y 4/ 1	粗粒砂混じりシルト	程0.5cm未満の細少量入 しまり悪い
224柱穴	1	黒鶴	2.5Y 3/ 2	粗粒砂混じり粘土シルト	網目状・土器片入る しまり良い
	2	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	30%入る
	3	1層に近似	7.5Y 3/ 1	粗粒砂混じりシルト	程0.3cm未満の細少量入 土器片入る ややしまり悪い
	4	灰オリーブ	5Y 4/ 2	粗粒砂混じりシルト	5) ブロック20%入る
	5	灰オリーブ	7.5Y 4/ 2	粗粒砂混じりシルト	よくしまる 程0.5%の細少量入
225柱穴	1	黒鶴	2.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルト	網目状・土器片入る しまり良い
	2	オリーブ黒	7.5Y 3/ 2	粗粒砂混じりシルトブロック	30%入る
	3	黒鶴	2.5Y 3/ 1	粗粒砂混じりシルト	粗粒砂ブロック 10%入る

表2-5 建物・柱穴列土層一覧表

建物名	道橋番号	層番号	色	土質	備考
建物8	225柱穴	2	オリーブ黒	2.5Y 4/3	シート
		3	オリーブ黒	5Y 3/1	粗粒砂混じりシルト
		灰	7.5Y 5/1	細粒砂ブロック	10%入る しまり悪い ややしまり悪い
建物6	226柱穴	4	灰	7.5Y 5/1	細粒砂ブロック
		1	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		2	オリーブ灰	10Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
建物6	227柱穴	3	灰	5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
		1	黒	2.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		2	オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト
建物10	191・202・ 201・200・ 199柱穴	2	オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じりシルト
		灰	5Y 5/1	シートブロック	10%入る しまり悪い 径0.3cm未溝の縦少量入る しまり悪い
		3	灰	5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト
建物10	196・195・ 194・197・ 193柱穴	4	オリーブ灰	5Y 4/2	粗粒砂混じり砂質シートブロック
		5	灰	5Y 4/2	粗粒砂混じり砂質シートブロック
		1	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
建物10	198柱穴	2	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		3	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		4	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
建物10	198柱穴	5	灰	7.5Y 4/2	シート混じり粗粒砂シルト
		1	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
		2	黒	2.5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
建物10	198柱穴	3	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		4	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		5	灰	5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト
建物11	203・204・ 205柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシルト
		2	オリーブ黒	5Y 3/2	シートブロック
		灰	5Y 4/1	粗粒砂混じり砂質シルト	
建物11	206柱穴	2	灰	5Y 4/2	粗粒砂混じり砂質シルト
		3	灰	5Y 4/2	シート
		4	緑	2.5Y 4/2	粗粒砂へシルト
建物11	207柱穴	1	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルトヘシルト
		2	緑	5.6/1	細粒砂へシルト
		3	オリーブ黒	5Y 3/2	細粒砂混じりシートブロック
建物11	208柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		2	灰	5Y 5/3	粗粒砂混じりシルト
		3	灰	7.5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト
建物11	209・210柱穴	1	灰	5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト
		2	灰	5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
		3	オリーブ灰	10Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
建物11	211柱穴	1	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
		2	オリーブ黒	2.5Y 4/3	シートへ粗粒砂ブロック
		3	灰	7.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
建物11	212柱穴	4	灰	2.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
		5	オリーブ黒	2.5Y 4/3	シートブロック
		6	灰	7.5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト
建物11	213柱穴	7	黄灰	2.5Y 4/1	シート
		8	オリーブ黒	2.5Y 4/3	粗粒砂混じりシルト
		9	灰	7.5Y 4/1	粗粒砂混じりシルト
建物11	214柱穴	10	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
		11	暗灰黄	2.5Y 4/2	シートへ粗粒砂ブロック
		12	灰	5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
建物11	215柱穴	13	2層に近似	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルトブロック
		14	灰	7.5Y 4/1	粗粒砂混じり砂質シルト
		15	オリーブ黒	2.5Y 4/3	シートブロック
建物11	216柱穴	16	灰	7.5Y 4/1	粗粒砂混じり砂質シルト
		17	黄灰	2.5Y 4/1	シート
		18	オリーブ黒	2.5Y 4/3	シートブロック
建物11	217柱穴	19	灰	7.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
		20	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルト
		21	暗灰黄	2.5Y 4/2	粗粒砂混じりシルトヘシルト
建物12	236・238・ 239・240柱穴	22	灰	5Y 4/2	粗粒砂混じりシルトブロック
		23	灰	7.5Y 4/1	細粒砂混じりシルトブロック
		24	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
建物12	237柱穴	25	灰	7.5Y 4/1	細粒砂混じりシルトブロック
		26	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		27	灰	7.5Y 4/1	細粒砂混じりシルトブロック
建物12	238・239柱穴	28	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		29	灰	7.5Y 4/1	細粒砂混じりシルト
		30	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
建物12	240柱穴	31	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト
		32	灰	7.5Y 4/1	細粒砂混じりシルト
		33	オリーブ黒	5Y 3/2	粗粒砂混じりシルト

表2-6 建物・柱穴列土層一覧表

建物名	通横番号	表面色	色	土質	備考
建物13		3 灰オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	径0.3cm未溝の纏少量入る しまり悪い
		1 黒灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	
		2 灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり細粒砂	1に似るがそれより粘性低い
		3 露オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂	
		4 オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	地山のシルトブロックが僅かに入る
柱穴1	38柱穴	1 黒灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	
		2 灰黄	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	1に似るがそれより粘性低い
		3 露	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂	
		4 オリーブ黒	7.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂	2に似るがそれより粘性低い 塗化物混がに入る
	37柱穴	1 黒	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	地山のシルトブロックが僅かに入る
		2 灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂	
		3 灰	7.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂	2に似るがそれより粘性低い 塗化物混がに入る
		4 オリーブ黒	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂	地山の再堆積層
	5 黑灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂		
柱穴1	108柱穴	1 黒灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	地山の黄褐色シルトブロック含む
		2 灰灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂	
		3 黑灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂	塗化物混がに入る
	10 黑灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂		
100・101・102柱穴	1 黑灰	10Y R 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂		
	2 黄灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂	塗化物混がに入る	
	3 黑黑	2.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じり中～細粒砂		
	4 黑灰	10Y R 4 / 1	粗粒砂混じり中～細粒砂		
	5 黑灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～細粒砂	地山のシルトブロック含む	
	6 灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂		
	7 灰	7.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～細粒砂	地山の緑灰色中～細粒砂ブロック入る	
柱穴2	91・92・93・柱穴	1 灰	5 Y 4 / 1	中粗粒砂混じり細粒砂	塗化物含む
		2 黑灰黄	2.5 Y 4 / 2	細粒砂混じり粗粒砂	
		3 黑黑	2.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂	
		4 オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり細粒砂	地山シルトの再堆積層
		5 黑灰黄	2.5 Y 5 / 2	粗粒砂混じり中～細粒砂	
		6 黑黑	2.5 Y 5 / 2	粗粒砂混じり細粒砂	
		7 黑	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～細粒砂	
		8 黑灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中～細粒砂	
		9 灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	
		10 灰オリーブ	5 Y 4 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂	
110・109柱穴	1 オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂	塗化物混がに入る	
	2 灰灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	塗化物混がに入る	
	3 灰灰黄	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂	塗化物混がに入る 地山の粗粒砂ブロック入る	
柱穴3	55柱穴	1 黑	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	
	2 離灰黄	2.5 Y 4 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂	1に似るがそれより粘性低い	
	3 オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂		
	4 黑	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂	1に似るがそれより粘性低い	
85・86柱穴	1 黄灰	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり細粒砂	地山の細粒砂ブロックが混ざる 塗化物混がに入る	
	2 離灰黄	2.5 Y 4 / 2	中～粗粒砂混じり細粒砂	地山の中～粗粒砂の堆積層をベースに1のブロックが僅かに入れる	
	3 オリーブ	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じり細粒砂		
	4 黑	2.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じり中～粗粒砂		
	5 灰	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じり中～粗粒砂		
柱穴4	172・173・174・175柱穴	1 黑黑	7.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	
		2 露オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	
		3 オリーブ黒	2.5 Y 4 / 3	砂質シルトブロック30%入る	塗化物、土壌入る しまり良い
	2	灰	1.5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	
		3 露	7.5 Y 4 / 1	粘土ブロック20%	
		4 露オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	
		5 オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粘土ブロック20%	
		2*	2	2層よりさらにはしまり悪く軟質	しまり悪い
		3*	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い やや軟質
		3*	2.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	しまり悪い さらに軟質
柱穴5	157・158・313柱穴	1 露オリーブ	2.5 Y 3 / 3	粘粒シルト	しまり悪い 上部入る 径0.3cm未溝の纏少量入る
	2 黑	2.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
	3 露	2.5 Y 5 / 4	粗粒砂混じりシルト		
	4 露	2.5 Y 5 / 4	粗粒砂ブロック	40%入る	
柱穴6	257柱穴	1 黑黑	7.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト	
		2 露オリーブ	5 Y 4 / 2	粗粒砂混ブロック30%入る	
		3 オリーブ黒	2.5 Y 4 / 2	砂質シルトブロック20%入る	塗化物、径5mm未溝の纏少量入る しまり悪い
	2	灰	5 Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	
		3 黑	5 Y 4 / 1	シルトブロック10%入る	しまり悪い 5mm未溝の纏少量入る
		3 オリーブ黒	7.5 Y 3 / 1	粘土ブロックへ粘土	しまり悪い 軟質
		4 オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルトブロック20%入る	径5mm未溝の纏少量入る
		4 オリーブ黒	5 Y 3 / 1	シルト	
		5 灰	5 Y 4 / 1	シルトブロック20%入る	径5mm未溝の纏少量入る しまり良い
		5 1層に近似			しまり良い
		6 2層に近似			しまりやや良い
		7 オリーブ灰	7.5 Y 4 / 2	粗粒砂混じりシルト	植物体入ら やや軟質 径5mm未溝の纏少量入る
		8 オリーブ灰	5 Y 3 / 1	粘土～粗粒砂混じり粘土	軟質 径5mm未溝の纏少量入る
258・259柱穴	1 露オリーブ	2.5 Y 3 / 3	粗粒砂混じりシルト	径3mm未溝の纏少量入る 植物遺体多量入る 軟質 しまり悪い	
	2 オリーブ黒	7.5 Y 3 / 2	粗粒砂混じりシルト		
	3 灰	10Y 4 / 1	粗粒砂混じりシルト	径3mm未溝の纏少量入る しまり悪い 軟質	
	4 オリーブ黒	7.5 Y 3 / 1	シルト		
	5 オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルトブロック20%入る	径3mm未溝の纏少量入る	
	5 オリーブ黒	5 Y 3 / 1	粗粒砂混じりシルト		
	5 オリーブ	5 Y 4 / 2	シルト状態に入る	しまり悪い 軟質	

表2-7 建物・柱穴列土層一覧表

造様名	造様番号	層番号	色	色	土質	備考
柱穴列7	182・183柱穴	6	灰	7.5Y 5/1	地盤ブロック10%入る 細粒砂混じり粘土質シルト40%入る	しまり悪い、軟質
		1	オリーブ黒	6Y 3/2	細粒砂混じり粘土質シルト40%入る	径3mm未溝の纏少量入る
		2	オリーブ黒	SY 3/2	粘土質ブロック10%入る	
		3	オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じりシルトブロック30%入る	
柱穴列7	186柱穴	4	暗オリーブ	7.5Y 4/3	細粒砂混じりシルトブロック30%入る	植物遺体多量に入る 土器片入る
		2	オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じり粘土質シルト	径2mm未溝の纏少量入る やや軟質
		3	オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じり粘土質シルト	
		5	オリーブ黒	7.5Y 3/2	細粒砂混じり粘土質シルト	径3mm未溝の纏少量入る 軟質
柱穴列8	2~5柱穴	1	183-1層に間	5G 6/1	無機ブロック10%入る	
		2	黄	10Y 3/2	無機砂混じりシルト	
		3	黄黒	2.5Y 5/4	無機砂混じりコロク10%入る	径3mm未溝の纏少量入る 炭化物含む しまり悪い
		4	黄	10Y 3/2	無機砂混じりシルト	しまりやや悪い
		5	黄	2.5Y 5/4	無機砂混じりシルト	径3mm未溝の纏少量入る
柱穴列8	286柱穴	1	オリーブ黒	10Y 3/2	無機砂混じりシルト	径3mm未溝の纏少量入る
		2	オリーブ黒	2.5Y 5/4	無機砂混じりシルト	しまりやや悪い
		3	黒	2.5Y 5/4	無機砂混じりシルト	径3mm未溝の纏少量入る
		4	黒	2.5Y 5/2	無機砂混じりシルト	径3mm未溝の纏少量入る
柱穴列9	287柱穴	1	オリーブ黒	10Y 3/2	無機砂混じりシルト	径3mm未溝の纏少量入る
		2	黄	2.5Y 5/4	無機砂混じりシルト	径3mm未溝の纏少量入る 炭化物含む しまり悪い
		3	オリーブ黒	7.5Y 3/2	無機砂混じりシルト	しまり悪い
		4	角灰 黄	2.5Y 5/2	無機砂混じり細粒砂	1に似るがそれより粒粗めの含有量高い
柱穴列9	283・284柱穴	5	黄	2.5Y 4/1	無機砂混じり細粒砂	径2mm以上の花崗岩碎合む
		6	黄	10Y 4/1	無機砂混じり細粒砂	地山の花崗岩バイナ土に似るが、それより粘性あり
		7	暗灰 黄	2.5Y 4/2	無機砂混じり中粒砂	
		8	暗灰 黄	2.5Y 4/3	無機砂混じり中粒砂-粗粒砂	3に似るが、それより粘性強い
柱穴列10	132・133柱穴	1	にじい 黄黒	10Y 4/3	無機砂混じり中-粗粒砂	
		2	灰	10Y R 4/2	無機砂混じり中-粗粒砂	
		3	褐灰	10Y R 4/1	無機砂混じり中-粗粒砂	
		4	黒	2.5Y 3/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
柱穴列11	104・105柱穴	12	黒	10Y R 3/1	無機砂混じり細粒砂	
		13	黒	2.5Y 3/1	無機砂混じり細粒砂	
		1	にじい 黄黒	10Y R 4/3	無機砂混じり中-粗粒砂	12に似るがそれより粘性低い
		2	灰 黄	10Y R 4/2	無機砂混じり中-粗粒砂	
柱穴列11	135柱穴	3	褐灰	10Y R 4/1	無機砂混じり中-粗粒砂	
		4	黒	10Y R 4/1	無機砂混じり中-粗粒砂	
		5	黒	2.5Y 3/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
		6	黒	2.5Y 3/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
柱穴列12	129・130・131柱穴	7	精灰 黃	10Y R 4/2	中-粗粒砂混じり細粒砂	径3mm以上の粒入る
		8	灰	10Y R 4/2	中-粗粒砂混じり細粒砂	径2mm以上の粒入る
		9	黄	2.5Y 4/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	地山の粗粒ブロック入る
		10	精灰 黄	2.5Y 4/2	中-粗粒砂混じり細粒砂	地山の粗粒ブロック入る
柱穴列12・13	52・66柱穴	11	灰	10Y R 4/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	地山の粗粒層
		12	灰	2.5Y 4/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	5mm以下の纏入る
		13	黒	2.5Y 3/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
		14	黒	2.5Y 3/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
柱穴列12	46柱穴	1	オリーブ黒	5Y 3/1	無機砂混じり細粒砂	
		2	灰	5Y 4/1	無機砂混じり細粒砂	
		3	黄	2.5Y 4/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	2に似るがそれより粘性あり
		4	精灰 黄	2.5Y 4/2	中-粗粒砂混じり細粒砂	
柱穴列13・14	51・53・54・64・65柱穴	5	灰	5Y 4/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
		6	黒	5Y 3/1	無機砂混じり細粒砂	
		7	黒	5Y 4/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
		8	黒	5Y 5/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
柱穴列13・14	柱穴	9	黒	5Y 5/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
		10	灰	5Y 6/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
		11	灰	5Y 6/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
		12	灰オリーブ	5Y 5/2	中-粗粒砂混じり細粒砂	
柱穴列13・14	柱穴	13	灰	5Y 5/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
		14	灰	5Y 4/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	
		15	黒	2.5Y 3/1	中-粗粒砂混じり細粒砂	

表3-1 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層名	種別 器種	口径 基高	その他の法量	色調 胎土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
1 12壁穴住居	須恵器	—	12.0	内: 7.5Y7/1灰白 外: 7.5Y7/1灰白 断: 7.5Y7/1灰白 胎土: 粘密 焼成: ややあまい	受部は右から左に向かって弧を描いて張り出し、端部は丸みを帯びる。立ち上がりは短い内傾し、口縁端部はやや丸く、断面は少しきずがあるが残存部分は内外両とも回転ナデで調整する。	10%	口縁部の焼成部分が低いため、立上がりは短い。内側には断面が含まれる可能性あり、最大で14cmまで。	
2 12壁穴住居	土師器	—	14.4	腹部径13.2	内: 10Y8/2灰黄褐色 外: 7.5Y8/3にじいろ褐・裏面部分 断: 7.5Y4/2灰褐色 胎土: 粘密 焼成: 良好	口縁部は内外面ともコロナデ。口縁端部はつまみ上げ、丸く立ち上がる。全体外表面は摩耗しており、調整痕は明瞭でないが、ナデとみられる。全体内面は強いけがなコナデ。	30%	腹部径の復元値から口縁径をもとめた。
3 12壁穴住居	土師器	—	13.0	内: SYR8/3にいぶし緑、5/2灰褐色 外: SYR8/4にいぶし緑、4/1褐灰色 断: SYR8/3にいぶし緑 胎土: 粘密 焼成: 良好	口縁部は内外面ともコロナデ。口縁端部はつまみ上げ、丸く立ち上がる。全体外表面は摩耗しており、ミエラスの調整痕のみある。全体内面は直一削型に於て半年度の接合痕が複数、ミエラスの調整タブリズを施したと見られるが、摩耗により調整痕は不明瞭。	口縁部40%	内外面にもうつらと保付着。	
4 12壁穴住居	須恵器	—	21.2	腹部径17.5 裏 (4.8)	内: SY8/4灰オリーブ 外: SPB8/1青灰 断: NS/灰 胎土: 程0.5mm以下の長石含む 焼成: 良好	口縁部は外側して立ち上がる。口縁部下方に肥厚させ、面を成す。残存する口縁部の調整は、内外面とも回転ナデで、内面には多量自然粘土が含められ、外側の屈曲部分にもわずかに擦がかる。	10%以下	
5 298ピット・ (柱穴判別)	須恵器	—	—	輪廓部: 2.5Y5/1緑オリーブ灰 無輪廓部: 10Y5/1灰 断面: 2.5Y5/2灰黄褐色 胎度: 程1mm以下の長石含む(わざかに程3mmの大ものも入る) 焼成: 良好	薄い胎土板を折り曲げて組み立てて把手とし、その後に嵌入文を施す。上方に自然粘土があり、わずかにこぼれられた表面にはワタ灰の跡の被覆が付着する。底面部は左回りの初期タブリズが施され、それ以外は回転ナデが施される。	輪郭部15%	輪郭部に施してあるくろいの跡がある部分があたため、棒の復元最大径は、19cmを下す可能性あり。	
6 (25)柱穴 (避窓3)	土師器	—	—	SYH8/6横 斜か? (2.9)	口縁部はやや内凹しつつ外方に立ち上がり、端部は丸く立ち上がる。全体内面から口縁部の外表面はコロナデ。底部内面はナデを施す。全体外表面はナデとならぶが、摩耗の調節により調整済は不明瞭である。	破片	口縁部の残存部分がわざかたため、器形の類似は推定による。	
7 12柱穴(建 物3)	須恵器	—	—	腹部10.0 高杯 (2.8)	側面部はやや外反気泡に凸になり、側面部に凹凸した溝をする。底部の外表面に浅い凹線が3条ある。被覆部は内側する調節を呈する。内外両とも回転ナデで仕上げる。	10%		
8 109柱穴 (建物10)	須恵器	—	—	腹部高1.7 杯蓋 (2.4)	模様部は一筋の網目にて置き継ぎを行っており、縦5cm。口縁部はやや深く、内側に段丘を有している。欠損している天井部を除くと、回転ナデで仕上げる。	破片	口縁部の残存率が低いため(1.85%)口様は特定できないが、おもそく10-12cmの中に含まれるとされる。	
9 37柱穴(建 物13)	須恵器	—	—	内: NB/灰 外: NG/灰 断: NB/灰 胎土: 粘密 焼成: 良好	底部は欠損するが、体部外表面下部に回転ヘラクシリの痕迹が若干認める。それ以上の部分は回転ナデで仕上げる。受部はほぼ水平で端部はやや脱離する。やや外反気泡に口縁部が立ち上がる。	10%	口縁部の残存部分がわざかたため、口様は特定できない。	
10 15溝	須恵器	—	13.7	内: NB/灰 外: NG/灰 断: NB/灰 胎土: 粘密 焼成: 良好	平均天井部三分割外表面に右回転ヘラクシリの施された後、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。天井部と体部の縫には必ずしも接觸が認められるのである。口縁部内面にはやや回面を呈し、口縁端部はやや脱離する。	25%		
11 15溝	須恵器	—	13.6	NB/灰 杯蓋 (3.5)	天井部はほぼ欠損するが、やや丸みを帯びる形状だったところから、右回転のへつ切痕、無調整だったことが伺える。接觸部になく、天井部と体部の縫にむずかしい絞りが施されるのである。口縁部内面には回面を作りながら、縫部に丸みを持たせる。底部外表面は回転ナデで仕上げている。	10%	口縁部の残存部分がわざかたため、復元口様には誤差を含む可能性あり。	
12 15溝	土師器	—	14.8	内: 10Y8/2にいぶし黄緑、4/2灰黄褐色 外: 10Y8/2灰黄褐色、7/2にいぶし黄緑 断: 10Y8/2にいぶし黄緑 胎土: 粘密 焼成: 良好	口縁部内面には楕円形のハケ。体部外表面には範囲が広いタブリズを施す。全体内面はタブリズ、口縁部から体部上端にかけてはコロナデを施す。口縁端部はわずかにつまみ上げ、丸く仕上げる。	口縁部25%	内面全体にうつらと保付着	
13 15溝	土師器	—	13.7	内: 7.5Y8/3にいぶし橙 外: 10Y8/2淡黄褐色 断: 2.5Y8/2灰黄褐色 胎土: 粘密 焼成: ややあまい	胎部の上半のみ残存する。体部外表面に手がけた壓力の向かう側面が残る。口縁部附近と体部内面にはナデ調整を施すとみられるが、胎部のため調整痕は不明瞭である。	口縁部25%		

単位: cm ( ) : 残存値 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-2 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層名	種別 名様	口径 高さ	その他の法量	色調 地土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
14	15層	土器器	5.5	内: 10YR7/3にない黄橙 外: 10YR7/2にない黄橙 断: 10YR7/2にない黄橙	底面内面と体部外面にコピオサエの筋縫が複数。成形後はナデで仕上げたとみられる。	50%	口縁部の右部分 にカキモチがあるか、 腹元口部には圓 窓を含む可能性あ り。レニアード	
		鉢	3.7					
				胎土: 繊密、径2mm以下の白砂粒と、若干の赤色粒を含む 焼成: やや低い				
15	15層	土器器	13.4	内: 10YR4/1灰褐色 外: 10YR8/1~2灰白4/2灰黄褐色 断: 10YR8/1灰白 胎土: 繊密 焼成: 良好	口縁部外面には横方向のハケ調整、体部外面には縦方向のハケ調整が施される。体部内面はヘラグズ リ、口縁部外面はコナデで仕上げる。体部下半部 および底部は欠損する。	口縁部10%		
		甕(年差林 か?)	(9.9)					
16	20薄	須恵器	13.6	内: NL/灰 外: NL/灰 断: NL/灰	天井部はゆるやかな丸みを帯びるが、面部は平坦に 仕上げる。天井部上半部は右回りの回転ヘラグズリが 施されるが、それ以外の部分は回転ナゲで仕上げ る。縫縫は体部側面に沈雑な凹のくぼみを作ることによ て形成されている。縫縫は丸みを帯びる。口縁部内面 にやや外側傾けるゆるやかな凹面が作成される。	40%		
		杯盤	4.75					
				胎土: 繊密 焼成: 良好				
17	20薄	須恵器	14.2	内: NL/灰 外: NL/灰 断: NL/灰	天井部と底部との間に浅い凹面をめぐせることによ り、かくもて焼成を示している。天井部は輪轉ナゲで 仕上げる。天井部上半部は左回りの回転ヘラグズリが 施されるが、それ以外の部分は回転ナゲで仕上げる。 縫縫は口縁部側面に沈雑な凹のくぼみを作ることによ て形成されている。縫縫は丸みを帯びる。天井部内面 にやや外側傾けるゆるやかな凹面が作成される。	40%		
		杯盤	3.8					
				胎土: 繊密、墨色粒若干含む 焼成: 良好				
18	20薄	須恵器	13.8	内: NL/灰 外: NL/灰 断: NL/灰	体部側面をわざわざに押し下げるこにこにより、かくもて焼 成を表現している。天井部は全体に丸みをおり、左 回りの回転ヘラグズリを施す。それ以外の部分は回転 ナゲで仕上げる。口縁部はやや反張気味で、内面 に級々に段をつくるため、やや脱型印象。天井部に 複数のくぼみが現れている。	40%		
		杯盤	5.0					
				胎土: 繊密、黒色粒若干含む 焼成: 良好				
19	20薄	須恵器	—	内: NL/灰 外: NL/灰 断: NL/灰	体部側面に段を造ることで、何とか縫縫を表現している。 天井部上半部は左回りの回転ヘラグズリを施す。それ以外の部分は回転ナゲで 仕上げている。口縁部は円錐状で作り出す。口縁部は 丸くおさめる。	焼片	口縁部の残存率 が低いため、口縁 は特定できない	
		杯盤	(3.5)					
20	20薄	須恵器	14.0	内: NL/灰 外: NL/灰 断: NL/灰	受部をやや上方に加熱して作成される。立ち上がりや や内傾気味で、口縁部で直立する。口縁部前面に一隻 の回遊魚がある。体部下半部に右回りの回転ヘラグズリが 施される。それ以外の部分は回転ナゲで仕上げる。 燒成: 良好	30%		
		杯舟	(4.8)					
				胎土: 繊密、墨色粒若干含む 焼成: 良好				
21	20薄	須恵器	12.3	内: NL/灰 外: NL/灰 断: NL/灰	底部には右回りの回転ヘラグズリが施されるが、底部 中央部はヘラグズリの際にくぼみが生じた部分があり、そ こにはヘケグズリが達していない。それ以外の部分は回 転ナゲで仕上げている。受部は左向きに傾いており だれでてあり、縫縫は丸みを帯びる。立ち上がりや内傾 気味で、口縁部は丸みを帯びる。底部に工具があ たてて生れた跡がある	60%		
		杯舟	4.5					
				胎土: やや粗、径2mm以下の長石を含む 焼成: 良好				
22	20薄	須恵器	7.0	頭部径8.3 後端 25.5	SPB8/1/青灰 頭部最大径21.4 断: 2.5%+堆灰	体部は口縁部と頭の接点がないため、器高は推定 である。カキモチを施した面を裏、その反対側を正面とす ると、B面にはオサツの、ナゲ調節が施される。側 面は左回りの回転ヘラグズリで仕上げる。C面は右回 りの回転ヘラグズリで仕上げる。D面は左回りの回 転ヘラグズリで仕上げる。E面は右回りの回転ヘラ グズリで仕上げる。F面は左回りの回転ヘラグズリで 仕上げる。G面は右回りの回転ヘラグズリで仕上げ る。H面は左回りの回転ヘラグズリで仕上げる。I面は右 回りの回転ヘラグズリで仕上げる。J面は左回りの回 転ヘラグズリで仕上げる。K面は右回りの回転ヘラ グズリで仕上げる。L面は左回りの回転ヘラグズリで 仕上げる。M面は右回りの回転ヘラグズリで仕上げ る。N面は左回りの回転ヘラグズリで仕上げる。O面は右 回りの回転ヘラグズリで仕上げる。P面は左回りの回 転ヘラグズリで仕上げる。Q面は右回りの回転ヘラ グズリで仕上げる。R面は左回りの回転ヘラグズリで 仕上げる。S面は右回りの回転ヘラグズリで仕上げ る。T面は左回りの回転ヘラグズリで仕上げる。U面は右 回りの回転ヘラグズリで仕上げる。V面は左回りの回 転ヘラグズリで仕上げる。W面は右回りの回転ヘラ グズリで仕上げる。X面は左回りの回転ヘラグズリで 仕上げる。Y面は右回りの回転ヘラグズリで仕上げ る。Z面は左回りの回転ヘラグズリで仕上げる。	60%	
				胎土: 繊密、1mm以下の白砂粒と、若干の小礫(径2mm以下)を含む 焼成: 良好				
23	20薄	土製品	/	残存長6.2 / 新面発大型1.8	7.5YR8/3/淡黄橙 胎土: 径1mm以下の石英、長石、チャートを含む(チャートは微量) 焼成: 良好	円柱状で、両端は削割する。きのの細かい粒土を使 用し、表面は長輪方(円柱)に單になめて仕上げる。	焼片	
24	20薄	礫石器か?	/	最大長6.8 / 最大幅6.0		折削しており、加工痕や使用痕は認められない。里側 な右柱で、全体的に丸みを有すため、川原の砾石を 意図的に持ち込んだものと見られる。	石材: 右側	
25	21薄-22井戸	須恵器	13.3	内: 5RP1/1明葉灰 外: 10YR8/1褐灰	全体に丸みを帯びた形狀となりふれる。縫縫は天井部 の下端と底部の上端に回転状のくぼみをめぐらせて 凸巻状の張り出しが作り出すことによって表現している。 天井部外面には右回りの回転ヘラグズリを施す。 それ以外の部分は回転ナゲで仕上げる。内面の口縁 部付近に回転が目立つ。口縁部外面に刻み日状 調節痕がある。	30%		
		杯盤	(3.3)					
				胎土: 径0.5mm以下の長石含む 焼成: 良好				

単位: cm ( ) : 残存値 - : 計測不可能 ✓: 計測項目無

表3-3 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土場 名、 標名	種別	口径 基高	その他の法量	色調 胎土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
26	21漢・22井戸	須恵器 杯身	12.8 4.0	内: N6/灰 外: 5Y7/1灰白 胎土: 径1mmの長石、長石を含む 焼成: 良好	受部にはぼつこで堆積は丸みを帯びる。立ち上りは外側に傾斜がある。底部はやや丸みを帯びて片状である。底部外表面は右側の回転ヘラケズ、底部内面は一定方向のナダ。それ以外の部分は回転ナダで仕上げる。	30%		
27	21漢・22井戸	須恵器 杯身	12.7 3.8	内: 2.5Y7/1灰白 外: 5Y7/1灰白 胎土: 径1mmの長石、黒色粒を含む 焼成: ややあまい	扁平な底面から外側に向直線的に立ち上がる形状である。受部は左側に水平に伸び、堆積をよくおめる。立ち上りは短く内側にし、口縁部を丸くおさめる。底部は右側の回転ヘラケズで、それ以外の部分は回転ナダで仕上げる。	90%		
28	21漢	須恵器 杯蓋	14.0 (2.7)	内: N6/灰 外: N4/灰 胎土: 径1mm以下の石英若干含む 焼成: 良好	体部をわざかに内側に下げるににより、からうじて梗部が現れる。外側に傾斜がある。底部は丸みを帯びて片状である。底部外表面は右側の回転ヘラケズ、それ以外の部分は回転ナダで仕上げる。	40%		
29	21漢	須恵器 杯身	12.3 4.7	2.5Y7/1灰白 胎土: 径1mm以下の長石若干含む 焼成: あまい	受部はほぼ水平で堆積は丸みを帯びる。内側下子に立ち上りが有り、口縁部は左側にわずかに外反する。口縁部は丸みを帯びて片状である。底部は丸みを帯びて片状である。底部外表面は右側の回転ヘラケズ、それ以外の部分は回転ナダで仕上げる。	20%		
30	21漢	須恵器	11.8 (3.6)	2.5Y7/1灰白 胎土: 径1mmの大石英と黒粒含む 焼成: ややあまい	受部は左側に傾き加藤で形成し、底部は丸い。内側下子に立ち上りが有り、口縁部は丸みを帯びて片状である。底部は丸みを帯びて片状である。底部外表面は右側の回転ヘラケズで、それ以外の部分は回転ナダで仕上げる。	15%		
31	21漢	須恵器 杯蓋	13.5 (2.7)	内: N6/灰 外: N4/灰 胎土: 粘土 焼成: 良好	天井部と全体の境をわざかに肥厚させて籠めさせるににより、からうじて梗部を表現している。口縁部はやや外反させて堆積を丸くおめる。弁門部はほほん張り出るが、残存部は回転ナダで仕上げる。	口縫部20%		
32	21漢	須恵器 杯蓋	15.0 (3.4)	内: N6/灰 外: N5/灰 胎土: 径1mmの長石含む 焼成: 良好	天井部はほほん張り出るが、丸みを帯びて片状となる。天井部と全体の境をわざかに肥厚させて籠めさせることにより、からうじて梗部を表現している。口縁部はやや外反させて堆積を丸くおせる。底部外表面は右側の回転ヘラケズで、それ以外の部分は回転ナダで仕上げる。	口縫部10%		
33	21漢	須恵器	14.4	N6/灰 杯身 (3.9)	半円形に立ち上りをせて体部が立ち上る形状である。受部は断面円筒形の突起部の削除して表現される。立ち上りが右側に立立体感でなく、口縁部は丸みを帯びるが、薄くてやや立著な印象をもたらす。底部外表面は右側の回転ヘラケズで、それ以外の部分は回転ナダで仕上げる。	口縫部12%		
34	21漢	須恵器	12.8 (3.8)	N6/灰 胎土: 径0.5mmの長石、石英含む 焼成: 良好	底部は口縁部を押すが、丸みを帯びて片状となる。底部外表面の突起部の削除して表現される。内側下子に立ち上りが有り、内側に凹む。口縁部は丸みを帯びて片状であるが、薄くてやや立著な印象をもたらす。底部外表面は右側の回転ヘラケズで、それ以外の部分は回転ナダで仕上げる。	口縫部25%		
35	21漢	土師器	13.5 (5.0)	内: 10YR7/3にぶい黄橙 外: 2.5Y7/2浅黄 胎土: 径1mm以下の長石、石英含む 雲母もわずかに含む 焼成: 良好	口縁部はまぐらまぐらめで丸くおさめる。内側下子に立ち上りが有り、体部上半部分は外縁部に近づく。底部外表面は横方向に網からへき。その後に粗いへきで調整する。	口縫部12%		
36	21漢	須恵器 杯身	13.7 (3.0)	内: 2.5Y7/1橘灰 外: 10YR7/4橘灰 胎土: 粘土 焼成: 良好	底部は丸く丸められて丸くおさめる。内側下子に立ち上りが有り、受部端部はやや丸くおさめる。立ち上りは直立気味で、底部端部を丸くおさめる。残存部分は回転ナダで仕上げる。	20%	口縫部の残存率が低いため、口径には焼成が含まれる可能性がある。	
37	21漢	土師器	17.0 (5.4)	5YR4/6深褐 胎土: 径1mmの長石、石英若干含む 焼成: 良好	口縁部はわざかにまぐらめで丸くおさめる。体部は横方向へのケズ調整、口縁部は外表面にもヨロナグで仕上げる。口縁部内部はナダ調整の際に横方向へのケズ調整を施す。体部内面は摩擦によく調整能性は認められる。	10%		
38	21漢	土師器 便	- (4.6)	内: 7.5YR8/4にぶい褐 外: 7.5YR8/0褐色 胎土: 粘土 焼成: 良好	口縁部はまぐらめで丸くおさめる。体部内面はナダ、外表面は横方向へのケズ調整、口縁部は内面にもヨロナグで仕上げる。	鋼部90%	体部外表面下半部、全体的にまぐらめが付着する。	
39	21漢	土師器	13.0	10YR8/3～8/4浅黄橙 10YR4/1褐色 便 (9.4)	体部外表面に土上部の接着痕が残る。体部内面と外面上にはナダ調整で仕上げる。体部外表面下子はヘア調整の後、ケズを除し、その後ヘア調整を行なう。体部外表面はまぐらめで丸くおさめるが、少し凹んでいて(径～3cmと径0.5～1cm)。体部外表面下半部を中間に押円溝を削除する。			

単位: cm ( ) : 残存率 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-4 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層名	種別 容積	口径 高さ	その他の法量	色調 土色 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
40	21漢	須恵器	13.8	内: N7/灰白	半透明な底部から上部へ直線的に体部が立ち上がる。受部は上部に加減して横方向に伸び、のち上部から内側へ縮む。全体的に器腹は薄く、受部・口縁部は厚く、それがもとでくびれがある。表面の印象を受ける。底部は一厚脚で、円を描くような、程度の左回りの回転の手法を施す。それ以外は回転の手法で仕上げる。	35%		
		杯身	3.9	外: N6/灰 N3/暗灰				
				焼土: 程1~2mmの長石多く含む				
				燒成: 良好				
41	21漢	土師器	19.8	内: 10YR7/3に近い黄橙	口縁部は丸くおさめる。体部外面に縱方向のハケ調節を施した後、口縁部内外面にココナラ手法を施す。体部内面はヨコナラ手法で仕上げる。	口縁部20%	外周部は全体に、少しずらと縦が付着	
		壺	(5.0)	外: 10YR7/3に近い黄橙 7SYR4/3底				
				胎土: 程1.5mmの長石。石英若干含む				
				燒成: 良好				
42	21漢	須恵器	13.6	内: 10YR7/1灰白	杯底に全体に丸みを帯びる盛部で、受部は水平で器部を丸くおさめる。内部する器の輪郭の立ち上がりで、口縁部は丸くおさめる。底部外面は左回りの回転の手法で、それがもとでくびれがある。口縁部内外面にはヨコナラ手法で仕上げる。	杯底70%		
		高杯	(6.0)	外: N6/灰				
				胎土: 程1~2mmの長石、石英含む				
				燒成: 良好				
43	21漢	須恵器	6.2	底部最大径21.3	口縁部に丸みを帯びる盛部で、受部は水平で器部を丸くおさめる。内部する器の輪郭の立ち上がりで、口縁部は丸くおさめる。底部外面は左回りの回転の手法で、それがもとでくびれがある。口縁部内外面にはヨコナラ手法で仕上げる。	100%	全体に縦感が感じられる。特に中央部分では縦感に上りかかっている。	
		杯底	23.8	胎土: 密				
				燒成: ややあまい				
44	22井戸	須恵器	13.6	内: N5/灰	口縁部に丸みを帯びる盛部で、受部は水平で器部を丸くおさめる。内部する器の輪郭の立ち上がりで、口縁部は丸くおさめる。底部外面は左回りの回転の手法で、それがもとでくびれがある。口縁部内外面にはヨコナラ手法で施す。その対面側の面にはキリ調節を施すが、擦痕が刻んで、中央部ではほんのりカキ氷が消えている。口縁部内外面にはヨコナラ手法で施すが、斜面に粒状の粘土で埋められた痕が現れる。	100%		
		杯底	3.35	外: N4/灰 断: 中心部7SYR5/2底幅 口縁部N7/1 胎土: 灰白				
				胎土: 粘土・程0.5~1mmの大長石、石英程微量含む				
				燒成: 良好				
45	22井戸	須恵器	13.9	内: N5/灰	半透明な丸井部分外面に左回りの回転の手法で、口縁部は丸くおさめる。内部する器の輪郭の立ち上がりで、口縁部は丸くおさめる。底部外面は左回りの回転の手法で、それがもとでくびれがある。口縁部内外面にはヨコナラ手法で施す。その対面側の面にはキリ調節を施すが、擦痕が刻んで、中央部ではほんのりカキ氷が消えている。口縁部内外面にはヨコナラ手法で施すが、斜面に粒状の粘土で埋められた痕が現れる。	100%		
		杯身	4.1	外: 50S/1青灰				
				胎土: 粘土・程5mmの大チャート、程0.5mm~1mmの大長石、石英程微量含む、程1mm以下の白砂粉含む				
				燒成: 良好				
46	22井戸	須恵器	15.0	外: N5/灰 10BS/1青灰	底部から受部への立ち上がりは直線的で、頂高が低いところ、全体として平たい印象を受ける。受部は水平方に丸く伸び、端部は丸くおさめる。口縁部は内側にてて倒立柱があり、端部附近で内凹や外反する。底部外面は右回りの回転の手法で、それがもとでくびれがある。口縁部内外面にはヨコナラ手法で施すが、それがもとで底部にヨコナラ手法で仕上げる。口縁部内外面にはヨコナラ手法で仕上げる。	30%		
		杯底	(3.7)	断: 10YR6/4黄橙				
				胎土: 粘土・程4mm以下の長石と、0.5mmの大長石含む				
				燒成: 良好				
47	22井戸	土師器	13.2	内: 10YR6/4に近い黄橙	口縁部はかるくつまみあげて丸くおさめる。口縁部は横方向に横方向のハケ調節、体部外面には縦方向のハケ調節を施す。口縁部外面はヨコオサエの後、強引なヨコナラ手法で仕上げる。口縁部内面はヨコナラ手法で仕上げる。	30%	外周部は全体的に縦感を付着する。	
		壺	(10.5)	外: 10YR6/3に近い黄橙 断: 10YR6/4黄橙				
				胎土: 程1mm以下の長石、石英含む。胎土と母材を含む。燒成: 良好				
48	22井戸	土師器	11.8	内: 5SYR/8橙	外表面はヨコオサエの後、ヨコナラ手法で仕上げており、らんせんに前立柱の底板が残る。体部内面には縦方向にハケ調節を施す。口縁部外面はヨコオサエの後、強引なヨコナラ手法で仕上げる。	100%		
		瓶	4.4	外: SYR/8/2橙~10YR8/2灰白				
				胎土: やや粘・程0.5~1mmの大長石、石英程微量含む				
				燒成: ややあまい				
49	22井戸	土師器	12.3	内: 2SYR/3に近い黄	体部外面はヨコオサエの後、ヨコナラ手法で仕上げし、粘土の結合板を残る。体部外面は縦方向のハケ調節を施すが、所々板状工具の跡が、表面を削りこいでいる。	100%		
		瓶	5.2	外: 2SYR/3底				
				胎土: やや粘・程0.5~1mmの大長石、石英、程0.5mmの赤色粒子微量含む。胎土混じる。				
				燒成: 良好				
50	22井戸	須恵器	—	2SYR/2焼灰黒	外表面は縦方向のハケ調節を施すが、底部のみ部分的なヨコナラ手法を施す。受部は丸くおさめる。内面には縦方向のハケ調節を施す。ハケがまばらな場合、内面には縦方向のハケ調節を施す。底部とその付け根のみ、ハケの様子を監視する。底部と体部の境には粘土のつなぎ目が若干残る。	40%	内・外ともに全般的に少しづらと縦が付着している。	
		平底鉢	(9.5)	胎土: 程1mm以下の長石、石英と若干の雲母を含む。				
				燒成: 良好				
51	32漢	須恵器	15.6	内: 2SYR/1灰白	天井部は縦やくみをもおせる。底部は縦に回転を「一条めぐらせること」からうつて縦感を表現する。天井部外面には左回りの回転の手法で、内面には一定方向のヨコナラ手法を施す。それ以外の部分はヨコナラ手法で仕上げる。天井部内面には部分的なヨコナラ手法で仕上げる。天井部内面にはヨコナラ手法で、縦感は丸くおさめる。	20%		
		杯底	4.3	外: 2SYR/1青灰 断: 2SYR/1~5/1青灰				
				胎土: 密				
				燒成: ややあまい				

単位(cm)( ):残存値 - :計測不可能 ✓:計測項目無

表3-5 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層名	種別 器種	口径 基高	その他の法量	色模 胎土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
52	32層	土師器	14.2		内: 10YR7/2にじる黄裡 外: 10YR7/2にじる黄裡 断: 10R4/2灰赤 胎土: 良好・径1mm以下の長石と、わずかに赤色を含む。 焼成: ややまろい	口縁端部はくびかにつまみ出で丸くおさめる。口縁部は外側にも凹コナチを施す。体部外面は前方に向かって調整を施す。内面には器型の歓楽により、調節は不明である。	10%	
53	29-30層	須恵器	11.3	輪部径5.9	内: SPB4/1暗青灰 7.5RS/2灰赤 外: N6/灰 断: N6/灰 胎土: 良好 焼成: 良好	口縁端部のみが残存する。外反して開口し、口縁部ではやや上へ傾斜する。口縁端部は内面にする所をもつて、口縁部と口部の接合は、角付いたにあって口縁部がゆがむ。口縁部には柔軟な状況が施される。	口縁部70%	
54	29-30層	須恵器	—	杯身	(3.8)	焼成は体部側に凹陥部のあるぼみを備えることとなり、かくらいて表記される。口縁端部は内面にする所をもつて、内面側の面を下り、端部は丸くおさめる。	破片	口縁部は、口縁端部の頂点が折れていたが特定できなかったが、14.0~16.0cmの中に含まれる。
55	29-30層	須恵器	13.3	杯身	(4.4)	底面は丸く盛るが、全体に丸みを帯びる形状だったらしい。端部にはしばり水印に近い伸び、端部が大きい。立ち上がりがわずかに内側になら直線的に伸び、口縁端部は丸くおさめる。残存部は回転ナデで仕上げる。	口縁部35%	
56	29-30層	須恵器	13.6	杯身	4.8	半円的な底部の外側には右出のねじ跡ヘラケツリを施し、それが外側の部分は回転ナデで仕上げる。内面は上向き加減にいくぶん伸び、端部は丸くおさめる。立ち上がりは長く、口縁部は丸くおさめる。底～体部は長いと、赤色粒、赤色粒を含む	50%	
57	29-30層	須恵器	12.4	杯身	3.6	底面は丸みを帯びるが、高さは低いため全体としては半円的印象を受ける器形である。受部は水平で端部は丸く盛る。立ち上げは長いやや直立で、口縁端部は丸くおさめる。底部は丸切りの前輪ヘラケツリで、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。底部内面にあて具痕が認められる。	20%	
58	29-30層	須恵器	12.0	杯身	(3.3)	受部は上方に向かって短く傾け出し、端部は丸く盛る。立ち上げはやや長く、ほぼ直立し、口縁端部は丸くおさめる。残存部分は回転ナデで仕上げる。立ち上りの粗曲面部内面に、当て具痕がわずかに残存する。	口縁部20%	
59	29-30層	須恵器	13.4	杯身	(4.2)	底面は丸く盛るが、やや丸みを帯びる形状だったと思われる。受部は水平で端部は丸く盛る。立ち上げはやや長く、中段では若干外反して直立する。端部外側には右出のねじ跡ヘラケツリ、それ以外の部分は丸切りヘラケツリの痕跡があり、それ以外は回転ナデで仕上げる。	30%程度	復元口径には既存の含まれる可能性あり(口径は火炎、胎土から逆差しで測りました)
60	29-30層	須恵器	11.7	杯身	(3.8)	受部はやや上向き加減にいくぶんの出し、端部は丸く盛る。立ち上げは直立で、口縁端部は丸くおさめる。底部外側には丸切りの前輪ヘラケツリで、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。	口縁部10%	
61	29-30-127 溝	須恵器	14.8	杯身	(3.5)	丸昇端部は丸く盛るが、丸みを帯びる形状だったらしい。端部は、器型をもととする部でせり、体部側にいくぶん形状の凹みを作り出す事で「みじ」と表現される。口縁端部はわざかに内反させ、内面にゆるやかな段を作りだす。残存部分は回転ナデで仕上げる。	15%	
62	29-30-127 溝	須恵器	16.1	杯身	4.0	天井部は平で、継縫は体部側をやや押しつけて下げるとして、かくらいて表現される。口縁端部はわざかに外反させ、内面にゆるやかに段を作りだす。天井部外側は右出のねじ跡ヘラケツリで、それ以外は回転ナデで仕上げる。やや傾けている。	20%	
63	29-30-127 溝	須恵器	13.9	杯身	(5.2)	底面はやや丸く、体部の立ち上がり丸みをおさめる。受部は上向き加減にいくぶん出た、端部は丸くおさめる。立ち上げは口縁端部ではわずかに外反、つぶれ感。口縁端部は丸く盛る。底部外側は左出のねじ跡ヘラケツリで、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。底部端部外側に自然剥離がある。	20%	
64	29-30-127 溝	須恵器	—	杯身	(3.2)	底面は丸く盛るが、おそらくやや平たい形状のものと考えられる。器型は薄く、審美的な印象を受ける。直線的のび伸び部と一体化するように、やや下方に伸びる部は、端部は丸く盛るが、やや傾く。立ち上りは直立、中段で内反させつつやや内傾する。口縁端部は丸く盛る。底部外側は右出のねじ跡ヘラケツリ、それ以外は回転ナデで仕上げる。	15%	綻片であり、やがて丸く盛るため、口縁には残部が含まれる可能性が大きい。おそらくD12.1~16.0cmの間に含まれる。

単位: cm ( ) : 残存率 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-6 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層名	種別 容器	口径 直径	高さ 厚さ	その他の法量	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
						赤土 焼成			
65 29-30層 溝	須恵器 杯	—	内: N5/灰 外: N7/灰白 断: 6.7/灰 胎土: 緩密 焼成: 良好	内: 7.5YR5/1褐色 外: N4/灰 断: N6/灰 胎土: 密緻、径1mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好	底面は灰焼成で、おそらくその半分は赤土焼成のものと 考えられる。受部は赤土焼成で削り出し、周縁部をよくくさ らし、立ち上がりは高く、外反しが成立する。受部 と立ち上げの接し面に凹凸めぐらせて区別をつけてい る。残存部分は回転ナデで仕上げる。	破片	破片のみ、口縁 に凹凸が含まれる		
66 29-30層 須恵器 盤	—	粗解剖24 杯身 (9.8)	内: 7.5YR5/1褐色 外: N5/灰 断: 7.5YR5/1灰白 胎土: 密緻、径1mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好	外縁部に凹凸を用いて凸縁を表現し、その間に3 条の波状文を施す。またそれらの段に之内2条の 波状文を重ねて施設する。内面にはビロサエの剥離 が見られるが、最終的には回転ナデで仕上げる。	10%				
67 29層 須恵器 杯身	14.0 (3.5)	—	内: N5/灰 外: N5/灰 断: 7.5YR5/1灰白 胎土: 黒色粒と若干含む 焼成: 良好	全体に修理が薄く、草書体の印加受け。受部は上 方に削り出し端はやや低い、立ち上がりはやや長く、 基部附近で外反しつつ、基部気味で壊部はあくおき める。残存部分は回転ナデで仕上げる。	20%				
68 29層 須恵器 盤	19.8 (6.3)	—	内: 7.5YR5/2灰褐色 外: 2.5YR1/1灰白 断: N7/灰白(10YR7/4)に近い黄褐色 胎土: 赤色粒と白砂粒を含む 焼成: ややあまい	口縁部は直線的に外反させる。口縁端部は下端に粘 土を多く含むが、またその上部にはややつま みがある。全体は手平打で削り出された、かくしメ モ調整を行なう。全体の内面に同心円形の目皿模様が残る。	20%	口縁部の残存率 が極めて低いため、既存の頃は 修理を含む			
69 29層 須恵器 盤	15.3 (5.5)	—	内: 9YR7/1灰白 外: 7.5YR7/1灰白 断: 9YR7/1灰白 胎土: 緩密 焼成: ややあまい	口縁部は丸をさせて削り外反し、口縁端部は受け 厚させて丸くおめる。全体は手平打で削り出され た。全体の内面に同心円形の目皿模様が残る。口縁部は 内外共に回転ナデで仕上げる。	20%				
70 29層 磨石 斜面(10.0)	/	長輪(7.1) —	—	—	内側は他用いたものとされる。表面に握り打痕がみら れるが、全体的に滑らかで表面は滑らか。	50%	石材: 砂岩		
71 29-30層-127 溝 瓶(把手部分)	土器蓋 最大厚2.1	短輪(4.0)	内: 10YR7/3に近い黒 外: 7.5YR6/4に近い黒 断: 7.5YR7/4に近い黒 胎土: 緩密 焼成: 良好	断面形状に沿って刃削り形。全体外縁にハケ調整を 施した後、把手を付ける。把手はコピオサエで整形 され、ナデ調整を施す。全体内面は厚礪のため、調整 痕は不明。	破片				
72 29-30層 櫻石器か?	最大幅6.8 最大厚5.2 最大長7.6	最大幅0.8 — —	内: N5/灰 外: N5/灰 断: N5/灰 胎土: 緩密 焼成: 良好	堅韌な石材で、加工痕・使用痕等は認められない が、川原の軽石を意図的に持ち込んだものである可 能性あり。	石材: チート				
73 30層 須恵器 杯蓋	13.5	最大幅0.8	内: N5/灰 外: N5/灰 断: N5/灰 胎土: 緩密 焼成: 良好	天井部は丸で平たく、縁線は直線側に深い羽根状のくぼ みを設けることからして表現される。口縁内面には 浅い円錐状の凹陷入がある。そのため口縁端部はやや 窓く。天井部外縁は手削りの削りハラタリ、それ以外 の部分は回転ナデで仕上げる。天井部内面にわず かに削り痕が残る。	40%				
74 30層 須恵器 杯蓋	15.0 (4.4)	最大幅0.5	内: N5/灰 外: N5/灰 断: N5/灰 胎土: 良好・径2mm以下の白砂粒と黒色 粒含む 焼成: 良好	天井部はほぼ丸欠損するが、丸みを帯びる形などだと 考えられる。縁線は、全体削り出しが困難なところを 押す多さからして表現される。口縁端部はやや窓く。 天井部内面には窓く。またその他の部分には削り痕 が残るが、天井部外縁は右回りの削りハラタリ、それ以外 の部分は回転ナデで仕上げる。	口縁部20%				
75 30層 須恵器 杯身	12.6 4.5	最大厚0.8	内: N5/灰 外: N5/4/灰 断: 7.5R4/2灰赤 胎土: 黒色粒と赤色粒、径1mm以下の石 英、白砂粒を含む 焼成: ややあまい	底面のみが残す。外縁は底部端面にかかる形でタ タリの痕が残るが、底部の修理により底部部の調整痕 は不明。底部の調整は、丸みを出さない。口縁端部はやや 窓く。天井部内面には窓く。またその他の部分には削り 痕が残るが、天井部外縁は右回りの削りハラタリ、それ以外 の部分は回転ナデで仕上げる。	25%				
76 30層 劣生土器 蓋	—	底部径4.3 (4.4)	内: 10YR8/3に近い黒 外: 10YR1/4に近い黒 断: 7.5R4/2灰赤 胎土: 黑色・赤色粒と、径1mm以下の石 英、白砂粒を含む 焼成: ややあまい	底部のみが残す。外縁は底部端面にかかる形でタ タリの痕が残るが、底部の修理により底部部の調整痕 は不明。底部の調整は、丸みを出さない。口縁端部はやや 窓く。天井部内面には窓く。またその他の部分には削り 痕が残るが、天井部外縁は右回りの削りハラタリ、それ以外 の部分は回転ナデで仕上げる。	30%程度				
77 30層 須恵器 杯	—	底部径1.6 4.0	内: N5/灰 外: N5/灰 断: 7.5Y8/1灰白 胎土: 緩密、白砂粒含む 焼成: 良好	平坦な底盤から丸みを帯びて底部が立ち上がる。底部 外縁には格子状の、底部内面に当てる具痕が残る。底 部内面は右回りの削りハラタリが施される。	破片				
78 30層 須恵器 杯身	14.0 4.2	—	内: N5/灰 外: N5/灰 断: N5/灰、10YR5/2灰褐色 胎土: 緩密、白砂粒含む 焼成: 良好	平坦な底盤から丸みを帯びて底部が立ち上がる。底 部は平たい削り出し、底部は丸く立てる。底部は灰 色の火照れはなく、輪郭は火くろめらかが、薄くて華 奢な印象を受ける。立ち上がりはやや低く、縁や窓くで外 反させつつほぼ直立する。口縁端部はあくおきの形 で仕上げる。	口縁部20%				
79 30層 須恵器 杯身	12.0 (3.85)	最大厚0.5 —	内: N5/灰 外: N5/灰 断: 10YR5/2灰赤 胎土: 良好・1~2mmの小砾、径0.5mm以 下の白砂粒、若干の赤色粒、黑色粒を 含む 焼成: 良好	受部は上方に削り出し、底部はやや削り立ち上 がりが良く、ほぼ直立する。口縁端部内面に深い凹痕 をもつて丸みを帯びる。丸みを帯びるものの内側に 窓く。天井部内面には窓く。またその他の部分には削り 痕を作りだしている。底面外縁にはおそらく右回りの 削りハラタリが施され、それ以外の部分は回転ナ デで仕上げる。	口縁部20%				

単位: cm ( ) : 残存値 - : 計測不可能 ✓ : 計測項目無

表3-7 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層名	種別 器種	口径 基高	その他の法量	色模 胎土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
80	30漢 須恵器 杯身	—	12.1 (3.1)	内: N7/灰白 外: N7/灰白 断: N7/灰白	胎土: 粘密、黒褐色と直径2mm以下の白砂粒含む 焼成: 良好	底面にはぼかし出せる。その丸みをねじった形状となる。 受加土は底より上方に増加傾向で盛り付けられる。 断面は丸く下方に内傾し、上半と外反して直立する。 底部内面は回転ハック形式。それ以外は回転ナデで仕上げる。	15%	
81	30漢 須恵器 杯身	—	— (2.5)	内: N5/灰 外: N4/灰 断: SP7/1明紫灰 胎土: 粘密 焼成: 良好		分厚くて半球的な底盤あり。上外方に低く体部が立ち上 がる。受加土は底より上方に増加傾向で盛り付けられる。 輪郭を丸くおさめる。底盤再びは回転ハック形式。それ以外 の部分は回転ナデで仕上げる。底部内面に同心円の当て具痕跡が現る。	20%	
82	30漢 須恵器 杯身	—	13.3 (4.5)	内: 2.5Y7/2灰黄 外: N5/灰 2.5Y7/1灰白 断: 2.5Y7/2灰黄 2.5Y7/1灰白	胎土: 良好-黒色粒と、径2mmの大いな小穂。 径1mm以下の白砂粒と赤色粒を含む 焼成: 良好	底盤は平坦で、受部はやや上向きに傾いて盛り出 る。輪郭は丸くおさめる。立ち上りはや長く、中段ほどでわ かに受加土は底より上方に増加傾く。口縁端部はよく 丸められ、底盤外周は2回の印加輪ハック形式。それ 以外の部分は回転ナデで仕上げる。底部内面に当て具 痕跡が現る。	30%	口径の残存率が 低いため、腹元口 径には誤差が含まれ る可能性大さい
83	30漢 須恵器 壺	—	17.5 (8.9)	内: 5Y7/1灰白 外: N5/灰 断: 5Y7/1灰白 胎土: 粘 焼成: あまり		口縁端部はやや外方に張り出させ、やや下がったよ うに受加土を押り出して、軸元口折れと見せせて いる。外側は口縁端から体部にかけて調整をした 後、体部ではタッキ調整を施す。底部内面に同心円 文の当て具痕跡現る。口縁部は最終的に回転ナデで 仕上げる。	3/10未満	
84	30漢 須恵器 壺	—	12.5 (7.5)	内: N6/灰 外: N6/灰 断: N6/灰	胎土: 粘密、直径2mmの大いな白砂粒含む 焼成: 良好	口縁端部は丸みをもせてやや外方に張り出させる。口縁端部は厚 厚で受けてよくおさめる。体部外周は底子目印と後ナ グ。体部内部は底盤下端をわずかに削って整形し、 同じ円文の当て具痕跡現る。口縁部は内側と外側 で回転ナデで仕上げる。	15%	
85	26漢 須恵器 壺	—	— (4.5)	内: SY5/2灰褐 外: SY4/2灰褐 断: SY5/2灰褐	胎土: 粘密、赤色粒と直径1mm以下の白 砂粒含む 焼成: 良好	口縁部のみ残存する。口縁部は外反して立ち上がり、 口縁端部で下方向に若干肥厚させて、面を作 りだす。口縁端部直下の外面に波状文をめぐらせ る。	10%	
86	26漢 須恵器 壺	—	18.0 (9.8)	内: N5/灰 外: N5/灰 断: N5/灰	胎土: 粘密、径1mm以下の白砂粒。若干 の赤色粒、黒色粒を含む 焼成: ややまあまい	口縁部はわずかに外反しながら立ち上り、口縁部をわ ずかに内側にせめる。口縁端部に面をたせせる。体部は 平行矢タキの後、カキ目調整を施し、内面には同心円 文の当て具痕跡現る。口縁部は回転ナデで仕上げ る。	10%	
87	26漢 須恵器 壺	—	15.8 (4.5)	内: 2.5Y7/1灰白 外: 10Y5/1灰 断: 2.5Y7/1灰白	胎土: 粘密、黒褐色と白砂粒含む 焼成: 良好	口縁部はやや外反して立ち上りがあり、口縁端部は外 側で厚さをもってやや横縫をくくる。腹元外周にはカキ 目、それ以外の部分には回転ナデを施す。	破片	
88	26漢 須恵器 壺	—	22.2 (7.9)	内: N7/灰白 外: N7/灰白 断: N7/灰白	胎土: 粘密、黒褐色と白砂粒含む 焼成: 良好	口縁部に一部ひずみが生じる。全体に丸みを帯びる が、頂部はやや平坦。天井部外周は右回の印加輪ヘ ラック式、内面には一定方向のナデを施す。それ以外 の部分は回転ナデで仕上げる。口縁端部はまるくおさ め。	20%	
89	154唐 須恵器 壺蓋	—	11.85 5.15	内: N6/灰 外: N6/灰 断: N7/灰白	胎土: 粘密、黒褐色と白砂粒含む 焼成: 良好	天井部がやや平坦な鋤形で、天井部と体部の腰の屈 曲部にむかうな段を作り出す。天井部外周には右回の 印加輪ハック式、内面には一定方向のタッキを施す。 それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。口縁端部は丸くおさ め。	90%	
90	1172土坑 須恵器 壺	—	19.4 (5.0)	内: N7/灰白 外: N7/灰白 断: N7/灰白	胎土: 粘密、白砂粒含む 焼成: ややまあまい	口縁部付近のみ残存する。口縁部の立ち上りはなく、 口縁端部は外面下方にむかうに粘土を馴び足して、 粘土を折り返したような体表をもつている。体部外周は カキ目調整を、それ以外の部分は回転ナデで仕上げ ている。	10%	
91	1172土坑 須恵器 壺蓋	—	底径21.0 (4.5)	内: N7/灰白 外: N7/灰白 10Y4/1褐灰 断: N7/灰白	胎土: 粘密、白砂粒含む 焼成: 良好	脚輪部のみ残存する。外側に回転を2条のべせる。 脚輪部はむかうに外側する平坦な面を作り出してお り、回転ナデで仕上げる。	10%	
92	1172土坑 須恵器 壺	—	21.5 (6.8)	内: N6/灰 外: N5/灰 断: 10Y7/1灰白	胎土: 粘密、白砂粒含む 焼成: ややまあまい	面部は外薄しながら上方に立ち上がる。口縁端部 はむかうに肥厚させて丸くおさめる。体部外周には柄 子目印き、内面には同心円文の当て具痕跡が現る。 口縁部は外面と内面と回転ナデが施される。	20%	

単位: cm ( ) : 残存値 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-8 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層名	種別 器種	口径 基高	その他の法量	色調 地土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
93 1172土坑	土器	土器	16.1	内:2.57/4浅黄 外:2.57/3浅黄 断:2.57/3浅黄	赤土・難密、直径2mmの石突・長石骨 むき 焼成:ややあまい	口縁部はやや丸味及び上内面へへらじりが、口縁部を丸くする手法はなく、口縁部をはざむける手法はなく、底部の形状はややく、直径部をやや平たい。器底に焼成層により、調整層は不明ではないが、外面はナメで仕上げられているとみられる。	80%	
	便		16.5					
94 1172土坑	鉢(スラグ)	/	最大径2.5	-		上面はほぼ平手で、下面はやや凸出する。上面はやや気泡があるが、下面の気泡は小さくてまばらである。	-	
		/	最大幅3.0	-				
		/	最大厚1.2	-				
				重さ12.1g				
95 1172土坑	須恵器 高杯	(8.4)	-	内:N7/灰白 外:N6/灰 断:N7/灰白	直底部と脚上半分のみ焼成する。3方に長方形で斜線の透し窓を設ける。上下的透し窓の間にはくで幅広の小横縫をもつてらる。脚の上端付近に引きが残るが、焼成部分は回転ナメで仕上げている。	30%		
96 1172土坑	須恵器	20.5	側部最大径3.78	内:7.5Y6/1灰 外:上半9Y6/1灰 下半N4/灰 断:10Y6/1灰	丸底成形地で、やや脚が膨張形を見る。口縁部の立ち上がりは緩やかで、丸みをもつ。口縁部を丸めやや下がったところに横縫が残っている。口縁部内外面に回転ナメ、体部外表面は平行引き、内面には同心円式で当机部が残り、底部付近に唇唇部があり、また体部外表面に上からくじらひかれたような状態で、自然縮みがある。	90%		
	便	39.8	側部径13.9					
97 14土坑	須恵器 杯蓋	3.1	-	内:7.5Y6/1灰 外:N5/灰 5Y6/1灰白 断:N5/灰	やや平たな引窓を受ける鏡形である。鏡面はやや薄く、日輪模様を受ける。天井部は体部に接する側部はなく、口縁部の内面に引窓がある。天井部は回転ナメで仕上げるが、頂部はヘアの内面、無焼成である。それ以外の部分は回転ナメを施す。	20%		
98 49土坑	須恵器 杯蓋	13.0 (3.7)	内:N6/灰 外:N6/灰 断:N6/灰 地土・難密 焼成:良好	天井部は口縁部を残すが、やや丸みをもつた引窓形である。天井部は体部の裏に接する側部はなく、口縁部を丸めやや下がったところに横縫が残っている。口縁部内外面に回転ナメをするが、横縫の内面はみられない。口縁部は圓面をもつてだらし、天井部外表面は左回転の内側へラブリで仕上げる。それ以外の部分は回転ナメで仕上げる。	10%	口縁部の残存率が低いため、復元口徑による誤差の含まれる可能性あり		
99 278土坑	須恵器 杯蓋	14.0	内:N6/灰 外:10Y4/1灰 断:10Y4/1灰	器蓋は若干厚さがあるのに、体部上面に回転模様のくぼみやめらせび横縫を残す。口縁部を丸めやすく外反させて、縁際にはくじらひかれた面をもつ。天井部は口縁部を残すが、焼成部分は内外面とも回転ナメで仕上げる。	10%	復元口徑には誤差が含まれる可能性が高い。天井部外表面にくじらひかれた自然縮みがある。		
100 1009土坑	石器	/	最大長7.6 外:面	2.5Y6/2灰白 /	柱状で、使用されている場合はいはずれも使い減りして継ぎやかな凹面を呈する。きめの細かい石材で、仕上げが粗略として利用されたと考えられる。			
		/	最大幅4.3	-				
		/	最大厚3.1	-				
101 153土坑	土器 杯	12.2 (4.1)	内:7.5YR7/4にぶい焼 外:7.5YR7/4にぶい焼 断:10Y4/2灰黄	全体が丸みを帯びる鏡形で、口縁部のみわざかに外反させる。口縁部は内外面ともミヨナメ、底部外表面は横方向のケヌ。それ以外はナメ調整で仕上げる。	30%			
102 153ビット	土器 便	23.8 (8.2)	内:7.5YR6/6 外:10YR6/3にぶい黄 断:10YR4/2灰黄	口縁部は直線的に外方に伸びり、口縁部裏には面を作りだす。体部外表面にはハケ調整、内面には縱方向のナメ調整を施す。口縁部は内外面ともミヨナメで仕上げる。	20%			
103 266ビット	浮生土器 便	- (6.4)	高部径3.5 内:10YR6/3にぶい黄 外:2.5Y6/3浅黄	底部から球形に体部が膨らむ形状を見る。体部上半分は手掘り。体部外表面は粘土棒の接合痕が残る。外表面には平行引き、内面には下から上に向かってラブリの痕跡がみられ、底面にはサエの痕跡あり、全体に摩擦溝で溝が走る。調整痕は不明瞭。	20%	焼成部分のうち、底部から心材部分の半分の面積で底盤あり。		
104 266土坑	浮生土器 便	不明 (17.0)	高部径28.0 内:10YR6/3にぶい黄 外:2.5Y6/3浅黄	内面は摩擦溝が少ない。調整痕は不確実だが、ハケ調整の跡がハケ跡をもつこしたことがわかる。外表面には平行引き、内面には下から上に向かってラブリの痕跡がみられ、底面にはサエの痕跡あり、全体に摩擦溝で溝が走る。	30%			
105 北西隅谷古 墳時代堆積 層	須恵器 杯蓋	13.5 (4.0)	内:N7/灰白 外:N6/灰 断:N7/灰白	本來はやや平坦な大型器を有する器形とみられる。天井部と体部の壁はさわやかに、2枚の削離をめぐらせて横縫をもつて記述する。口縁部は内面に内縫する凹面を作り出し、やや外反させつつ丸くおおめ。天井部外表面はヘアの後、回転へラブリで施すが、ヘアの跡に生れたくみをもちらんは見えない。それ以外の部分は回転ナメで仕上げる。外表面/3~1/2ほどに、うっすらと自然縮みがくびついていたふらがある。	20%			
106 北西隅谷古 墳時代堆積 層	須恵器 杯蓋	13.4 425	内:N6/灰 外:10YR5/1灰 断:10Y4/2灰黄	天井部内面に粘土棒の接合痕が残る。天井部や手平い形で、横縫はない。口縁部ははざむける手法はなく、外反せず、口縁部内部に内縫する作法だ。天井部外表面はヘアの後、回転へラブリで施すが、ヘアの跡に生れたくみをもちらんは見えない。それ以外の部分は回転ナメで仕上げる。外表面/3~1/2ほどに、うっすらと自然縮みがくびついていたふらがある。	30%	口縁は、火入済痕基準に、立ち上がりがゆるめの参考として剥引出しており、派生も含む可能性あり。		

表3-9 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層名	種別 器種	口径 高さ	その他の法量	色調 胎土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
107	北西隅谷古 墳時代堆積 層	土器器	10.3		内: 10YR8/2(浅)黄褐色 外: 10YR8/4(浅)黄褐色 断: 10YR8/3(浅)黄褐色	底部はやや高く、全体の底にそぞら-骨縫がある。本體は外輪で作られており、輪縫部内面には、やや丸みがあり、ひつごとに施して表面を作り出している。回転ナダで仕上げている。底部の折筋の彫造を主として作られたものと考えられる。	20%	人夫頭-口部底の足の組曲線から、實元口径を削り出した。よって剖差が含まれる可能性あり。
					胎土: やや赤-黒色と径2mm以下の石英、長石、赤色粒を含む 焼成: 良好			
108	北西隅谷古 墳時代堆積 層	須恵器 —	—	面部(杯との接合 部)径4.4 高杯 (9.6)	面部外側: 自然釉付青部分N3/緑灰 それ以外N3/灰 杯部外側: SY6/1灰 杯部内部: SY5/1灰 脚-脚断面: 2SY5/1黄褐色	3方に最大幅の浅く少し底があり、うち貫通しているのは1周所のみ。透かし窓の下には12枚の窓。前面がぐるぐる入った丸みをもつていて、底部内部に当て具根があり、部分的に軽く一定方向のナダを施すが、おざかな感じで残っている。それ以外の部分は回転ナダで上げる。 胎土: 緩密、直徑2mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好	40%	脚部外側の半分と 杯部外側に、うっ すらと自然釉がか かる。
109	北西隅谷古 墳時代堆積 層	須恵器 —	11.0		内: 2SY5/1黄褐色 外: N3/1黄褐色 断: 2SY5/1黄褐色	底部は丸く、全体的に丸みを帯びた器形である。受部は丸く、中央に底の凹く切り口。輪縫を大きくおさめ、丸み立たせた形で作られており、輪縫部内面には、口縫丸みがある。本體外縁は回転-ラグナダ。それ以外の部分は回転ナダで仕上げる。 胎土: 緩密、直徑2mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好	95%	
110	北西隅谷古 墳時代堆積 層	須恵器 —	10.0		内: N3/灰 外: N7/1灰 断: SY6/1灰 胎土: 緩密、直徑2mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好	丸みをおびた大井部中央に、近接する2条の平行汎縫を入れて曲面を設け、その間に数条の直縫をへりさせて装飾している。天井部と体部の繋ぎは、体部を横に削り、天井部を内側にひき寄せさせて底部部分をやや縮めている。口縫部はやや薄く、輪縫を丸みおさめた。回転ナダで上げる。	30%	
111	北西隅谷古 墳時代堆積 層	須恵器 —	9.8		内: N4/灰 外: N5/1灰 断: 2.8	大井部は丸みをおさめたが、ややゆるんでいる。口縫部断面は横に傾曲する(左側円柱)ており、断面はやや角ばっている。全面回転ナダで仕上げる。	往復100%	
112	北西隅谷古 墳時代堆積 層	土器器	12.0		内: 10YR8/2にぶい黄褐色 外: 7SYR8/4にぶい青 10YR7/2にぶい 黄褐色 断: 10YR7/2にぶい黄褐色	口縫部は内外両面ともコニカナダ。それ以外はナダ調整で仕上げる。口縫部は丸くおさめる。全体的に丸みをひいた形を呈する。	40%	
113	北西隅谷古 墳時代堆積 層	土器器 高杯 (8.4)	—	面部最大径9.5	内: 10YR8/2にぶい黄褐色 外: 10YR8/4(中)青 10YR7/2にぶい 黄褐色 断: 10YR7/2にぶい黄褐色	脚部のみ残存する。外由中央にコビオサテ、内面にシザリみがあり、ナダ調整で仕上げたものと見られる。粘土の接合部分で杯部が剥落した状態。	40%	
114	北西隅谷古 墳時代堆積 層	土器器 高杯 (5.9)	—	面部最大径9.0	内: 10YR8/3にぶい黄褐色 外: 7SYR8/4にぶい青 断: 10YR8/3にぶい青	脚部のみが残存する。下から3分の1あたりで断面して、根元広くななり、輪縫部は丸くおさめる。全体的に厚壁が解消しており、調整窓は不規則だが、上端にわざわざ方向性のハケ、内面にはぼくぼく、根元部にはコビオサテの跡跡があり、最終的にはナダ調整で上上げてみられる。	40%	
115	北西隅谷古 墳時代堆積 層	土器器 高杯 (5.8)	—	面部最大径9.2	内: 5YR7/4にぶい青 外: 7SYR7/4にぶい青 断: 5YR7/3にぶい青	脚部外表面は三ニチエナダ調整、内面もナダ調整で仕上げるが、最底部にはナダがおおよそ指屈痕のみ残る。内面にシザリがある。	40%	
116	北西隅谷古 墳時代堆積 層	須恵器 —	13.6	面部最大径11.8	内: N5/灰 外: N4/灰 断: N5/灰	2方に、2段の透かし窓を施するが、ほとんど大きくなっている。透かし窓の印込みは模倣で違うているので、一旦削り出した後、輪縫部を削りこぼしたものにさがったところである。上の透かし窓の間には一条の浅い凹縫がある。杯部内面には丸く削り生れた細かい亂れが無数にみられるところから、脚部中央の丸みだけ削りで生じた可能性あり。またひび割れ部分に、うらし様の黒色動物がらわれる。	90%	
117	北西隅谷古 墳時代堆積 層	須恵器 —	13.5	面部最大径9.3	内: N6/灰 外: N5/灰 断: N6/灰	杯部はほぼ根付する。脚部はわざわざ外輪しならべ、外下方へひいるが、輪縫部は輪縫へ向けて徐々に盛りあがる。内面は丸みをもつていて、内面の下方に凹縫を有する。透かし窓はたしか、内面に斜上方の結合部がある。杯部断面内面に、一方斜ナダ調整が認められるが、それ以外の部分は回転ナダで仕上げる。	25%	
118	北西隅谷古 墳時代堆積 層	土器器 高杯 (2.85)	—	残存面部径2.1	内: 7SYR7/3にぶい青 外: 7SYR7/4青 断: 7SYR5/2灰褐色 胎土: 緩密、赤色粒と径1mm以下の白砂粒を含む 焼成: 良好	脚部の上半のみの残存で、杯部との接合部分では、はがれた状態である。表面の剥落を重い。脚部外表面に粘土の接合部が残り、杯部の内面にコビオサテの痕跡あり。瓶方向にナダする。内面にシザリみあり。三ニチエナダ。	10%	

単位: cm ( ) : 残存値 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-10 土器・土製品・石器等の観察表

遺物 番号	出土温機 名、 後時代堆積 層	種別 器形	口径 基部 高さ	その他の法量	色調 土色 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
119 北西隅谷古 後時代堆積 層	須恵器 高杯	—	底部最小径3.7 (7.3)	内: 7.5YR4/1灰 外: N6/灰 断: 7.5YR6/1灰 胎土: 繊密、径1mm以下の白砂粒含む 焼成: 良好	文様焼成は底の口部側に似るが、腹部が厚ぼった く、内面にシボリがあることから、高杯の器形と判断 した。口縁の浅い凹縁をめぐらせ、その間に列点文を 施す。	30%		
120 北西隅谷古 後時代堆積 層	土師器 高杯	—	底部最大径6.7 (5.2)	内: 7.5YR6/4cに似る黄褐 外: 7.5YR6/4cに似る黄褐 断: 7.5YR6/4cに似る黄褐 胎土: 繊密、當母、赤色と、径1mm以下の 白砂粒含む 焼成: 良好	腹足のみの後ろ、底部内面にシボリ等、外面上半 に規則的に上げたような凹縁あり、全周はナダで 仕上げたと見られる。内面にシボリあり。	40%		
121 北西隅谷古 後時代堆積 層	須恵器 高瓶	11.7 (14.3)	高台径9.5 杯	内: N6/灰 外: N6/灰 断: N6/灰 胎土: 繊密、白砂粒含む 焼成: 良好	腹足はわずかに外反しながら上方に立ち上がり、 口縁部はわずかに厚ぼって丸くある。口縁部 から体部の画面はカキモチ風。体部はその後、部分 的に回転ナダを施す。内面は回転ナダを施す。	30%程度		
122 北西隅谷古 後時代堆積 層	須恵器 杯	—	高台径9.5 (1.5)	内: 2.5Y7/1灰白 外: 2.5Y8/1青灰 断: 2.5Y7/1灰白 胎土: 繊密、直徑2mm以下の白砂粒含む 焼成: 良好	底部のみ残存する。底部内外面とも研磨されて平 滑になっている。窓などに2次利用された可能性が高い が、付着物は認められない。	30%	Ⅳ類	
123 北西隅谷古 後時代堆積 層	土師器 瓶	—	底部径10.0 (4.05)	内: 7.5YR7/3cに似る黄褐 外: 7.5YR6/3cに似る黄褐 断: 7.5YR7/3cに似る黄褐 胎土: 繊密、當母と、径1mm以下の赤色 粒、白砂粒を含む 焼成: 良好	残存部はわずかに、器底の厚さが一定で、丁寧 に作られた印象を受けける。内面の調整は底足方向 のケヅリ。外面はナダ調整で仕上げる。	10%	底部外面に木の 茎の圧痕あり。	
124 北西隅谷古 後時代堆積 層	土師器 瓶	18.9 (8.15)	—	内: 10YR7/3cに似る黄褐 外: 10YR7/3cに似る黄褐 断: 10YR7/3cに似る黄褐 胎土: 繊密、當母、直徑2mm以下の長石・ 石英・チャートを含む 焼成: 良好	体部内面はケヅリ調整で、調整が達成できない部 分は直角に接合頂が現れる。口縁部は内面に横方向 のケヅリ調整した後、内外面をコロゾデする。口縁進 部は主にナダ加減により丸くされる。体部外表面は底 足方向のハケ調整。	10%		
125 北西隅谷古 後時代堆積 層	土師器 瓶	42.4 (7.0)	—	内: 10YR7/3cに似る黄褐 外: 10YR8/3cに似る黄褐 断: 10YR7/3cに似る黄褐 胎土: 繊密、當母、直徑1mm以下の石英・ 長石を含む 焼成: 良好	丸みを帯びた体部から、細やかに外反させて口縁部 を立ち上げる。口縁部は丸くされる。体部内面に横 に粘土の接合頂がわざわざ現れる。体部外表面はササエ 後蹴りのケヅリ調整。内面はユコサエ後ナダ調整。 口縁部は内外面ともコロゾデを施す。	10%	外表面に全体的に 煤付着	
126 北西隅谷古 後時代堆積 層	陶生土器 壺(盃)	— (8.3)	瓶部径13.6	内: 2.5Y5/2暗灰 外: 10YR6/2灰黃灰 断: 10YR6/2暗灰 胎土: やや細かい、径4mm以下の石英、長 石などを多大含む 焼成: 良好	腹足のみ現存。全体に厚壁の質感があり、調整痕 は外表面に部分的に底足方向のハケを認めるのであ る。内面底部は半才ササエ後ナダ調整。	10%	中期後半(IV種 式)	
127 北西隅谷古 後時代堆積 層	須恵器 罐	— (12.0)	瓶部径11.85 瓶部径11.15	内: N4/灰 外: N5/灰 断: N5/灰 胎土: 繊密・黑色粒と、径1mm以下の白砂 粒含む 焼成: 良好	体部はほぼ1cmの幅でのキズを施す。底部外表面 は右側の前軸(ケヅリ)があり、それ以外の部分は回転ナ ダを施す。カキモチ下に2cmほどの幅で、回転ヘラケ の上に打込みで施す。内面は底足中心に直径約2cm の穴があり、口縁部は打ち欠いている。	80%	穿孔の下部の 縫合がいる(破綻 部は穿孔の復元ラ イン)	
128 北西隅谷古 後時代堆積 層	砾石集合石	/	最大長23.1	—	全体的に火に受けたものとみられ、赤もしくは黒東 了部分が認められる。風化が進みず、表面に漆 喰を含む。	—	砂岩質	
		/	最大幅13.3	—				
		最大厚8.1	—	—				
129 II-3	土師器	/	残存長6.3	7.5YR7/2cに似る梗	脚部の横幅で見る、凸部の粘土の断面は直角で、底 部は内側に丸み立たせた粘土で補強している。外 面は粘土の接合部によってナダを施す。内面はオサ エ後ナダ調整で仕上げる。内面は全体に柱状が付着す る。	破片		
	移動式竈	/	残存幅6.3	—				
		最大厚6.3	—					
		最大厚4.1	—					
130 19漢	土師器 移動式竈	/	残存長8.3	A面: 10YR6/4cに似る黄褐 B面: 10YR6/2cに似る黄褐 断面: 7.5YR7/4cに似る梗	底部に水平な面を作り立てるが、横口部分が破片と 見られる。端部内面に底足に向かって斜め跡があるが、 これでやや傾斜している。脚部部分はやや斜めで、 内面は底足の接合部によってナダを施す。内面はオサ エ後ナダ調整で仕上げる。内面は底足中心に直径約2cm の穴があり、口縁部は打ち欠いている。	破片		
		/	残存長8.5	—				
		最大厚1.3	—					
		最大厚4.3	—					
		最大厚4.0	—					
		最大厚4.0	—					
131 II-3	土師器	/	残存長8.6	7.5YR7/4cに似る梗	底部に水平な面を作り立てるが、横口部分が破片と 見られる。内面は底足に向かって斜め跡があるが、 これでやや傾斜している。脚部部分はやや斜めで、 内面は底足の接合部によってナダを施す。内面はオサ エ後ナダ調整で仕上げる。	破片		
	移動式竈	/	残存幅5.3	—				
		最大厚1.3	—					
		最大厚4.0	—					
132 1172土坑埋 土上面	土師器	/	残存長5.5	7.5YR7/4cに似る梗	内面は丸くした舟型の断面である。底部内面で、底足 部はがくばくして底足の内側に凹みがある。底足の内側 は内側に丸み立たせた粘土で補強している。内面は オサエ後ナダ調整で仕上げる。	破片		
	移動式竈	/	残存幅3.0	—				
		最大厚2.5	—					
		最大厚2.5	—					

単位: cm ( ) : 残存値 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-11 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層名	種別 器種	口径 基高	その他の法量	色調 胎土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
133 北西隅谷古 墳時代堆積 層		土師器 移動式窯	/	残存長6.4 残存幅2.2 最大厚3.9	表面: 7.5YR7/3に似る褐色 内・外・底: 10YR8/3に似る黄褐色 胎土: 黑褐色・赤褐色が若干と、径2mm以下の石英、長石、チャートを含む 焼成: 良好	付け根部分の破片では、多孔化した部分は凹面を周 囲で強めに削り落す。内部の凹面は、凸面に沿ってコロナ 形の痕跡が明顯に残る。内面はナメ調整で仕上げる。	破片	
134 21溝		土師器 移動式窯	/	残存幅(横方向) (17.4) 残存長(横方向) (5.7) 残存長(5.1)	表面: 7.5YR7/3に似る黄褐色 内・外・底: 10YR8/3に似る黄褐色 胎土: 黑褐色・赤褐色と、径1mm以下の石英、長石を 含む 焼成: 良好	直筒の形状である。内面は凹面を多く持つ傾向があるそ して、内面は水平である。底部は丸くおおめらか。全体外 面には規則的なハケ調整の痕跡が認められるが、内部 面はナメ調整で仕上げる。底部の部分はおおむね内外 面ともコロナ形で仕上げる。	破片	上部を丸めたう で、楕円は任意で ある。ひさし端部を 水平とみなして計 測している。
135 北西隅谷古 墳時代堆積 層		土師器 移動式窯	/	残存長4.4 残存幅15.4 残存厚1.65	表面: 7.5YR7/3に似る黄褐色 内・外・底: 10YR7/4に似る黄褐色 胎土: 黑褐色・赤褐色と、径2mm以下の赤色 鉄、長石、チャートを含む 焼成: 良好	底部分の破片である。縦面に作られた場合には、上 端部をかくつみおなじく強めに削り落す。全体外 面には規則的なハケ調整の痕跡が認められるが、内部 面はナメ調整で仕上げる。縦面附近は、内面 面ともコロナ形で仕上げる。	破片	
136 1172坑埋 土・土壌もん くはその付 近		土師器 移動式窯	/	残存長5.8 残存幅5.8 最大厚1.1	表面: 10YR7/2に似る黄褐色 内・外・底: 10YR8/4に似る黄褐色 胎土: 黑褐色・赤褐色と、径2mm以下の長石、 チャートを含む 焼成: 良好	底部分の破片である。軽度の接合部で底部から剥 落した跡である。底の輪郭が右でごこちるため、残り1 面のみが残っている。底部分は内面側と横方向にハケ 調整を施した後、ナメで仕上げる。縦面附近は、内面 面ともコロナ形で仕上げる。 内面にはこう字型の擦付跡がある。	破片	
137 北西隅谷古 墳時代堆積 層		土師器 U字状土製品	/	最大幅1.0 最大長14.25 最大厚2.1	A面: 10YR7/3に似る黄褐色 B面: 2.5YR7/3に似る黄褐色 C面: 2.5YR7/2灰褐色 胎土: 黑褐色 焼成: 良好	山形と化した縦面に、テラスした様子がある。この二つの山 形の間に窓がある。窓の輪郭が右でごこちるため、残り1 面のみが残されている。A面はケロソ油およびコロナ サウスで表面を調整した後、ナメ調整を施す。B面は板 状で、もしもはハッコヨコオサで凹部を調整した 後、ナメ調整を施す。	破片	
138 II-3	須恵器 杯	土師器 杯身	12.9 (3.4)	内: N6/灰 外: N5/灰 断: N7/灰白 胎土: 黑褐色、白砂粉含む 焼成: 良好	内: N6/灰 外: N5/灰 断: N7/灰白 胎土: 黑褐色、白砂粉含む 焼成: 良好	大井戸がよく残っているが、やや丸みを欠いた輪郭 である。底は丸くおおめらか。底縁部は左斜方に削り出 し、縦面は丸くおめらか。立ち上がりの面には圓錐状のひば みが認められる。底面は円形の削除跡(クスクス)があり、 内面は静止した状態でナメ調整。それ以外の部分は 回転ナメで仕上げる。	15%	
139 II-3	須恵器	土師器 杯身	12.4 4.0	内: N7/灰白 外: 10YR7/3灰白 断: 10YR7/1灰白 胎土: 黑褐色 焼成: 良好	底部分がよく残っているが、やや丸みを欠いた輪郭 である。底は丸くおめらか。底縁部は左斜方に削り出 し、縦面は丸くおめらか。立ち上がりの面には圓錐状のひば みが認められる。底面は円形の削除跡(クスクス)があり、 内面は静止した状態でナメ調整。それ以外の部分は 回転ナメで仕上げる。	20%	底部外側に少々 自然崩れがある	
140 II-2	須恵器 高杯	—	底径10.0 (4.7)	内: N6/灰 外: N6/灰 断: N6/灰 胎土: 黑褐色、白砂粉含む 焼成: 良好	脚部のみ残す。3方に刃物の跡が残す。 透かし窓の形で、脚部の内側に近い部分がわざかに削 り出す。底縁部は丸くおめらか。	30%		
141 II-3	土師器	土師器 瓶	7.5YR7/4灰白 最大長2.2		土師器で切取られた粘土形である。		完形	
142 II-1	土師器	瓶(把手部分)	7.5YR7/4灰白 最大幅2.2		コビオサエ、ナメで整形成する。表面は陶丸瓦方然。 底部に全体と接合させるため、ソケット状の突起あり。		破片	
143 II-1	土師器	瓶(把手部分)	7.5YR7/4灰白 中央部最大厚2.55		コビオサエ、ナメで整形成する。表面は円形。		破片	
144 II-1	円筒埴輪	—	復元径17.8~20.0 (6.0)	内: 10YR6.7/2に似る黄褐色 外: 2.5YR7/2灰白色 断: 2.5YR7/3灰褐色 胎土: 黑褐色・赤1mm以下の白砂粒と若干 の黒色鉄を含む 焼成: ややまろい	裏側は土台と柱、内側は、瓶の内側をよくこねて上部 の底を削り、腰壁の内側により、調節柱に不規則だが 内面は横方向にハケで削り落す。外側は 横方向のハケの後、縱方向のハケ調整か、瓶の部分 はヨコナメ。		破片	裏側のため、特に は底面の含まれる 可能性が大。
145 20漢	須恵器 杯	—	N6/灰 (2.1)	内: N6/灰 外: N6/灰 断: Y5/1灰 胎土: 黑褐色・黑色鉄と底径2mm以下の白 砂粉含む 焼成: 良好	右肩の内側へハケクリ調整を施した上に、先端の丸 い工具で、はっきりした直線を引く。内面は回転ナメ 調整で仕上げる。		破片	底部外側にヘラ書き記号あり
146 20漢	須恵器 杯	—	N6/灰 N6/灰 N6/灰 焼成: 良好	右肩の内側へハケクリ調整を施した上に、先端の丸 い工具で、はっきりした直線を引く。内面は回転ナメ 調整で仕上げる。		破片	底部外側にヘラ書き記号あり	
147 北西隅谷古 墳時代堆積 層	須恵器 杯	—	N6/1灰 N6/1灰 N6/1灰 焼成: 良好	右肩の内側へハケクリ調整を施した上に、先端の丸 い工具で、はっきりした直線を引く。内面は回転ナメ 調整で仕上げる。		破片	底部外側にヘラ書き記号あり	
148 21溝・22井 戸	須恵器 杯	—	N6/1灰 N6/灰 N6/灰 焼成: 良好	左側の内側へハケクリ調整を施した上に、先端の丸 い工具で、わざかに削り落す。内面は回転ナメ 調整で仕上げる。		破片	底部外側に非常に 浅いヘラ書き記号あり	

単位: cm ( ) : 残存値 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-12 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層位	種別 容器	口径 高さ	その他の法量	色調 灰土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
149	26層	須恵器	/	内・底: 7.5YR 1/1灰白 外: 10YR 1/1灰 断: 細密、直徑2mm以下の白砂粒を含む 燒成: 良好	右側の内縁へラグレス調節を施した上に、先端の丸い工具で、わずかに内縁を引いたような、不明瞭な直線を引く。内面は回転ナダ調節で仕上げる。直線は少なくとも2本あり、十字に引かれたものか。	30%	底部外縁にヘラ書き記号あり	
150	14土坑	須恵器	/	内: 2.5YR 1/1黄灰 外: N4灰 断: 5YR 1/1灰白 胎土: 細密、黒色土と直径1mm以下の白砂粒を含む 燒成: 良好	右側の内縁へラグレス調節を施した上に、先端の丸い工具で、はっきりとした直線を引く。内面は回転ナダ調節で仕上げる。	破片	底部外縁にヘラ書き記号あり	
169	151落込み	瓦器	一 瓶(高台部分)	高台径5.5 高台高3.5	内: 7.5YR 1/1灰 外: 10YR 1/1灰 断: 2.5YR 1/1灰白 胎土: 細密 燒成: ややあまい	底部のみ残存する。肩付け高台は断面有形部を以する。底部の摩擦により、調整痕は不明である。	10%	
170	151落込み	瓦器	9.4 瓶	2.05	内: 2.5YR 1/1灰黄 外: 2.5YR 1/1灰黄 N4/灰 断: 2.5YR 1/1灰黄 胎土: 直径2mm以下の石英、長石、赤色粉が若干ある 燒成: 良好	やや丸みをむいた底部から、矧い口縁部がやや外傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおろし、底部と口縁端との間に接觸痕はない。底部内面はオサエ後ナダ。口縁部外面はコナダ、Pはナダ調節で仕上げる。	40%	
171	北西隅谷中 世耕作土	土師器	6.2 瓶	(1.3)	内: 10YR7.5/3に近い黄褐 外: 10YR7.5/3に近い黄褐 断: 10YR7.5/3に近い黄褐 胎土: 細密 燒成: 良好	上方に丸くややこじらかした口縁部と、底部の内面には明瞭な接觸痕はない。口縁部はコナダ。底部内面はナダ。底部外面はオサエ後ナダで仕上げる。	40%	
172	北西隅谷中 世耕作土	瓦質 土管	14.6	(7.0)	内: N4/灰 外: N4/灰 断: 5YR 1/1灰白 胎土: 細密 燒成: 良好	受付部ややく薄曲げて直線に変化する。断面は内側に若干凹部を形成させ平底の皿をもつだ。内面にコサエの痕跡が残るが、全体は回転ナダで仕上げる。	破片	
173	1~3層	瓦器	13.6 瓶	(3.0)	内: 10YR 6.0/4に近い黄褐 外: 10YR 6.0/4に近い黄褐 断: 10YR 6.0/4に近い黄褐 胎土: 細密 燒成: ややあまい	口縁端部を丸くおさめる。体部外面はユビオサエ後ナダ、内面はナダ後、七牛調節を施す。ミガキは幅0.5~1mmで、まだらにこみられない。	10%	破片のため、口縁に誤差が含まれる可能性が高い
174	6溝	瓦器 瓶	12.0 (3.3)	内: N4/灰 外: N3/灰 断: 2.5YR 1/1灰白 胎土: 細密 燒成: 良好	口縁部に強いコナダを施すため、やや外反する。口縁端部は丸くおさめる。体部外面はユビオサエ後ナダ。口縁部内面はコナダ後、七牛調節を施す。ミガキは幅0.5~1mmで、まだらにこみられない。	10%	破片のため、口縁に誤差が含まれる可能性が高い	
175	1~2-2	土師器	10.4 瓶	(2.25)	内: 2.5YR 1/2灰白 外: 2.5YR 1/2灰白 断: 2.5YR 1/2灰白 胎土: 細密、僅0.5mm以下の長石、チャートを含む 燒成: 良好	底端部は直角にする。企ねに丸みを帯びる器足と見られる。口縁付近でやや軽度な接觸痕は、高脚部の瓦張部の形状に似る。口縁部はコナダ。体部内面はナダ後ナダ、内面はナダ調節で仕上げる。	破片	
176	1~2-2	東櫛系直器	26.0 瓶	(2.3)	内: 5YR 1/1灰 外: 5YR 1/1灰 断: 5YR 1/1灰 胎土: やや粗、僅1mm以下の白砂粒を含む 燒成: 良好	口縁部が残存するのみである。口縁端部は上下にむき出しに丸めて削り出された面を作りだす。口縁端部上端を丸く仕上げる。口縁部に強い弱ナダを加える。	10%	東櫛系直器
177	1~2-1	土師器	8.7 瓶	1.4	内: 2.5YR 1/2灰黄 外: 2.5YR 1/2灰黄 断: 2.5YR 1/2灰黄 胎土: 細密 燒成: 良好	口縁部は上部に緩やかに立ち、上面は直線と裾部は明瞭な接觸痕はない。口縁端部は水平方向にむき出しに外反させた後、若干丸めさせて丸くおさめる。口縁部をコナダ。口縁部内面はナダ調節で仕上げる。	20%	
178	1~2-1	土師器	12.0 瓶	(3.7)	内: 2.5YR 1/2灰黄 外: 10YR 7.5/3に近い黄褐 断: 2.5YR 1/2灰黄 胎土: 細密、當母と、僅1mm以下の石英、チャートを含む 燒成: 良好	やや丸く立ち、丸みを帯びる形状で、口縁部を打削するに外反させる。口縁端部は丸くおさめる。体部外面はナダ。内面にコサエ後ナダを施す。胎内に当母と、僅1mm以下の白色砂粒(僅0.5mm以下)を含む。	20%	
179	1~2-1	漆前 漆錠	一 (4.5)	内: 2.5YR 5/3に近い赤褐 外: 2.5YR 5/3に近い赤褐 断: 2.5YR 5/1灰 胎土: 細密、當母と、若干の白砂粒(僅0.5mm以下)を含む 燒成: 良好	口縁端部のみ残る。断面は下方に若干船を吊り差して面を作る。回転ナダで仕上げる。内面に漆が付いて所だけ残存する。	破片		
180	1~2-1	瓦質 火薬	— (7.4)	内: N4/青灰 外: N4/灰 断: 7.5YR 1/1灰白 胎土: 細密、當母と、若干の白砂粒(僅0.5mm以下)を含む 燒成: 良好	体部がわずかに外傾しつつ立ち上がる。やや滑走するところから、円筒形の塑形と考える。口縁端部は口縁にやや肥厚し、口縁にむき出されて平らな面を作りだす。口縁部外面はコナダ、それ以外はナダでもこれはコナダ後、外面上に方向の一一定しないミガキを施して仕上げている。	破片		
181	34ビット	陶器 壺	一 (7.0)	内: 2.5YR 6/1赤灰 外: 2.5YR 6/1赤灰 6/2赤灰 断: N6/灰白 (内): 2.5YR 4/1赤灰 胎土: 細密 燒成: 良好	口縁端部は外下面に軽く筋を引いて、下方に重ね下面を作りだす。口縁部内面、上方から舟をかかった自然軸が付くする。回転ナダで仕上げる。	10%		

単位: cm ( ) : 残存値 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-13 土器・土製品・石器等観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層名	種別 器種	口径 基高	その他の量	色調 胎土 焼成	形態・手法の特徴	残存率	備考
182	I-2	土師器	8.0	内: 10YR8/3浅黄 外: 7.5YR8/4C灰 断: 10YR8/3浅黄	上外方に削りゆるやかに立ち込口縁部と、平坦な底面との間に明瞭な接觸面(いたない)。底部外面をオナニ後、全体はナダで仕上げる。	20%		
		皿	8.85	胎土: 鹿児島・径1mm以下の石英、長石、チャート含む 焼成: 良好				
183	I-2	土師器	7.7	内: 10YR7/4C灰 外: 7.5YR8/4C灰 断: 7.5YR7/4C灰 胎土: 鹿児島・赤色含む 焼成: 良好	口縁部外側にやや逆さにヨコナラを施すことにより、底部ととの間にわずかな段差が生じている。底部外面と、内面はナダ調整で仕上げる。	20%		
		皿	1.1					
184	I-2	土師器	9.8	内: 10YR8/3灰黄 外: 10YR8/3灰黄 断: 10YR7/3C灰 胎土: 鹿児島 焼成: 良好	底部外面はオナニ後ナダ調整。口縁部は内凹曲線とヨコナラ。底部外面はナダ調整で仕上げる。口縁部と外方にヨコナラが立ち込上る。口縁部端は丸くおさめる。	20%		
		皿	1.5					
185	I-2	瓦器	9.8	内: 10YR8/4C灰 外: 10YR7/4C灰 断: 10YR7/4C灰 胎土: 鹿児島 焼成: やや柔軟	底部の内面にはナダで平行短縫、底部外面はヨコナラやヨコナラ調整を施す。口縁部の端はヨコナラにより口縁端部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。	20%		
		皿	(1.8)					
186	I-2	瓦器	12.0	内: NA/灰 外: N3/灰 断: 2.5Y7/1灰白 胎土: 鹿児島 焼成: 良好	体部の内面はナダで良、縫合部のヨコナラが施される。体部外面はサクサクオナダ調整。縫合部はヨコナラで仕上がる。縫合の厚さは3mm前後で、全体に算数な印痕を受ける。	20%		
		碗	(3.5)					
187	I-2	瓦器	13.0	内: N5/灰 外: NA/灰 断: N6/灰白 胎土: 鹿児島 焼成: 良好	底部から体部にかけてはやや小さな丸みをもち、口縁部外面にヨコナラが施される。口縁部と外反させると、口縁部内面に器裏部に対して上方に軽い工具で削り落とし作業が行なわれる。内面はナダで仕上げる。外面はヨコナラ後ナダ調整を施す。	10%		
		碗	(2.7)					
188	I-2	磁器	15.0	内: 2.5Y5/1灰黄 外: 2.5Y5/3灰 断: 2.5Y5/1灰白 胎土: 鹿児島 焼成: 良好	体部は斜めに立ち上り、口縁部端に立ち上りより、口縁部端で外反させる。口縁部は丸くおさめる。全体に真白色の、やや透明感のある輪がかかる。	10%		
		瓶	(3.3)					
189	I-2	白磁 碗	—	胎: 5GY1/灰 断: 10Y8/1灰白 胎土: 鹿児島 焼成: 良好	口縁部の内面有、天線の表面形はやや下膨れ気味で、やや半丁の印彫を受ける。	破片	口縁は、圓形のため特定できないが、13~15cm程度とみられる	
			(2.8)					
190	I-2	東播系須恵器 鉢	—	内: 7.5Y8/1灰 外: N6/灰 断: 10Y8/1灰 胎土: やや粗・径1mm以下の白粉粒含む 焼成: 良好	体部は直筒的に立ち上り、口縁端部外面に軽く削り落とし作業をだす。上方への傾斜はわずかである。口縁部端上面に、伏せて何回か押付けたような状態痕が認められる。回転ナダで仕上げるが、内面の口縁部に近づける際にやや強く軽く向てナダた軽度の誤認が認められる。	破片	東播系須恵器	
			(5.0)					
191	I-2	東播系須恵器 鉢	25.8	内: 10Y6/1灰 外: 5Y8/1灰 断: 5Y8/1灰 胎土: 鹿児島・径1mm以下の白粉粒と墨色 粒含む 焼成: 良好	体部は上外方に直筒的に立ち上り、口縁端部外面に軽く削り落とし作業をだす。口縁部端上面に、伏せて何回か押付けたしたところの痕が認められる。体部外面はサクサクの縫合み、回転ナダで仕上げるが、体部内面のみ、さきに静止した状態でナダ調整を施す。	破片	口縁部の残存率は高く、縫合みがみられることがある。復元口徑には誤認が含まれる可能性があり、東播系須恵器	
			(4.7)					
192	I-2	井	/	最大長12.8	体部は直筒的に立ち上り、口縁端部外面に軽く削り落とし作業をだす。口縁部端上面に、伏せて何回か押付けたしたところの痕が認められる。体部外面はサクサクの縫合み、回転ナダで仕上げるが、体部内面のみ、さきに静止した状態でナダ調整を施す。	変形		
			/	10YR0/3黑褐				
			幅1.1	—				
193	I-1-2	伊賀(京)造 碗	9.4	内: 7.5Y7/2灰白 外: 7.5Y7/2灰白 断: 5Y8/1灰白 胎土: 鹿児島 焼成: 良好	胎壁が薄く、小さくして堅苦しい印象を受ける。下半部に縫合や内縫合をもたらす。口縁部端外反させて縫合部を丸くおさめる。全体に真白色の輪裏が薄らかくなる。	15%		
			(3.8)					
194	I-1-2	瀬戸美濃造 天目茶碗	11.2	内: 7.5Y5/4C灰 外: 7.5Y5/4C灰 断: 2.5Y5/2灰白 胎土: 鹿児島 焼成: 良好	底部は出脚あり、ワタリで、高さは奥張る。体部は上外方に直筒的に立ち上り、口縁部端で削り落とし、口縁端部は丸くおさめる。体部外面には厚く輪裏があるが、底部外面は輪裏である。	30%		
			(5.65)					
195	I-1-2	唐津燒 皿	11.4	内: 7.5Y8/3C灰 外: 7.5Y4/3M灰 断: 7.5YR8/4C灰 胎土: 鹿児島 焼成: 良好	底部と体部の端に「ざわざわ」の輪裏をもたせて、体部は上外方に直筒的に立ち上り、軽く削り落とす。底部が均一だされる。口縁端は、一旦水平方向に外反させた後、縫合部を上方につまみあげて丸くおさめる。底部内面に表面を削りおいた跡子目が輪裏を有する。	25%		
			3.1					
196	I-1-1	青磁 碗	—	胎: 5GY7/1朝オリーブ灰 断: 10Y8/1灰白 胎土: 鹿児島 焼成: 良好	外壁に墨書きあり、残存範囲はわずかだが、残存する様な細工は丁寧である。釉は透明感がある。	破片	口縁部の残存率が低いため、口径は特定できなかったが、おそらく15~18cm位に含まられる	
			(3.1)					

単位: cm ( ) : 残存値 - : 計測不可能 / : 計測項目無

表3-14 土器・土製品・石器等の観察表

遺物 番号	出土遺構 名・層名	種別 器種	口径 基部 断面	その他の法量	色調 土色 底色	形態・手法の特徴	残存率	備考
197	I-1-1	瀬戸美濃焼 天目系焼	10.9 (5.0)	内: 10YR3/1 嘉陽 外: 10YR3/1 嘉陽 断: 2.5Yb/1 白灰 胎土: 粘密 焼成: 良好	底部は均一なグレードで、反対は欠損する。全体はわずかに内側に凸出する。口縁部を軽く外反させる。口縁端部内面に鋸歯に対して上方から工具を当てて、跡を切りだす。内側はナガ後ナガ、外側はビオサ後ナガ調節を施す。	20%		
198	I-1-1	瓦器 瓶	13.8 4.2	内: 10YR5/3にぶい黄褐色 外: 2.5Yb/1 白灰 断: 2.5Yb/1 白灰 胎土: 粘密 焼成: 良好	底部は均一なグレードで、反対は欠損する。全体はわずかに内側に凸出する。口縁部を軽く外反させる。口縁端部内面に鋸歯に対して上方から工具を当てて、跡を切りだす。内側はナガ後ナガ、外側はビオサ後ナガ調節を施す。	30%		
199	I-1-1	土師器	/	残存長7.6	10YR6/1 白灰	焼成不良で全体的に板質。足部は調整があわざい。それ以外は丁寧なナゲ調節を施す。		
		數足	/	最大幅3.65 高さ 付	内: 磨擦・徑2mm以下の石突・長石を含む 燒成: ややあまい			
200	I-1-1	陶器 元支道窓	/	直径2.3	孔取付印約7 最高点2.1	表面は無え	ほぼ完形	初唐・北末1078年
201	倒溝	青磁 碗(経泉窯)	-	最高径5.8 高台高1.2 底径4.2 厚さ0.5	輪: 7.5YR6/1 嘉陽 脚: 2.5Yb/1 嘉陽 断: 2.5YR7/4にぶい黄褐色 胎土: 粘密 焼成: 良好	底部のみ残存する。削り出し高台はやや高く、周囲に凹凸が大きめに施される。底部内面に文様があり、全体に釉薬が施されるが、高台の内側は無釉である。	破片	
202	倒溝	大小刀	/	残存全长21.4 残存刃部長17.5 最高点2.25 最大幅1.9	内: 10YR7/3にぶい黄褐色 外: 10YR7/3にぶい黄褐色 断面: 10YR7/4にぶい黄褐色 胎土: 粘密・雲母・赤色粒・直徑1mm以下の石突・長石含む 焼成: 良好	柄端部。刀底先端を大きく、既食を進み、刀身の中ほどまで大きくなれる。もとの長さは7才強である。	90%	
212	26漢	土師器 移動式竈	/	最大幅3.7	内面: 10YR7/3にぶい黄褐色 外面: 10YR7/3にぶい黄褐色 断面: 10YR7/4にぶい黄褐色 胎土: 粘密・雲母・赤色粒・直徑1mm以下の石突・長石含む 焼成: 良好	側面に平坦な窓が作られ、それに平行して側面に器蓋面が厚くなる。そして底部では内面に凹む。側面がふらふらにならぶ。掃口に当たる部分を考えられる。内面はケヌ後ナガ。器底はオサニ後ナガ調節で仕上げる。内面は全体にやや焼成している。	破片	
213	26漢	土師器 移動式竈	/	最大幅4.3	内面: 7.5YR4/1にぶい橙 外面: 10YR7/3にぶい黄褐色 断面: 10YR7/4にぶい黄褐色 胎土: 粘密・雲母・赤色粒・直徑1mm以下の石突・長石含む 焼成: 良好	長軸方向に軽く外凸する。粘土の接合部分で体部が丸ねはがれてしまい、裏面にすべて剥離面が見られる。おそらく底部を強制するため、貼り足した粘土とみられる。器底はオサニ後ナガで仕上げている。	破片	
214	26漢	土師器 移動式竈	/	最大幅6.4	内面: 7.5YR7/3にぶい橙 外面: 10YR7/4にぶい黄褐色 断面: 10YR7/4にぶい黄褐色 胎土: 粘密・雲母・赤色粒・直徑1mm以下の石突・長石含む 焼成: 良好	横軸方向に軽く両面曲る。器底の厚さは一定していない。裏面に、板状の工具がナゲでつけたような痕跡が見られる。表面とナゲ調節で仕上げる。	破片	
215	26漢	土師器 移動式竈	/	最大幅10.6	内: 外: 10YR7/3にぶい黄褐色 断面: 10YR8/3浅黄褐色 胎土: 粘密・雲母・赤色粒・直徑1mm以下の石突・長石含む 焼成: 良好	筒口部分とみられ、底が粘土接合部分では凹れた窓口部が見られる。窓口部は内側に凹む。窓口部にわざわざに粘土の接合部が残る。内面に窓口の内側に合わせてコマニサテクの痕跡があり、粘土の接合部を内面から抉み込んだ痕跡と見られる。外側の粘土の接合部にもビコビオサエの痕跡あり、ナゲ調節で仕上げている。	破片	
216	26漢	土師器 移動式竈	/	最大幅10.6	内面: 7.5YR7/4にぶい橙 外面: 10YR7/3にぶい黄褐色 断面: 10YR7/4にぶい黄褐色 胎土: 粘密・雲母・赤色粒・直徑1mm以下の石突・長石含む 焼成: 良好	長軸方向に軽く外凸する。粘土の接合部分で体部が丸ねはがれてしまい、おなじく底部を補強するため、貼り足した粘土とみられる。器底はオサニ後ナガで仕上げている。	破片	
217	26漢	土師器 移動式竈	/	最大幅7.1	内面: 10YR8/1 濃灰 外: 7.5YR6/4にぶい黄褐色 断面: 10YR7/4にぶい黄褐色 胎土: 粘密・雲母・赤色粒・直徑1mm以下の石突・長石含む 焼成: 良好	おそらく窓口部分とみられる。窓口端部はわずかに肥厚化しておなじみがある。内面はケヌ後ナガ。内面はオサニ後ナガ調節で仕上げる。内側は、全体にやや焼成している。	破片	
218	26漢	土師器 移動式竈	/	最大幅5.3	外: 7.5YR7/3にぶい黄褐色 内: 7.5YR6/4にぶい黄褐色 断面: 10YR6/4にぶい黄褐色 胎土: 粘密・雲母・赤色粒・直徑1mm以下の石突・長石含む 焼成: 良好	長軸方向に軽く両面曲し、底の先端とみられる部分を含む。底端部はやや下向き加熱で丸くおさまる。表面はオサニ後ナガで仕上げる。	破片	
219	26漢	土師器 移動式竈	/	最大幅7.8	外: 7.5YR7/4にぶい黄褐色 内: 10YR6/2灰黄褐色 断面: 10YR6/3浅黄褐色 胎土: 粘密・雲母・赤色粒・直徑1mm以下の石突・長石含む 焼成: 良好	おそらく窓口のリーダー部分に取り付けられた付け根の痕跡とされる。粘土接合部で体部から剥離している。窓口部の先端部分が欠けている。窓口部の内側は全体にやや焼成している。オサニ後ナガ調節で仕上げる。	破片	
220	26漢	土師器 移動式竈	/	最大幅9.5	内面: 10YR8/2灰黄褐色 外面: 7.5YR6/4にぶい橙 断面: 10YR6/3浅黄褐色 胎土: 粘密・雲母・赤色粒・直徑1mm以下の石突・長石含む 焼成: 良好	器底の厚さは一定しており、全体に軽く両面曲している。粘土接合部での剥離痕は認められない。オサニ後ナガ調節で仕上げる。	破片	
224	北西隅古 墳時代後 半	土師器 煮沸器(把手)	/	最大長5.6 最大厚3.95	内面: 10YR8/3にぶい黄褐色 胎土: 粘密・雲母・赤色粒・直徑1mm以下の石突・長石含む 焼成: ややあまい	ユビオサエで焼成した後、全体を削ぎなくて仕上げる。把手の先端部分に竹管状の工具痕が認められる。	破片	
225	5漢	青磁 碗	/	残存長6.4 最大厚0.65	外面: 7.5YR5/2灰オリーブ 内面: 7.5YS/1灰 胎土: 粘密 焼成: 良好	体部下部部分の壁月で、透明感のある釉薬が、全体に薄くかかる。表面の差脊の模様はシャープである。	破片	

単位: cm ( ) : 残存値 - : 計測不可能 ✓ : 計測項目無

表4-1 木器観察表

木器	遺物番号	実測番号	出土遺構名・層名	種別	最大長 最大幅 最大厚	他の法量	備考	樹種
151	199	21清	弓(弓はず部 分合む)	17.5	径1.1~1.4		全体に長軸方向に削ったような加工痕あり。丁寧に整形成されている。先端に近い部分に浅く溝を切ったような痕跡があり、その周囲に繊維質なものが縛られたような痕跡あり。	ヤマフジ
152	200	21清	弓(弓はず部 分合む)	18.4	径1.1~1.5		全体に長軸方向に削ったような加工痕あり。丁寧に整形成されている。先端に近い部分に浅く溝を切ったような痕跡があり、その周囲に繊維質なものが縛られたような痕跡あり。	ヤマフジ
153	201	21清	板状木製品	27.5			加工痕は表面にはほとんどられないが、凹凸と側面は平面になるように加工されたものと見られる。b面は、中央にふしや突起があり、a面ほど丁寧に仕上げられていないが、おおむね平坦になるようにには加工されたものとみられ、結果としてやや綺麗な柱状の形態を呈する。	スギ
					6.2			
					2.9			
154	205・206	21清	木桶	256.3			実測した面は、丸太を長軸に平行する方向で分割した後、大まかに削り口を整えつつ、中央部をやすやすめている。粗い作りだが、木桶と考えられる。裏面には加工痕はない、所々に程度が残存する。	スギ
					約34.0			
					8.7			
155	194	21清	板状木製品	77.0			全体に火を受けたとみられる。特にa面は炭化している。加工痕跡はどこかないが、b面は平滑な面を呈する。一方、b面は、側面は加工しただけのように受けられない、取扱いが難しかったとみられる。	スギ
				15.0				
				約2.5				
156	202	22井戸	板状木片	28.4			両面ともに長軸方向に表面を作りだしたような加工痕跡あり。	スギ
				2.1				
				0.6				
157	188	242土坑	建築部材か	14.5	長軸10.9		丸太に長軸方向に削ったような形状を呈する。表面は繊維をほいどうなり形で、明瞭な加工痕は認められない。	クスノキ
					短軸7.9			
158	196	273ビット	柱柾	17.3	径9.8		丸太を長軸方向に削ったような形状を呈する。表面は繊維をほいどうなり形で、明瞭な加工痕は認められない。	ヒノキ
159	187	231ビット	柱か?	21.6	長軸9.7		断面は不整形圓形面形を呈する。断面にはついたような加工痕跡が部分的に見られる。	コナラ黒風
160	189	254ビット	建築部材か	33.2			一見自然木の上位にも見えるが、二面を平面に加工している可能性あり。ただ加工痕跡は認められない。	スギ
				5.3				
				4.3				
161	204	1172土坑	木桶	44.9			明確な加工痕は認められないが、平滑な面が作りだされている。裏面は縱方向に凹凸がある。丁寧な加工は施されていたかとみられる。繊維は認められないが、表面に深い部分と考えられる。	ヤナギ風
				28.9				
				2.1				
162	190	北西隅谷理土 最下層	板状木片	53.9			明確な加工痕は認められないが、表面が整形成されたような箇所もありとみられる。全体として、板状の形態を呈する。板材を作った所で生じた横片か。	スギ
				5				
				2.7				
163	193	北西隅谷理土 最下層	板状木製品	38.2			表面が分離したことなく、全体を加工していたとみられる。加工痕跡は認められないが、表面は平滑に作成されている。大きく縱方向に欠損しているため、との形態は不明である。	スギ
				6.5				
				3.8				
164	192	北西隅谷理土 最下層	板状木製品	28.6			丸太を長軸方向に分割しているため、表面が長方形を呈する。分割された面には加工痕跡はみとめられない。分割されて生じた面以外には、横枝が残る。	スギ
				5.6				
				2.9				
165	191	北西隅谷理土 最下層	板状木製品	32.25			薄い板状に作りだされる。側面は丁寧に整形成されて平滑に作りだされる。全体に、工具痕跡は把握できない。	クリ
				4.35				
				1.0				
166	203	北西隅谷理土 最下層	板状木製品	31.9			もとでは平面が長方形の板状を呈していたとみられる。裏面面でも縦方向にはついたような加工痕跡が若干みとめられる。	アカガシ黒風
				8.3				
				2				
167	207	北西隅谷理土 最下層	板状木製品	90.8			A面はほぼ平らになるまで削られたとみられるが、B面は木割れの際に生じた凹凸がある。側面は丁寧に整形成され、平滑な面を呈する。	スギ
				9.9				
				3.3				
168	197	北西隅谷理土 最下層	板状木製品	23.5			加工痕は明確にはとらえられないが、両面とも平滑な面が作りだされる。	アカガシ黒風
				10.2				
				1.8				
209	196	I-2-1	漆器柾		株存高1.9		口縁部分のみわざかに残存する。内外面とも、漆塗で着色される。	一
					0.3			
210	195	北西隅谷斜面 付近	円板状木製品	11.8			曲物のあたりもしくは底盤の使用品か?直縁部分の側面にも面取りが施されており、a面の断面でわかるように、上半部は両面から斜めに削って縁を尖らせていく。	スギ
				4.6				
				0.8				
221	登録番号 168	77柱穴(建物 4)	柱柾	61.5	長軸13.6 短軸12.1		断面が横円形を呈する	ヤナギ風
222	登録番号 167	76柱穴(建物 4)	柱柾	34.4	径9.4			コナラ黒風
223	登録番号 170	99ビット	柱柾	34	長軸18.5 短軸15		断面が横円形を呈する	クリ

単位:cm ( ) :残存値 -:計測不可 /  
-:計測項目無

表4-2 木器観察表

224	登録番号 356	19柱穴(建物10) 柱根	22.4	長軸9.7 短軸5.8	断面が楕円形を呈する	スギ	
225	登録番号 390	28ピット 柱根	44	長軸16.95 短軸14.8	断面が楕円形を呈する。全体に炭化している。	クリ	
226	登録番号 169	78柱穴(建物 4)	柱根	39.4	長軸15.5 短軸11.8	断面が楕円形を呈する	ヒノキ
	登録番号 171	99柱穴(建物 2)	柱根か	15	直径6	高食が悉く、断面になつている	—

表5 瓦観察表

遺物番号	実測番号	出土遺構名・層名	種別	長合	色調	形状・手法の特徴	現存率
				幅・径 厚み	釉土 焼成		
203	179	I-1-2	丸瓦	33.4	内:N4/灰	内面はタテ彫用引き後にナメ。玉縁部はヨコナメ。凹面は継ぎ丁目板で覆われると共に、糸切り粗縫も見られる。また、太溝による約1cm幅の凹面取りは脚部側面から玉縁部は2cm弱、広端面は28.5cm、玉縁面は1cm弱である。	95%
				14.2	外:N6/灰		
				2.15	断:N6/灰白		
204	178	I-1-1	丸瓦	28.2	内:N5/灰	内面は玉縁部は欠損する。凹面はタテ彫用引き後にナメ。凹面は継ぎ丁目板で覆われる。外縁部のや下の部分に粘土の接合痕が残る。凹面取りは脚部側面は1~1.5cm弱、広端面は4cm前後である。	80%
				14.4	外:N5/灰		
				2.4	断:N7/灰白		
205	83	I-1-1	丸瓦	33.8	内:N6/灰	内面はタテ彫用引き後にタテナメ。玉縁部はヨコナメ。凹面は継ぎ丁目板で覆われると共に、糸切り粗縫も見られる。また、太溝による約1cm幅の凹面取りは脚部側面から玉縁部は約1.5cm、広端面は6cm前後、玉縁面は1.5cm弱である。	90%
				14.5	外:N6/灰		
				2.8	断:N6/灰		
206	180	I-2-2	丸瓦	28.0	内:N4/灰	内面はタテ彫用引き後にナメ。玉縁部はナメ。凹面は継ぎ丁目板で覆われる。玉縁のや下の部分に粘土の接合痕が残る。約1cm幅の凹面取りは脚部側面から玉縁部は22cmである。	破片
				13.6	外:N5/灰		
				2.1	断:N5/灰		
207	146	II-1	丸瓦	残存長9.65	内:10YR6/4に近い黄褐色 残存幅7.8 2.4	玉縁部分の破片である。凹面に二重沟と、布目痕があり。	破片
208	181	I-1-1	平瓦	32.2	内:2.5Y6/2灰黒 外:2.5Y6/2灰黒	凹面はていねいなナメで、糸切り粗縫が少々残る。背面には最大約1cmの面取りを行う。凸面は粗いナメで、糸切り粗縫が明瞭に残り、離れ砂が付着する。側面面は平滑にケツ引後、ナメ。	90%
				23.0	外:2.5Y6/2灰黒		
				2.3	—		

単位:cm ( ):残存率 —:計測不可 / :計測項目無

## 付章 自然科学分析

### 第1節 上私部遺跡（その3）発掘調査に伴う花粉分析

#### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

#### 2. 試料

分析試料は、古墳時代の須恵器甕を土坑に埋設した埋甕遺構において、埋甕埋土の上部と下部、木樋の3層、木樋底部の24層と25層、サブレンチの1層、3層、4層、5層から採取された計9点である。

#### 3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5% リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 4) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 5) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。またこの処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

#### 4. 結果

##### （1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉 28、樹木花粉と草本花粉を含むもの 5、草本花粉 25、シダ植物胞子 2 形態の計 60 である。これらの学名と和名および粒数を表 6 に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図 58 に示す。なお、200 個未満であっても 100 個以上の試料については傾向をみるために参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亞属、スギ、コウヤマキ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亞属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、トチノキ、ブドウ属、グミ属、ミズキ属、ハイノキ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属—ガマズミ属

[草本花粉]

ガマ属—ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アザサ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ベンケイソウ科、ノアズキ属、ツリフネソウ属、チドメグサ亞科、セリ亞科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ亞科、キク亞科、オナモミ属、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

单条溝胞子、三条溝胞子

## (2) 花粉群集の特徴

### 1) 埋甃

#### ・埋甃（下）

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亞属、シイ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、スギが比較的多い。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科—イラクサ科、ニワトコ属—ガマズミ属が低率に出現する。草本花粉ではヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科などが出現する。

#### ・埋甃（上）

花粉密度が極めて低くなり、草本花粉の占める割合が高くなる。とくにイネ科が高率に出現し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アブラナ科などが伴われ、ソバ属が出現する。樹木花粉と草本花粉を含むニワトコ属—ガマズミ属は減少する。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亞属、シイ属が減少する。

### 2) 木樺

#### ・3層

樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高い。草本花粉ではヨモギ属、イネ科を主に、カヤツリグサ科、セリ亞科、キク亞科、サジオモダカ属、タンポポ亞科などが出現する。樹木花粉ではスギ、コナラ属アカガシ亞属、シイ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クリ、コナラ属コナラ亞属、ツガ属、マツ属複雑管束亞属などが出現する。

#### ・24層、25層（木樺底）

両者は類似した出現傾向を示す。樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高い。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが出現する。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亞属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亞属、クリ、マツ属複雑管束亞属などが出現する。24層では、花粉密度が低くなり、イネ属型、ソバ属が出現する。

### 3) サブトレンチ（1層、3層、4層、5層）

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

5層および4層では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、シイ属、コナラ属アカガシ亞属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、コナラ属コナラ亞属、マツ属複雑管束亞属な

表6 上私部遺跡(その3) 07-1発掘調査における花粉分析結果

学名	分類群 和名	地塊		木種 3層	木種底 24層	木種底 25層	サブレンチ		
		上	下				1層	3層	4層
ArboREAL pollen	樹木花粉			1	1	1		2	1
<i>Podocarpus</i>	マキ属			5	1	9	3	2	5
<i>Abies</i>	モミ属			3	7	4	2	2	3
<i>Tragia</i>	ツガ属			1	7	5	18	8	17
<i>Pimea</i> subgen. <i>Diplazylon</i>	マツ属椎管束亞属			4	33	47	29	31	12
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ			3		2	1	1	3
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ			3					
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イネ科-イヌクサ科-ヒノキ科	3	49	35	25	33	4	6	20
<i>Juglans</i>	クルミ属			2					
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ			5					
<i>Alnus</i>	ハンノキ属			2	2	1			
<i>Betula</i>	カバノキ属			6	65	36	39	25	73
<i>Corylus</i>	ハシバミ属			1					
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサガ			14	19	25	16	10	7
<i>Castanea crenata</i>	クリ			6					
<i>Gaultheria shallon</i>	シイ属			1					
<i>Fagus</i>	ブナ属			5	16	19	33	23	28
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属			2	86	41	29	49	51
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanus</i>	コナラ属アカガシ亜属			1					
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ヤケニ			1					
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ			1					
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属			1					
<i>Ilex</i>	モチノキ属			1					
Celastraceae	ニシキギ科			1					
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ			1					
<i>Vitis</i>	ブドウ属			1					
<i>Elaeagnus</i>	グミ属			1					
<i>Cornus</i>	ミズキ属			1					
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属			1					
ArboREAL • NonarboREAL pollen	樹木・草本花粉	3	15	1		1	1	1	4
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イクラサ科			1					
Rosaceae	バラ科			55	52	103	129	81	37
Lemnaceae	マメ科			1	4	3	8	5	6
Araliaceae	ウコギ科			1				1	1
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属			20	2	2		1	2
NonarboREAL pollen	草本花粉								
<i>Typha-Spartogentus</i>	ガマ属-ミクリ属			5	1	6	1	1	1
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属			1	2	4	3	1	1
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属			1					
Gramineae	イネ科			1					
<i>Oryza</i> type	イネ属型			5					
Cyperaceae	カヤツリグサ科	5	22	18	42	29	8	7	5
<i>Anemone keiskei</i>	イボクサ			2	1				
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サニタタデ節			1					
<i>Rumex</i>	ギンギク属			4	2	4	2	2	1
<i>Fagopyrum</i>	ゾバ属			1					
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科			1	4	4	2	1	3
Caryophyllaceae	ナデシコ科			4	1				
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属			1					
Cruciferac	アブラナ科	4	2		2	1			2
Crasulaceae	ベンケイソウ科			4					
<i>Dumbaria</i>	ノアズキ属			1			3	2	2
<i>Impatiens</i>	フリフネソウ属			2					
Hydrocotyleoidae	チドメグサ科			3	2	4	4		2
Apiaceae	セリ科	2	5	13	1	11	4	11	5
<i>Plantago</i>	オオバコ属			1					
Valerianaceae	オミナエシ科			2	5	4	2	3	1
Lactuceidae	タンポポ科			2	2	9	3	6	3
Asteroidae	キク科			3					
<i>Xanthium</i>	オナミ属			10	55	110	55	60	40
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属			1					
Fern spore	シダ植物胞子			1					
Monosporite spore	单孢囊胞子			2	7	18	8	5	6
Triporate spore	三孢囊胞子			41	296	226	213	194	252
ArboREAL pollen	樹木花粉			3	38	8	5	9	13
ArboREAL • NonarboREAL pollen	樹木・草本花粉			82	160	281	261	212	100
NonarboREAL pollen	草本花粉			126	494	515	479	415	365
Total pollen	花粉总数	9.6	4.4	1.1	1.4	3.8	5.7	1.3	9.0
Pollen frequencies of 1cm <sup>-2</sup>	試料1cm <sup>-2</sup> 中の花粉密度	$\times 10^2$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^4$	$\times 10^2$	$\times 10^3$	$\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	11	21	9	9	7	7	9	14
Fern spore	シダ植物胞子	3	9	21	12	9	9	22	7
Hedmitic eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化産物	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(-)	(-)	(++)	(+)	(++)	(-)	(++)	(-)

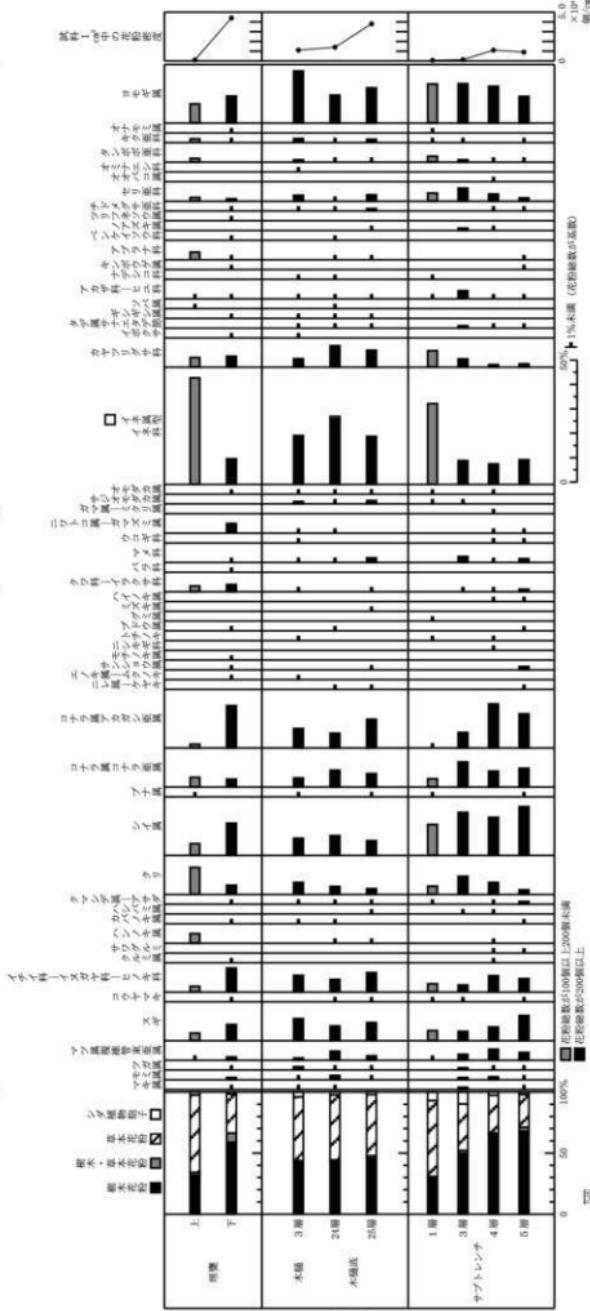


図 58 上私部遺跡  
(その3) 07  
-1 発掘調査  
における花粉  
ダイアグラム

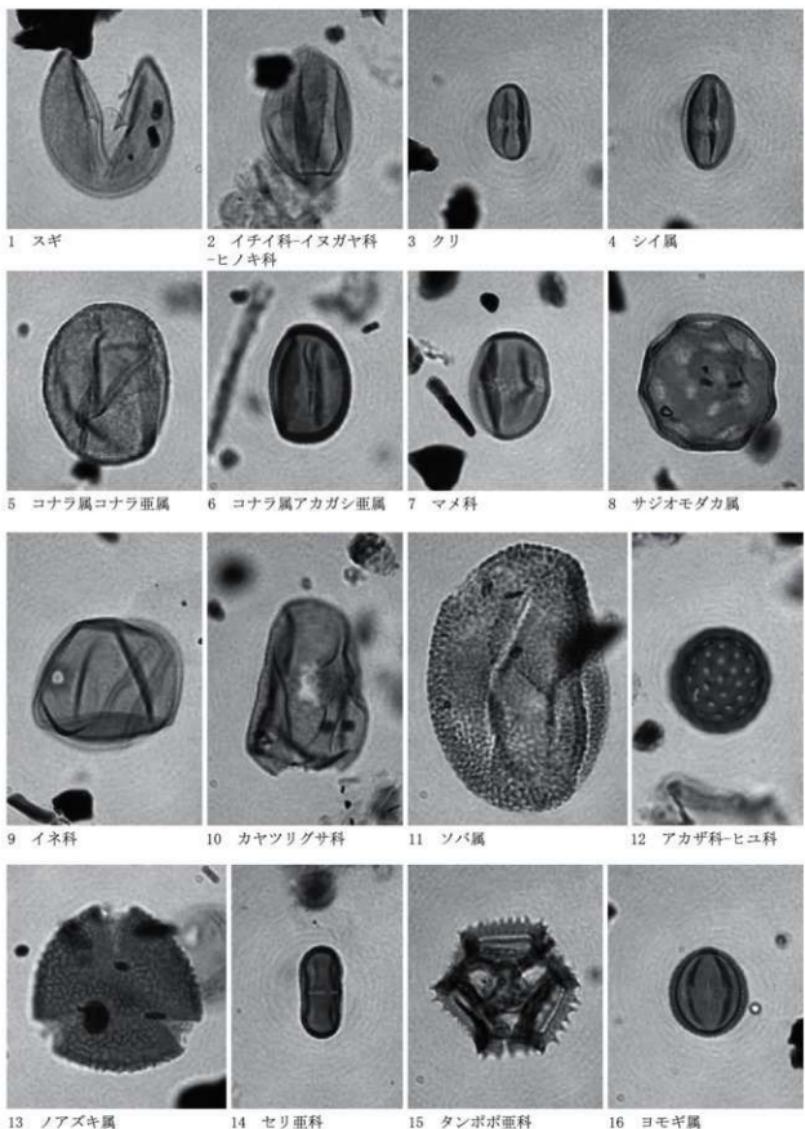


図 59 上私部遺跡の花粉

どが比較的多い。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科などが出現する。

3層では、花粉密度は低くなり、草本花粉の占める割合がやや増加する。樹木花粉のコナラ属アカガシ亞属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、スギが減少し、クリが微増する。

1層では、さらに花粉密度が低くなり、草本花粉の占める割合が高くなる。イネ科が増加し、樹木花粉のコナラ属アカガシ亞属、コナラ属コナラ亞属、マツ属複維管束亞属などが減少する。

## 5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉構成と花粉組成の変化の特徴から植生の復元を行う。

### (1) 埋甕

#### 1) 埋甕（下）

樹木花粉の占める割合がやや高く、周辺の植生が反映されたと考えられる。周辺には、コナラ属アカガシ亞属、シイ属などの照葉樹林と、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、スギなどの針葉樹林が分布していたと推定される。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科—イラクサ科、ニワトコ属—ガマズミ属（ここではカナムグラ、カラムシ、ソクズなどの草本が近似し、生態的にも一致する）、草本花粉のヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科などが周囲に生育していたとみなされる。シイ属やクリなど乾燥したところに生育する樹木がやや多い。草本では虫媒花植物で花粉生産の少ないオモダカ属やイボクサなどの水生植物が検出され、これら草本が近接して生育していたか、埋甕が水利に関連していたことが考えられる。

#### 2) 埋甕（上）

花粉密度が極めて低くなり、堆積速度が速かったことが考えられる。ただし、草本花粉の占める割合が高くなってしまい、埋甕（下）とは異なる花粉群集であり両者には時間差が考えられる。栽培植物を多く含むイネ科、アブラナ科、ソバ属が出現し、周辺には農耕地が分布し、コナラ属アカガシ亞属、シイ属の照葉樹林は減少し、クリの二次林が増加していたと推定される。

### (2) 木樁

花粉の出現傾向は埋甕の下層の時期とやや類似する。周辺には、コナラ属アカガシ亞属、シイ属などの照葉樹林と、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、スギなどの針葉樹林が分布し、木樁周囲にヨモギ属、イネ科が生育していたと思われる。オモダカ属、サジオモダカ属、タデ属サナエタデ節などの水草も出現し、木樁が滞水していたか、水草などが生育する水域の影響を受けるような木樁であったと推定される。

### (3) サブトレント（1層、3層、4層、5層）

花粉構成と花粉組成の変化の特徴から下位より植生の復元を行う。

#### 1) 5層および4層

シイ属、コナラ属アカガシ亞属の照葉樹林が比較的近接して分布していたと考えられ、やや遠方にスギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、マツ属複維管束亞属などの針葉樹林が分布していた。周囲はヨモギ属、イネ科などの草本が生育し、日当たりの良い環境であったと考えられる。台地や斜面の乾燥地を好むシイ属が多く、周辺には台地等のやや乾燥したところが多かったと推定される。

#### 2) 3層

コナラ属アカガシ亞属の照葉樹林要素が減少する、一方、ヨモギ属やクリの人為ないし二次林要素が増加し、人為干渉地が拡大したと推定される。

#### 3) 1層

イネ科が増加しヨモギ属とともに草本がより多くなり、森林が減少する。埋甕（上）の花粉群集とは草本の多いことで類似し、草本が優勢な人為干渉の著しい植生が分布していたと推定される。

## 6. まとめ

埋甕（下）と木樋は類似する花粉群集である。すなわち、周間にヨモギ属、イネ科が生育し、周辺にコナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹林と、イチイ科一イヌガヤ科ヒノキ科、スギなどの針葉樹林の分布が示唆された。埋甕と木樋は、オモダカ属などの水生植物が生育する水域とつながっており、その影響を受けていたと推定された。下部にあたるサブトレンドの4層、5層では森林が比較的多く、シイ属、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹林が比較的近接して分布していた。最上部とみなされる埋甕（上）およびサブトレンドの1層の時期は、森林が減少し草本の優勢な人為干渉の著しい植生が分布していたと推定された。

## 参考文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店。p.248-262.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。60p.
- 中村純（1973）花粉分析。古今書院。p.82-110.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究。13.p.187-193.
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学。第10号。p.21-30.
- 中村純（1980）日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集。91p.

## 第2節 放射性炭素年代測定

### 1. はじめに

大阪府交野市所在の上私部遺跡（その3）より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtatidze、Jorjoliani、測定は小林、丹生、伊藤、本文は伊藤、中村が作成した。

### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表7のとおりである。試料は部位不明で生の木材1点である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。  
結果

表8に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ<sup>13</sup>C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代範囲を、表8下図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

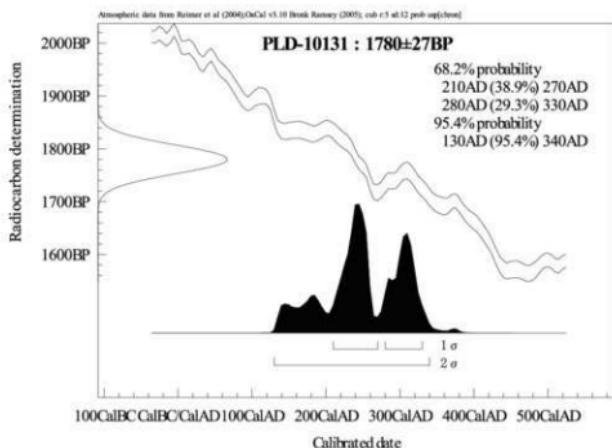
<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差(±1σ)は、

表7 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-10131	遺跡名：上私部遺跡(その3)	試料の種類：生材 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)

表8 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PLD-10131	-25.11 $\pm$ 0.35	1780 $\pm$ 27	1780 $\pm$ 25	210AD (38.9%) 270AD 280AD (29.3%) 330AD	130AD (95.4%) 340AD



測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$  年代がその $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

#### 暦年較正

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された $^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期  $5730 \pm 40$  年) を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$  年代の暦年較正には OxCal3.10 (較正曲線データ : INTCAL04) を使用した。なお、 $1\sigma$  暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$  年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に  $2\sigma$  暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その

範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。それぞれの曆年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

### 3. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び曆年較正を行った。試料（PLD-10131）の $2\sigma$ 曆年代範囲は 130-340calAD（95.4%）であり、弥生時代後期から古墳時代前期に相当する。

なお、木材の<sup>14</sup>C年代は試料とする部位が生育していた年代を示す。木材は部位によって形成された時期が異なるため、古い時期に形成された組織はその分古い年代を示す。たとえば、最外年輪の年代は枯死・伐採年を示し、内側の年輪ほど古い年代を示す。今回測定した試料は部位不明の木材であったため、枯死・伐採年よりも古い年代を示している可能性を考慮する必要がある。

# 写 真 図 版





2 調査区東半部古墳時代遺構面全景（南から）



2 調査区西半部古墳時代遺構面全景（東から）



1 調査区北半部古墳時代遺構面全景（南東から）



1 調査区南半部古墳時代遺構面全景（東から）



14 土坑（南から）



39 土坑（南から）



建物1（北東から）





18 土坑（南から）



19 溝・20 溝  
・柱穴列 12  
(南から)



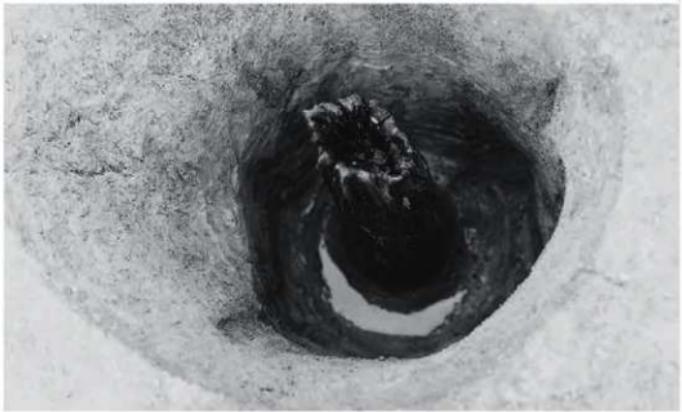
建物 2 検出状況  
(北東から)



建物2完掘状況(北から)



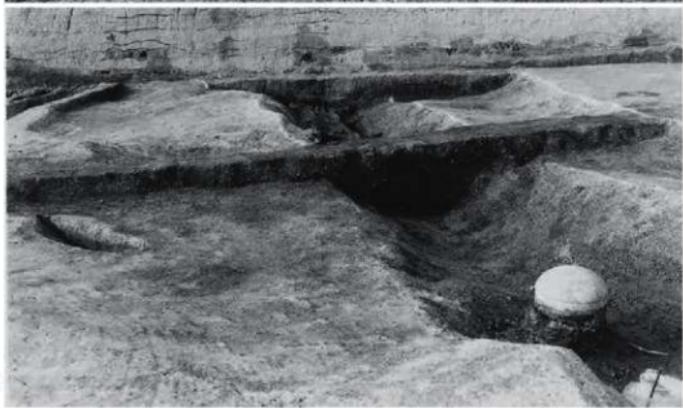
建物3完掘状況(北から)



77柱穴(南西から)



21 溝遺物出土状況  
(東から)



21 溝土層断面  
(南から)



21 溝遺物出土状況  
(東から)

図版八  
遺構





1172 土坑出土壺  
口縁部接写(北から)



1172 土坑I層  
掘削状況(西から)



1172 土坑VI層  
上面輸出状況(南から)



1172 土坑土層断面  
(南東より)



1172 土坑土層断面  
(北西より)



1172 土坑VI層上面  
検出状況(北東から)



1172 土坑VI層上面検出状況（南西から）



1172 土坑VI層断ち割り状況（北から）



1172 土坑完掘状況  
(北から)



154 溝土層断面と遺物  
検出状況（東から）



153 ピット遺物出土状況  
(東から)



調査区北西隅検出  
谷地形（東から）



調査区北西隅検出谷地形  
土層断面（東から）



建物 10・建物 7  
(東から)



建物9・建物8(東から)



建物10(東から)



建物7(西から)



266 土坑遺物出土状況  
(東から)



建物 11(東から)



建物 12(東から)



中世遺構面全景（南東から）



1溝・2溝・3溝・畦畔4・5溝（南から）



畦畔2・畦畔3（南から）



1 調査区北半部中世遺構面（東から）



1 調査区中世遺構面全景（南から）





43



44



47



48



49



50



66



73



56



69



62



70



53



89



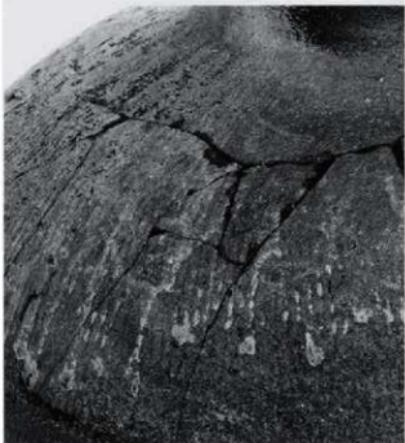
96



91



93



|



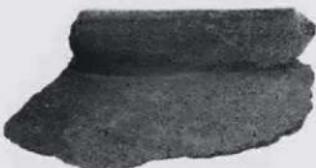
97



|



100



102



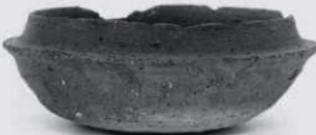
103



104



107



109



111



108



116



121



117



127



113



114



123



128



137





141



144



124



224



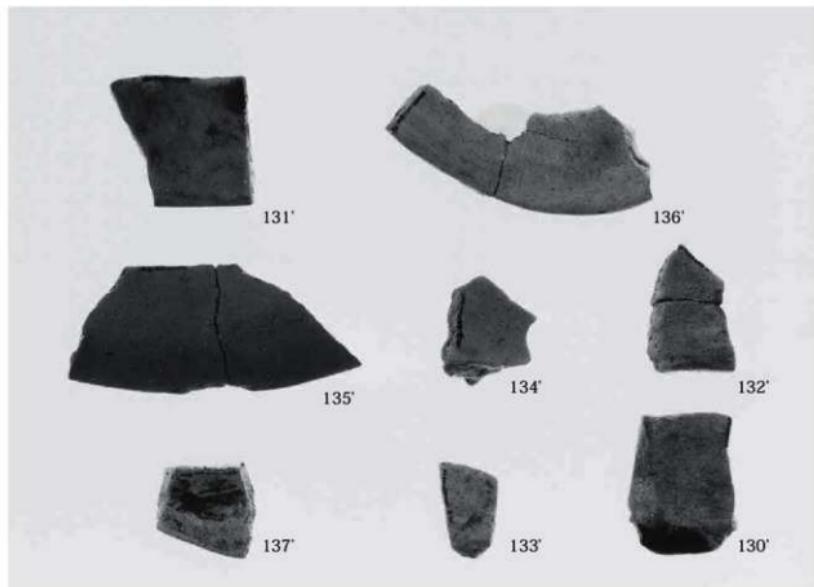
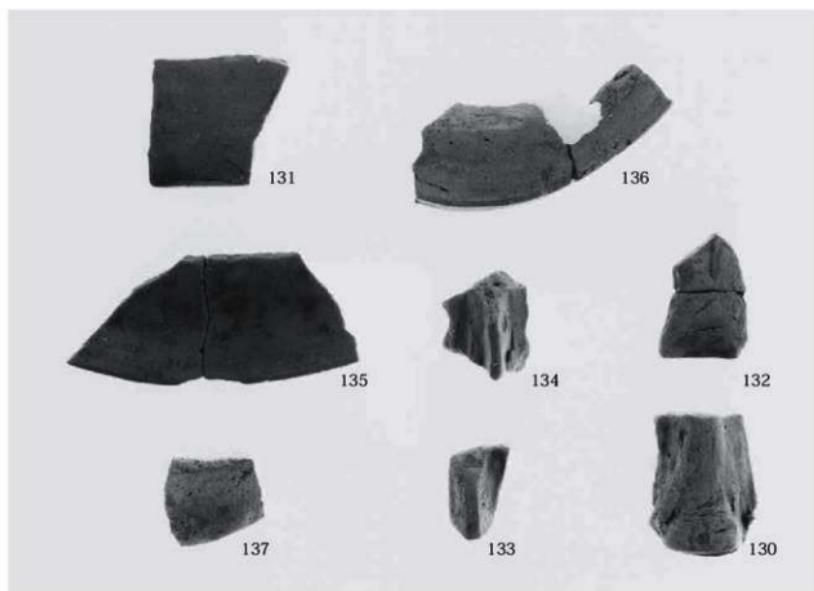
125

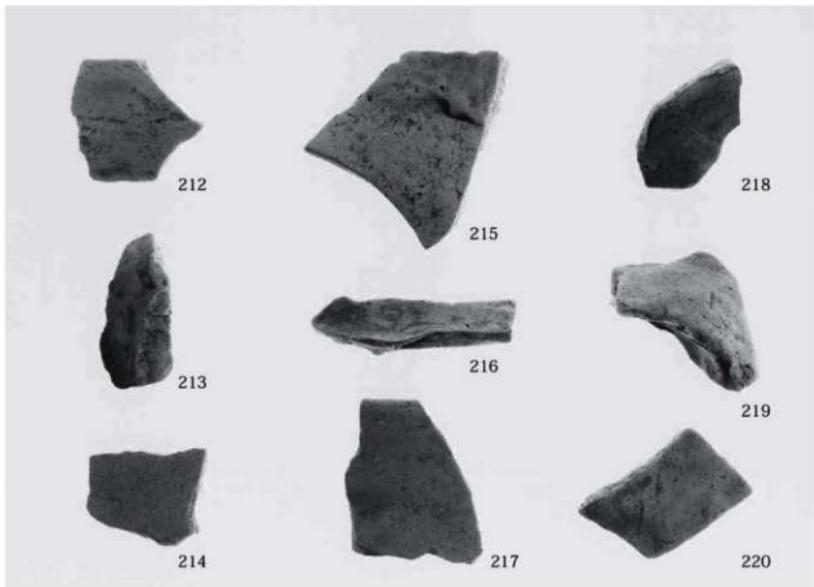
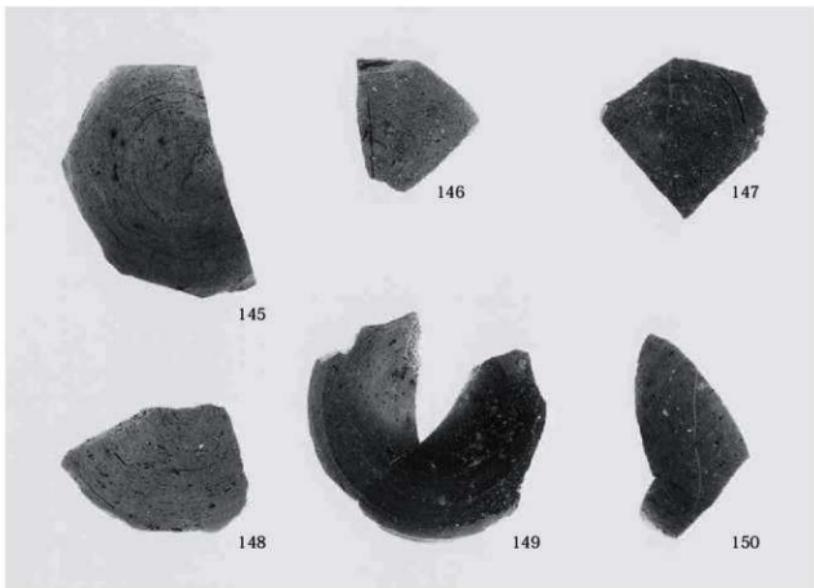


122



140







199



193



194



197



188



200



192



202



196



201



225



—



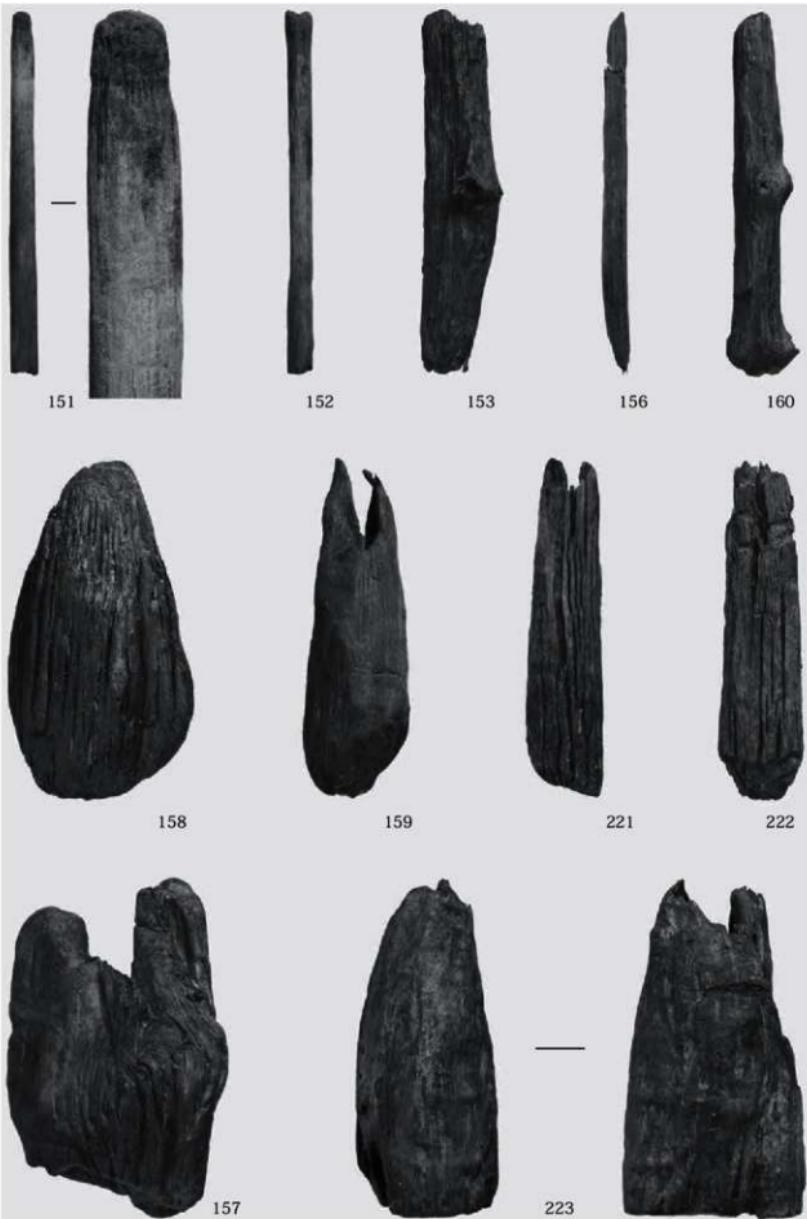
205



203



208

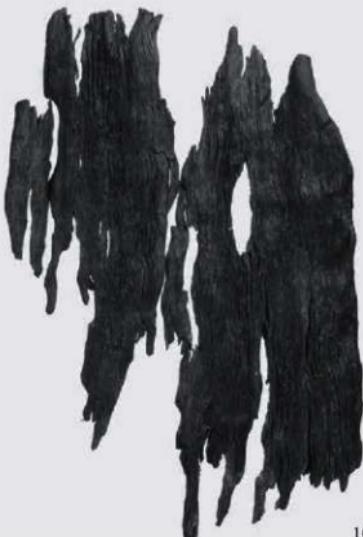




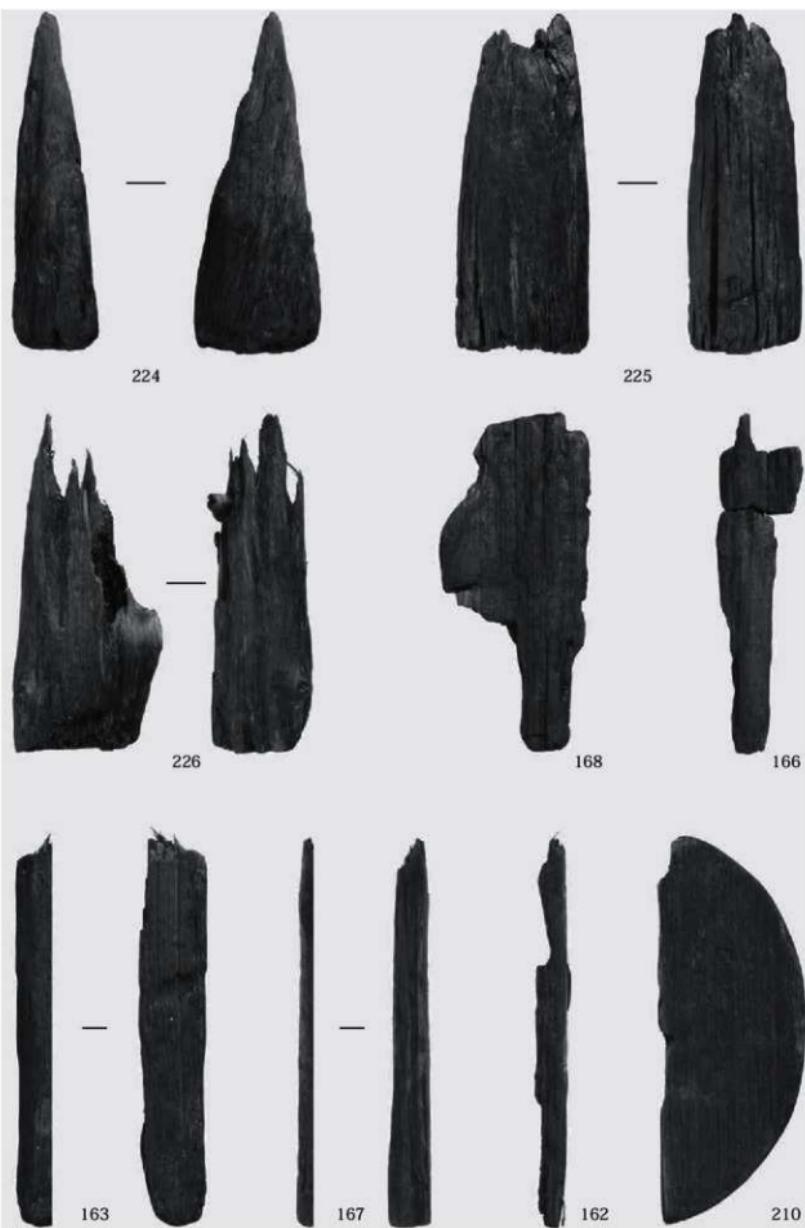
155



154



161





[第Ⅱ部]

有池遺跡（その6）07-1

上私部遺跡（その4）07-2

上私部遺跡（その4）08-1

の発掘調査成果報告

## 凡　　例

1. 本書に掲載した遺構実測図・地形図などに付された方位は、すべて座標北を示している。
2. 本書で使用した測量基準線は、世界測地系による国土座標を基準に、当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル（暫定版）』(2003) に準拠している。座標値は、すべてmで統一した。
3. 本書で使用した標高値は、東京湾平均海水位 (T.P.) を使用した。
4. 実測図の縮尺については、掘立柱建物は 80 分の 1 に統一した。その他の遺構については、それぞれスケールバーを用いて、縮尺を図中に明記した。なお、断面図・見通し図の位置は、平面図中に「T」字形で示し、断面図には方位を記入した。
5. 遺構番号は、全調査区にわたっておむね発掘調査の段階で付した番号を、そのまま使用している。このため、遺構名の表記は、「105 竪穴住居」、「101 溝」のように、「番号+遺構の属性」となっている。ただし、既往の調査において確認されている遺構を引用する場合は、既報告の名称をそのまま用い、〔 〕で括って区別した。今回検出した遺構と連続する場合は、「現調査遺構名+〔既往の調査遺構名〕」で示した。  
なお、遺構番号は、各調査区ごとに 1 から順に付した。
6. 遺構平面図には、極力、遺構名を掲載したが、ピットについては見辛くなるため、あえて番号のみを掲載したものがある。
7. 遺物実測図の縮尺は、基本的には 3 分の 1 に統一したが、他の縮尺をとったものもある。縮尺は、図版ごとに示した。遺物番号は、図版ごとに付番した。
8. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄著『新版 標準土色帖』2008 年版 農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修 を基準とした。

# 目 次

## 凡 例

## 目 次

第1章 調査の経緯と調査方法.....	133
第1節 調査に至る経緯と経過.....	133
第2節 調査地の立地.....	134
第3節 調査区の設定.....	135
第4節 調査方法.....	136
第2章 調査成果.....	137
第1節 第1調査区.....	137
第2節 第2調査区.....	160
第3節 第3調査区.....	166
第4節 第4調査区.....	198
第5節 まとめ.....	209

## 挿 図 目 次

図1 調査地位置および周辺の遺跡分布図 .....	133
図2 現往の調査範囲および今回の調査対象範囲 .....	134
図3 調査区設定図 .....	135
図4 第1調査区基本層序模式図 .....	137
図5 1-3区西壁・中央壁土層断面図 .....	138
図6 第1調査区遺構面全体図（中近世） .....	139
図7 第1調査区遺構面平面図（1）・1-2区遺構平面・断面図 .....	143
図8 第1調査区遺構面平面図（2） .....	144
図9 1-5区遺構平面・断面図 .....	145
図10 第1調査区遺構面平面図（3） .....	146
図11 1-3区遺構平面・断面図 .....	147
図12 第1調査区遺構面平面図（4） .....	148
図13 1-3区遺構平面・断面図 .....	149
図14 第1調査区遺構面平面図（5） .....	150
図15 1-3区遺構平面・断面図 .....	151
図16 第1調査区遺構面平面図（6） .....	152
図17 1-4区遺構平面・断面図（1） .....	153

図 18	1－4 区遺構平面・断面図（2）	154
図 19	1－4 区遺構平面・断面図（3）	155
図 20	第1調査区遺構面平面図（7）・1－1 区遺構平面・断面図	156
図 21	第1調査区出土遺物（1）	157
図 22	第1調査区出土遺物（2）	158
図 23	第1調査区出土遺物（3）	159
図 24	第2調査区基本層序模式図	160
図 25	2－1 区北西壁断面図	161
図 26	2－2 区北西壁断面図	162
図 27	第2調査区遺構面全体図（中近世）	163
図 28	213 積穴住居周辺遺構平面・断面図	164
図 29	第2調査区出土遺物	165
図 30	第3調査区基本層序模式図	166
図 31	第3調査区壁・珪断面図	167
図 32	第3調査区遺構面全体図（古墳時代後期～古代初頭）	169
図 33	第3調査区遺構面平面図（1）	171
図 34	第3調査区遺構面平面図（2）	172
図 35	第3調査区遺構面平面図（3）	173
図 36	第3調査区遺構面平面図（4）	174
図 37	第3調査区遺構面平面図（5）	175
図 38	第3調査区遺構面平面図（6）	176
図 39	第3調査区遺構面平面図（7）	177
図 40	99 積穴住居平面・断面図	178
図 41	105 積穴住居平面・断面図	179
図 42	117・118 積穴住居平面・断面図	180
図 43	167 積穴住居平面・断面図	181
図 44	120 積穴住居平面・断面図	182
図 45	296 積穴住居平面・断面図	183
図 46	297 積穴住居平面・断面図・296 積穴住居柱穴平面・断面図	184
図 47	303 積穴住居および周辺遺構平面・断面図	185
図 48	〔建物 14〕平面・断面図	186
図 49	〔建物 15〕・〔建物 26〕平面・断面図	187
図 50	〔建物 28〕・〔建物 37〕平面・断面図	188
図 51	〔建物 38〕・〔建物 47〕平面・断面図	189
図 52	〔建物 52〕・〔建物 54〕平面・断面図	190
図 53	建物 391 平面・断面図	191
図 54	建物 392 平面・断面図	192
図 55	第3調査区溝断面図	192

図 56	第3調査区土坑断面図	193
図 57	第3調査区出土遺物（1）	195
図 58	第3調査区出土遺物（2）	196
図 59	第3調査区出土遺物（3）	197
図 60	第4調査区基本層序模式図	199
図 61	第4調査区壁断面図	200
図 62	第4調査区遺構面全体図（古墳時代後期～古代初頭）	201
図 63	建物 431 平面・断面図	202
図 64	建物 432 平面・断面図	203
図 65	建物 433 平面・断面図	204
図 66	建物 460 平面・断面図	205
図 67	建物 461 平面・断面図	206
図 68	建物 572 平面・断面図	207
図 69	建物 573・建物 576 平面・断面図	208

## 挿入写真目次

写真 1	現地調査 機械掘削状況	136
写真 2	現地調査 人力掘削状況	136
写真 3	写真測量 実施状況	136
写真 4	現地調査 測量作業状況	136

## 写真図版目次

図版 1	遺構 1. 1-1 区 中世遺構面全景（北西から）	
	2. 1-2 区 中世遺構面全景（南東から）	
図版 2	遺構 1. 1-3 区 中世遺構面全景（東から）	
	2. 1-3 区 85 溝完掘状況（北西から）	
	3. 1-2 区 30 土坑遺物出土状況（北から）	
	4. 1-3 区 87 井戸検出状況（南西から）	
図版 3	遺構 1. 1-3 区西半部 中世遺構面遺構完掘状況（南東から）	
	2. 1-4 区 中世遺構面全景（北西から）	
図版 4	遺構 1. 1-5 区 中世遺構面全景（南東から）	
	2. 1-5 区 130 土坑半裁状況（北東から）	
図版 5	遺構 1. 2-1 区 中世遺構面全景（東から）	
	2. 2-1 区 中世遺構面全景（西から）	

3. 2-1区西半部 中近世遺構面全景（東から）  
4. 2-1区中央部 古墳時代後期～中世遺構面全景（南から）  
5. 2-1区 213 竪穴住居完掘状況（西から）  
6. 2-2区 中世遺構面全景（東から）
- 図版6 遺構 1. 3-1区 中世遺構面全景（西から）  
2. 3-1区 中世遺構面全景（東から）  
3. 3-1区 102 溝完掘状況（南から）  
4. 3-1区 111 溝完掘状況（南から）
- 図版7 遺構 1. 3-1区東半部 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（西から）  
2. 3-1区西半部 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（東から）
- 図版8 遺構 1. 3-1区 105 竪穴住居周辺遺構検出状況（南から）  
2. 3-1区 105 竪穴住居完掘状況（南から）  
3. 3-1区 112 土坑完掘状況（南から）  
4. 3-1区 117・118 竪穴住居完掘状況（北から）  
5. 3-1区 120 竪穴住居完掘状況（南から）
- 図版9 遺構 1. 3-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（西から）  
2. 3-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（東から）
- 図版10 遺構 1. 3-2区 中世遺構面全景（南から）  
2. 3-2区 167 竪穴住居完掘状況（東から）  
3. 3-2区 167 竪穴住居竈遺物出土状況  
4. 3-2区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（東から）
- 図版11 遺構 1. 3-3区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（北西から）  
2. 3-3区 [建物26] 検出状況（南西から）
- 図版12 遺構 1. 3-4区 中世遺構面全景（北から）  
2. 3-4区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（北から）
- 図版13 遺構 1. 3-3区 303 竪穴住居完掘状況（西から）  
2. 3-4区 296 竪穴住居検出状況（西から）  
3. 3-4区 297 竪穴住居検出状況（南から）  
4. 3-4区 296 竪穴住居竈検出状況  
5. 3-5区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（南東から）
- 図版14 遺構 1. 3-6区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（北から）  
2. 4-1区 中世遺構面全景（西から）  
3. 4-2区 中世遺構面全景（西から）  
4. 4-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（西から）
- 図版15 遺構 1. 4-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（南から）  
2. 4-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（東から）
- 図版16 遺構 1. 4-2区 古墳時代後期～古代初頭遺構面検出状況（西から）  
2. 4-2区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（南から）

- 図版 17 遺物 1. 第1調査区 85 溝出土遺物（1）  
2. 第1調査区 85 溝出土遺物（2）
- 図版 18 遺物 1. 第1調査区 85 溝出土常滑燒壺底部  
2. 第1調査区 85 溝出土備前燒壺底部  
3. 第1調査区 85 溝出土備前燒壺底部織維付着部分拡大  
4. 第1調査区 85 溝出土土師器皿  
5. 第1調査区 85 溝出土青磁碗底部  
6. 第1調査区 85 溝出土白磁碗底部
- 図版 19 遺物 1. 第1調査区 86 溝出土瓦質土器擂鉢  
2. 第1調査区 86 溝出土遺物  
3. 第1調査区 87 井戸出土遺物
- 図版 20 遺物 1. 第1調査区 124 溝出土土師器皿
- 図版 21 遺物 1. 第1調査区 遺構内出土遺物（1）  
2. 第1調査区 遺構内出土遺物（2）
- 図版 22 遺物 1. 第1調査区 122 溝出土遺物  
2. 第1調査区 127 溝出土水晶製石鏃未成品  
3. 第1調査区 中世包含層出土錢貨「皇宋通寶」「聖宋元寶」  
4. 第1調査区 中世包含層出土遺物
- 図版 23 遺物 1. 第2調査区 出土遺物  
2. 第2調査区 207 溝出土瓦質土器羽釜  
3. 第3調査区 4 溝出土天目茶碗  
4. 第3調査区 27 溝出土青磁碗
- 図版 24 遺物 1. 第3調査区 中世遺構・包含層出土遺物  
2. 第3調査区 古墳時代遺構内出土遺物
- 図版 25 遺物 1. 第3調査区 34 溝出土須恵器杯身  
2. 第3調査区 99 竪穴住居出土須恵器杯身  
3. 第3調査区 57 溝出土須恵器甕  
4. 第3調査区 105 竪穴住居出土遺物  
5. 第3調査区 118 竪穴住居出土土師器高杯
- 図版 26 遺物 1. 第3調査区 111 溝出土遺物  
2. 第3調査区 111 溝出土須恵器杯身  
3. 第3調査区 111 溝出土壺  
4. 第3調査区 111 溝出土鐵滓  
5. 第3調査区 111 溝出土砥石  
6. 第3調査区 111 溝出土須恵器甕口縁  
7. 第3調査区 111 溝出土須恵器甕口縁  
8. 第3調査区 111 溝出土須恵器甕口縁
- 図版 27 遺物 1. 第3調査区 106 溝出土須恵器杯蓋

- 2. 第3調査区 112 土坑出土土師器高杯
  - 3. 第3調査区 119 土坑出土土師器高杯
  - 4. 第3調査区 古墳時代溝出土遺物
  - 5. 第3調査区 118 竪穴住居出土遺物
- 図版 28 遺物 1. 第3調査区 214 ピット出土土師器高杯  
2. 第3調査区 214 ピット出土土師器高杯  
3. 第3調査区 222 竪穴住居出土須恵器杯身  
4. 第3調査区 296 竪穴住居土師器甕  
5. 第3調査区 303 竪穴住居出土土師器高杯  
6. 第3調査区 308 ピット出土須恵器杯蓋  
7. 第3調査区 308 ピット出土土師器高杯  
8. 第3調査区 310 ピット出土須恵器杯身  
9. 第3調査区 337 溝出土土師器甕
- 図版 29 遺物 1. 第3調査区 296 竪穴住居出土遺物
- 図版 30 遺物 1. 第3調査区 297 竪穴住居出土遺物  
2. 第3調査区 296・297 竪穴住居出土滑石製白玉・ガラス製小玉・ガラス片  
3. 第3調査区 296 竪穴住居竈内出土骨片
- 図版 31 遺物 1. 第3調査区 古墳時代包含層出土遺物
- 図版 32 遺物 1. 第1調査区 101 溝出土木製鍬（中世末～近世初頭）  
2. 第1調査区 89 溝出土板状部材・杭（中世末～近世初頭）  
3. 第3調査区 1 水路出土漆器椀（近世）  
4. 第3調査区 1 水路出土板状部材（近世）
- 図版 33 遺物 1. 第1調査区 199 井戸出土棒状部材（近世）  
2. 第2調査区 206 流路出土板状部材（近世）  
3. 第2調査区 206 流路出土角材状部材（近世）  
4. 第2調査区 206 流路出土漆器椀（近世）  
5. 第4調査区 407 ピット出土柱根（古墳時代後期～古代初頭）  
6. 第4調査区 411 ピット出土柱根（古墳時代後期～古代初頭）  
7. 第4調査区 490 ピット出土柱根（古墳時代後期～古代初頭）

# 第1章 調査の経緯と調査方法

## 第1節 調査に至る経緯と経過

有池遺跡および上私部遺跡は、交野市青山を中心として広がる周知の遺跡である（図1参照）。現時点では、上私部遺跡が府道736号交野久御山線を西限として東に広がり、さらにその東側の微高地に有池遺跡が存在する。両遺跡では、平成11年度に実施された第二京阪道路建設に先立つ確認調査において、埋蔵文化財が確認された。このため、平成14年度より、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所および日本道路公団関西支社（当時）の委託を受け、財團法人大阪府文化財センターが、大阪府教育委員会の指導のもと、現在も調査を継続的に実施している。このうち平成14・15年度には、有池遺跡で33,874m<sup>2</sup>、上私部遺跡で15,554m<sup>2</sup>という広範囲にわたる調査をおこない、その結果、上私部遺跡は古墳時代中期～後期に存続した大規模集落であったこと、また有池遺跡が豪族居館を有する中世集落であることなど、歴史的事象が次々と明らかとなった。これまで希薄とされてきた当地の考古学的資料が急増し、地域の歴史認識が大幅に改められる契機となったのである。このため大阪府教育委員会は、事業用地内の細かい未調査地についても、稠密に遺構が分布する範囲については本調査が必要であると判断するに至った。

これらの経緯を受けておこなわれた今回の調査は、現在も使用されている生活道路（市道）および現

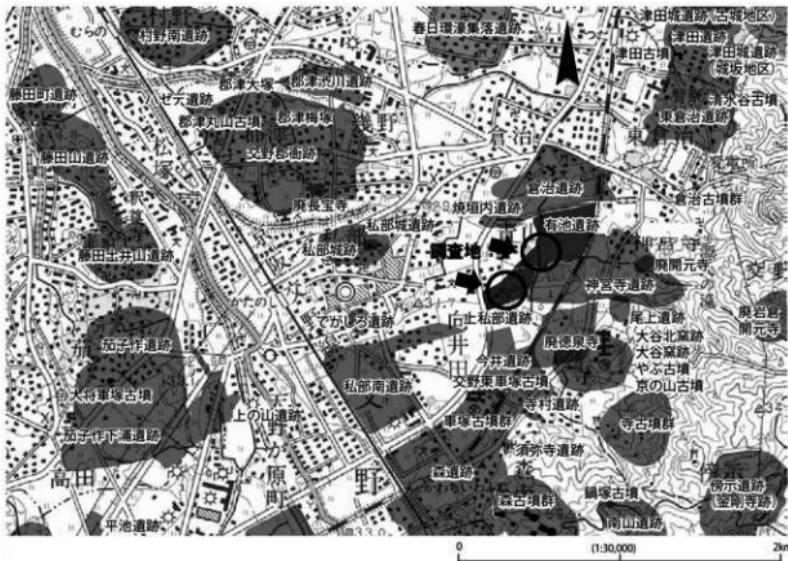


図1 調査地位置および周辺の遺跡分布図

況水路部分など、平成14・15年度に調査が及ばなかった未調査部分を対象とするものである（図2参照）。現地調査は平成20年2月より着手し、平成20年10月末日に完了した。平成19年度については、全調査区1,360m<sup>2</sup>のうち954m<sup>2</sup>を、平成20年度は残る406m<sup>2</sup>を調査対象とした（図3参照）。

限られた調査面積ではあるが、既往の調査成果から、希少な遺構および遺物の検出が予想された。

## 第2節 調査地の立地

調査地周辺の立地および環境については、既往の調査報告書である『有池遺跡I』『上私部遺跡I』および、本書第1部に詳述があるため、ここでは既往の調査成果を含めた概略を述べておきたい。

有池遺跡は東に交野山を臨み、生駒山地西麓から交野台地に移行する扇状地の末端に位置している。現在ではほぼ平坦な土地となっているが、最終遺構面に達すると、谷地形や微高地が櫛の目状につらなることから、本来は隨所に凹凸をもつ景観を呈していたと考えられる。かつての谷地形上に形成された湿地部分は中世以降、水田等の生産域として利用されてきた。これに対し、微高地部分では主に居住域が形成され、濠をめぐらさせた居館が建築されるなど、中世集落が盛行した。中世末～近世初頭になると集落は廃絶し、その後は生産域として、整地と耕作が繰り返され、平地化が進められた。

有池遺跡の西に接する上私部遺跡も、交野山の西麓に形成された扇状地の西端に位置しており、北川の旧流路もしくは扇状地を開析して形成された谷地形を臨む。調査区一帯はかつての自然堤防上にあたっており、古墳時代中期から後期、飛鳥時代には大規模な集落が営まれた。上私部遺跡の既往の調査面積は15,554m<sup>2</sup>であるが、そのほとんどが居住域にあたり、これまでに竪穴住居51棟、掘立柱建物81棟が復元されている。遺構の切り合い関係や出土遺物の考察から、5世紀前半から7世紀前半までの時間幅において、少なくとも5回の建て替えが想定できる。今回の調査では、新たに竪穴住居5棟、掘立柱建物10棟を復元しており、今後さらに遺構数は増えるものと予想される。また、渡来系遺物である新羅土器など、希少な遺物の出土も報告されており、遺跡の特異性をさらに際立たせている。

なお、上私部遺跡の西隣には、弥生時代中期初頭から中世まで存続する私部南遺跡が立地する。現在、順次調査が進められており、その様相が徐々に明らかとなりつつある。上私部遺跡に近い調査区では、古墳時代中期～飛鳥時代の水田が検出されており、これを上私部遺跡集落の生産域と仮定するならば、集落の範囲はさらに西側へと拡大する可能性がある。また、私部南遺跡集落の居住域とも近く、この一帯が古墳時代中期～飛鳥時代の中心的集落であったことが、確実視されている。

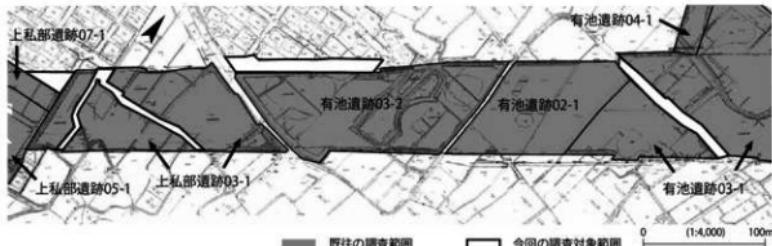


図2 既往の調査範囲および今回の調査対象範囲

### 第3節 調査区の設定

今回の調査では、大きく4箇所に調査区を設定した。このうち、第1調査区が有池遺跡に、第2調査区・第3調査区・第4調査区が上私部遺跡の範囲に含まれている。現地調査では、本体工事と平行して調査をおこなったため、各種工程の都合上、調査区をさらに分割した。調査区名に枝番号を付して小調査区を設定し、作業を進めた。

第1調査区は、現況では市道にあたること、また2本の工事用道路が横断することから、調査区を5区に細分し、それぞれ付け替えをおこないながらの調査となった。まず、市道を調査対象外用地（既往の調査地）に振り替えるため、その取り付け部分である東西の先端部（1-1区・1-2区）を調査した。次に、市道を付け替え、その完了後に工事用道路以外の部分（1-3区）を開口した。その後、工事用道路の付け替えをおこない、その跡地である1-4区・1-5区の調査をおこなった。

第2調査区は、生活道路を挟んで2-1区と2-2区に二分した。第2調査区には、現在も使用されている上水道管が埋設されているため、はじめにその埋設状況と遺構面の遺存を確認するための試掘をおこなった。その結果、遺構面が水管設置による搅乱を受けていることが判明したため、水管管理設部分を畦状に残した状態で調査をおこなうこととなった。2-1区と2-2区の調査は並行しておこなった。

第3調査区は、現在農業用として使用されている2本の水路範囲および、その両岸部分に相当する。水路および工事用道路、作業用通路付け替えの都合上、調査区は6箇所に細分した。現況の水路は、西側の1本が南から北へ、東側の1本が東から北へ向かって流れしており、調査区北端部で合流して路線外へと続く。このため、調査に先立ち、用水を移設する手段を講じた。

東側の水路は素掘りで水量はさほど多くない。このため、調査区の東側に新たに小溝を掘削して調査区外の流末に連結させ、代替とした。東側水路を含む範囲のうち、工事用道路を除く部分を3-1区、工事用道路の跡地を3-3区、水路合流部付近を3-5区として調査を進めた。

西側の水路は、コンクリート擁壁およびブロック積みを伴う護岸が施されている大規模なもので、常時一定の水量を有している。擁壁周辺の数箇所で試掘をおこなったところ、工事用道路より北側部（3-2区）では、擁壁設置時の搅乱により、遺構面の破損が著しいことを確認した。このため、コンクリート擁壁の撤去はおこなわず、擁壁継目からの漏水を防ぐため、流頭にてポンプによる揚水をおこない、擁壁内に通したホースにて水を運び、流末へ放出するという二重の対策をとった。しかし、工事用道路を振り替えた跡地にあたる3-4区では、遺構面の標高が周辺よりも下がること、また盛土が厚く、



図3 調査区設定図

水路設置時の搅乱が遺構面にまで達していないことが掘削段階で判明し、急遽、コンクリート擁壁を含む構造物すべてを撤去し、その下面を調査することとなった。結果、豊穴住居2棟を含む遺構群を、良好な状態で検出することができた。

なお、地域住民の作業用通路となっていた範囲(3-6区)は、2日間の通行止めを申請し、地域住民協力のもと、完了することができた。

第4調査区は、現況里道および住宅跡地に相当する。里道は生活道路であるため、調査は住宅跡地を4-1区として先行掘削し、道路付け替えの後、残る里道跡地を4-2区として調査をおこなった。

#### 第4節 調査方法

現地調査は、バックホーを用いて現代の盛土および近世・近代耕作土を除去した後、人力による掘削と精査をおこない、遺構面を検出した。また、主要な遺構面については、25tトラッククレーンを用いた高所からの撮影により、写真測量をおこなった。

また、図面作成のほか、写真用足場からの撮影、各遺構および遺物の出土状況の接写撮影等を随時おこない、記録保存に努めた。遺物は調査区および遺構ごとに取り上げて、登録番号を付し、整理した。

作成図面は整合を確認した後、デジタルトレースを用いた版組みをおこなった。出土遺物は洗浄、注記後、可能なものについては実測および製図ベン等を用いたトレースを施した後、写真とともに本書に掲載した。今回の調査にかかる一連の作業は、本書の刊行をもって完了した。



写真1 現地調査 機械掘削状況



写真2 現地調査 人力掘削状況



写真3 写真測量 実施状況



写真4 現地調査 測量作業状況

## 第2章 調査成果

### 第1節 第1調査区

#### 1. 調査区の状況と基本層序

**調査区の状況** 第1調査区は、東西に細長い形状をもつ調査区である。標高は、山手に近い東端部が高く、西端が低い。さらに、南から北へ向かって緩やかに下がっており、最も高い1-4区東端の遺構面はT.P.43.2 m、最も低い1-5区北西部ではT.P.40.5 m程度を測る(図4参照)。

現況は道路(市道)である。この道路には下水管が埋設されており、調査区中央を縦方向に貫いて場外へと続く。また、この下水管の埋設以前には、木杭および矢板を伴う近現代の用水路が同方向に設けられていた。このため、調査区の中央付近は、幅1~3mにわたり大きく擾乱を受けている。今回の調査では、擾乱による遺構面の破損範囲は、調査対象外として扱われた。

**基本層序** 道路のアスファルトおよび近現代の耕作土を除去すると近世耕作土があり、その下に中世包含層が残存する。この中世包含層は、中世後期包含層および中世末期～近世初頭包含層に分別できる。

中世末期～近世初頭包含層は、暗オリーブ灰色を呈する粗砂まじり粘土質シルトに細かいブロック土を多く含む搅拌層である。主として大型遺構の上層埋土およびその付近に厚く認められることから、周辺の凹凸を埋め立てた造成土であると考えられる。遺物の包含は少なく、稀に瓦器や中世の須恵器、天目茶碗の破片等が含まれている。

その下層にある中世後期包含層は、黒褐色を呈する粗砂まじりシルトを主体とする。黒褐色シルトブ

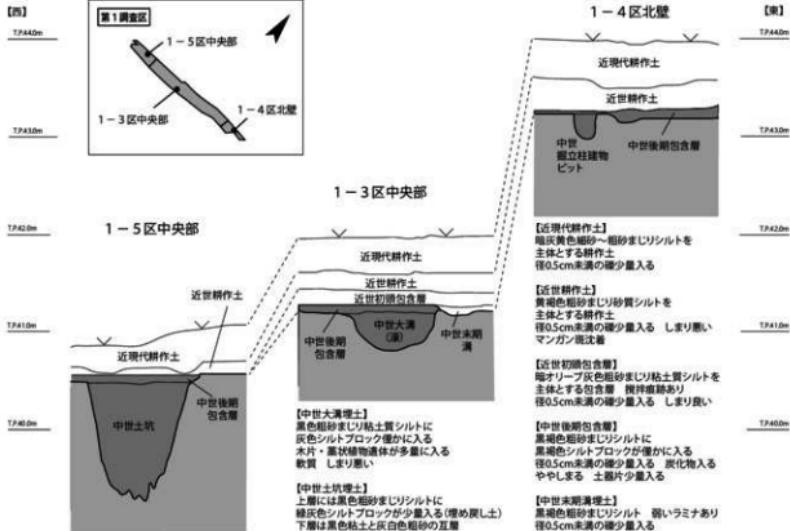


図4 第1調査区基本層序模式図

ロックがわずかに混じるもの、大幅な搅拌痕跡は認められない。10cm前後の薄層であるため、後世の擾乱により、堆積が認められない地点もある。

中世後期包含層を除去した面において、地山を確認した。地山上面が主要構造面に相当する。遺物の所属時期から、13世紀～15世紀頃まで存続した遺構面であると推測される。

なお、今回の調査では、調査区そのものが狭隘であるため、連続した調査区壁断面図を作成しにくい状況下にある。このため、任意で調査区内の一部を畦状に残し、柱状図として層序堆積の理解に努めた（図5参照）。

## 2. 検出遺構

調査区の両側では平成14年度に調査がおこなわれており、その結果、コの字状に大溝（濠）をめぐらせた大型掘立柱建物や、ピット群、列石を作り溝、区画溝群、石組み井戸、石敷き土坑などを有する大規模な中世集落が検出されている。その中で、今回の調査区は、集落の居住域と生産域（水田）を隔てる地点にあたっている（図6）。

今回の調査では、中世遺構面において、ピット、土坑、溝、井戸を検出した。ピットには、掘立柱建物の柱穴となる可能性が高いものが含まれている。溝には、水田耕作に伴う区画溝や鋤溝のほか、大型

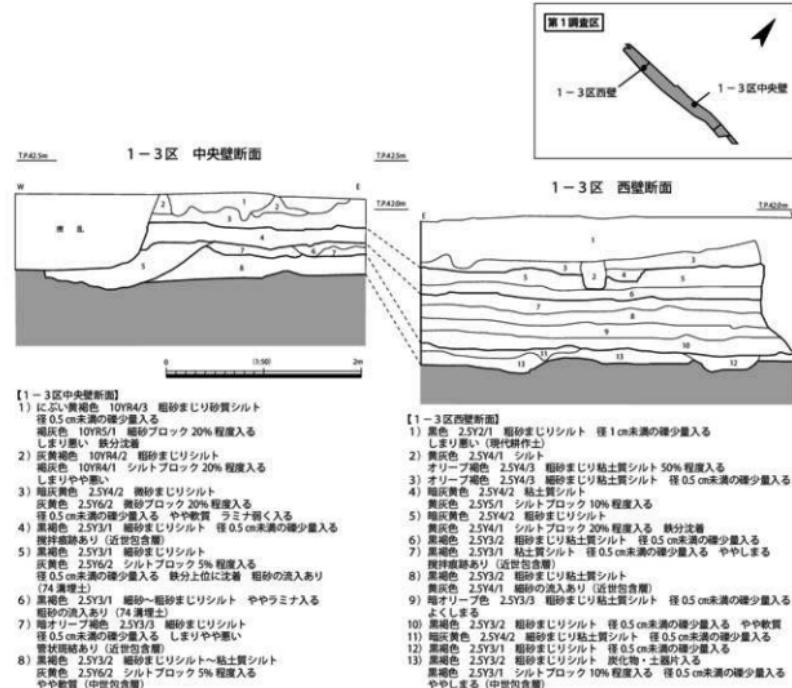


図5 1-3区西壁・中央壁土壌断面図

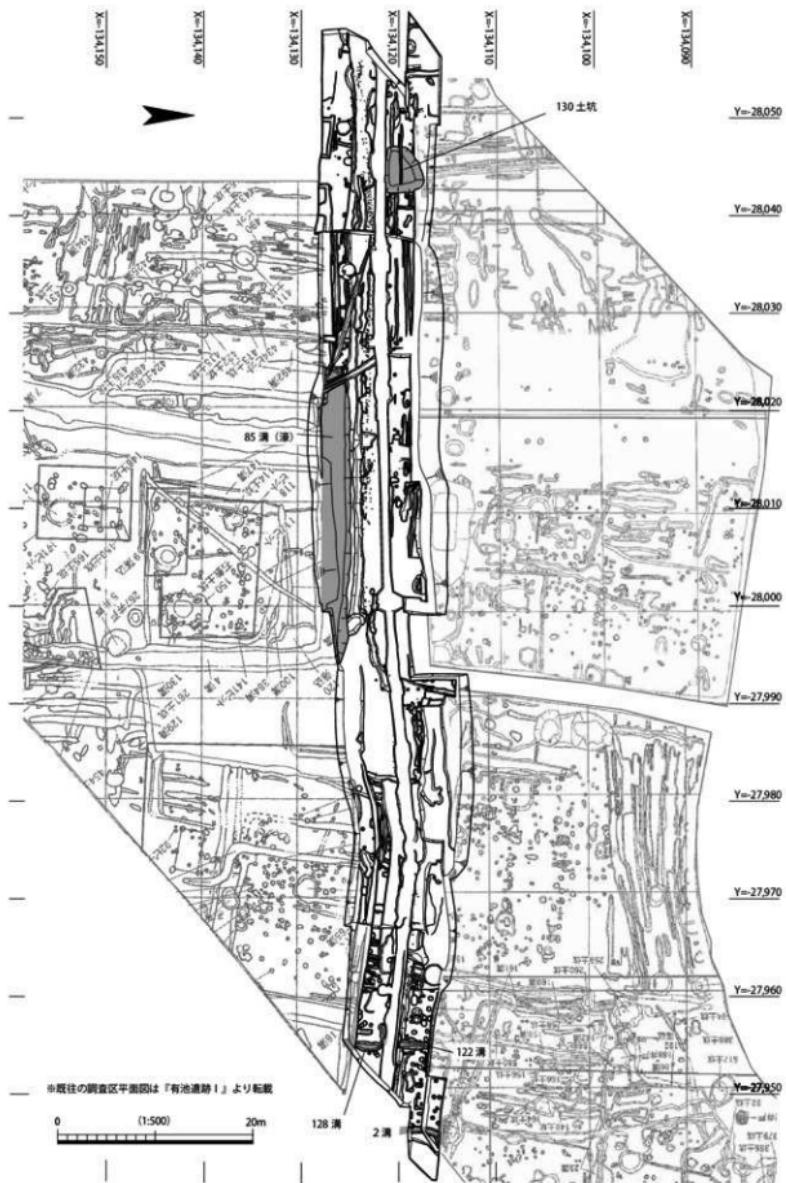


図6 第1調査区遺構面全体図(中近世)

建物を取り囲む濠の一部が含まれる。土坑は、大型のものから小型のものまで多数あり、井戸は、石組み井戸1基、素掘り井戸3基を確認した。

これらの遺構を概括すると、埋土や出土遺物からおむね三種に分類できる。ひとつは中世前期中に埋没した遺構で、数は少ないものの調査区東半部のピット群のいくつかや、土坑が該当する。埋土は、暗オリーブ灰色を呈する砂まじり粘土質シルトを主体とする。

次に掲げられるのが、中世前期から後期の遺物を含む遺構群であり、今回検出したものの中では最も多い。黒褐色粗砂まじりシルトを主体とする溝、ピット、土坑等が該当する。埋土は総じてしまが悪い。集落が最も拡大したときに掘削されたものと見られ、埋土からは瓦器碗や三足釜、羽釜、東播系須恵器などが出土する。また、土師器皿が多数出土した溝もこの時期の遺構である。

最後は、中世末期から近世初頭に掘削された遺構である。前述のとおり、この地域では中世末期に多量の搅拌土による埋め立てがなされたが、このとき、遺構内に溜まった泥水を排水するために設けられた溝等の施設がこれに相当する。埋土からは瓦質土器や陶磁器類の出土が認められる。

これらの遺構のうち、主要なものについて以下に報告する。なお本書では調査区面積が狭小であるため、小区ごとの記述はせず、調査区を連続させた状態で西端から追って図示し、記述する。また、既往の調査区において報告された遺構に連続する場合は、遺構名を〔 〕で括り、並列して示した。

**26溝(図7)** 1-2区において検出した南北方向の溝である。検出長3.3m、最大幅0.7mを測る。北接する既往の調査区ではさらに北へと伸びる様相が確認されている。最大深度は5cm程度と浅く、埋土は砂質である。断面観察では弱い筋状のラミナを確認した。この溝より東側と西側では斷溝の方向性を違えることから、水田区画に関連する溝であると考えられる。遺物の出土は認められなかった。

**27溝(図7)** 26溝の西側に位置する、やや大型の溝である。検出長1.3m、最大幅1.5m、最大深度は20cmを測る。既往の調査成果では、このまま北方向へ続くものの途中で幅狭となり、やがて消滅する。埋土は中世末期の埋め戻し土である地山ブロックを含む砂層が上位にあり、黄灰色～褐色を呈する粗砂～細砂が下位に堆積する。性格は不明であるが、流水痕跡が認められないことから、溝としての機能を有していない可能性がある。遺構内からは瓦器碗・土師器皿の破片が出土した。

**28土坑(図7)** 27溝の西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形、断面形状は半円形を呈する。南辺は確認できていないが、最大長1.3m、最大幅0.85m程度の規模をもつと推測される。埋土は上層に造成土、下層は灰色～灰オリーブ色を呈する中砂～細砂である。上層の造成土は、近世時の整地に由来する層であり、遺構の最終埋没時期は、周辺の溝群に比べて時代が下がる可能性がある。性格は不明である。

**29溝(図7)** 調査区西端で検出した南北方向に走る溝である。南端部でやや東へと方向を変える。検出した最大長は0.9m、最大幅は0.4m、最大深度は6cmを測る。埋土は中砂～極細砂で構成される。既往の調査では確認できおらず性格が不明である。遺構内からは瓦器碗・陶磁器の破片が出土した。

**30土坑(図7)** 26溝および27溝を完掘した状況で検出した遺構である。不定形な隅丸三角形ともいうべき平面形状を有しており、直径1.0～1.3m、最大深度50cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は上層・中層・下層に大別でき、上層は27溝埋土に由来するシルト、中層は黒褐色～オリーブ褐色を呈する砂まじり粘土質シルト、下層は灰色～オリーブ黒色粘土を主体とする。

中層を除去したところ、埋土中に拳大から人頭大の花崗岩を計7点検出した(写真図版2-3参照)。石肌は灰色～灰白色を呈するが、被熱のため部分的に黒色化が認められる。埋土中にも炭化物が多く含

まれていたため、土坑内で着火行為があったと推測できるが、燃焼した対象物は確認できていない。土器の碎片等は出土しておらず、土製品の焼成土坑であったとは考えにくい。また、石の被熱に対して出土した土器片には焼成痕跡がないことから、単なる廃棄土坑に点火したものとも考えがたい。遺構内からは、石のほか、瓦器椀・土師器羽釜が比較的大きな破片で出土した。

**52溝**（図11・14） 調査区南辺から北方向へ続く溝である。但し、検出長は0.7mと短い。最大幅は0.7m、最大深度は5cm程度である。南接する調査区では南方向へ伸び、建物の周囲をめぐる溝として復元されている。その性格をもつ遺構ならば、東方向へ屈曲し77溝へと連続する可能性がある。埋土は、黒褐色シルトを主体とする。遺構内からは瓦質土器三足釜、土師器皿、瓦器椀の破片（図21-1）が出土した。

**80土坑**（図13・14） 調査区東半部の南辺で検出した遺構である。東西に長い楕円形を呈しており、最大長1.72m、最大幅0.82mを測る。断面形状は、壁面がほぼ垂直に立ち上がる隅丸方形に似る。底面は平坦で、最大深度は28cm程度である。埋土は黒褐色～暗褐色粗砂まじりシルトを主体とする。遺構内からは、土師器皿が出土した。

**85溝〔8溝〕**（図10・11・12） 調査区中央南半部において検出した大型の溝である。今回の検出長は28.8m、最大幅は2.7m、最大深度は80cmを測る。既往の調査報告とあわせると、最大幅3.0m、を測る大溝が、一辺25～32mのコの字状を象り、大型建物を取り囲むように展開する。南側を除く東・北・西に溝がめぐっており、今回確認したのは北辺溝にある。断面形状は逆台形を呈しており、底面は平底に作られている。底面の標高を参照すると、掘削当初より北辺中央部分が最も低くなるように計画されたようである。掘り方の傾斜角度は、コの字状にめぐる内面側の傾斜は緩やかで、外側の立ち上がりは急である。

埋土は上・中・下の3層に大別できる。上層は中世末期の埋め戻し土である。中層は、黒色～オリーブ黒色粘土や粘土質シルトを主体とする軟質層であり、小枝や蘆、茎、草類などの植物遺体を多量に含む。このうち蘆は、葦や薺の腐食物である可能性がある。堆積状況からは、廃棄物とともに泥砂が堆積した状況を想像できる。上位には拳大の礫も隨所に含まれている。下層には粘土の沈殿や粗砂と粘土の互層が認められることから、水が溜まった状況下で、徐々に堆積した土壤であると推測される。これらのことから、下層は濠が掘削され、比較的清浄に保たれていた時期の堆積、中層は集落の後退期に廃棄場所として埋没が進んだ時期の堆積、上層は平坦化が図られた時期の埋め戻し土と見ることができる。中層から陶磁器の出土が多く認められており、その堆積時期は中世中期（14世紀後半～15世紀初頭）の範囲で捉えられる。なお、既往の調査では、この大溝の開削を13世紀後半、埋没時期を14世紀以降と推測する。

遺構内からは、常滑焼甕、備前焼壺、土師器皿、蓮弁文青磁碗、白磁碗、瓦器椀、瓦質土器羽釜、三足釜、東播系須恵器鉢、綱目叩きをもつ平瓦等が出土した（図22-20～24・写真図版17・18）。

**86溝**（図10・11） 調査区のほぼ中央を東西に向かって断続的に伸びる溝である。検出長は25m、最大幅は0.7mを測る。最大深度は12～20cm程度である。オリーブ黒色粗砂まじりシルトや粘土を埋土とし、所々に弱いラミナを形成する。調査区西半部の鋤溝群と同方向を示すことから、水田耕作にかかる遺構であると考えられる。遺構内からは、瓦器椀、施釉陶器椀、東播系須恵器鉢（以上写真図版19-2）、瓦質土器鉢（写真図版19-1）が1点出土した。

**87井戸〔28井戸〕**（図12・15） 調査区中央の北辺で検出した遺構である。掘り方は直径1.8mを測

る円形を呈する。段をつけて中央部を掘りくぼめており、段の底面に石組みを配する。中央部の深度は0.9mを測る。埋土は中世包含層である上層と、井戸本来の埋土である下層に分層できる。ただし、遺物は、上層からの出土が多い。埋土からは、瓦器椀・瓦器皿・土師器皿・瓦質土器三足釜等の破片のほか、被熱した花崗岩1点が出土した（写真図版19-3）。

**88溝【408溝】（図10・11）** 調査区を南北方向に走る溝である。確認できた最大長は2.2m、最大幅0.7mを測る。南接する既往の調査区では、60mほど南へ続き、西方向へ屈曲するようである。今回の調査では、その最大長をさらに伸ばしたこととなるが、調査区中央の搅乱を隔てた対岸では、連続する遺構を確認できない。最大深度は15cm程度、埋土は黒褐色粗砂まじりシルトを主体とする。既往の調査をあわせてみると、この溝より西側では掘立柱建物が復元できないことから、ある時期の居住域と生産域を区切る溝として位置づけることができる。遺構内からは、瓦器椀・瓦質土器の破片が出土した。

**89溝・101溝（図10・11）** 85溝の北西コーナーから斜め方向へ向かってそれぞれ西と北西方向に伸びる溝である。ともに近世初頭の遺構であり、図示した遺構の中では新しい類に属する。

89溝の検出長は6.7m、最大幅は0.8mを測る。最大深度は52cmを測ることから、掘削幅の割には深い印象を与える。これは101溝も同様で、最大長13.6m、最大幅0.75m、最大深度は85cmを測る。埋土は黒色やオリーブ黒色を呈する砂まじり粘土が主体である。

両溝に共通するのは、85溝内からはじまること、その取り付き部に木製樋を設置することである。89溝の木製樋は方形に切り出した木材の内部を削り抜いた作りである（写真図版32-W1）。101溝の樋は破損が著しく、底面のみの出土であったが、本来は同形状を呈していたと推測される。両溝は、85溝内から徐々に傾斜をつけて、西方、北西方へと下がっていることから、85溝内に溜まった泥水を他方へと抜き出すための排水溝であったと推測される。埋土からは陶磁器類の小片が出土した。

**97溝・100溝【7溝】（図10・13）** 85溝を横切って南北方向に伸びる溝である。100溝は85溝との交点付近において、97溝は、搅乱を挟んだその北側において検出した遺構であり、連続する可能性がある。100溝は、85溝とともに南接する既往の調査区において検出されており、ある時期に居住域の西限を区切る溝として報告されている。今回の調査では、断面観察によって、100溝の埋没後に85溝が掘削されたと考えられる切り合い関係を確認することができた。

100溝の最大幅は2.2m、最大深度は48cmである。但し、搅乱を大きく受けた箇所での検出であることから、本来は、既報告の通り、70cm前後の深度をもっていたものと推測される。埋土はオリーブ黒色粗砂まじり粘土質シルトを主体とする。端部には粗砂の流入が認められる。

97溝の最大幅は1.5mを測る。但し、削平のため最大深度は5cm程度を確認したに過ぎない。埋土はオリーブ黒色粘土質シルトを主体とする。遺構内から遺物の出土は認められなかった。

**118土坑（図12・13）** 85溝の北東コーナー付近において検出した土坑である。平面形状は瓢箪形、約3分の1程度を85溝に削られている。検出長は2.2m、最大幅は1.5m、最大深度は50cmを測る。埋土はオリーブ黒色を呈するシルトを主体とする。遺物の出土が認められず、性格は不明である。

**122溝【158溝】（図16・17）** 調査区東半部において確認した南北方向に伸びる溝である。検出長は3.0m、最大幅は0.7mを測る。既往の調査では、北側へ続くことが報告されている。今回の調査を含めると、20m程度の長さをもって確認できたことになる。最大深度は20cm程度、埋土は暗オリーブ褐色粗砂まじりシルトを主体とする。溝状遺構であるが、明確な流水痕跡はない。遺構内からは、土師質土器羽釜、瓦器椀、内面に煤が付着した土師器皿等、12～13世紀の土器がまとまって出土した（図

22-1~5・写真図版22-1)。

**124溝(図16・17)** 調査区西半部で検出した溝状遺構である。検出長は2.2m、最大幅は1.8mを測る。断面形状は逆台形で、東壁の立ち上がりが急である。最大深度は45cmを測る。埋土は中世包含層である黒褐色粘土質シルトを主体とする上層と、黒褐色～黒色粘土を主体とする下層からなる。

埋土上層からは、土師器皿が折り重なるような状態で、一括して出土した。個体数は計16点以上を数える。完形に復元できるものが多い。内面に煤が付着するものがあり、灯明皿を一括廃棄したものではないかと考えている(図22-6~19・写真図版20)。

**127溝〔159溝〕(図16・17)** 124溝の東側で検出した遺構である。周辺の溝群と同じ方向性をもち、南南西から北北東方向へと伸びる。北接する既往の調査区では、連続する溝が確認されており、あわせると20m弱の長さとなる。東側に大型の掘立柱建物が確認されていることから、居館をめぐる溝の西辺として想定することもできる。遺構内からは、瓦器楕や土師器皿が出土し、また、混入品であるが、水晶製石鐵未成品(図21-1・写真図版22-2)が出土した。

**128溝〔16溝〕(図16・17)** 調査区東端部の南辺において検出した溝状遺構である。南から北へ向かって伸び、調査区内で西へと屈曲する。ただし屈曲後は浅くなり、そのまま消滅する。既往の調査では、

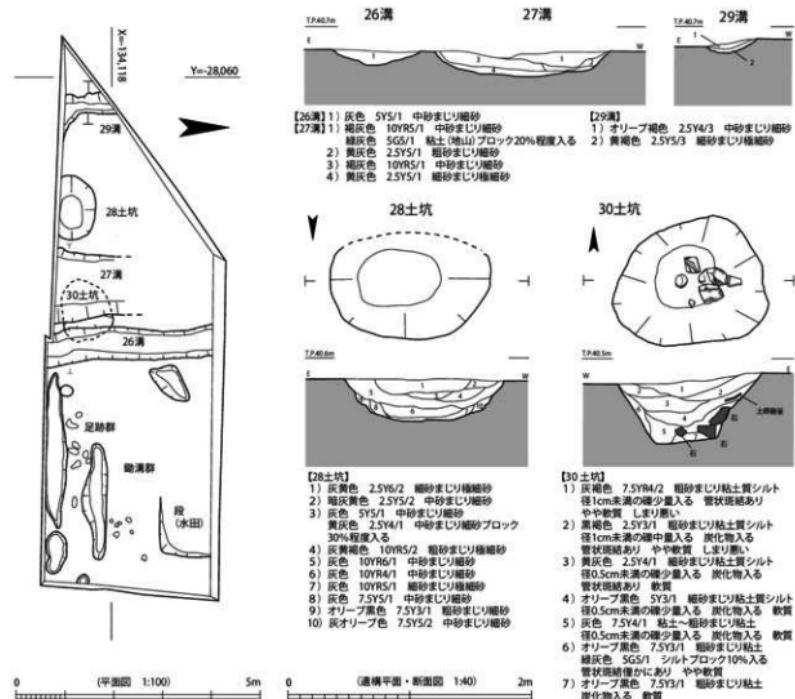


図7 第1調査区遺構平面図(1)・1-2区遺構平面・断面図

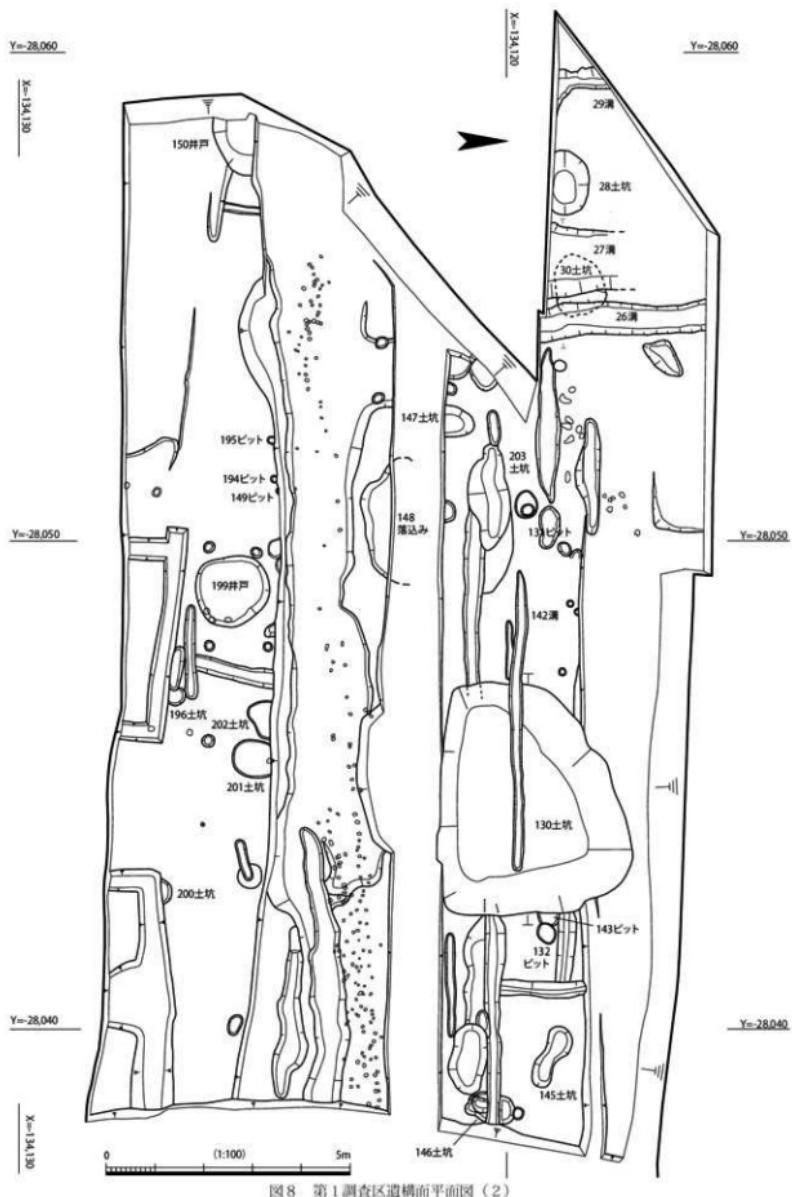
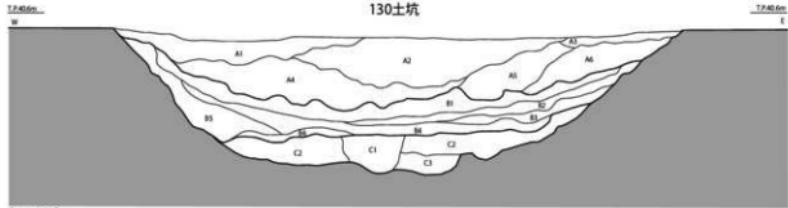


図8 第1調査区遺構面図(2)



【130 土坑】

- A1) 黒色 7SY2/1 粗砂まじり粘土  
オリーブ黒色 7SY3/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 40% 程度入る  
オリーブ灰色 10SY2/2 粗砂まじり粘土ブロック 10% 程度入る  
径 0.5 m未満の礫少量入る しまり悪い 欽質 質状斑状僅かにあり
- A2) オリーブ黒色 7SY3/1 粗砂まじり粘土質シルト  
黒色 7SY2/1 粗砂まじり粘土ブロック 20% 程度入る  
オリーブ灰色 10SY2/2 粗砂まじり粘土ブロック 10% 程度入る  
灰オーブン色 7SY2/2 粗砂まじり粘土ブロック 10% 程度入る  
径 0.5 m未満の礫少量入る しまり悪い 欽質 士器片入る
- A3) 黒色 7SY2/1 粗砂まじり粘土  
オリーブ黒色 7SY3/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 20% 程度入る  
灰オーブン色 7SY2/2 粗砂まじり粘土ブロック 10% 程度入る
- A4) オリーブ黒色 7SY3/1 粗砂まじり粘土質シルト  
黒色 7SY2/1 粗砂まじり粘土ブロック 5% 程度入る  
オリーブ灰色 10SY2/2 粗砂まじり粘土ブロック 5% 程度入る  
径 0.5 m未満の礫少量入る しまり悪い 灰質
- A5) オリーブ黒色 7SY3/1 粗砂まじり粘土質シルト  
黒色 7SY2/1 粗砂まじり粘土ブロック 40% 程度入る  
灰色 10Y4/1 粗砂へシルトブロック 10% 入る しまり悪い 欽質
- A6) オリーブ黒色 10Y5/2 粗砂まじり粘土  
オリーブ黒色 7SY3/1 粗砂まじり粘土質シルトブロック 5% 程度入る  
黒色 7SY2/1 粗砂まじり粘土ブロック 5% 程度入る しまり悪い 欽質

B1) 黒色粘土とオリーブ黒色細砂の互層

黒色 5Y2/1 粘土と  
オリーブ黒色 5Y3/1 粘土と

オリーブ黒色 5Y3/2 細砂が溶状に入れる

B2) 黒色粘土とオリーブ色細砂の互層

オーブン色 5Y3/1 粘土と

オリーブ黒色 5Y3/2 細砂が溶状に入れる

B3) 灰色～灰オーブン色 5Y4/1-4/2 粗砂～細砂

黒褐色 2.5Y3/1 滲砂まじり粘土質シルト

黄褐色 2.5Y4/1 細砂ブロック 40% 程度入る

径 0.3 m未満の礫少量入る

B4) 灰色 10Y4/1 粗砂まじり粘土質シルト

オーブン色 7SY3/1 粗砂まじりシルトブロック 30% 程度入る

しまり悪い 欽質

C2) オリーブ色 5G5/1 相砂まじりシルト

緑灰色 5G5/1 滲砂ブロック 10% 程度入る

径 0.5 m未満の礫少量入る しまり悪い 欽質

C3) オリーブ色 5G5/1 粗砂ブロック 20% 程度入る

径 0.5 m未満の礫少量入る しまり悪い 欽質

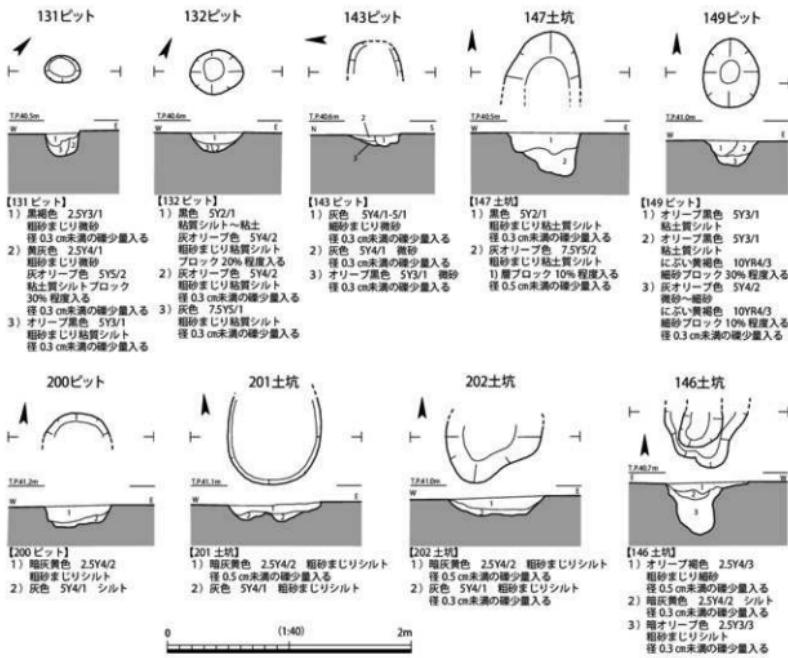


図9 1—5区遺構図平面・断面図

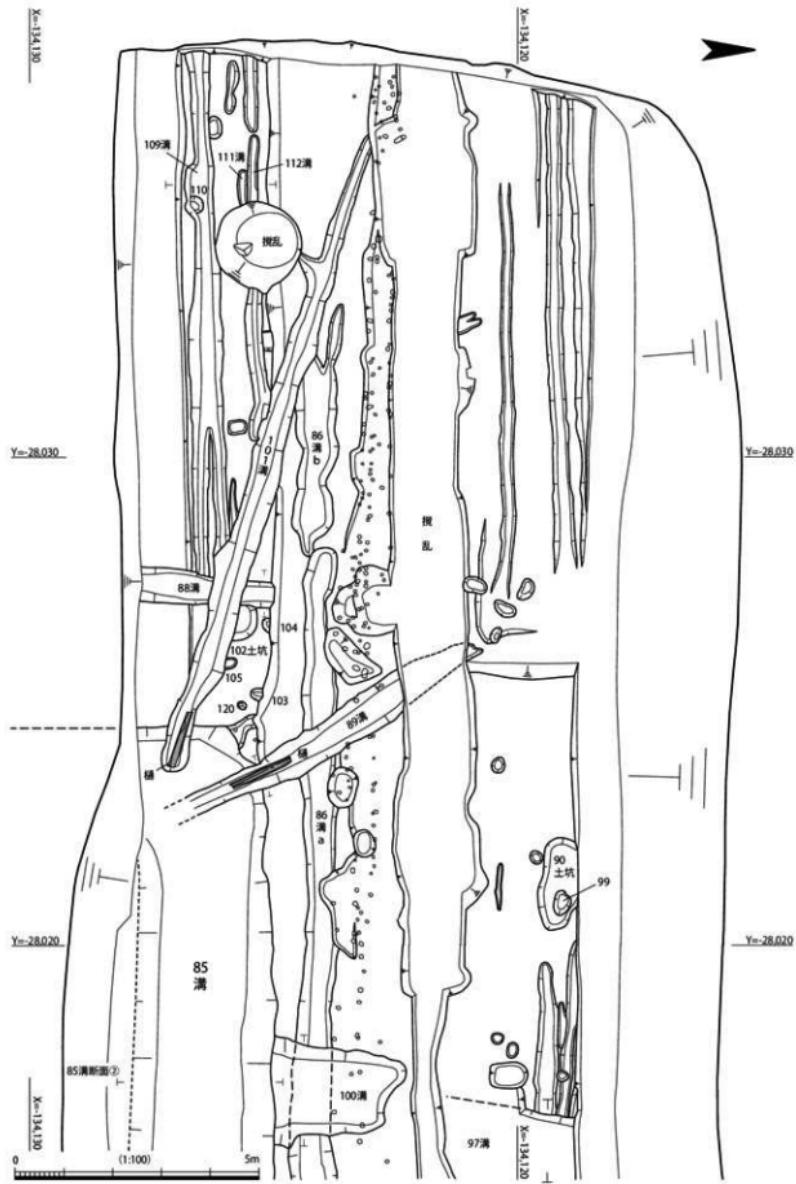


图 10 第1调查区造構面平面図(3)

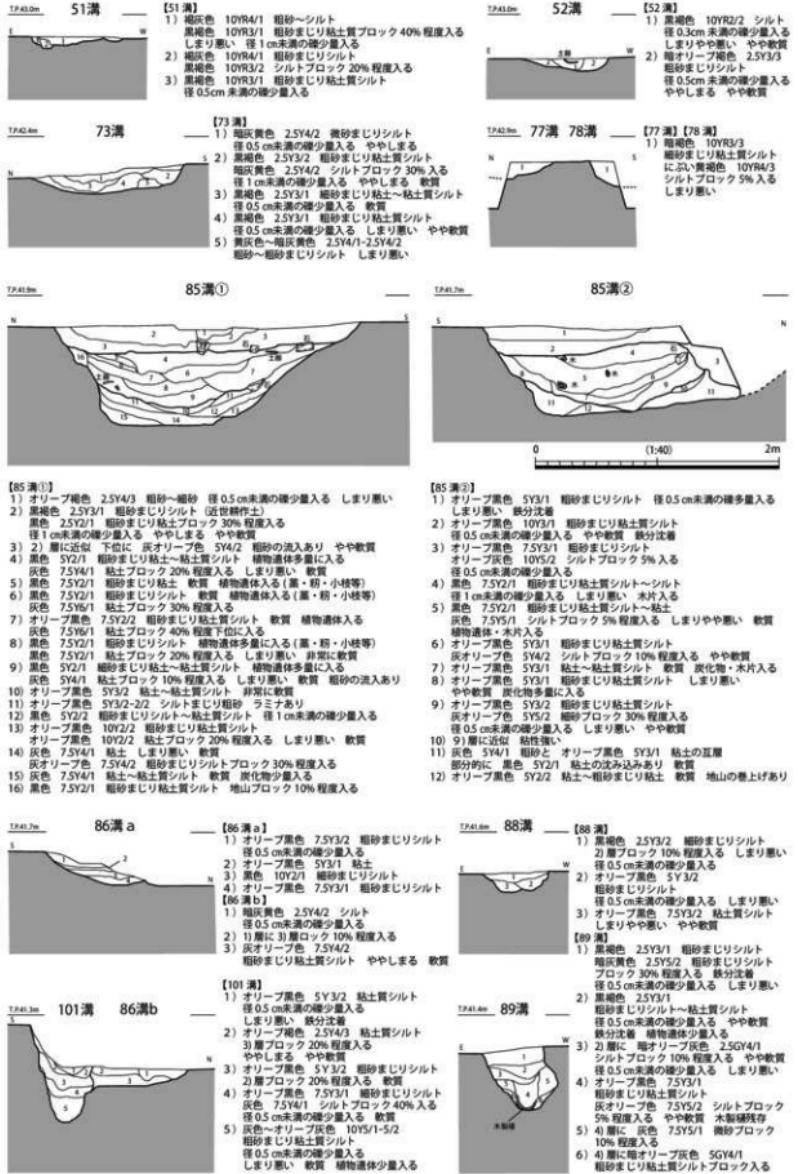


図 11 1～3区造横平面・断面図

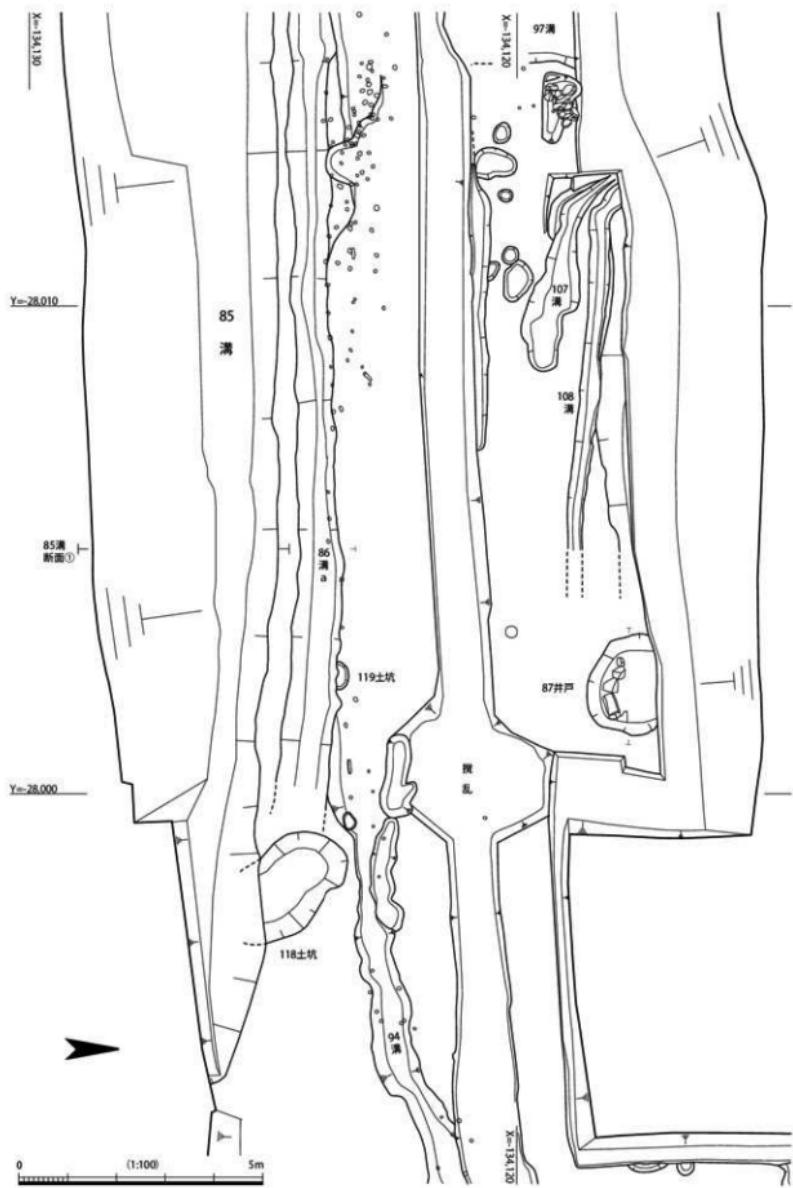


図12 第1調査区遺構面平面図(4)

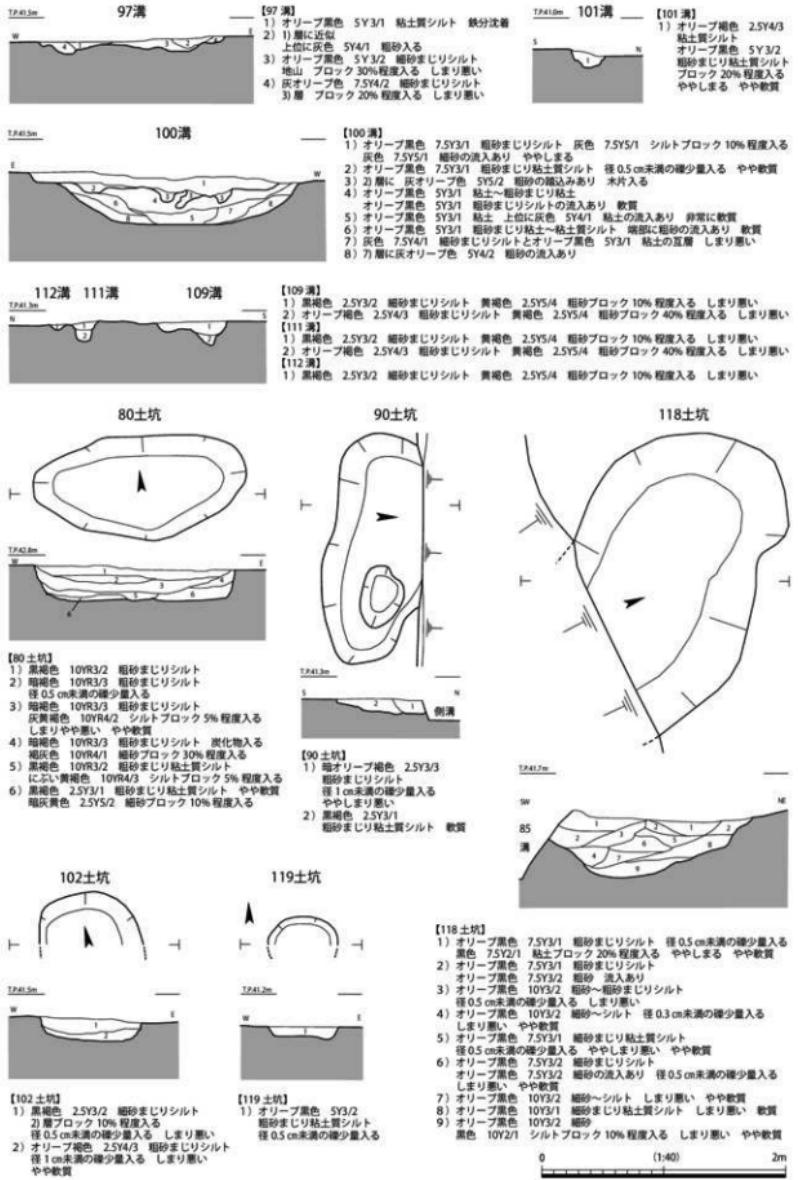


図13 1-3区遺構平面・断面図

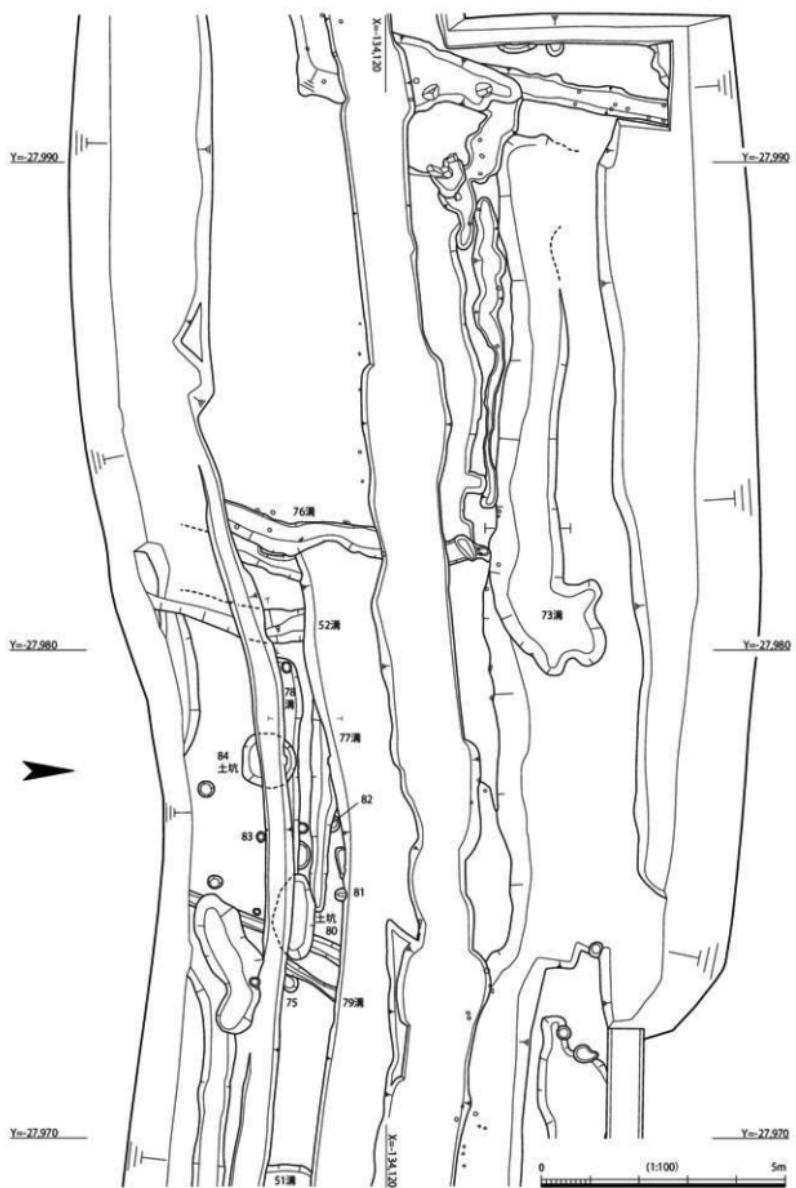


图 14 第1调查区造構面平面图 (5)

建物をめぐる溝の1つである可能性が示されていた遺構である。屈曲してこのまま西へと連続した場合、その可能性はさらに高まる。また、屈曲せず、そのまま北へと伸びるならば、攪乱を隔てた対岸にある122溝と連続する可能性がある。

検出長は2.7m、最大幅は0.9mを測る。最大深度は29cm程度であり、底面には凹凸が目立つ。埋土は暗灰黄色・オリーブ褐色粗砂まじりシルトを主体とする。遺構内からは、土師器皿（図22-31・写真図版21-1）が1点出土した。

**130 土坑**（図8・9）1-5区中央北半部において検出した大型土坑である。平面形状は隅丸三角形を呈しており長径4.8m、短径4.0m、最大深度は1.1mを測る。断面形状は鉢鉢状を呈し、底面にはやや凹凸が認められる。埋土は大きく上層・中層・下層に分別することができる。上層（図9断面図A層）は、中世末期の埋め戻し層であり、黒色～黒色オリーブ粘土にオリーブ色を呈する地山ブロックを5～10%程度含む。中層（B層）は、ラミナを伴う水成層で、黒褐色粘土と灰色砂が筋状に重なり合う互層を主体とする。下層（C層）は、灰色～オリーブ黒色粘土からなる堆積層で、しまりが悪く非常

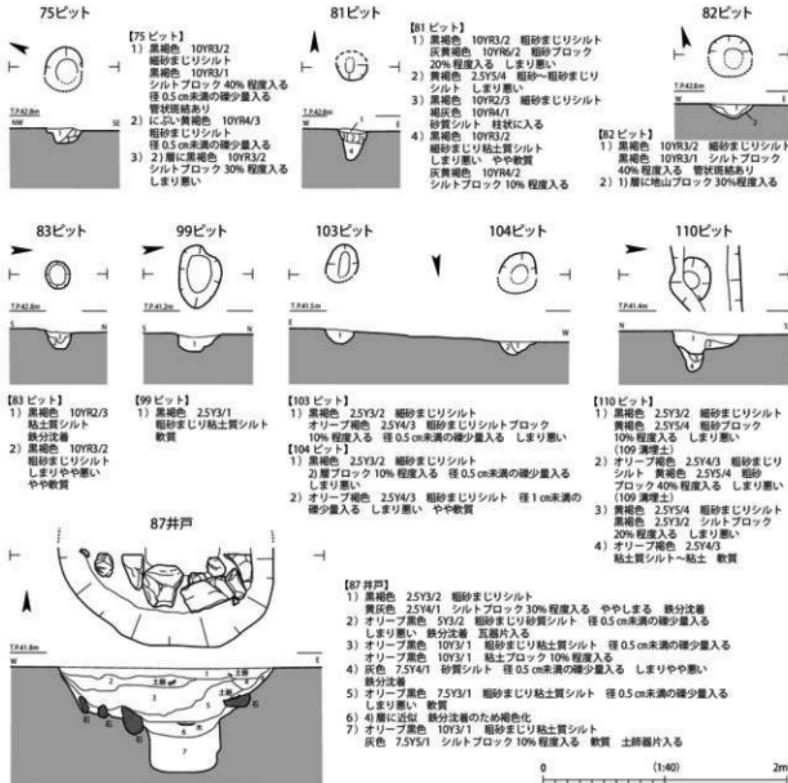


図15 1-3区遺構平面・断面図

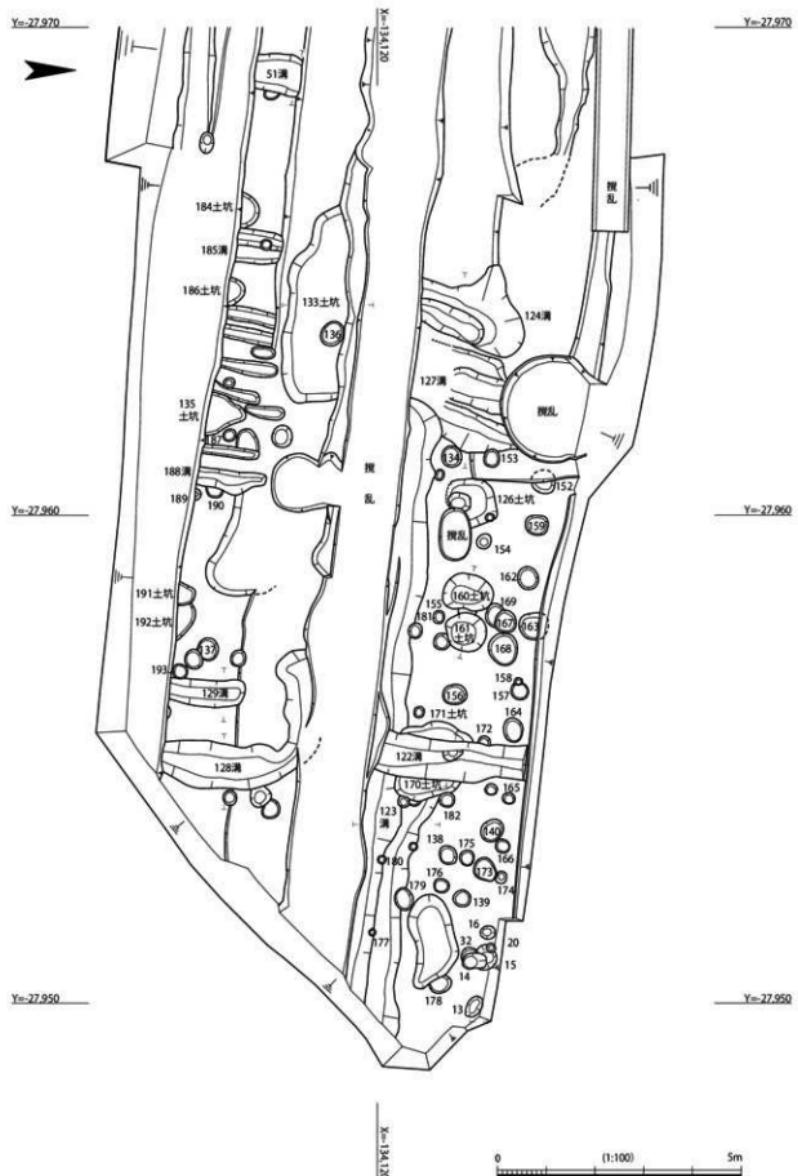


図 16 第1調査区遺構面平面図 (6)

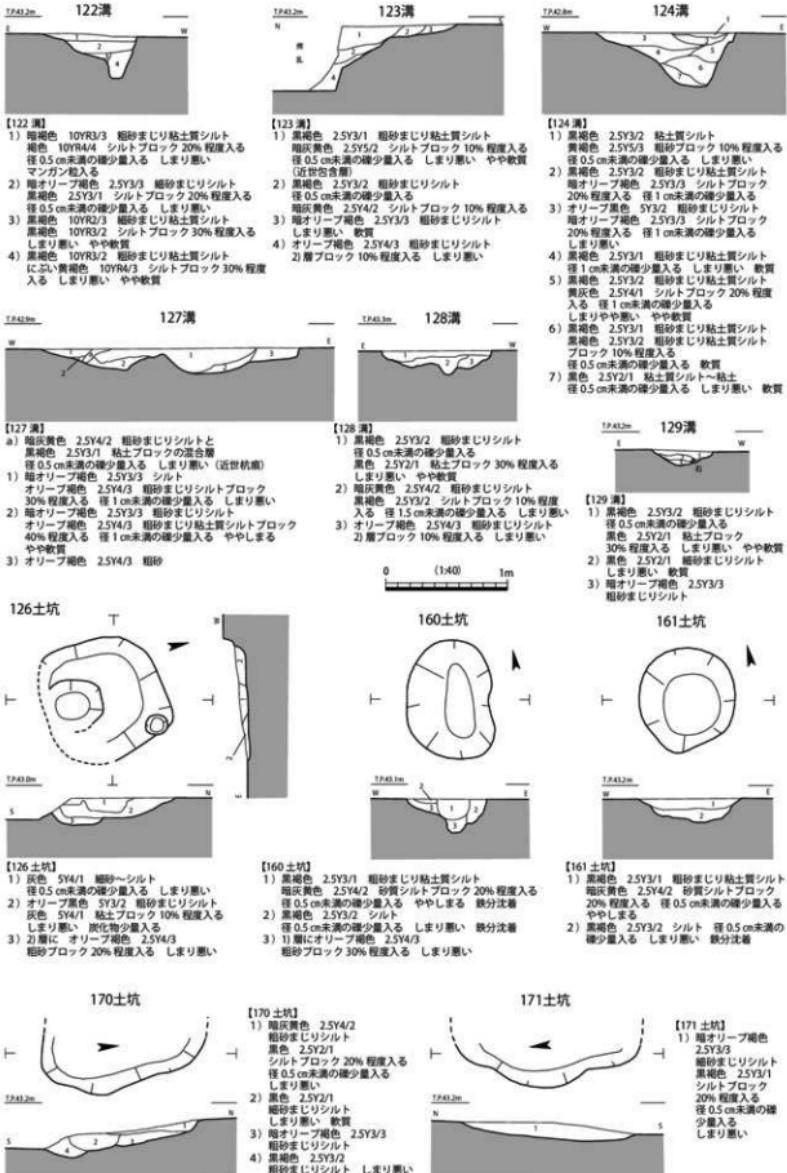


図 17 1 - 4 区造構面・断面図 (1)

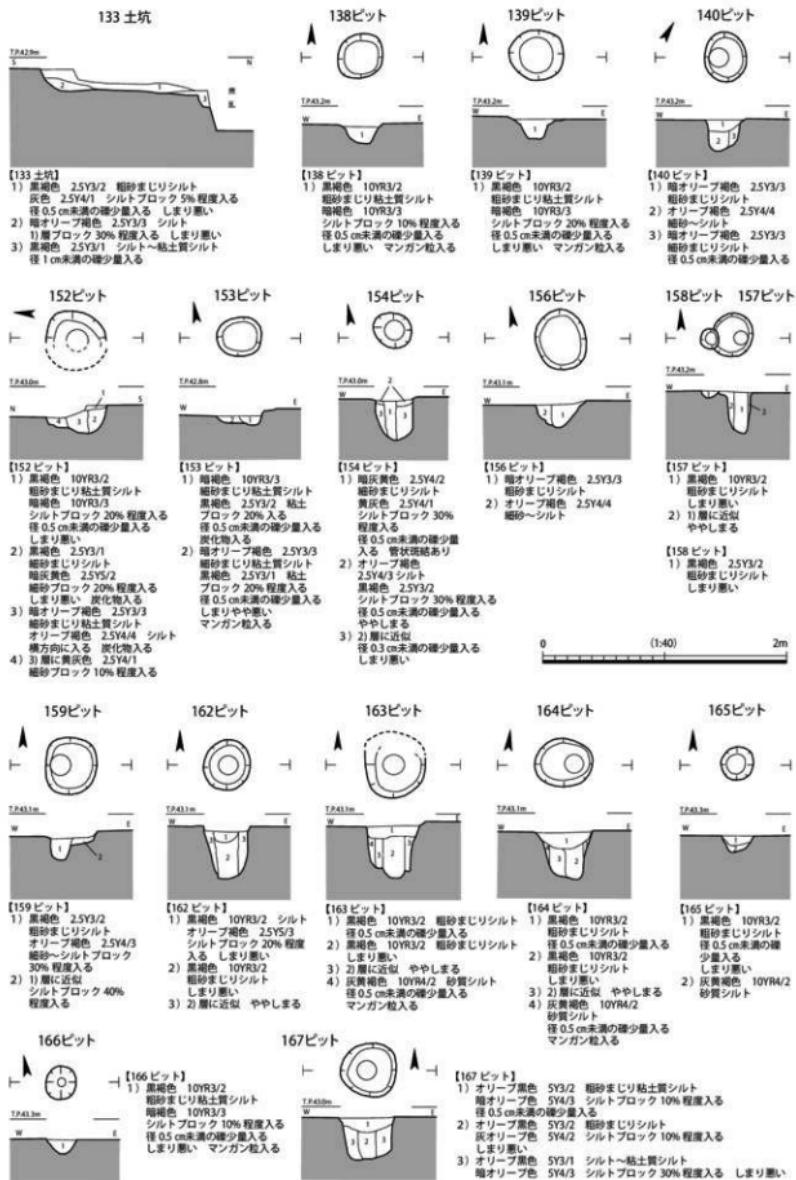


図 18 1~4区遺構平面・断面図(2)

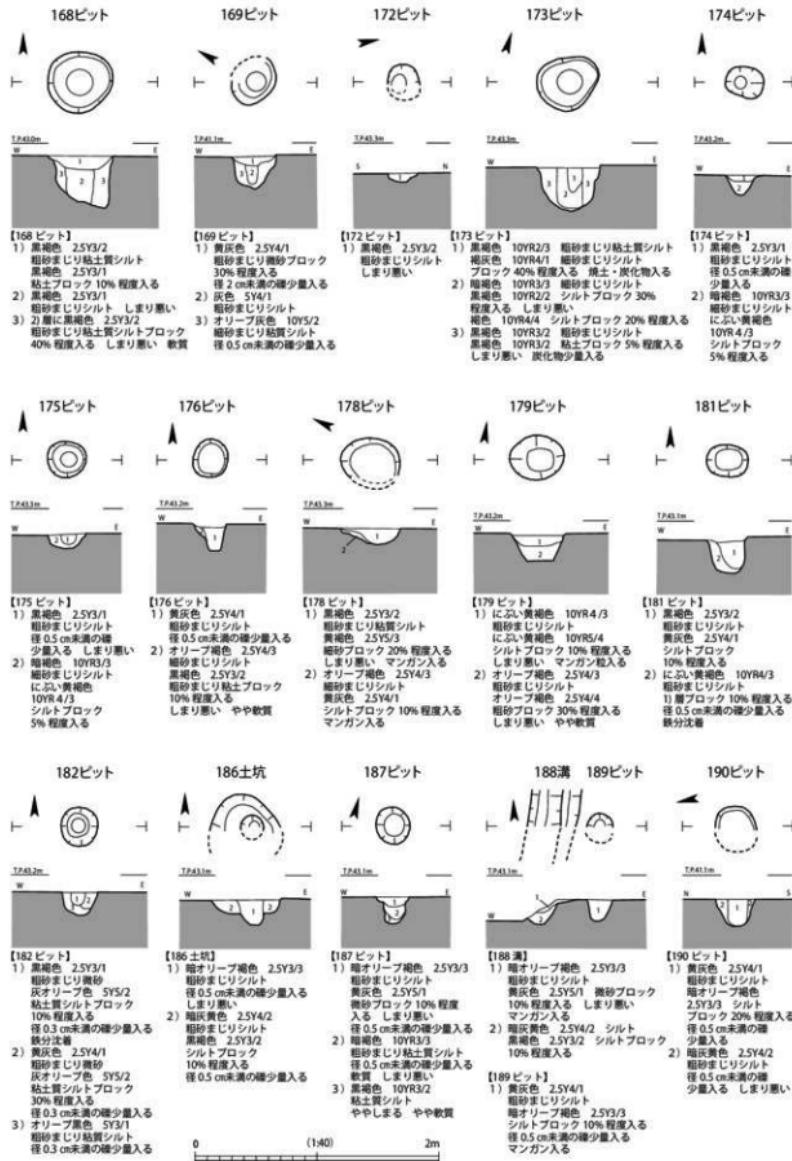


図 19 1-4 区遺構平面・断面図 (3)

に軟質である。

堆積状況からは、井戸または水溜め状の遺構であった可能性が高い。ただし、集落内には石組みの井戸なども設けられているため、飲料水を得る井戸というよりも、耕作に伴う水利施設のひとつであったと考えたい。なお、この周辺は、集落の居住域から生産域への変化点にあたり、既往の調査でも大型土坑が多く報告されている。遺構内からは瓦器碗（図22-27）、土師器皿（図22-26）、瓦質土器三足釜（図22-28）等が出土した（すべて写真図版21-1）。

**ピット群**（図16・18・19） 調査区の西端部（1-4区・1-1区）では多くのピット群を検出した。明確な掘立柱建物としての復元は難しいが、東西方向に連続する方向軸を想定することができる。なおこの方向軸は、既往の調査区において確認された区画溝や建物群の主軸と同方位を指すとみられる。

これらのピットのうち、明確な掘り方をもつものについては図18・19に掲げた。この付近に数多くのピットを検出したことにより、集落の居住域がより東側へ連続することを確認することができた。

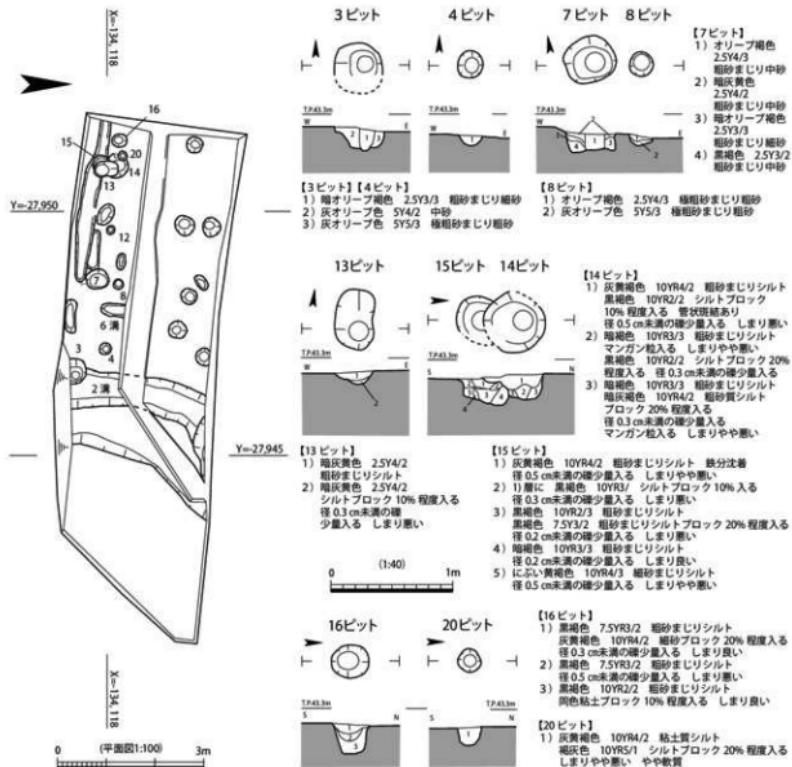


図20 第1調査区遺構平面図(7)・1-1区遺構平面・断面図

### 3. 出土遺物

**石器・剥片** 第1調査区から、それぞれが出土している。製作時期は縄文時代に遡ると推測されるが、周辺に該当する遺構や縄文土器の出土は確認できていない。今回の報告例も、中世遺構の埋土より出土した。

図21-1は水晶製の石鏃未成品である。最大長2.9cm、最大幅2.0cm、最大厚1.1cm、重量は5.8gを測る。石材は水晶、一部に自然面を残す。自然面は乳白色、加工された部分はやや黒味がかった透明である。全体的な調整は粗く、主要剥離面を大きく残している。先端部および基部は他に比べて細かく調整する。有池遺跡の近隣では、京田辺市に所在する甘南備山（通称水晶山）で水晶の露頭が確認されている。有池遺跡や隣接する上私部遺跡、私部南遺跡でも、角礫または自然石の状態で水晶が出土する例がある。しかし、明確に石鏃として加工された製品はこれまで確認されておらず、希少な出土例である。1-4区127溝埋土より出土した。

図21-2は、サヌカイトの剥片である。両面ともに剥離面を大きく残す。上面と側面の一部に自然面を残す。1-2区30土坑より出土した。

**錢貨** 図21-3は、「皇宋通寶」である。北宋銭で、初鑄は1039年である。1-3区中世包含層より出土した。図21-4は、「聖宋元寶」である。同じく北宋銭で、初鑄は1101年である。1-3区中世遺構面の精査時に出土した。

**土器** 図22には遺構内より出土した土器を掲げた。図22-1～5は、122溝より出土した遺物である。図22-1は、土師器皿であり、壁面はヨコナデ、底面には指頭圧痕を残す。内部壁面に煤の付着が認められる。図22-2・3は大和型瓦器椀である。ともに内面に緻密なミガキを施す。口縁端部内面には沈線をめぐらせて段状に作る。22-2の底部内面には連結輪状暗文が認められる。ともに12世紀中葉の製品である。図22-4は、同じく大和型の瓦器椀であるが、器高が低く、やや直線的に器壁が立ち上がる。内面にはミガキを施す。13世紀前葉の製品である。図22-5は、土師質土器の羽釜口縁部である。内外面ともにヨコナデが認められる。口縁は内傾し、鍔は短い。13世紀の製品である。

図22-6～19は、124溝埋土より一括出土した土師器皿である。すべて、直径8cm前後の法量を持ち、ヨコナデによって器壁と口縁の調整をおこなう。内面にはハケ状工具で円を描くように、斜め上方に向てあげた痕跡が残る。一部口縁の立ち上がりが緩いものや短いものがあり、必ずしも平面形は正円を描くものではない。内面に、煤が付着するものも認められる。

図22-20～24は85溝埋土より出土した。図22-20は、龍泉窯系青磁碗の底部である。外面上に蓮弁文を施す。底部外面は、工具によってヘラケズリが施される。13世紀の製品である。図22-21は、廈門窯系白磁碗の底部である。外面は底部付近まで施釉、高台は露胎とする。内面底部には、重焼痕が残る。高台端面には、薄く釉が付着する。12世紀後半～13世紀初頭の製品である。

図22-22は、土師器皿である。器壁の一部の立ち上がりが低いため、口縁が大きく歪む。内面にはハケ状工具での調整痕が認められる。

図22-23は、常滑燒碗の底部である。外面は大きく指頭圧痕が残り、灰釉の釉垂れが筋状に付着する。内面には自然釉等が細かく付着す

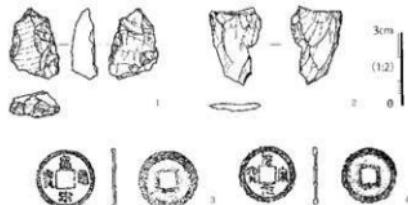


図21 第1調査区出土遺物(1)

る。底部外面は不調整、細かい砂礫の圧痕がある。図 22-24 は備前焼窯の底部である。器壁外面は指およびヘラ状の工具で、斜め上方向になであげる。割れ口付近には、布をあて、漆で接着し、補修を試みた痕跡が認められる。内面には自然釉が斑点状に付着する。

図 22-25 は、52 溝より出土した瓦器碗の底部である。底部外面には断面三角形状の貼り付け高台をめぐらせる。底部内面には連結輪状暗文が施されている 13 世紀前半の製品である。

図 22-26~28 は、130 土坑より出土した。図 22-26 は、土師器の皿である。器壁は内外面ともにヨコナデ、底部内面には、縦方向のナデを施す。底部外面には指頭圧痕が残る。高台は認められない。図 22-27 は瓦器碗である。器高が低く、浅い。器壁は緩く屈曲して外反する。内面には疎らな

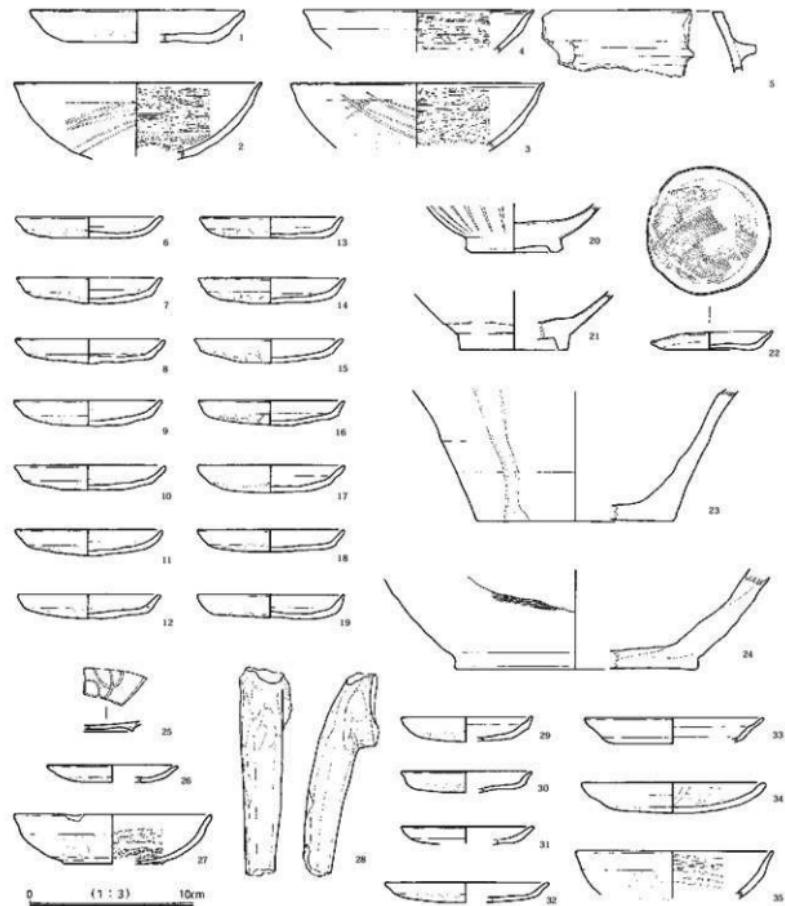


図 22 第 1 調査区出土遺物（2）

ミガキを施す。底部外面に貼り付けられた高台は非常に低く、わずかに突出するのみであり、高台としての意味を成していない。口縁の一部に製作時に生じたとみられる欠損が残る。図22-28は瓦質土器三足釜の脚部である。ナデおよび指頭圧痕が顕著に残る。

図22-29・30・32は、ピット群から出土した土師器皿である。直径8cm前後の小型品が多い。図22-33は1-3区西半部の90土坑から、図22-34・35は鋤溝内から出土した。図22-33・34は土師器皿、図22-35は楠葉型の瓦器椀である。34の内面には細かいナデ痕が顕著に残る。

図23には、中・近世包含層より出土した遺物を掲げた。図23-1~6は、土師器皿である。器壁の外面に1段ないし2段のヨコナデを施す。図23-7は須恵質の甕である。短い頸部から続く口縁部は外反し、端部を丸く收める。外面には平行タタキ、内面には顕著な指頭圧痕が残る。図23-8・9はともに大和型の瓦器椀である。8は、ミガキを内外面ともに施す。9は口縁部に施したナデが強く、口縁部の開きが大きい。両者ともに口縁端部には沈線をめぐらせて段を作る。8は12世紀中葉、9は12世紀末から13世紀初頭の製品である。図23-10は、瓦器椀の底部である。底部外面に貼り付けた高台は剥落し痕跡のみを残す。内面には連結輪状暗文がわずかに残る。内面中央には焼成後に刻まれた線刻「×」が認められる。図23-11は、東播系須恵器の捏鉢である。13世紀の製品である。

図23-12・13は、近世の溝付近より出土した。12は、京・信楽系陶器の灯明皿である。内面と外面の口縁部には乳白色の釉が塗布されている。内面の釉には貫入が認められる。18世紀の製品である。図23-13は、瓦質土製品の鼓形とちんである。色調は灰白色で、一部くすんだ銀色を呈する。最大長は4.7cm、最大径は3.1cmを測る。胎土はやや粗く、焼成はやや甘い。全体を手捏ねで成形し、左右に平坦面を作る。鼓形とちんは、平瓦の焼成時に使用する道具である。融着を防ぐため、瓦と瓦の間に挟んで使用する。通常は数個セットで使用するものである。中央部を細く作る例が多いが、13は中央部を突帯状に加工する点に特徴がある。

以上、第1調査区の調査成果について報告した。今回の調査では中世遺構面において土坑・溝・ピット群・井戸などの遺構を検出することができた。このうちの多くが、既往の調査において報告された遺構と連続するものであり、その性格を補強することができた。

また、調査区東半部において、多くのピット群を検出し、有池遺跡の居住域がさらに広がることを追認した。また、調査区の西半部では、生産域である水田跡や大型土坑を確認し、居住域周辺部の土地利用の様相に新たな資料を加えることができた。

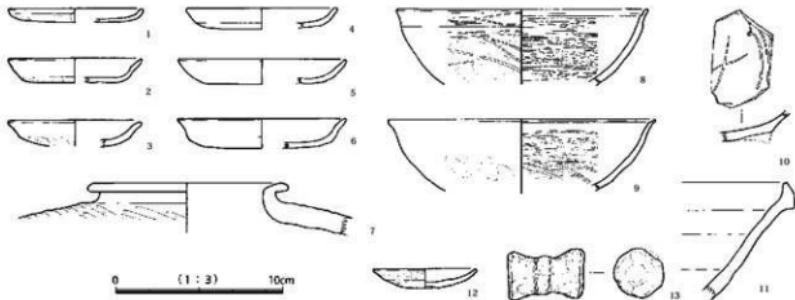


図23 第1調査区出土遺物(3)

## 第2節 第2調査区

### 1. 調査区の状況と基本層序

**調査区の形状** 第2調査区は、北東ー南西に細長い形状をもつ調査区である。現在では北東から南西に向かって緩やかに下がる住宅地であるが、宅地造成がなされる以前は、随所に谷が横断するきわめて起伏に富んだ景観を呈していた。谷地は樹木が茂る沼地となって所々に横臥し、谷へと続く斜面では水田が営まれていた。

調査地は大部分が里道（生活道路）であるが、既述のとおりガス管や水道管、下水道管などのライフラインが縦断し、調査不可能と判断された範囲も大きい。特に古墳時代から古代の集落域に相当する微高地では、造成前の削平や埋設管の敷設によって受けた搅乱が甚だしく、遺構面そのものの残存状況は悪い。しかし、住宅地の盛土によって守られた範囲では、遺構面の残存を確認することができた。

**基本層序** 盛土を除去すると、近現代耕作土、谷地を覆う腐植土層が認められた。近現代耕作土下には近世耕作土があり、その下にわずかではあるが中世包含層が存在する。中世包含層はオリーブ黒色粘土質シルトを主体とし、地山土である灰オリーブ色粘土ブロックを巻き上げて含む。基本的に耕作土であ

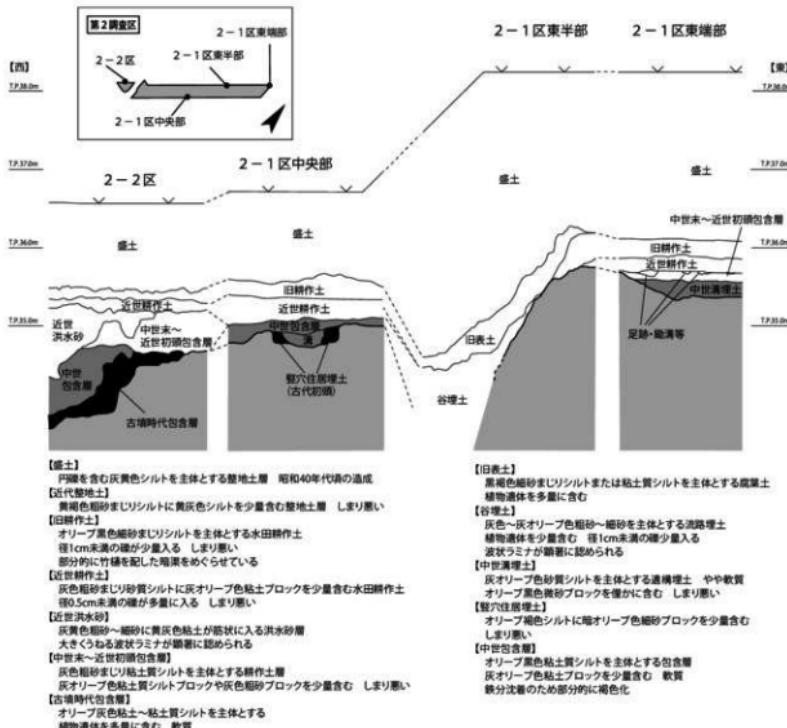
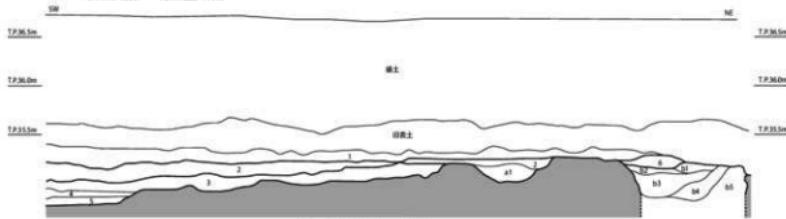


図24 第2調査区基本層序模式図

## 2-1区西端部 北西壁断面



【2-1区西端部北西壁断面】

- 1) 黄褐色 2.5Y5/6 粗砂まじり粘土質シルト  
粗砂色 2.5Y4/1 粗砂まじりブロック 30% 程度入る。しまり悪い (近世耕作土)
- 2) 黄褐色 5G4/1 粗砂まじりシルト  
粗砂色 5G4/1 粗砂まじりシルト 3cmの未溝の僅少量入る。
- 3) 黄オリーブ色 2.5G5/1 粘土ブロック 5% 程度入る しまり悪い 管状斑結あり (近世耕作土)
- 4) 墓地 0.7cm未溝の僅少量入る 管状斑結あり (中世包含層)
- 5) 黄オリーブ色 5G4/1 粗砂まじり粘土質シルト しまりやや悪い  
細砂色 7.5G5/1 粘土ブロック 5% 程度入る やや軟質 鉄分沈着
- 6) オリーブ色 10Y4/2 粗砂まじりシルト 径 0.5cm未溝の僅少量入る ややしまる  
細砂色 10Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト やや軟質 管状斑結あり
- 7) 地山 山麓灰岩 10G4/1 粗砂まじり粘土質シルト しまり良い やや軟質

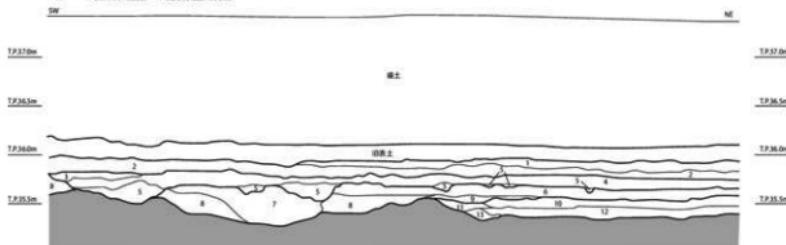
【近世溝理土】

- a1) 墓地オリーブ色 7.5Y4/4 粗砂 やや軟質

【古世井戸壁土】

- b1) 墓地オリーブ色 2.5G4/1 粗砂まじり粘土質シルト  
径 0.5cm未溝の僅少量入る やや悪い 管状斑結あり
- b2) オリーブ黒色 10Y3/2 粗砂まじりシルト～細砂 やや軟質 ラミナあり
- b3) 底～灰オリーブ色 10Y4/1 ~4/2 粗砂まじりシルト～トレンシルト しまり非常に悪い
- b4) 墓地オリーブ色 2.5G4/1 粗砂まじり粘土質シルト  
オリーブ色 10Y3/2 粗砂まじりシルト～ブロック 30% 程度入る
- b5) オリーブ灰岩 10Y4/2 粗砂まじりシルト  
径 0.5cm未溝の僅少量入る しまり良い やや軟質

## 2-1区東端部 北西壁断面



【2-1区東端部北西壁断面】

- 1) 黄色 10Y4/1 細砂まじりシルト 径 0.3cm未溝の僅少量入る  
しまり悪い 管状斑結あり (近世耕作土)
- 2) 墓地 0.7cm未溝の僅少量入る 粗砂まじりシルト  
粗砂色 2.5Y4/1 粗砂まじりシルト しまり悪い  
ややしまる 管状斑結あり (近世耕作土)
- 3) 黄褐色 2.5Y5/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5cm未溝の僅少量入る しまり悪い (近世耕作土)
- 4) 黄色 10Y4/1 細砂まじり粘土質シルト 径 0.5cm未溝の僅少量入る ややしまる  
管状斑結あり (近世耕作土)
- 5) 黄褐色 2.5Y5/1 粗砂～細砂 (近世洪水時・足跡帶土)
- 6) 黄色 10Y4/1 細砂まじりシルト しまり悪い 軟質
- 7) 墓地オリーブ色 7.5Y6/2 粗砂まじりシルト 波状ラミナあり 太木入る (近世耕作土)
- 8) 底～灰オリーブ色 7.5Y4/1 粗砂まじりシルト 上位に粗砂混入あり 粗砂ラミナあり  
植物遺体少量入る (中世末～近世初期洗浄路)
- 9) オリーブ黒色 10Y3/1 粘土～粘土質シルト 滑動の流入あり  
しまり悪い 軟質 ラミナあり (中世末～近世初期洗浄路)
- 10) 墓地オリーブ色 5G4/1 粗砂まじり粘土質シルト  
下位に滑動の流入あり しまり悪い 軟質 (中世包含層)
- 11) 墓地オリーブ色 5G4/1 粗砂まじり粘土質シルト  
粗砂まじり粘土質シルト しまり悪い 軟質 (中世包含層)
- 12) 墓地オリーブ色 2.5G4/1 粗砂まじりシルト しまり悪い 軟質 (中世包含層)
- 13) 墓地オリーブ色 5G4/1 粗砂まじりシルト～粘土質シルト  
径 0.3cm未溝の僅少量入る 軟質 精分沈着 (中世包含層)



図25 2-1区北西壁断面図

ると解釈される。調査区の東半部では遺構面が高いため、中世包含層の堆積は谷地などの凹地に限られている。緩やかに西へと下がる調査区中央付近では、中世包含層は5cm程度の層厚を保ち、西に向かって徐々に厚みを増す。調査区西端部の2-2区は谷筋にあたるため、中世包含層は厚く堆積し、約1mを測る。なお、谷内には中世包含層の上に、中世末～近世初頭包含層、近世洪水砂の堆積が認められる。第2調査区の微高地では、中世包含層を除去した段階で地山を確認した。地山上面が主要遺構面（古墳時代後期～中世）である。

## 2. 検出遺構

2-1区では、中世水田跡や溝のほか、古墳時代後期の竪穴住居を1棟検出した。また2-2区では、谷地の落込みを確認した（図27）。

**206 流路（図27）** 2-1区東半部において確認した流路である。既往の調査では谷として報告されており、谷が埋設した最終形態の水流を遺構として捉えている。今回の調査では、東岸を階段状に形成し、杭列を打設した痕跡を検出した。

確認した最大幅は15mを測る。近世洪水砂である粗砂～細砂の厚い堆積を除去すると灰色粘土が露呈した。この時点で掘削限界に達したため、深度2mをもって掘削を終了した。埋土からは中世末～近世初頭とみられる陶磁器片と朱漆塗りの漆器碗（写真図版33-4・W18）が出土した。

**207 溝（図27）** 2-1区北東端で確認した東西方向へ伸びる大型の溝である。既往の調査区では直交

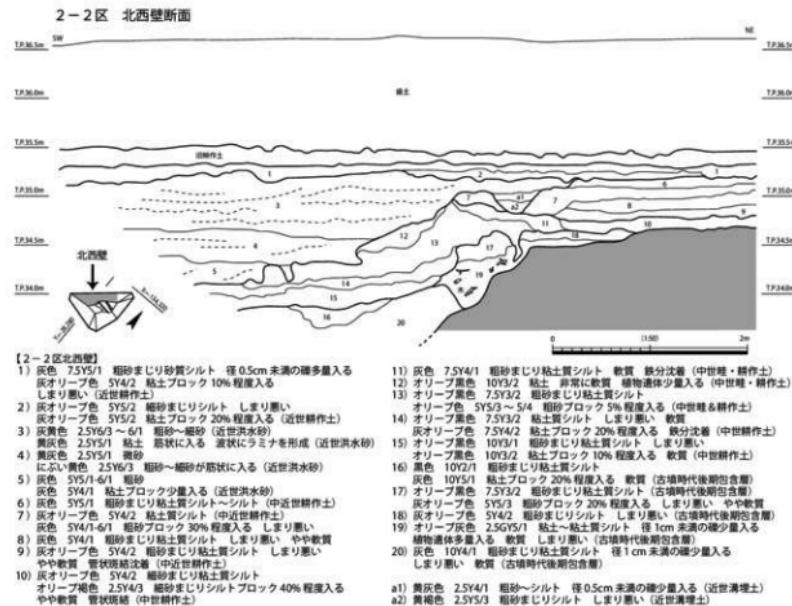


図26 2-2区北西壁断面図

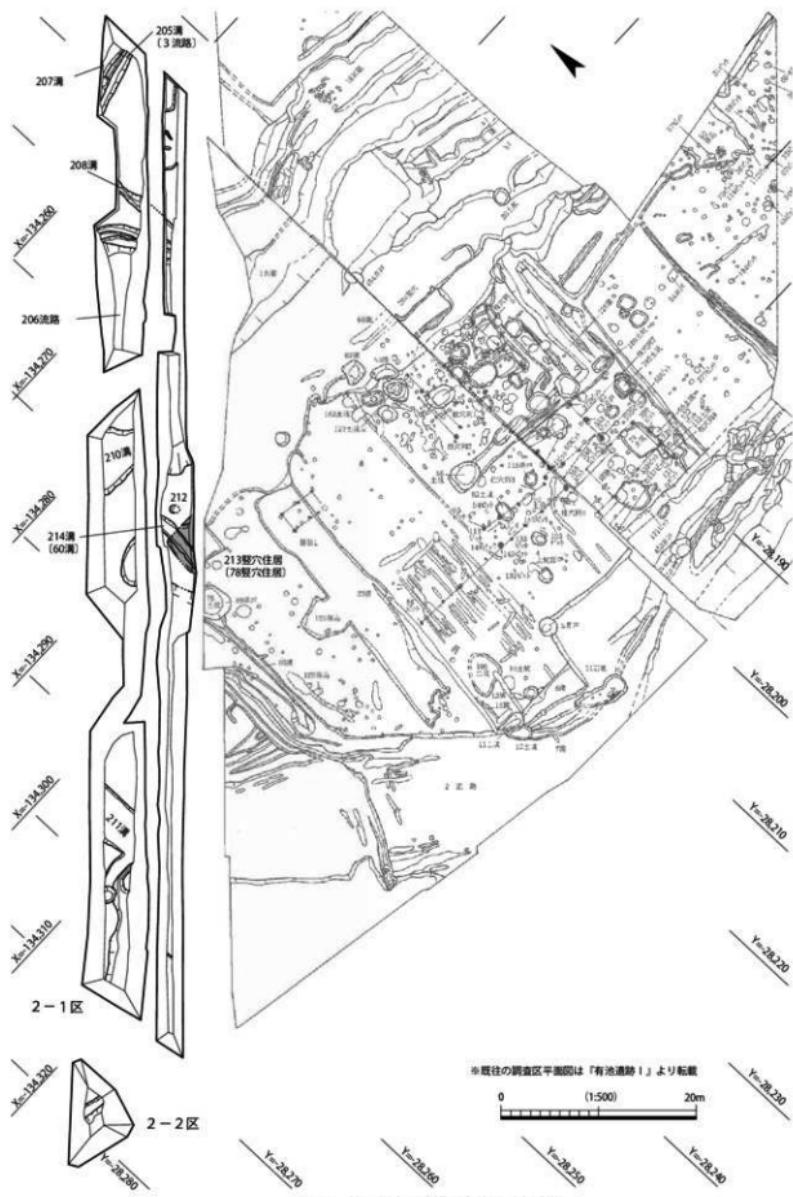
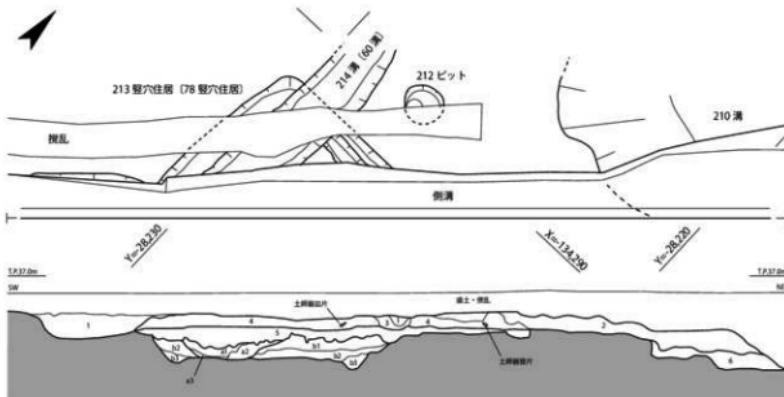


図27 第2調査区遺構全体図（中世）

する方向に、ほぼ同規模の溝が確認されており、類似した性格をもつ遺構であると考えられる。方位に沿って掘削されていることから、水田開発に伴う大規模な灌漑用水路である可能性が高い。埋土は、暗オリーブ灰色粘土を主体とする（図25下段参照）。埋土からは瓦質土器の羽釜が、比較的大きな破片で出土した（図29-8）。

**208溝（図27）** 2-1区東半部で検出した、南北方向に伸びる溝である。周辺には方向を同じくする鉢溝を多数検出し、水田の区画溝であると考えられる。確認できた長さは6.0m、最大幅は1.0mを測る。埋土からは、13世紀後半の瓦器椀が1点出土した。

**213竪穴住居（78竪穴住居）（図28）** 2-1区の中央付近において検出した竪穴住居の一角である。隣接する既往の調査区では南部が報告されており、今回の調査によって一辺4mを測る方形を呈するプランであることを確認した。ただし、検出遺構面では、この上面を中世の区画溝である214溝〔60溝〕が走っており、攪乱の影響もあわせて、竪穴住居の残存状況はきわめて悪い状況にある。周溝の一部を



#### 【2-1区中央部遺構断面】

- 灰色 SY4/1 細砂まじりシルト 径0.3cm未溝の礫少量入る  
しまり悪い、軟塑状態、砂質シルト
- 暗オリーブ色 SY4/2 砂質シルト 径0.5cm未溝の礫少量入る（中世耕作土）  
灰色 SY5/1 シルトブロック40%程度入る ややしまり悪い
- 暗灰 黄褐色 2SY4/2、シルト 径0.5cm未溝の礫少量入る  
しまり悪い、鉢分離層（近世水田堆積層）
- オリーブ色 2SY4/2 粗砂まじりシルト  
暗灰 黄褐色 2SY4/2 シルトブロック20%程度入る ややしまる  
土器片入る（中世耕作土）
- オリーブ色 2SY4/2 砂質シルト  
黄褐色 2SY5/4 粗砂 ブロック10%程度入る しまり悪い  
粗粒面跡あり（中世耕作土）
- 暗オリーブ色 SY4/4 粘土質シルト  
灰色 SY5/1 シルトブロック10%程度入る しまり悪い

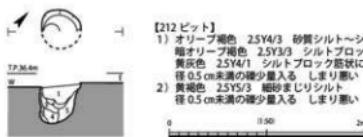
#### 【214溝（60溝）】

- 灰オリーブ色 SY4/2 粘土質シルト 径0.3cm未溝の礫少量入る  
灰オリーブ色 SY4/3 砂質シルトブロック5%程度入る ややしまる
- 暗オリーブ色 SY4/2 砂質シルト  
a) 積層ブロック 10%程度入る ややしまり悪い やや軟質

#### 【213竪穴住居（78竪穴住居）】

- オリーブ色 SY4/1 砂質シルト  
黄褐色 2SY4/1 シルトブロック20%程度入る ややしまる
- オリーブ褐色 2SY4/4 細砂シルト  
暗オリーブ色 SY4/2 細砂シルト  
a) 積層ブロック 30%程度入る しまり悪い
- 灰オリーブ色 7SY4/2 砂質シルト  
オリーブ黒色 7SY3/2 砂質ブロック10%程度入る やや軟質

#### 212ピット



- オリーブ褐色 2SY4/3 砂質シルトヘシルト  
暗灰 黄褐色 2SY3/3 シルトブロック10%程度入る  
灰色 SY4/1 シルトブロック5%程度入る しまり悪い  
径0.5cm未溝の礫少量入る しまり悪い
- 黄褐色 2SY5/3 砂質まじりシルト  
径0.5cm未溝の礫少量入る しまり悪い

#### 【212 ピット】

- オリーブ褐色 2SY4/3 砂質シルト  
a) 積層ブロック 10%程度入る
- 暗オリーブ色 SY5/3 砂質ヘシルト  
径0.5cm未溝の礫少量入る しまり悪い
- オリーブ褐色 2SY4/3 砂質シルト  
黄褐色 SY4/1 シルトブロック5%程度入る  
灰オリーブ色 SY4/2 粘土質シルト  
黄褐色 SY5/3 砂質ヘシルト  
径0.5cm未溝の礫少量入る しまり悪い

図28 213竪穴住居周辺遺構平面・断面図

確認したものの、竪跡や柱穴を検出することはできなかった（図28）。

遺構の残存深度は20cm程度、埋土はオリーブ褐色シルトを主体とする。既往の調査成果を含めてみると、213竪穴住居〔78竪穴住居〕は、古墳時代後期に拡大した上私部遺跡集落のほぼ北東端に位置する遺構である。東西を谷に挟まれており、緊密に住居が立ち並ぶ中にある他の遺構とは立地状況を異にするようである。遺構内から、7世紀初頭に製作時期をもつ須恵器杯身が出土した（図29-1）。

### 3. 出土遺物

図29-1は、213竪穴住居より出土した須恵器杯身である。口径は13cm、器高は3.0cm程度に復元できる。口縁は短く立ち上がり、一部に自然釉が付着する。底部外面には回転ヘラケズリを施す。底部外面の一部に粘土塊の付着が認められる。TK209型式（7世紀初頭頃）の製品である。

図29-2は、214溝より出土した和泉型の瓦器碗である。大きく開く口縁をもつ。器壁内面にはまばらなミガキ、外側には指頭圧痕が残る。13世紀後半の製品である。図29-4は土師器皿である。器高が高く、やや深い。器壁外側にはヨコナデを施す。底部付近には指頭圧痕が残る。

図29-7は、206流路より出土した真鍮製の煙管である。吸口・羅字・火皿の一体形である。薄く延ばした金属板を丸めて管状に作る。吸口より先はやや扁平に作り、先端部を短く立ち上げている。外側は腐食が進んでいるものの、部分的に金色に光る箇所が残る。近世以後の製品である。

図29-8は、207溝より出土した瓦質土器の羽釜である。垂直に立ち上がる口縁は口径に比して高く、口縁端面に一条の沈線をめぐらせる。器壁内面は横または斜め方向のハケ調整後、斜め上方へ向

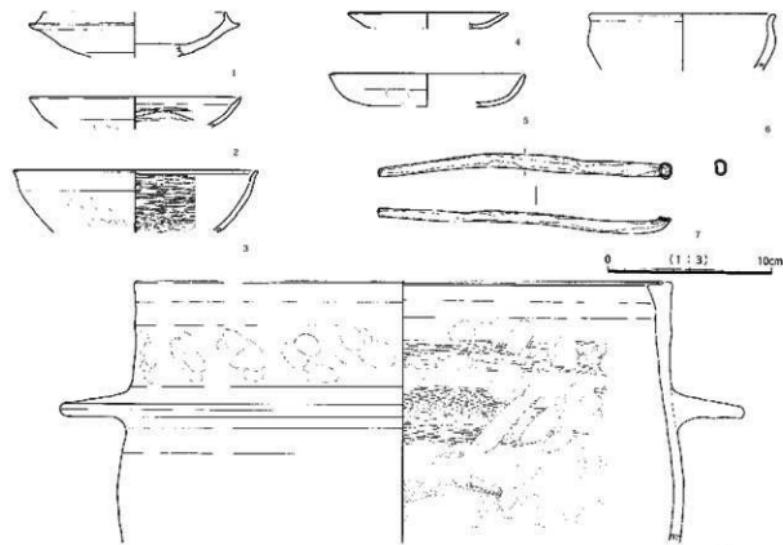


図29 第2調査区出土遺物

かってヨコナデを施す。口縁部外にはヨコナデ後、一定間隔での指頭圧痕を施すことにより、文様状の凹凸を作り出している。鉢部以下は、ヨコナデを施す。器壁の外面には炭化物の付着が認められる。

図29-3・4・6は、包含層より出土した。図29-3は瓦器碗である。内面に緻密なミガキが認められる。12世紀中葉の大和型の製品である。図29-4は土師器皿である。深みのある器形をもち、器壁が丸みをもって立ち上がる。外面には、ヨコナデを1段施す。図29-6は、瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。釉薬は暗褐色を呈する鉄釉である。口縁端部には使用による摩滅が認められる。

以上、第2調査区における調査成果を記述した。ここでは、中世遺構面において、谷地付近の土地活用のあり方を明らかにすることができた。谷に阻まれながらも、方位に即した水田地割がおこなわれていたことが推測される。また、既往の調査成果に連続して、古代初頭の竪穴住居の一角を検出することができた。ただし、当該期の遺構・遺物とともに残存が希薄であることから、この付近が集落の北限域にあたることが、改めて示される結果となった。

### 第3節 第3調査区

#### 1. 調査区の状況と基本層序

**調査区の状況** 第3調査区は2本の水路と、これが下流にて合流する範囲に相当するため、調査区全体の平面形状は鉤形を呈する。現況では、3-3区を上手にもつ東側水路が打設杭と横木で土留めを施す素掘り水路、3-4区を上手にもつ東側水路がコンクリート擁壁とブロック積みの土留めをもつ水路である。

調査区の標高は、扇状地の裾野が複雑に入り込むため、東側水路の上手にあたる3-3区が最も高く、

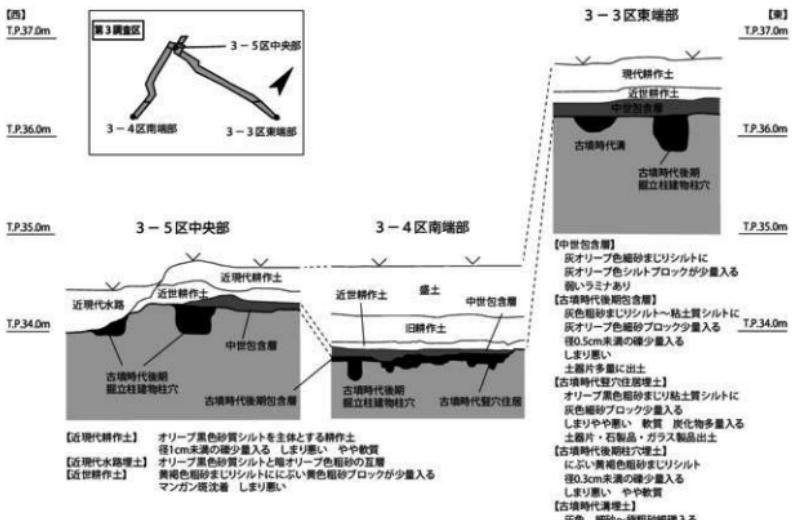


図30 第3調査区基本層序模式図

西側水路の上手にあたる3-4区と、水路の流末である3-5区が低い(図30参照)。遺構面の高さを比べると、水路上手にあたる3-4区のほうが下手にあたる3-5区よりも40cm程度低い状況にある。この比高を補うため、3-4区付近は近現代において大きく盛土がなされた。これが、3-4区の遺構面を良好に保つ要因となった。

これに対して、素掘り水路の下面にあたる3-1区及び3-3区は、遺構面の標高が高く、その残存状態は悪い。素掘り水路は何度も掘削が繰り返されており、さらにその下には、水路の前身となる中世末期の水路が設けられていたようである(図31上段参照)。このため古墳時代の遺構面は、重ねて擾乱を受ける状況下にあった。

**基本層序** 第3調査区では、盛土および近現代耕作土の下に近世耕作土と中世包含層が堆積し、3-4区の一部にのみ、古墳時代後期包含層が存在する。中世包含層は基本的に耕作土であり、ブロック土を



図31 第3調査区界・縦断面図

含む灰オリーブ色細砂まじりシルトを主体とする。古墳時代包含層は、この中世期の開墾によって、削平されたとみられる。中世包含層には、古墳時代の遺物も多数含まれている。

これらの状況により、古墳時代の包含層は3-4区の一部にのみ残存が認められるほかは、すべて遺構埋土として存在する。オリーブ黒色粗砂まじりシルトやにぶい黄褐色粗砂まじりシルトを主体としており、土師器や須恵器といった土器類を多く包含する。中世包含層および古墳時代から古代包含層を除去した段階で、地山が露呈した。主要遺構面は、地山上面に相当する。

## 2. 検出遺構

第3調査区では、竪穴住居、掘立柱建物、ピット群、溝、土坑を検出した（図32）。周辺は、既往の調査において、古墳時代中期から古代初頭の遺構群が稠密に確認された区域にあたる。今回の調査では、既往の調査において確認した遺構に連続するもののほか、竪穴住居7棟、掘立柱建物2棟を新たに検出した。また、連続することが確認された遺構のうち、先後関係等が判明したものや柱列を復元できたものがある。以下、個別に記述する。

**99 竪穴住居**（図40）3-2区において新たに検出した竪穴住居である。残存する一辺は、3.2mを測る。削平を受けているため、さらに東側へ広がる可能性がある。遺構内に残存する埋土は20cm程度である。

埋土は、暗黃灰色粗砂まじり細粒砂を主体とし、底面付近の堆積土には炭化物の細片が含まれている。遺構内からは、細かい平行タタキを外面に施した須恵器甕、須恵器杯身、土師器甕、土師器高杯が出土した。遺構の時期はおおむね6世紀後半頃と考えられる。

**105 竪穴住居【住居28】**（図41）3-1区西半部北辺において検出した遺構である。遺構の平面形状は、一辺5.6mを測る隅丸方形に復元できる。既往の調査では北半部を検出し、北辺に竪跡を確認している。埋土は暗灰黄色粗砂まじりシルトであり、地山に由来するブロック土を少量含む。遺構の残存深度は20cm程度、床面は東辺2m程度の範囲がわずかに高く、段を作るようである。

東辺の壁溝外側には、方形の角をもつ落込みがあり、建て替えがおこなわれた可能性がある。遺構埋土からは、土師器甕、須恵器甕のほか、弥生土器の底部破片が出土した。遺構の時期は6世紀である。

**117・118 竪穴住居**（図42）3-1区において新たに検出した竪穴住居である。117竪穴住居の南側に118竪穴住居が重なって確認されたことにより、住居の建て替えが想定される。

118竪穴住居は一辺4.5m程度、117竪穴住居は、3.8m以上の規模をもつ。118竪穴住居は、西辺より2.2m程度の範囲がわずかに高く、ベッド状の遺構を備えた住居であった可能性がある。埋土は暗灰黄色から灰黄色粗砂まじりシルトを主体とし、上位を黒褐色を呈する古墳時代包含層が覆う。底面付近の埋土の一部には、炭化物が含まれていた。

118竪穴住居の埋土からは、土師器甕、須恵器甕の破片が出土した。ともに6世紀の製品である。搅乱が著しく、柱穴や竪の痕跡は確認できなかった。

**120 竪穴住居【住居45】**（図43）既往の調査において、北半部が確認されていた遺構である。北辺には突出した竪をもつ。今回の調査では、これに続く南半部を検出した。

平面形状は、一辺6.0mを測る方形を呈する。残存する遺構の深度は、18cm程度である。埋土はにぶい黄褐色を呈する粗砂まじり細粒砂であり、地山に由来するブロック土を含む。東辺部では、ほぼ同形状の遺構が重なるようであり、建て替えが行われたと考えられる。東西の周溝が良好に残存しており、柱穴も確認することができた。既往の調査成果を含めると、4基の柱穴をもつ住居であったことがわか

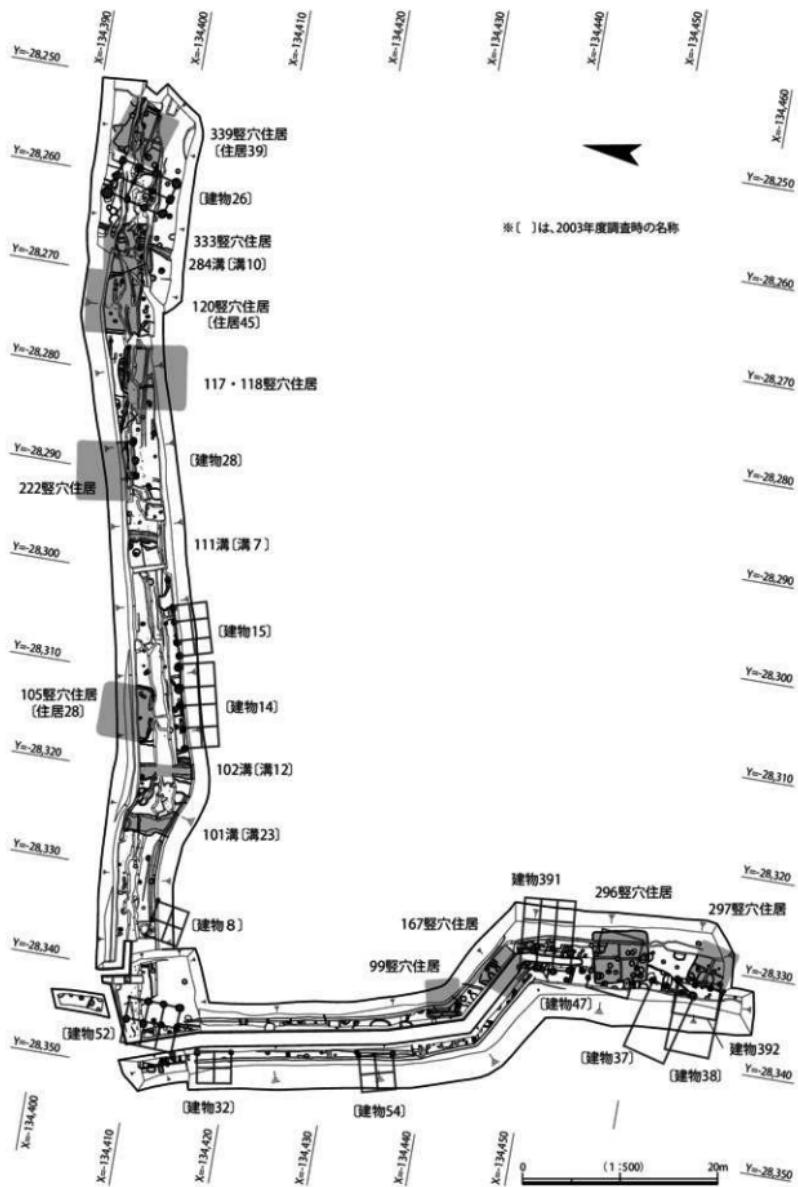


図32 第3調査区遺構面全体図(古墳時代後期～古代初頭)

る。遺構内からは、土師器甕と須恵器杯身・甕の小片が出土した。

**167 竪穴住居**（図 44） 3-2 区において新たに発見した竪穴住居である。北西辺の一角のみの検出であるが、竪跡を確認できることにより、一辺 4.8 m 程度の隅丸方形を呈する平面形状をもつ住居であったことが推測できる。

竪跡（268 土坑）は、北西辺壁溝に近い地点で検出した。埋土はにぶい黄褐色粗砂まじりシルトであり、地山に由来するブロック土を含む。竪跡付近は被熱による土壤の変色が顕著であり、炭化物や焼土が散在する。竪跡の掘削を進めたところ、下面において土師器甕の破片がまとまって出土した。また、この住居に隣連するとみられる柱穴（219 ピット）を 1 点検出した。

**295 竪穴住居**（図 45） 3-4 区で新たに検出した遺構である。既往の調査では、西側周溝の一辺が検出されていたものの、落込みの肩部として報告されていた。これが今回の調査において、竪をもつ竪穴住居であることが明らかとなった。

住居の平面形状は、一辺 5.5 m を測る方形である。削平を受けたため、遺構埋土の残存堆積は 5 cm 程度と薄いが、柱穴は既往の調査とあわせて 4 基を確認することができた（図 45・46）。ともに直径 20cm 前後の柱痕跡をもつ。

北壁と西壁には炭化物の集積があり、この 2箇所に竪を備えていた可能性がある。このうち、西壁の竪跡が良好に残存することから、北から西へ竪の作り替えをおこなった可能性がある。西側の竪は大きく住居外へと突出する。竪の埋土内には、土師器甕や高杯などの土器片のほか、炭化物や骨片の集積が認められた。

**297 竪穴住居**（図 46） 297 竪穴住居は、3-4 区南端において検出した遺構である。南半部が調査区外へと続くため、竪穴全体の規模は確認できていないが、竪跡の位置から、一辺 4 m 程度を測る方形プランをもつものと推測される。埋土は灰黄色粗砂まじりシルトであり、地山に由来するブロック土を若干含む。埋土からは、須恵器杯身、土師器甕等が出土した（図 62）。

竪は西壁に備えられており、わずかに突出する。周辺には黒色粘土や炭化物の集積があり、これを採取して洗浄したところ、炭化した植物遺体とともに滑石製白玉 2 点と水色を呈するガラス製小玉 1 点を検出した。

**303 竪穴住居**（図 47） 3-3 区において新たに検出した竪穴住居である。284 溝に切られているため残存状態は悪いが、東壁付近に土師器高杯（図 62-14）を逆位置に据えた竪跡らしき施設をもつ。埋土は暗灰黄色粗砂まじりシルトであり、地山に由来するブロック土を含む。埋土からは、土師器高杯のほか、土師器甕の破片が出土した。

**〔建物 14〕**（図 48） 3-1 区中央南辺において検出した柱列である。既往の調査成果と連続して、4 間 × 3 間の規模をもつ掘立柱建物となる。柱間の長さは 1.8 ~ 2.2 m 程度である。

建物の主軸は方位北に対して 70 度東に振る。建物の長辺は 8.4 m、短辺は 3.7 m、床面積は 31.08 m<sup>2</sup> を測る。柱穴は、直径 60 ~ 90cm を測る円形ないし隅丸方形の平面形状をもつ。柱痕は、直径 18cm 前後である。柱穴埋土からは、須恵器甕の小片が出土した。

**〔建物 15〕**（図 49 上段） 建物 14 の東側において検出した建物である。既往の調査成果と連続して 3 間 × 2 間の建物となる。柱間の長さは 1.4 ~ 2.0 m を測り、長辺中央の柱間がやや広く作られている。

建物の主軸は方位北に対して東へ 73 度振る。建物の長辺は 5.00 m、短辺は 3.00 m、床面積は 15.00 m<sup>2</sup> を測る。柱穴の規模は〔建物 14〕に比べて小さく、直径 50 ~ 60cm 程度の円形ないし隅丸方

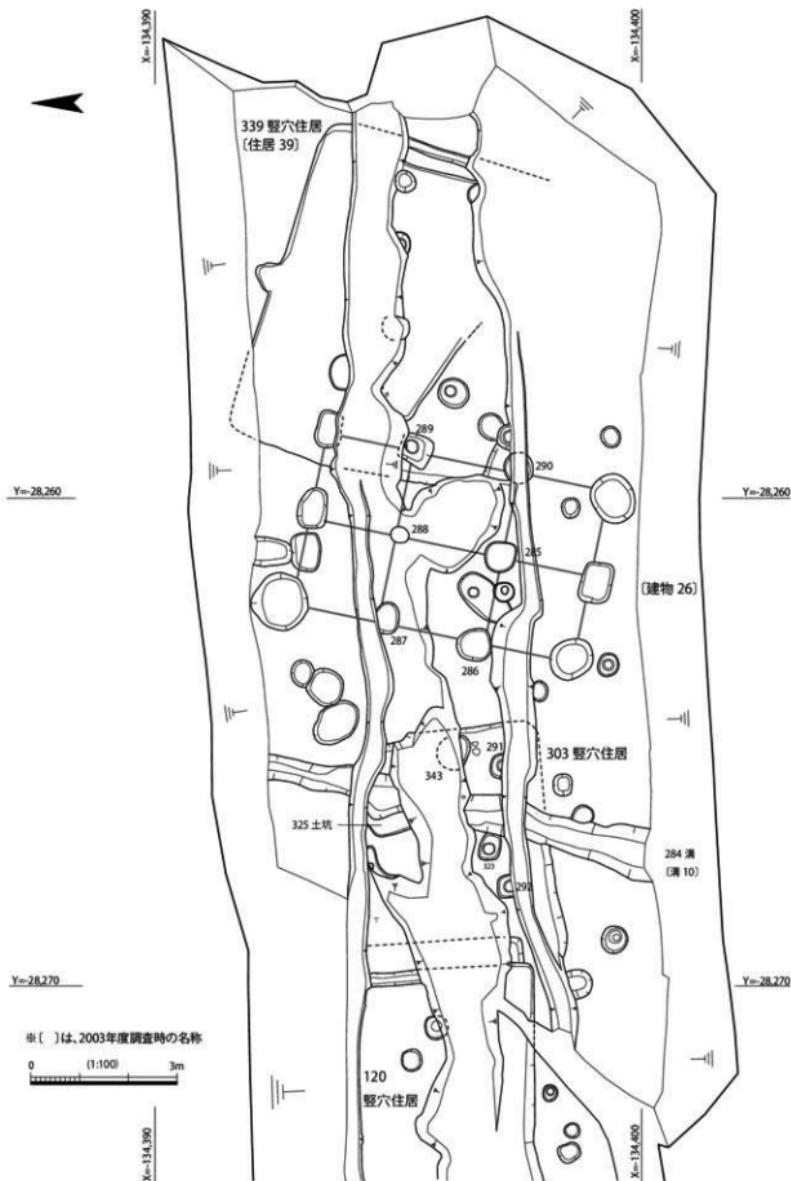


図 33 第3調査区造構面平面図(1)

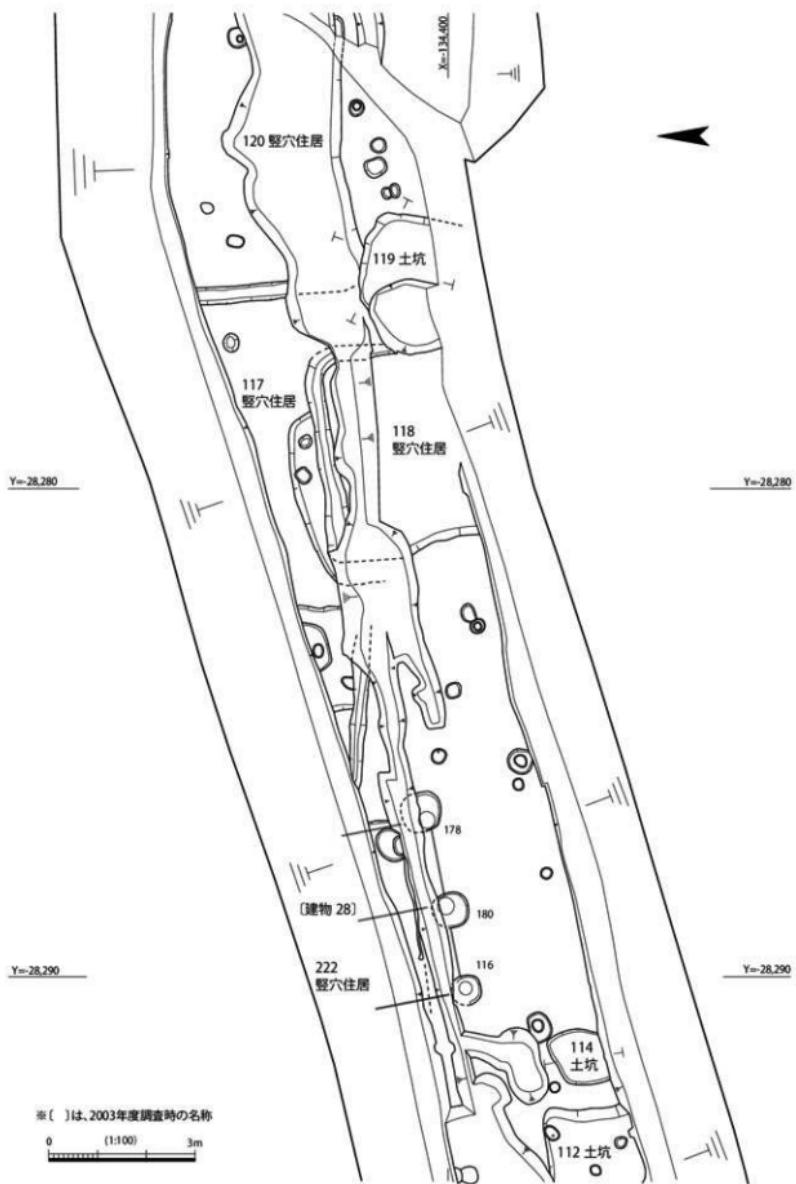


図 34 第3調査区遺構面平面図（2）

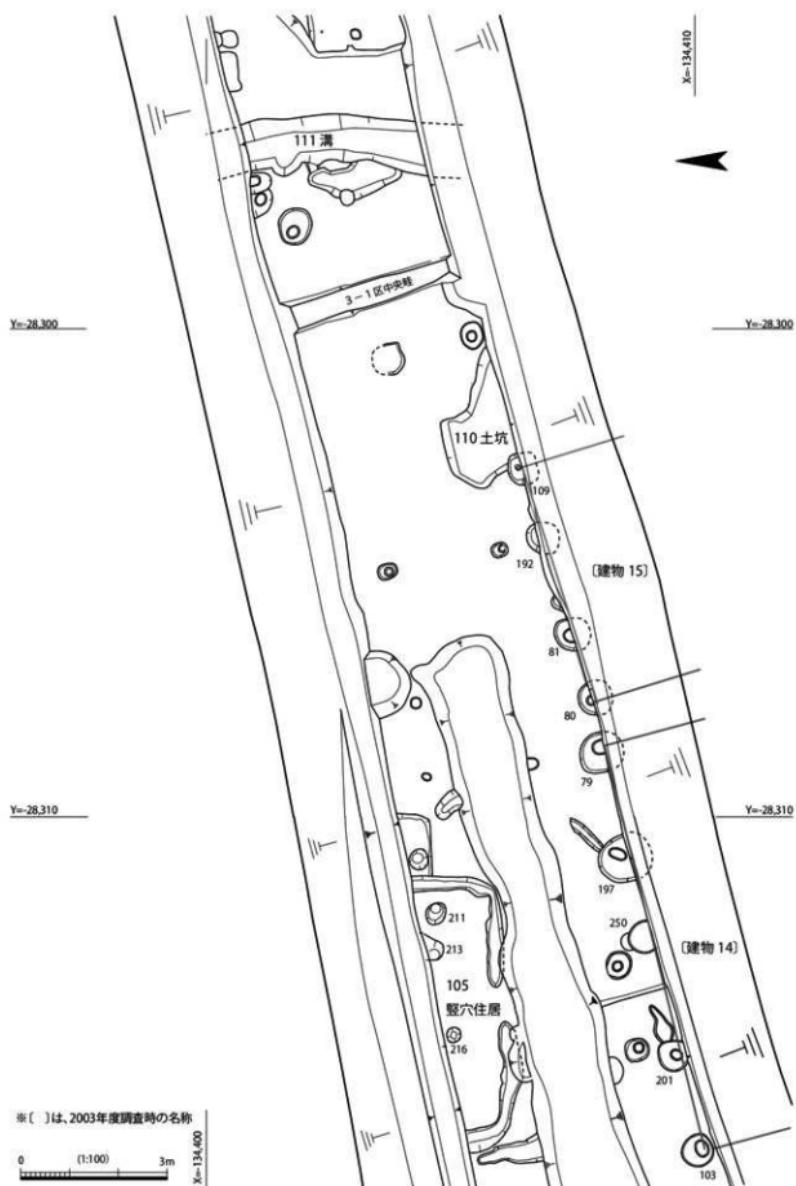


図 35 第3調査区遺構面平面図(3)

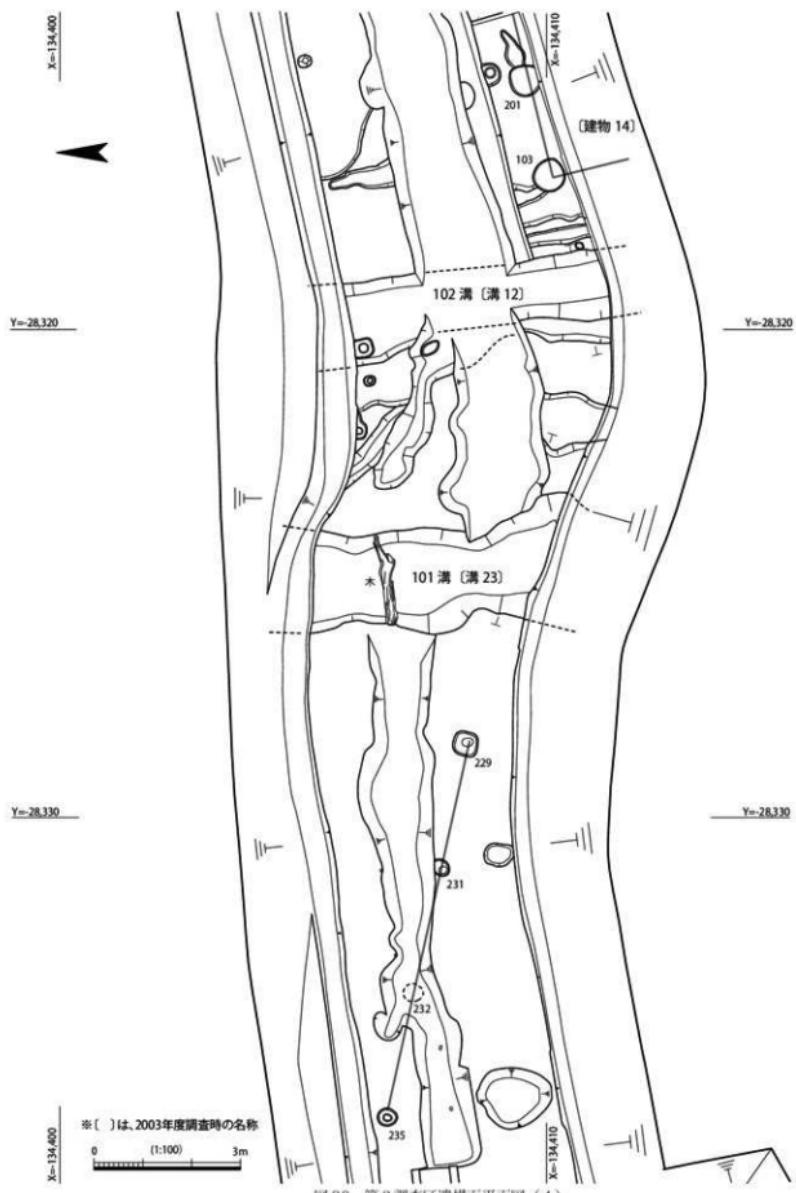


図 36 第3調査区遺構面平面図 (4)

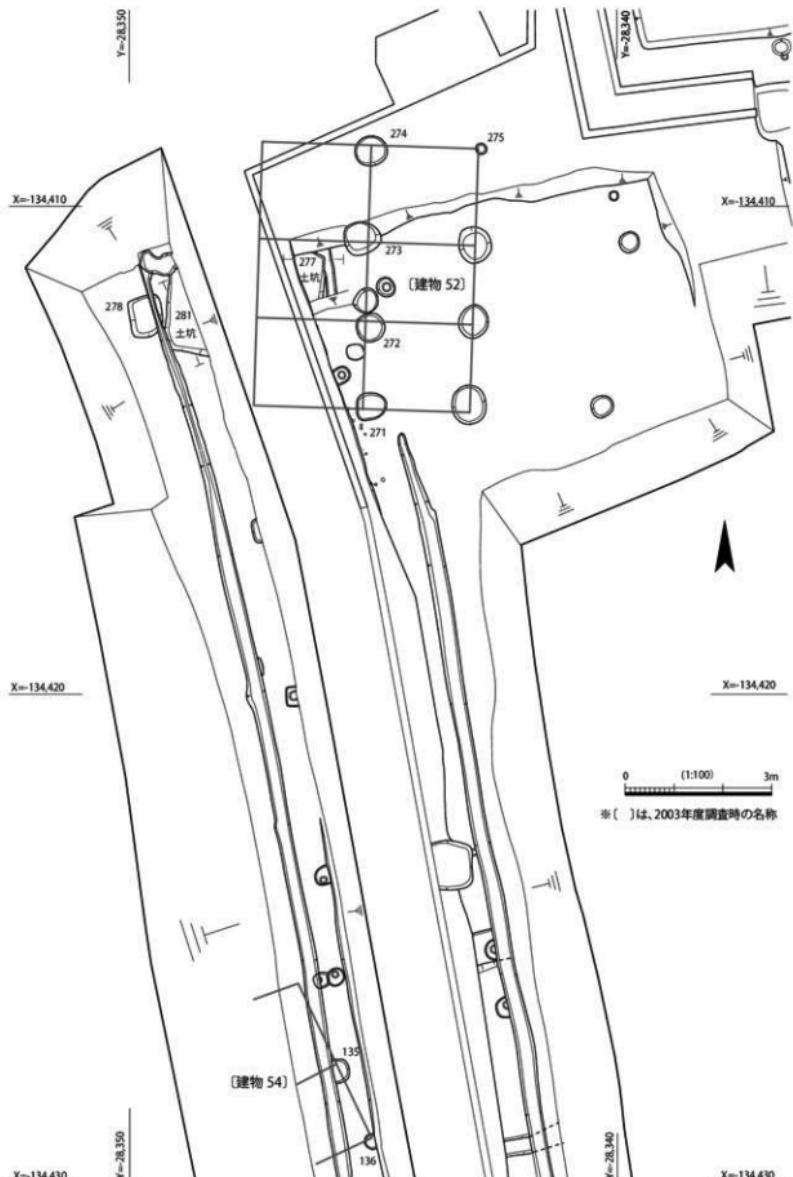


図 37 第3調査区遺構面平面図（5）

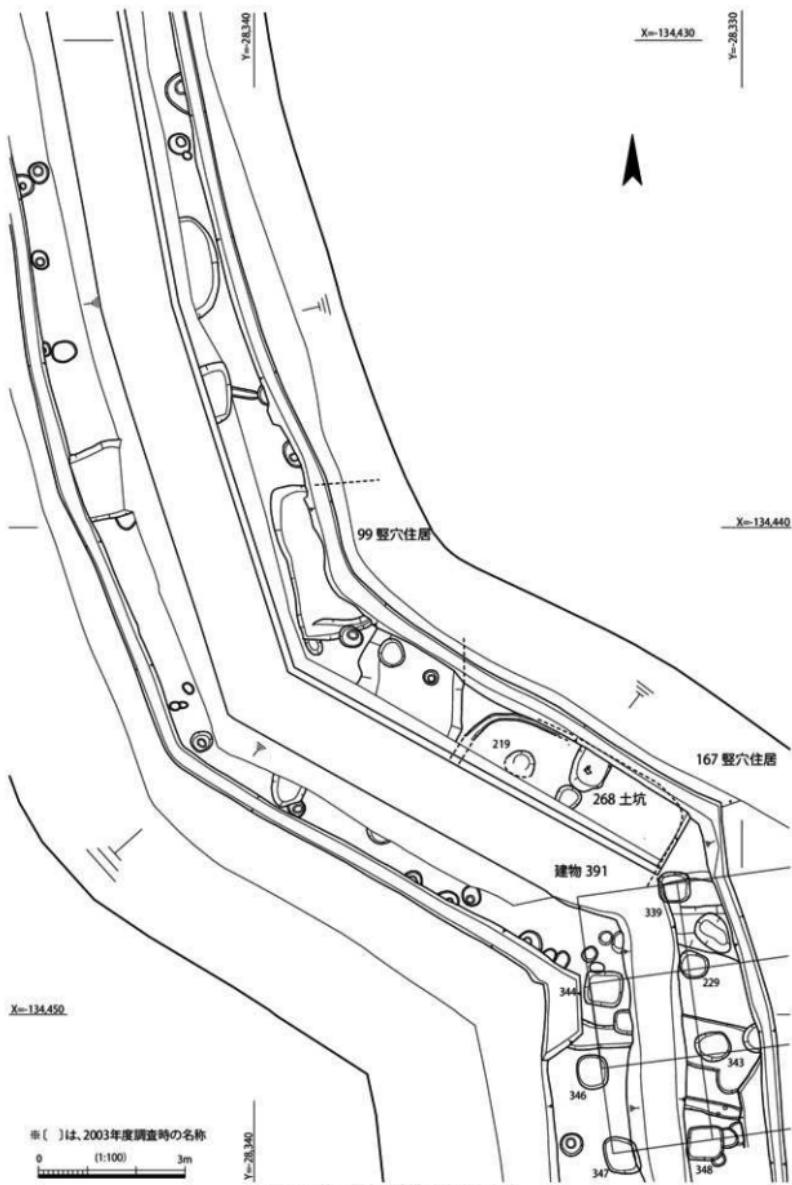


图 38 第3 调查区遺構面平面图 (6)

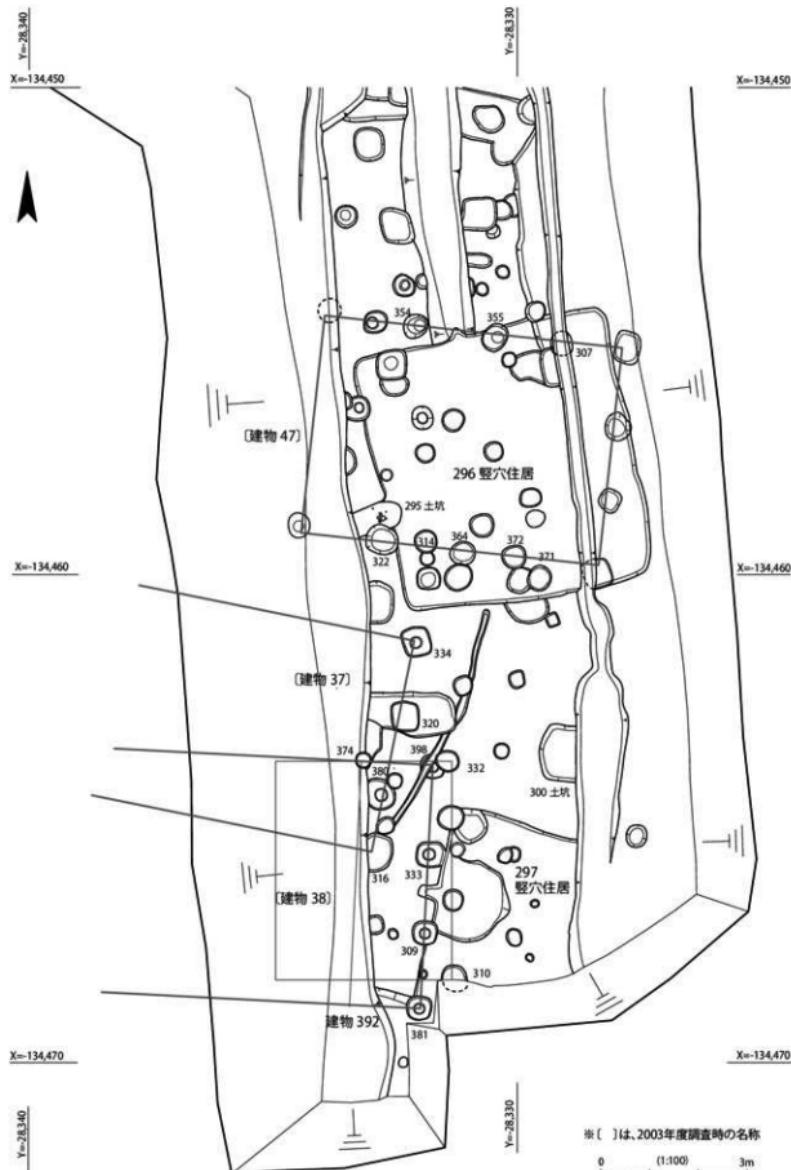


図 39 第3調査区遺構面平面図（7）

形の平面形を呈する。柱痕は、20cm未満のものが多い。

〔建物26〕(図49下段) 3-3区において検出した掘立柱建物である。3間×2間の柱間をもつ総柱建物であり、方位北より東へ10度振った方向を主軸とする。柱間は1.92~1.95m、建物の長辺は5.80m、短辺は3.60m、床面積は20.88m<sup>2</sup>である。柱穴の規模は直径60cm程度のものが多く、円形もしくは隅丸方形を呈する。残存する柱痕は直径20cm程度である。

この建物は、既往の調査では、[26-1] [26-2] [26-3]を通した辺を長軸とする掘立柱建物として想定されていた。しかし、今回の調査によって、北側へ柱と続く柱列が検出され、さらに、既往報告の[26-4] [26-5] [26-6]とも連続することが明らかとなった。

擾乱および削平を著しく受けており、柱穴そのものの残存状態は良くないが、灰オリーブ色を呈する地山上面に黒褐色シルトを埋土とする柱痕は目立つため、検出することが可能であった。285ピットの埋土からは、土師器高杯、須恵器甕の破片が出土した。

〔建物28〕(図50上段) 3-1区東半部で検出した柱列である。既往の調査では、2間×2間の総柱建物として復元されていたが、今回の柱列検出により、3間×2間の総柱建物であることが明らかとなった。

柱間の長さは1.8~1.92mを測る。主軸は方位北より西へ10度振った方向にもつ。建物の長辺は5.6m、短辺は3.6m、床面積は20.16m<sup>2</sup>を測る。柱穴は直径40~80cmの円形を呈する。柱痕は、直径20cmを下回るものが多い。

〔建物37〕(図50下段) 3-4区において検出した建物である。既往の調査において確認されている柱穴群と連続し、4間×3間を数える建物として復元することができた。建物の主軸は東西方向、長辺は7.2m、短辺は4.6m、床面積は33.12m<sup>2</sup>を測る。柱穴の平面形状は50~60cmの円形、深度は60cm程度である。柱穴の埋土は、古墳時代包含層であるオリーブ黑色細砂まじり粘土質シルトを主体とする。柱痕は、直径20cmを超えるものがある。埋土からは、土師器甕や高杯、須恵器甕の細片が出土した。

#### 99 穴住居

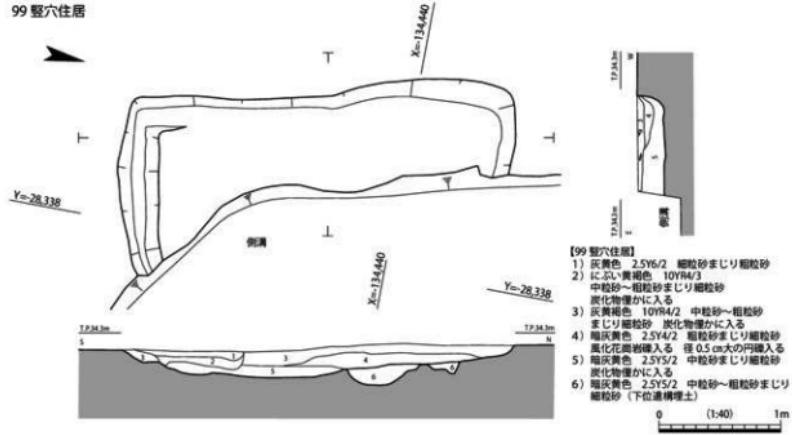


図40 99 穴住居平面・断面図

105 整穴住居（住居 28）

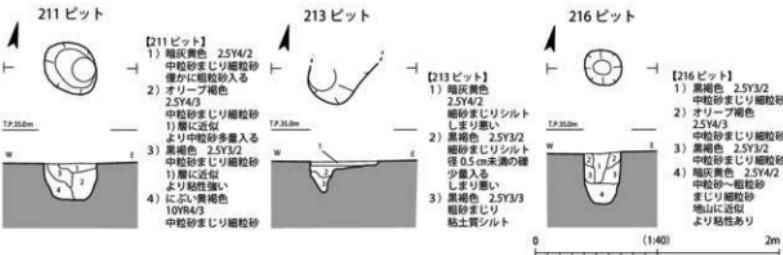
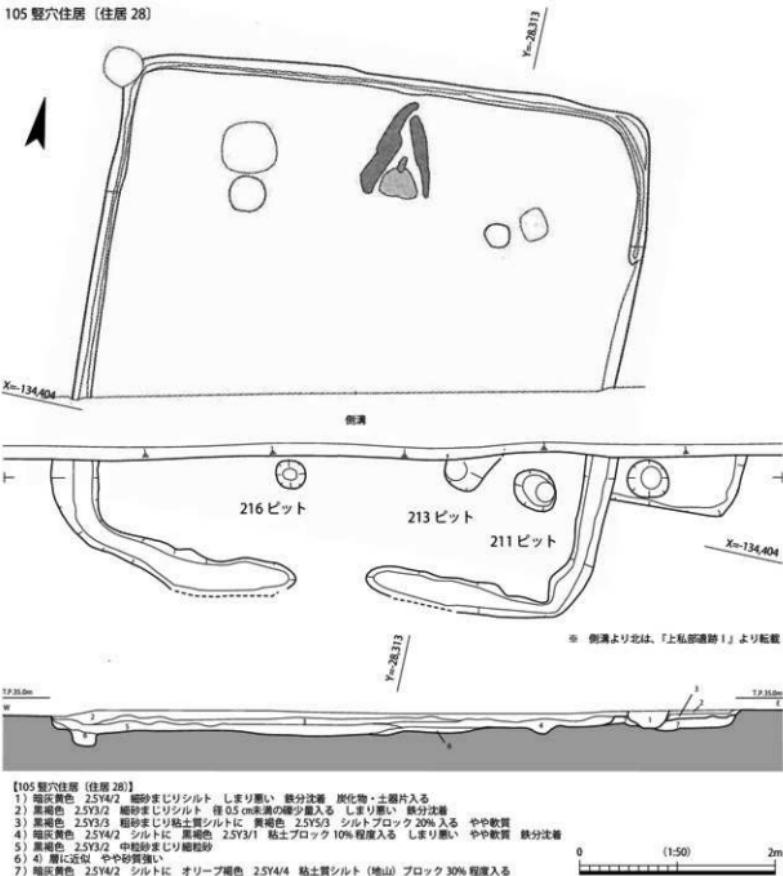


図 41 105 整穴住居平面・断面図

**〔建物 38〕** (図 51 上段) 3-4 区において検出した建物である。既往の調査において確認されている柱穴群と連続し、5間×3間を数える建物として復元できる。建物の主軸は東西方向、長辺は 8.70 m、短辺は 5.00 m、床面積は 43.50 m<sup>2</sup>を測る。柱穴の平面形状は 50 ~ 60cm の円形、深度は 60cm 程度で、柱痕は 20 ~ 25cm 程度である。集落の中では最大級の床面積をもつ大型建物に類別される。**〔建物 37〕** とは、若干方向軸を違えて建てられており、同じ性格をもつ建物の建て替えることもできる。

**〔建物 47〕** (図 51 下段) 3-4 区において検出した建物である。東辺の柱穴列を既往の調査によって検出す。今回の調査では連続する柱列を確認し、4間×3間の建物であったと推測する。柱間の長さは 1.00 ~ 1.40 m とばらつきがある。建物は主軸を東西方向にとる。建物の規模は長辺 6.20 m、短辺 4.40 m、床面積は 27.28 m<sup>2</sup>を測る。柱穴は直径 40cm 前後の円形または隅丸方形を呈する。

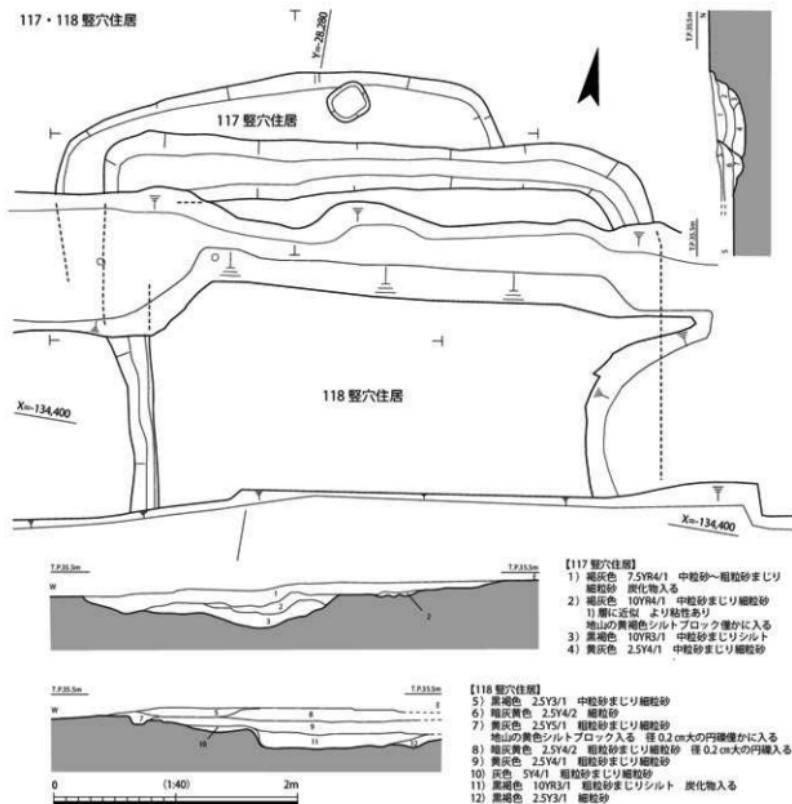
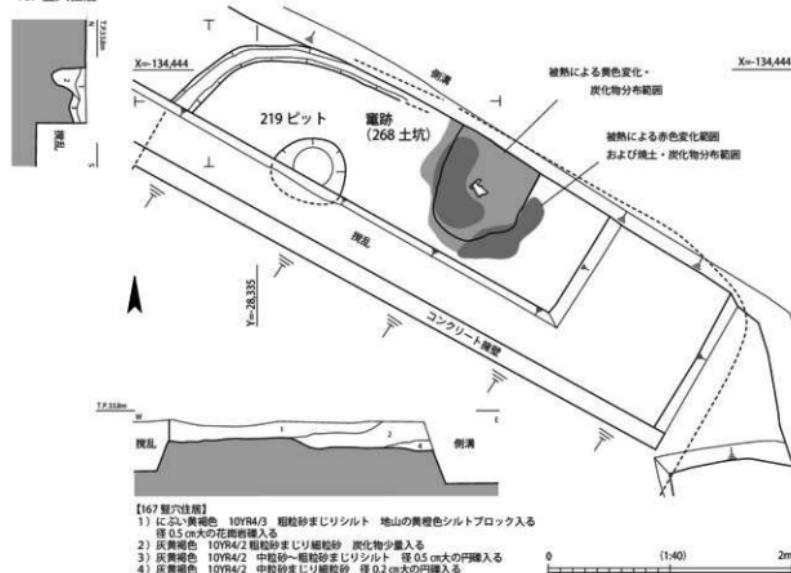


図 42 117・118 整穴住居平面・断面図

**[建物 52]** (図 52 上段) 3 - 5 区において検出した掘立柱建物である。既往の調査では、3間×1間以上の掘立柱建物として復元されていたが、今回の調査によって、3間×2間以上の総柱建物であることが明らかとなった。柱間の長さは 1.70 ~ 2.00 m を測る。建物の主軸は、ほぼ方位北を指す。建物の長辺は 5.20 m、短辺は 4.40 m 程度であると推測される。柱穴の平面形状は、直径 50 ~ 80cm 程度の円形である。柱痕は 18 ~ 22cm 程度である。

**[建物 54]** (図 52 下段) 3 - 2 区の北西部西辺に位置する掘立柱建物である。既往の調査成果に加え、

#### 167 穹穴住居



#### 167 穹穴住居竈 (268 土坑)

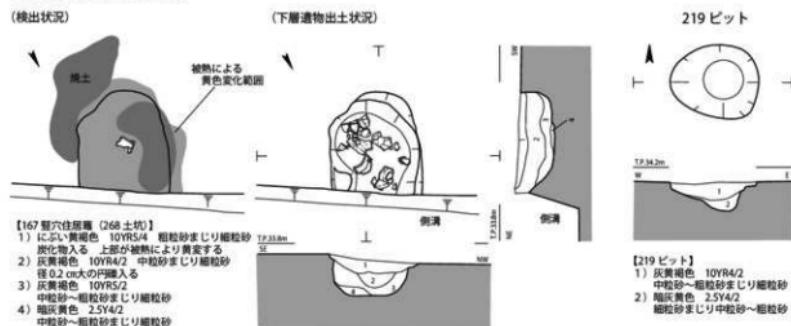
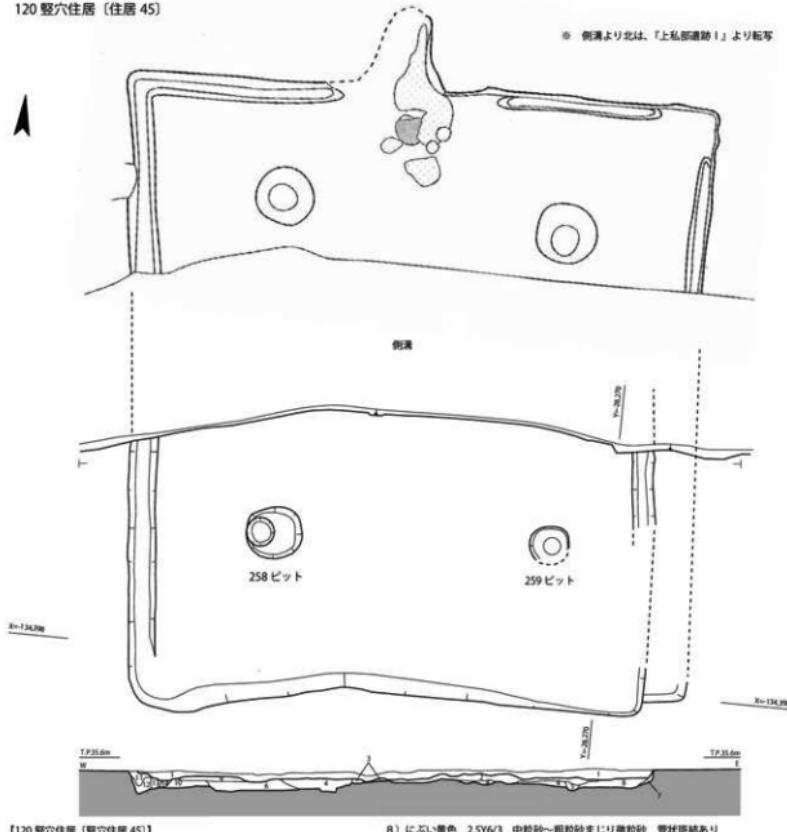


図 43 167 穹穴住居平面・断面図

## 120 穹穴住居（住居 45）

※ 例溝より北は、「上私部道路！」より転写



## 【120 穹穴住居（穹穴住居 45）】

- 黒褐色 2.5Y3/2 粗粒砂まじり細粒砂 径 0.5 cm未溝の円錐入る
- 黒褐色 2.5Y3/2 粗粒砂まじり細粒砂 地山の青灰色砂質土ブロック入る
- 黒褐色 2.5Y3/2 R1/1 細粒砂まじりシリルト
- 黒褐色 10YR4/1 中粒砂～粗粒砂まじり微粒砂
- 地山の黄褐色砂質土ブロック 30% 程度入る
- 褐灰色 10YR4/1 中粒砂～粗粒砂まじり微粒砂
- にぶい 黃褐色 10YR4/3 中粒砂～粗粒砂まじり微粒砂
- 層に似るがそれより地山ブロックの径が小さい
- 黄灰色 2.5Y4/2 微粒砂まじり細粒砂 径 0.2 cm大の円錐入る

8) にぶい 黄色 2.5Y6/3 中粒砂～粗粒砂まじり微粒砂 菱状斑続あり

9) にぶい 黄褐色 10YR4/3 中粒砂～粗粒砂まじり細粒砂

地山の青褐色砂質土ブロック入る

10) にぶい 黄褐色 10YR4/2 中粒砂～粗粒砂まじり細粒砂

地山の青褐色砂質土ブロック やや土煙色

11) 褐黃褐色 10YR4/2 粗粒砂まじり地山砂

径 0.2 cm大の円錐入る

12) 黄褐色 10YR3/3 中粒砂～粗粒砂まじり細粒砂

13) 黒褐色 10YR3/2 中粒砂～粗粒砂まじり細粒砂

12) 層に近似 地山ブロックの径が小さい

14) 褐黃褐色 10YR4/2 中粒砂まじり粗粒砂



## 258 ピット



## [258 ピット]

- にぶい 黄色 10YR4/3 細粒砂まじりシリルト 黄褐色 2.5Y5/4 細粒砂まじりシリルト ブロック 10% 程度入る
- 黒褐色 2.5Y3/2 R1/1 粗粒砂ブロック 30% 程度入る 径 0.5 cm未溝の縦少量入る しまり悪い
- 褐灰色 2.5Y4/1 細粒砂まじりシリルトと 黄褐色 2.5Y5/4 黏土質シルトの混合層 0.5 cm未溝の縦少量入る
- 2) 層に近似 級質
- 1) 層に近似 級質

## 259 ピット



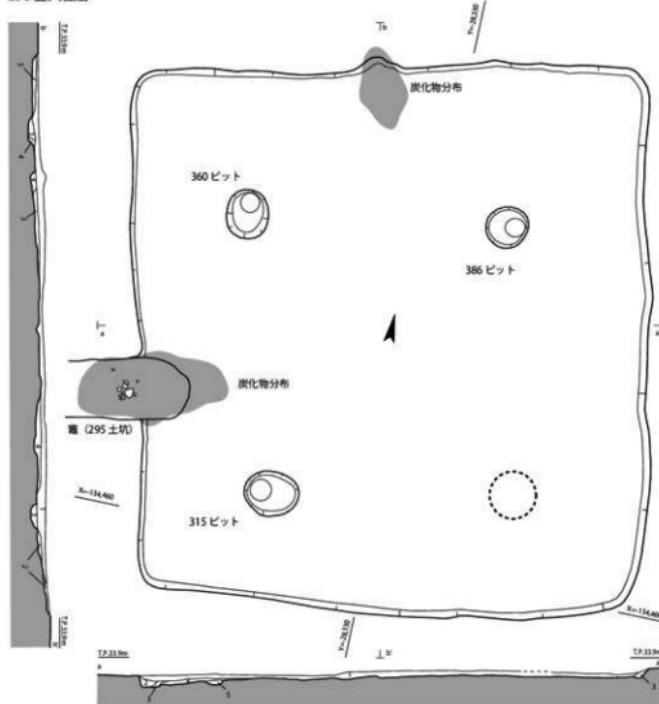
## [259 ピット]

- 褐灰黄色 2.5Y4/2 粗砂まじりシリルト 径 0.5 cm未溝の縦少量入る 級質
- 黄褐色 2.5Y4/1 細粒砂まじりシリルト 黄褐色 2.5Y4/1 粗粒砂まじりシリルト 黏土質シルトブロック 10% 程度入る しまり悪い
- 黒褐色 2.5Y3/2 細粒砂まじりシリルト 黄褐色 2.5Y5/5 シルトブロック 10% 程度入る
- オリーブ黒色 5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト 径 0.5 cm未溝の縦少量入る しまり悪い



図 44 120 穹穴住居平面・断面図

296 穹穴住居

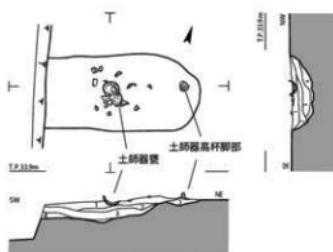


【296 穹穴住居】

- 1) オリーブ黒色 SY3/2 粗砂まじりシルト  
SY3/2 粘土ブロック 30% 程度入る  
灰オリーブ色 SY5/3 粗砂まじり粘質シルト  
灰色 SY4/1 粗砂ブロック 30% 程度入る 炭化物少量入る  
程度 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや悪い やや軟質
- 2) オリーブ黒色 SY3/1 粗砂まじり粘質シルト  
灰色 SY4/1 粗砂ブロック 30% 程度入る 炭化物少量入る  
程度 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや悪い やや軟質
- 3) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト  
程度 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質 炭化物少量入る
- 4) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂ブロック 10% 程度入る しまり悪い 軟質  
灰オリーブ色 SY5/2 粗砂まじり粘土質シルト  
灰色 SY4/1 粗砂まじりシルト しまり悪い 軟質
- 5) オリーブ黒色 SY3/1 粗砂まじりシルト しまり悪い 軟質  
灰色 SY4/1 シルトブロック 10% 程度入る

0 (1:50) 2m

296 穹穴住居西側竪 (295 土坑)



【295 土坑】

- 1) オリーブ黒色 SY3/2 粗砂まじりシルト  
オリーブ黒色 SY3/2 粘土ブロック 30% 程度入る  
炭化物少量・骨片少量入る しまりやや良い
- 2) オリーブ黒色 SY3/1 粗砂まじり粘質シルト  
灰色 SY4/1 粗砂ブロック 30% 程度入る 炭化物多量入る  
程度 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや悪い やや軟質
- 3) オリーブ黒色 7.5Y3/1 粗砂まじり粘土質シルト  
程度 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質 炭化物少量入る
- 4) オリーブ黒色 SY3/1 粗砂まじりシルト しまり悪い 軟質  
灰色 SY4/1 シルトブロック 10% 程度入る

0 (1:40) 2m

図 45 296 穹穴住居平面・断面図

297 穴穴住居

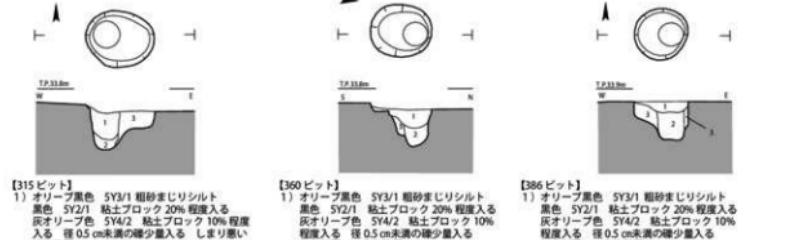
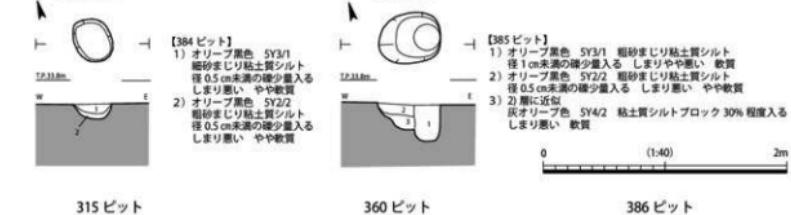
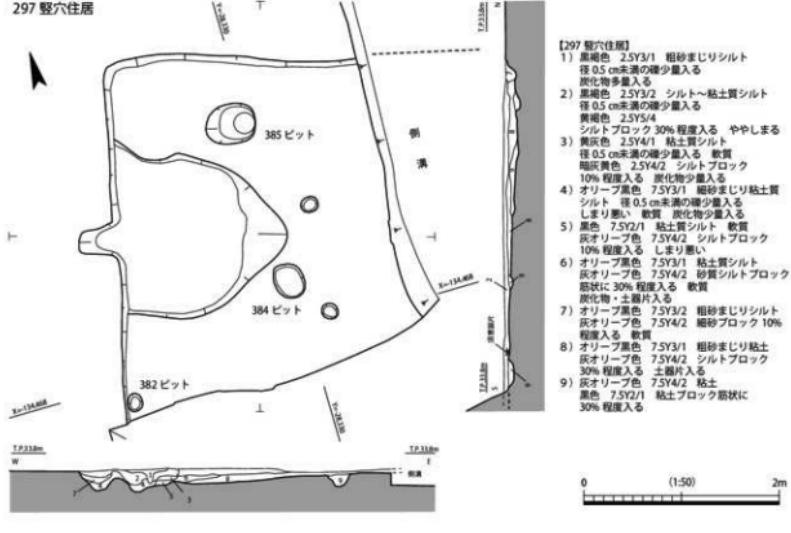


図 46 297 穴穴住居平面・断面図・296 穴穴住居柱穴平面・断面図

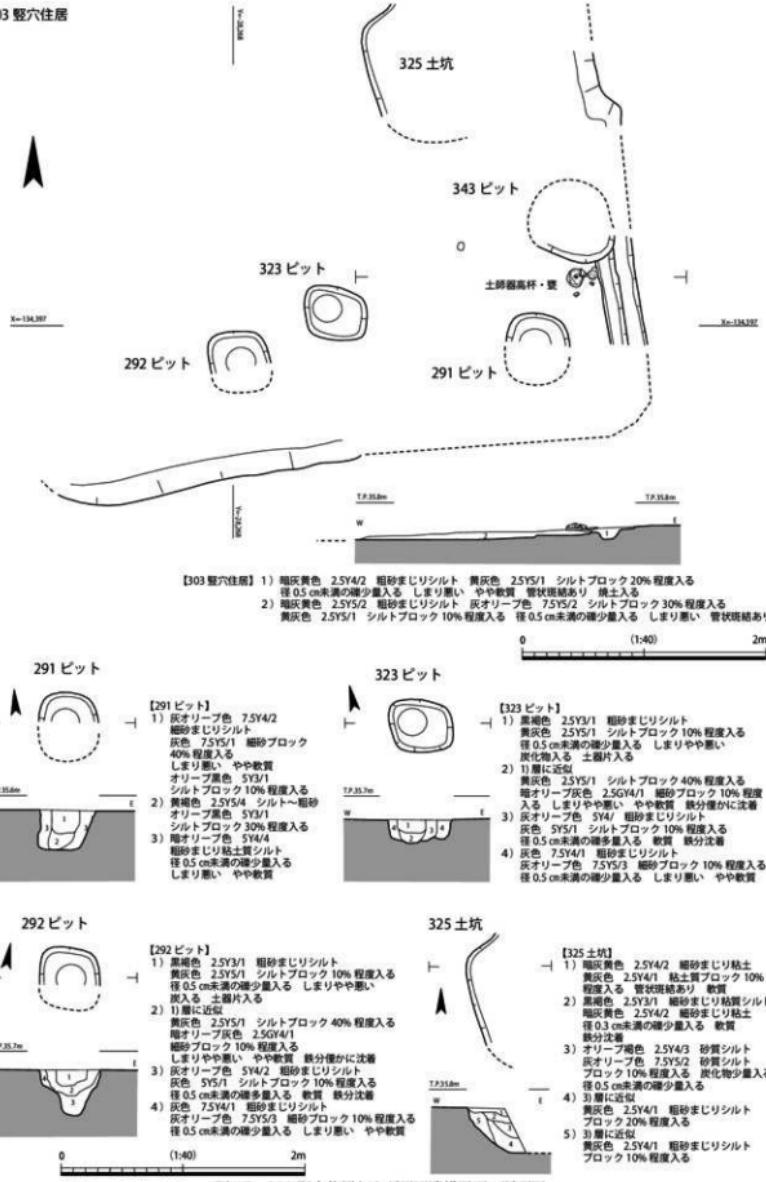


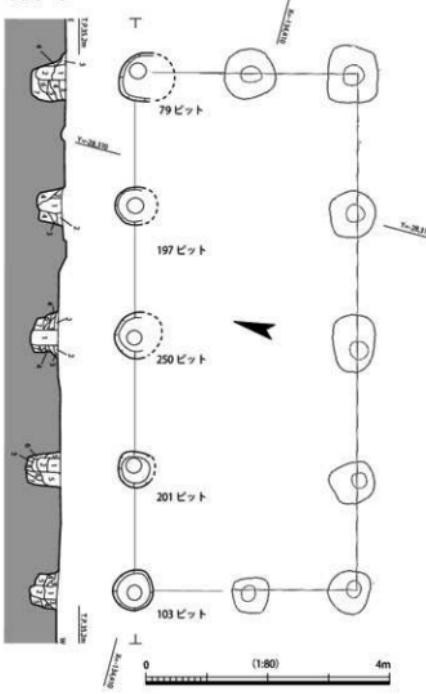
図 47 303 積穴住居および周辺遺構平面・断面図

今回2基の柱穴を確認したことと、2間×2間の総柱建物であることが追認された遺構である。

建物の規模は長辺4.2m、短辺3.7mで、床面積は15.54m<sup>2</sup>を測る。柱痕の直径は、20cm程度である。埋土は、古墳時代包含層である黒褐色粗砂まじり細粒砂を主体とする。

**建物 391**（図53）3-4区北辺において検出した柱列から図上復元した建物跡である。既往の調査区において検出した柱列と連続し、3間×3間ないし4間×3間の総柱建物であった可能性が高い。建物は主軸を東西方向にもつ。建物の長辺は6.20m、短辺は4.40m、床面積は27.28m<sup>2</sup>を測り、建物規模は大きい。柱穴の規模も大きく、平面形状は一辺80cmを測る隅丸方形を呈する。ただし、削平のため、掘り方の深度は20cm程度と浅く残存する。

#### 〔建物 14〕



##### 〔103 ピット〕

- 培養土色 2.5Y4/2 細砂まじり粘土質シルト  
オリーブ褐色 2.5Y4/3 シルトブロック 10% 程度入る  
径 0.5cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
- 培養土色 2.5Y4/2 細砂まじり粘土質シルト  
オリーブ褐色 2.5Y4/3 シルトブロック 30% 程度下位に入れる
- にじむ・黄褐色 10YR4/3 細砂まじりシルト～粘土質シルト  
黄褐色 2.5Y5/6 シルトブロック 10% 程度入る  
しまり悪い 鉄質
- 3) 壁に近い  
黄褐色 2.5Y5/6 シルトブロック 40% 程度入る
- 培養土色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト 径 0.5cm未満の礫少量入る  
しまり悪い 鉄質

##### 〔79 ピット〕

- にじむ・黄褐色 10YR4/3 粗砂まじり粘土質シルト  
黄褐色 2.5Y5/6 粗砂まじりシルトブロック 20% 程度入る  
径 0.5cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
- 培養土色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト 下位軟質化
- 2) 壁に近い  
黄褐色 2.5Y5/6 粗砂まじり粘土質シルトブロック 30% 程度入る
- 培養土色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト 鉄質
- 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト  
径 0.5cm未満の礫少量入る やや軟質
- 培養土色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト～砂質シルト  
径 0.5cm未満の礫少量入る
- オリーブ褐色 2.5Y4/6 粗砂まじりシルト  
黒褐色 2.5Y3/2 粘土質シルトブロック 50% 程度入る  
径 0.5cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質

##### 〔197 ピット〕

- オリーブ褐色 2.5Y4/3 粗砂まじりシルト 嵌入る 土器入る  
黄褐色 2.5Y4/1 シルトブロック 30% 程度入る しまり悪い 軟質
- 培養土色 2.5Y4/2 粘土質シルト  
オリーブ褐色 2.5Y4/4 シルトブロック 30% 程度入る 鉄分沈着
- 黒褐色 2.5Y3/2 細砂まじりシルト  
オリーブ褐色 2.5Y4/4 シルトブロック 10% 入る  
しまり悪い 軟質
- オリーブ褐色 2.5Y4/6 粗砂まじりシルトと  
黒褐色 2.5Y3/2 粘土質シルトの混合層  
径 0.5cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質

##### 〔250 ピット〕

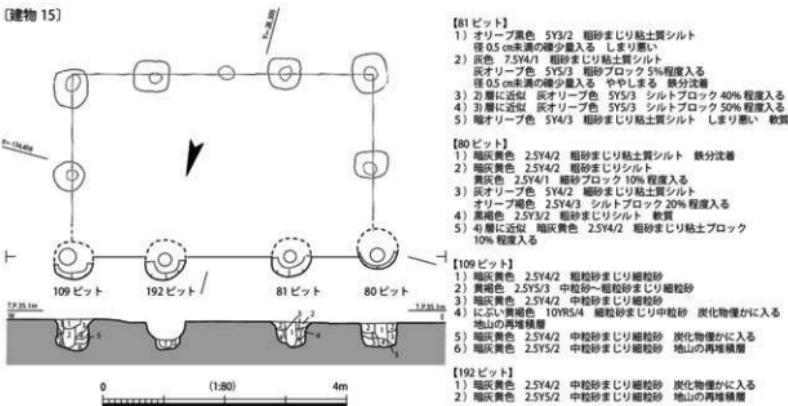
- 培養土色 2.5Y4/2 細砂まじり粘土質シルト  
黄褐色 2.5Y5/6 粗砂まじりシルトブロック 20% 程度入る  
径 0.5cm未満の礫少量入る しまり悪い 軟質
- オリーブ褐色 2.5Y4/3 細砂まじりシルト  
径 0.3cm未満の礫少量入る
- 黄褐色 2.5Y4/1 シルトブロック 30% 程度入る しまり悪い  
しまり悪い やや軟質
- オリーブ褐色 2.5Y4/2 シルト～粘土質シルト  
オリーブ褐色 5Y5/6 シルトブロック 10% 程度入る 軟質
- 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト  
オリーブ褐色 5Y5/6 シルトブロック 30% 程度入る 軟質
- 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト  
オリーブ褐色 5Y5/6 シルトブロック 40% 程度入る 軟質
- 灰オリーブ色 5Y4/2 細砂まじりシルト～粘土質シルト  
径 0.3cm未満の礫少量入る 軟質

##### 〔201 ピット〕

- にじむ・黄褐色 10YR4/3 粗砂まじり粘土質シルト  
黄褐色 2.5Y5/4 粗砂まじりシルトブロック 20% 程度入る  
径 0.5cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
- 培養土色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト 下位軟質化
- 2) 壁に近い  
黄褐色 2.5Y5/4 粗砂まじりシルト  
3) 壁に近い  
黄褐色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト  
4) 埋土  
黄褐色 2.5Y5/4 粗砂まじりシルト  
径 0.5cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
- 灰オリーブ色 5Y4/2 粗砂まじり粘土質シルト  
径 0.5cm未満の礫少量入る やや軟質
- 培養土色 2.5Y4/2 粗砂まじりシルト～砂質シルト  
径 0.5cm未満の礫少量入る

図48 〔建物 14〕平面・断面図

[建物 15]



[建物 26]

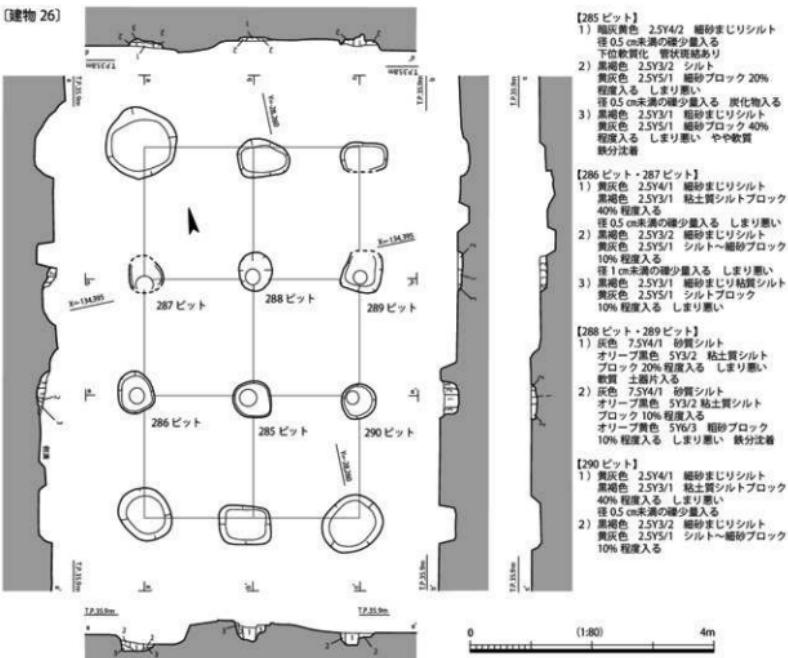
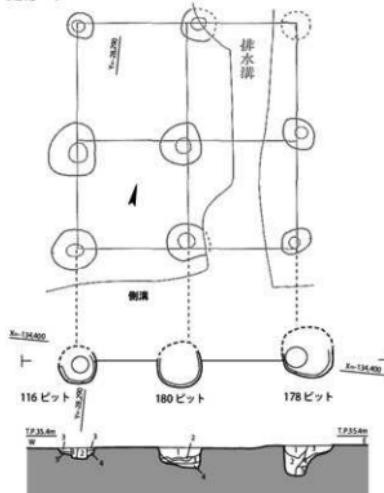


図 49 [建物 15]・[建物 26] 平面・断面図

[建物 28]



## [116 ビット]

- 1) 黄灰色 2.5Y4/1 粗粒砂まじり細粒砂
- 2) オリーブ色砂質土の地山にロックする
- 3) 黄灰色 2.5Y4/1 中粒砂まじり細粒砂
- 4) 地山の灰オリーブグリーンシルトブロックと 1 層ブロックが僅かに入る
- 5) オリーブ黒色 SY3/1 中粒砂まじり細粒砂

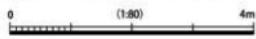
## [178 ビット]

- 1) 黄灰色 2.5Y4/1 粗粒砂まじり細粒砂
- 2) オリーブ色砂質土の地山にロックする
- 3) 黄灰色 2.5Y4/1 中粒砂まじり細粒砂 2) 屋根に近似 より粘性低い
- 4) 灰色 5Y4/1 中粒砂まじり細粒砂
- 5) 径 0.5 m 大の花崗岩塊とオリーブ色砂質土の地山ブロック僅かに入る
- 6) オリーブ黒色 SY3/1 中粒砂まじり細粒砂

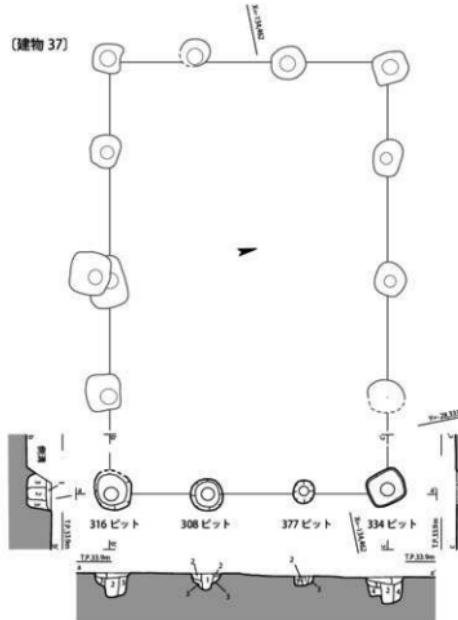
## [180 ビット]

- 1) 黄灰色 2.5Y4/1 中粒砂まじり細粒砂
- 2) オリーブ色砂質土の地山にロックする
- 3) 黄灰色 2.5Y4/1 中粒砂まじり細粒砂
- 4) 灰色 5Y4/1 中粒砂まじり細粒砂
- 5) 径 0.5 m 大の花崗岩塊とオリーブ色砂質土の地山ブロック僅かに入る
- 6) オリーブ黒色 SY3/1 中粒砂まじり細粒砂

※ 側溝より北の造構平面図は、「上私部通路」により転載



[建物 37]



## [316 ビット]

- 1) オリーブ黒色 SY3/1 細粒砂まじり粘質シルト
- 2) 黄灰色 5Y4/1 細粒砂まじりシルトブロック 30% 程度入る 径 0.5 cm 未満の礫少量入る しまりやや悪い やや軟質
- 3) 黏分量差、細かい土器片入る
- 4) オリーブ黒色 SY2/2 粘土まじり粘質シルト 径 0.5 cm 未満の礫少量入る
- 5) 黄オリーブ色 SY4/2 粘土ブロック 40% 程度入る 軟質
- 6) 2) 屋根に近似 黄オリーブ色 SY4/2 粘土ブロック 40% 程度入る 径 0.5 cm 未満の礫少量入る やや軟質

## [308 ビット]

- 1) オリーブ黒色 SY3/1 細粒砂まじりシルト
- 2) 黄灰色 SY4/1 シルトブロック 10% 程度入る
- 3) 黏分量差、細かい土器片入る
- 4) オリーブ黒色 SY3/1 細粒砂まじり粘質シルト
- 5) 黄オリーブ色 SY4/2 シルトブロック 30% 程度入る
- 6) 黄オリーブ色 SY4/2 粘土まじり粘質シルト
- 7) 黄オリーブ色 SY4/2 粘土ブロック 10% 程度入る
- 8) 3) 屋根に近似 黄オリーブ色 SY4/3 シルトブロック 10% 程度入る

## [377 ビット]

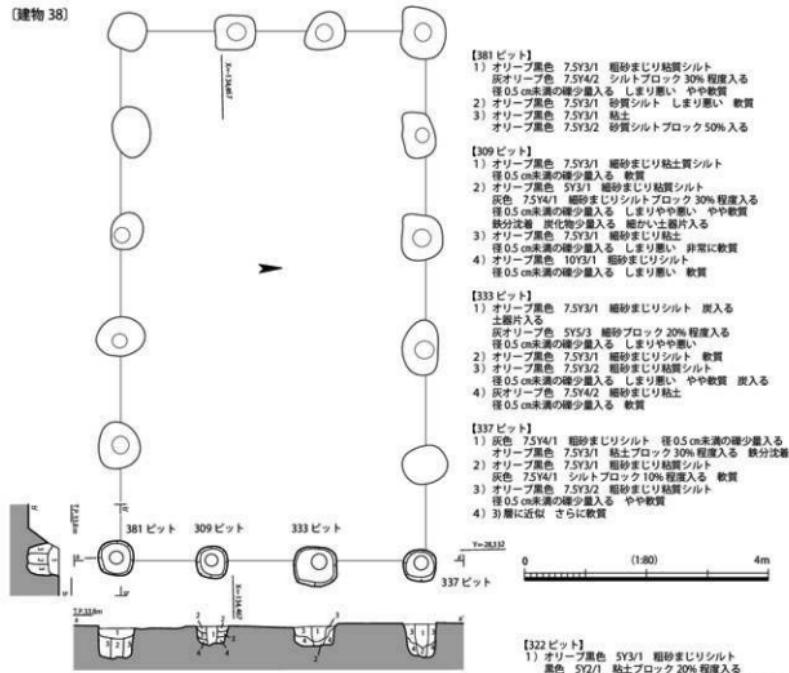
- 1) 黄灰色 7.5Y4/1 細粒砂まじりシルト
- 2) 黄オリーブ色 SY3/1 粘土ブロック 30% 程度入る
- 3) 黄オリーブ色 7.5Y3/1 細粒砂まじり粘質シルト
- 4) 黄オリーブ色 7.5Y3/2 細粒砂まじり粘質シルト
- 5) 黄オリーブ色 SY4/2 粘土まじり粘質シルト
- 6) 黄オリーブ色 SY4/2 粘土ブロック 40% 程度入る
- 7) 黄オリーブ色 SY4/2 粘土まじり粘質シルト
- 8) 黄オリーブ色 SY4/3 シルトブロック 10% 程度入る
- 9) 4) 屋根に近似 さらに軟質

## [334 ビット]

- 1) オリーブ黒色 SY3/1 細粒砂まじり粘質シルト
- 2) 黄灰色 7.5Y4/1 細粒砂まじりシルトブロック 30% 程度入る 径 0.5 cm 未満の礫少量入る しまりやや悪い やや軟質
- 3) 黏分量差、細かい土器片入る
- 4) オリーブ黒色 7.5Y2/1 粘土まじり粘質シルト
- 5) 黄オリーブ色 7.5Y2/2 細粒砂まじり粘質シルト
- 6) 黄オリーブ色 7.5Y2/2 粘土ブロック 20% 程度入る
- 7) 黄オリーブ色 7.5Y2/2 粘土まじり粘質シルト
- 8) 黄オリーブ色 SY4/1 シルトブロック 20% 程度入る 軟質
- 9) 4) 屋根に近似 黄灰色 7.5Y4/1 シルトブロック 20% 程度入る 軟質

図 50 [建物 28]・[建物 37] 平面・断面図

[建物 38]



[建物 47]

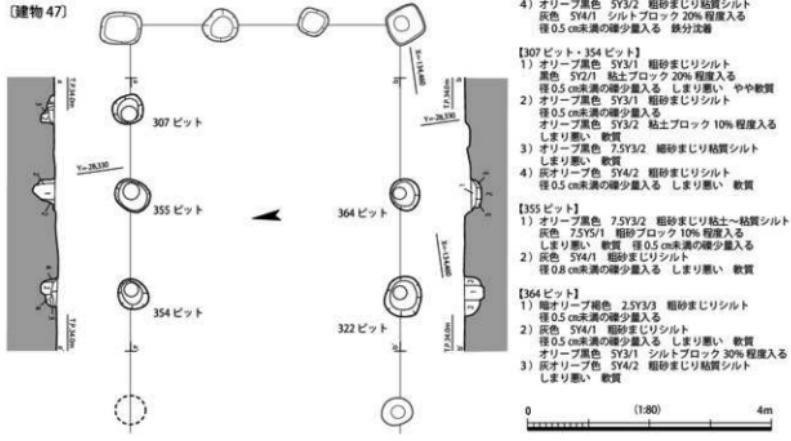


図 51 [建物 38]・[建物 47] 平面・断面図

**建物 392** (図 54) 3 - 4 区も西南端で検出した柱穴列からなる遺構である。297 穴住居とは切り合う関係にある。既往の調査区において検出した柱列と対応し、3 間 × 2 間を数える建物として復元できる。建物の主軸は南北方向にもつ。建物の長辺は 4.40m、短辺は 3.20 m、床面積は 15.84m<sup>2</sup>を測る。柱穴の平面形状は 50 ~ 60cm の円形、深度は 60cm 程度である。

**101 溝 [溝 23]** (図 55) 3 - 1 区の西半部を南北方向へ走る溝である。検出長は 4.5m、最大幅は 2.3 m、最大深度は 80cm を測る。埋土はシルトを主体とする上層と、粗砂～細砂を主体とする下層に大別できる。下層からは、古墳時代後期～古代初頭の遺物が多数出土した。断面観察では斜め方向のラミナが顕著に認められることから、激しい水流を受けて埋没したことが推測できる。埋土からは、土師器

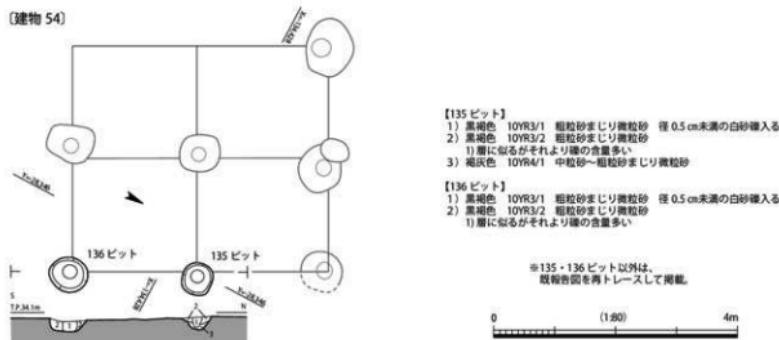
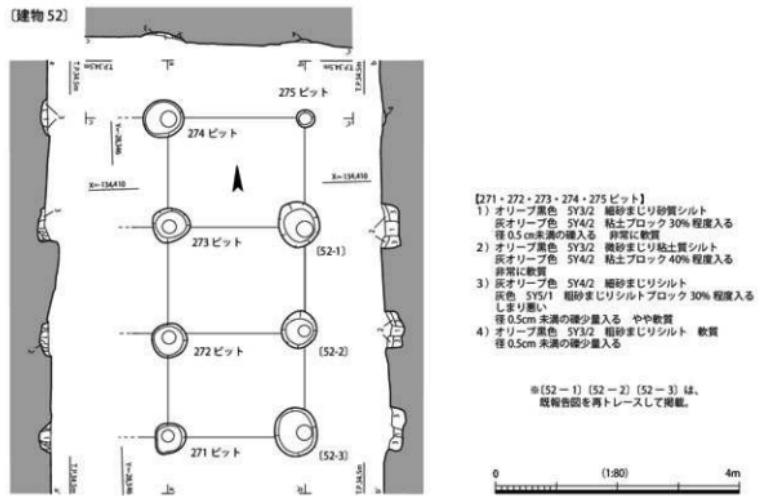
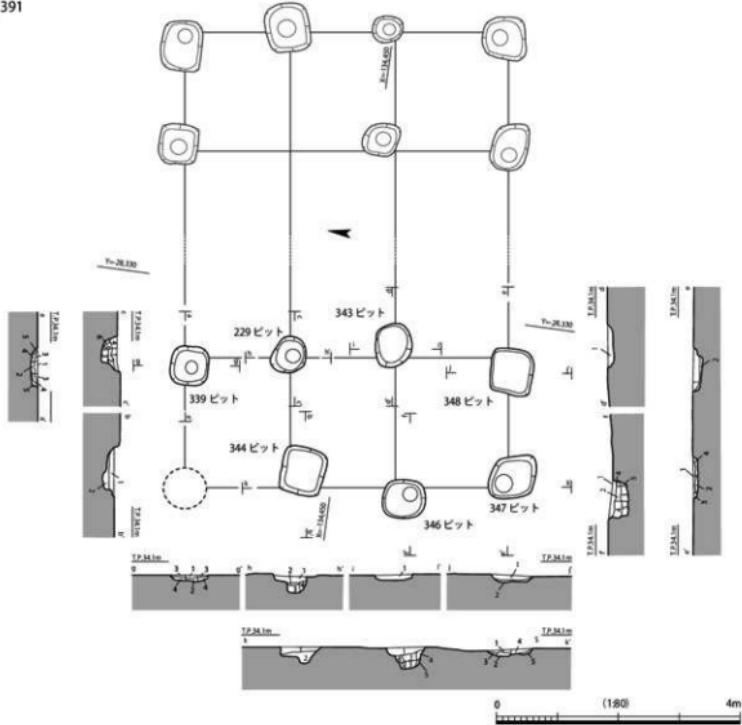


図 52 [建物 52]・[建物 54] 平面・断面図



## [299 ピット]

- オリーブ黒色 SY3/1 シルト質粘土、径 0.3 cm未満の礫少量入る 鉄分沈着
- オリーブ黒色 SY3/2 細砂まじりシリット 廉貿
- 灰オリーブ色 SY5/2 細砂まじりシリット 径 0.3 cm未満の礫少量入る  
鉄分沈着
- 灰オリーブ色 SY4/2 細砂まじりシリット 径 0.3 cm未満の礫少量入る  
鉄分沈着
- オリーブ黒色 SY3/1 細砂まじりシリット  
黒色 SY2/1 黏土ブロック 20% 程度入る 径 0.3 cm未満の礫少量入る  
しまり悪い やや軟質
- オリーブ黒色 SY3/2 粗砂まじり粘土 黒色  
5) オリーブ黒色 SY3/2 粗砂まじり粘土シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
6) 灰オリーブ色 SY4/2 細砂まじり粘土シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
オリーブ褐色 SY4/4 シルトブロック 30% 程度入る しまりやや悪い  
やや軟質

## [339 ピット]

- 暗オリーブ褐色 2SY3/3 粗砂まじり粘質シルト しまり悪い
- 灰オリーブ色 SY4/2 シルト 黑色 SY4/4 シルトブロック 10% 程度入る しまり悪い 软質
- オリーブ黒色 SY3/2 粗砂まじり粘土シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
しまり悪い やや軟質 鉄分沈着
- オリーブ黒色 SY3/2 シルト質粘土 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
しまり悪い 软質
- 灰オリーブ色 SY4/2 粗砂まじりシリット 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
しまり悪い 软質

## [343 ピット]

- オリーブ黒色 SY3/1 細砂まじりシリット  
黒色 SY2/1 黏土ブロック 20% 程度入る  
灰オリーブ色 SY4/2 黏土ブロック 10% 程度入る  
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い やや軟質

## [344 ピット]

- オリーブ黒色 7SY3/2 粗砂まじり粘質シルト  
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 软質
- オリーブ黒色 SY3/2 粗砂まじりシリット 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
オリーブ黒色 SY3/2 黏土 ブロック 20% 程度入る 软質

## [346 ピット]

- オリーブ黒色 SY3/1 細砂まじりシリット  
黒色 SY2/1 黏土ブロック 20% 程度入る  
灰オリーブ色 SY4/2 黏土ブロック 10% 程度入る  
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや悪い やや軟質
- オリーブ黒色 SY3/2 粗砂まじり粘質シルト  
オリーブ黒色 2SY5/2 細砂ブロック 10% 程度入る 管状斑紋あり
- 暗オリーブ褐色 SY4/2 粗砂まじり粘質シルト  
4) 灰色 SY4/1 細砂まじり粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
5) 灰オリーブ色 SY4/2 粗砂まじり粘質シルト  
6) 灰色 SY4/2 黏土ブロック 10% 程度入る しまり悪い 软質

## [347 ピット]

- オリーブ黒色 2SY4/2 粗砂まじり粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
暗黃褐色 SY4/2 シルトブロック 10% 程度入る 鉄分沈着
- 灰黄色 2SY4/1 細砂まじりシリット 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い  
鉄分沈着 岩化物入る
- 2) 層に泥炭 ややしまる 岩化物入る
- 4) オリーブ黒色 SY3/1 細砂まじり粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
軟質 鉄分沈着
- 5) オリーブ黒色 SY3/1 細砂まじり粘質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る

## [348 ピット]

- オリーブ黒色 SY3/2 粗砂まじりシリット  
灰色 SY4/1 細砂まじりシリットブロック 10% 程度入る
- オリーブ黒色 SY3/2 粗砂まじり粘質シルト  
灰オリーブ色 SY6/2-1/2 粘土へ細砂 糙まじりシリット  
鉄分ブロック 10% 程度入る

図 53 建物 391 平面・断面図

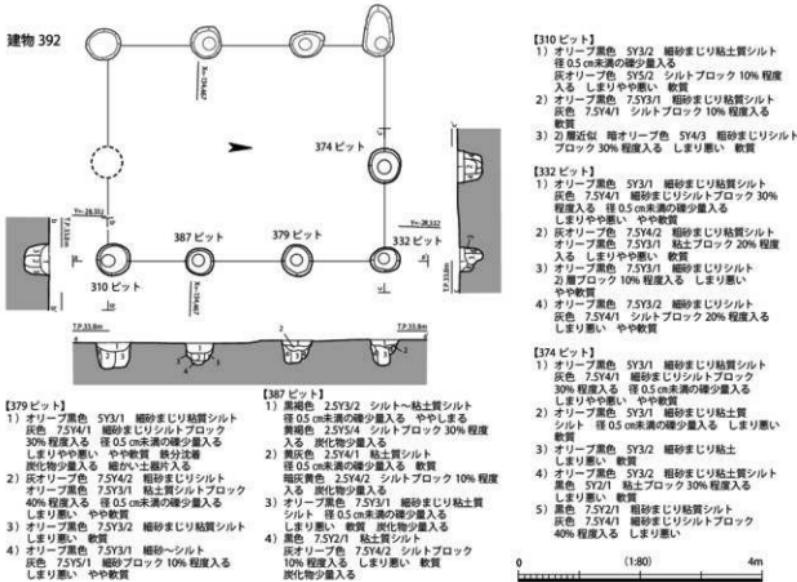


図 54 建物 392 平面・断面図

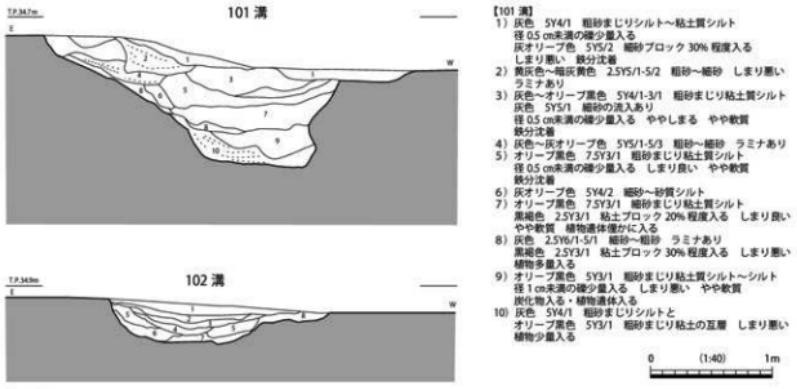


図 55 第3調査区横断面図

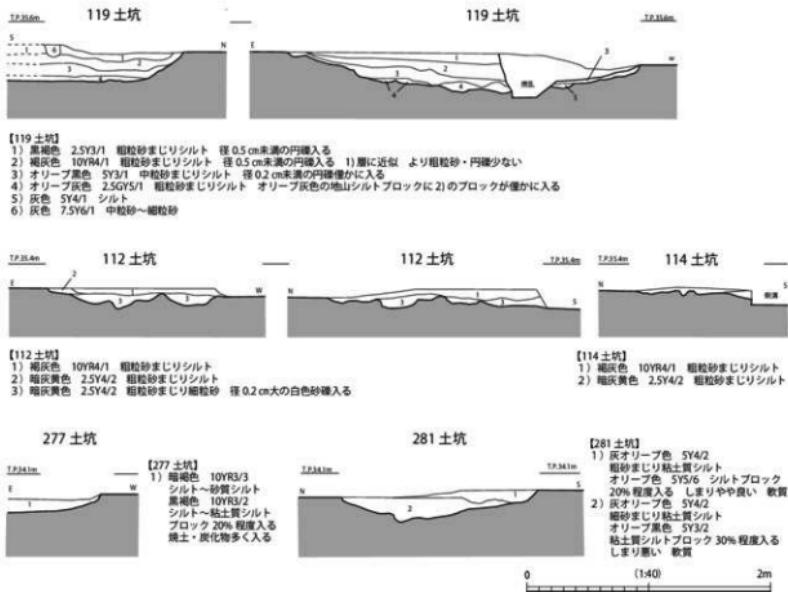


図 56 第3調査区土坑断面図

甕、須恵器杯蓋、外面に平行タタキをもつ須恵器甕、須恵器横瓶、金属滓等が出土した。また、底面からは流木が出土した。

**102 溝〔溝12〕(図55)** 101溝の東側で検出した溝である。検出長は5.2m、最大幅は1.7mを測る。断面形状は楕形で、最大深度は30cmを測る。埋土はシルトが主体であり、粗砂を多く含む101溝とは対照的に、静かに埋没した状況を窺うことができる。埋土からは、外面に格子目タタキをもつ須恵器甕、須恵器横瓶、脚部にスカシをもつ須恵器高杯、土師器甕、土師器高杯等の遺物が出土した。

**110 土坑(図35)** 110土坑は3-1区中央付近において検出した。平面形状は不定形を呈しており、南北幅2.2m、東西幅1.75mを測る。残存深度10cm程度である。掘立柱建物である〔建物15〕(後述)を構成する109ピットに切られていることから、集落内では比較的早く埋没した遺構であるといえる。埋土は黒褐色粗砂まじりシルトを主体としており、底面には地山ブロックを含む灰オリーブ色シルトが堆積する。埋土からは、土師器高杯の破片や土師器甕、須恵器甕が出土した。

**112 土坑(図56)** 112土坑の東側において検出した遺構である。一辺2.5m以上の隅丸方形を呈しており、埋土は4~15cm程度、残存する。底面には凹凸が認められるが、その上に暗灰黄色粗砂まじり細粒砂を敷いて平坦化を図っている。埋土からは、外面に平行タタキをもつ須恵器甕、土師器甕、土師器高杯が出土した。

**114 土坑(図56)** 112土坑の東側において検出した遺構である。平面形状は、最大径1.1m程度の不定形を呈する。残存深度は浅く、5cmに満たない。埋土は、褐灰色粗砂まじりシルトを主体とする。埋

土からは、土師器高杯、須恵器甕の細片が出土した。

**119 土坑**（図 56）3—1 区において検出した土坑である。西半部を搅乱によって損しているが、平面形状は一辺 2 m 程度の隅丸方形を呈していたと考えられる。最大深度は 25cm を測る。

埋土は黒褐色粗砂まじりシルトやオリーブ黑色シルトである。埋土からは、土師器甕口縁部、器壁内面にスリケシ調整をもつ須恵器甕、製塙土器等の細片が出土した。

**277 土坑**（図 56）3—5 区において検出した遺構である。北辺と西辺に搅乱を受けているため規模は明らかではないが、埋土に大量の炭化物を含むため竪穴住居にかかる遺構であった可能性がある。

**281 土坑**（図 56）同じく 3—5 区において検出した遺構である。北辺と東辺に搅乱を受けているが、277 土坑と連続する可能性がある。埋土は粘土質シルトで、軟質である。

### 3. 出土遺物

第 3 調査区では、古墳時代の遺構埋土から、比較的残存状態が良好な遺物が出土した。また、中世包含層からも、特色ある遺物が出土している。

図 57 には、竪穴住居および関連遺構、ピットより出土した遺物の実測図を掲載した。図 57—1 は、須恵器双把手付高杯の杯部である。口縁部は短く外反し、張り出した胴部の外面には、回転ナデによって作り出された低い凸帯と凹線の間に波状文を施す。把手は 2 箇所にその痕跡を残す。底部内面には強いナデが顕著に残る。底部外面には回転ヘラケズリが施されている。5 世紀中～後半の製品である。303 竪穴住居上層より出土した。

図 57—2 は、初期須恵器の杯身である。丸みを帯びたフォルムと内傾した口縁が特徴的である。焼成が甘く、器壁は外面とも灰色、断面は赤褐色を呈する。外面は回転ナデと静止ヘラケズリを施す。内面には静止ナデを施した痕跡が顕著に残る。T K 73 型式に類される製品である。222 竪穴住居より出土した。

図 57—3 は、須恵器高杯の脚部である。大きく開いた裾の 4 箇所に円形スカシを穿つ。杯部内面中央には、同心円文タタキが残されている。6 世紀の製品である。297 竪穴住居竈内より出土した。

図 57—4～7 は、須恵器杯蓋である。4 は、外面天井部近く浅い凹線をめぐらせ、これより上位にヘラケズリを施す。M T 85～T K 43 型式に類される 6 世紀後半の製品である。〔建物 37〕を構成する 308 ピットの埋土より出土した。5・7 は、やや低い器高をもつ。口縁端部内面をやや突出させて、凹面をつくりだす。6 世紀前半の製品である。7 の天井部内面には同心円文タタキを静止ナデにてすり消した痕跡が残る。ともに 297 竪穴住居竈内より出土した。6 は、外面口縁付近に浅く凹線を一条めぐらせる。部分的に細かい粘土塊の付着が認められる。6 世紀後半の製品である。297 竪穴住居竈内より出土した。

図 57—8 は、蓋杯の底部または天井部である。外面は、回転ヘラケズリを施した後、「×」の線刻を付す。内面には同心円文タタキが残る。297 竪穴住居埋土より出土した。

図 57—9～13 は、須恵器杯身である。すべて 6 世紀後半頃の製品である。9・11 は、296 竪穴住居 2 埋土より、12 は、296 竪穴住居竈（295 土坑）内より、10・13 は、297 竪穴住居竈内より出土した。10 の底部内面には同心円文タタキ後、静止ナデによってすり消した痕跡が残る。12 は、外面に細かい粘土塊の付着が目立つ。内面底部付近には、小さな亀裂が走る。13 は、胎土に含まれた白色礫が、露出する箇所がある。

図 57-14 は、土師器甕の口縁部である。口縁より頸部内面にかけて、横方向のハケ目をめぐらせる。外面は磨滅が著しい。3-1 区 120 竪穴住居の上層より出土した。

図 57-15 は、土師器高杯の杯部である。外面は磨滅が著しく、調整痕跡はわずかに指頭圧痕を残すのみである。口縁部近くに二次焼成による変色箇所が認められる。303 竪穴住居より、杯部を伏せ

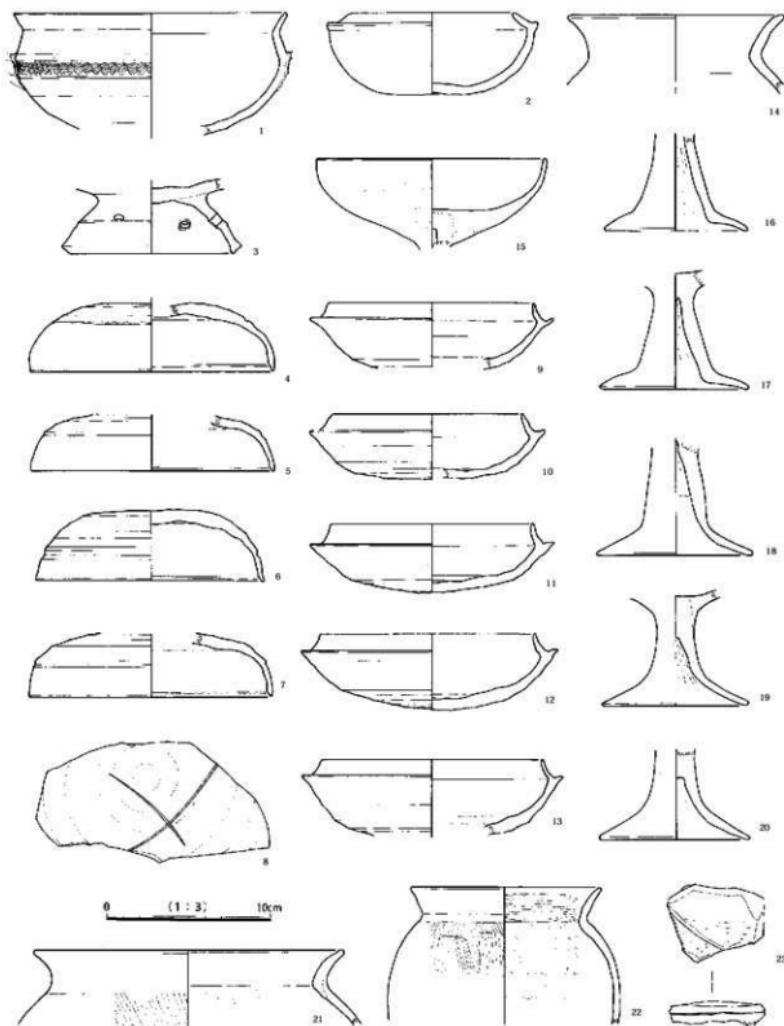


図 57 第3調査区出土遺物（1）

た状態で出土した。6世紀後半の製品である。

図57-16～20は、土師器高杯の脚部である。16は118竪穴住居埋土より、17は119土坑より、18は105竪穴住居壁溝付近より、19は296竪穴住居内より、20は296竪穴住居西側の竪穴より出土した。16～19の外表面はハケ後ヘラミガキまたはナデ調整、内面には脚柱部上位を圧縮した際にできた絞り目が認められる。16・20は、内面を板状工具によって削り取っている。すべて6世紀後半～7世紀初頭の製品である。

図57-21・22は、土師器甕である。21は、口縁端部を丸く作る。外表面は幅1.5cm程度の原体を用いたハケ調整を施す。22の口縁内面には横方向にハケをめぐらせる。肩部外表面は、縱方向のハケ、内面は、指頭圧痕が顕著である。ともに6世紀の製品である。

図57-23は、須恵器の融着資料である。破片であるが1点は杯身の破片である。オリーブ色を呈する自然釉によってもう一個体と接着された状態にある。焼き歪みがひどく、杯身として実際の使用に耐えたとは考えがたい。296竪穴住居上層より出土した。

図58には、3-1区より出土した遺物の実測図を掲載した。

図58-1～3は、須恵器杯身である。1・2は、TK43～TK209型式に分類される製品である。3は、大粒の白色礫を多く含むため、露出する箇所では器壁表面にひび割れが生じている。6世紀中～後半の製品である。1は中世である34溝から、2・3は111溝下層より出土した。

図58-4は、須恵器長頸壺の蓋である。小型品で、最大径は10cm程度を測る。頂面をくぼませた摘部を大きく作り、その周辺に回転力ギ目を一周させる。焼成は甘く、内外面ともにふい灰褐色を呈する。6世紀後半の製品である。完形で111溝上層より出土した。

図58-5～7は、須恵器甕の口縁部である。5は、口縁端部を細かく損じておらず、意図的に打ち欠

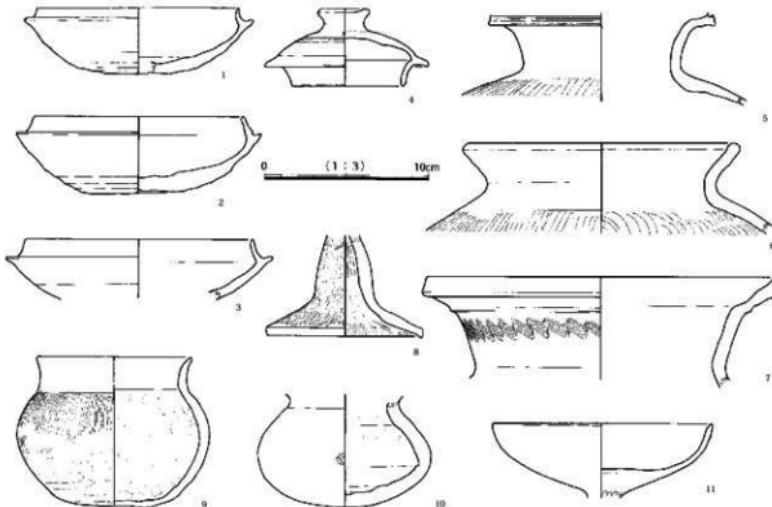


図58 第3調査区出土遺物(2)

いた可能性がある。体部外面は平行タタキ、口縁部内面には縦方向に静止ナデを施した痕跡が一部に認められる。仕上げは粗雑で焼成は甘く、内外面ともに赤褐色を呈する。5世紀後半～6世紀の製品である。111溝下層より出土した。

図58-6は、丸い口縁端部をもつ6世紀の製品である。体部外面は平行タタキ、内面には同心円文タタキを施す。焼成は良好、灰白色を呈する。中世溝である57溝より出土した。

図58-7は、口縁内面を強く横方向になで、やや角度をつけて外方へ開く形状をもつ。口縁外面に波状文を一条施す。6世紀後半の製品である。111溝下層より出土した。

図58-8は、土師器高杯の脚部である。脚柱のふくらみが強く、外方へ大きく聞く。外面は、ハケ調整の後、縦方向のヘラミガキを施す。内面裾部はハケ調整後ナデ、脚柱内面には絞り目が残る。7世紀初頭の製品である。100溝埋土より出土した。

図58-9は、土師器小型壺である。丸味をもつ体部から短く立ち上がる口縁をもつ。口縁はヨコナデ以前のハケ目がわずかに残る。体部上半は斜め～縦方向に、下半部は横方向にハケ調整を施す。器壁に凹凸があり、全体的に無骨な印象を与える。6世紀後半の製品である。〔建物15〕の北東隅柱の109ピット内より出土した。

図58-10は、土師器の壺である。厚い器壁をもつ。外面調整はハケ調整後にナデを施す。肩部や胴部中央に器壁を損する部位がある。器形が甕に似ることから、焼成後穿孔を試みた可能性を疑う。111溝より出土した。

図58-11は、土師器高杯の杯部である。器壁表面は、磨滅が著しい。111溝上層より出土した。

図59には、3-1区・3-2区より出土した中世の遺物を掲載した。

図59-1～5は、土師器皿である。すべて近現代水路の前身である中世水路と、その周辺の鋤溝より出土した。6・7は、瓦器である。6は、小型の楕である。斜めに伸びる体部から口縁を上方に向かって立ち上げ、口縁端部をわずかに外反させる。底部には断面三角形の高台を貼り付けている。口縁内面

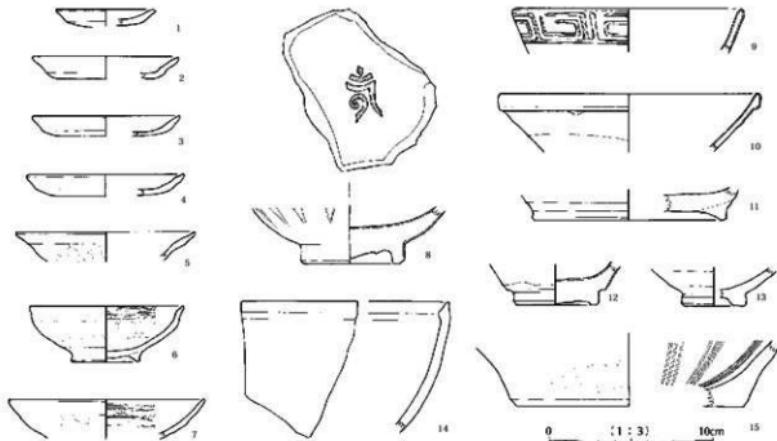


図59 第3調査区出土遺物（3）

は、横方向に強くなる。7は、和泉型の椀である。低い器高に対して、大きく開く口縁をもつ。内面にはまばらなミガキを施す。13世紀の製品である。

図59-8～13は陶磁器で、8は青磁碗で、器壁外面に蓮弁文、内面中央に梵字を一字刻む。現時点では該当する文字が確認できていないため、異体字の可能性がある。国内では泉佐野市上町東遺跡、広島県三原遺跡の出土品に類例があり、すべて同一文字が刻まれている。9は、龍泉窯系の青磁碗である。やや不明瞭ながら、口縁部外面に雷文帯をめぐらしている。口縁端部には、使用による磨滅が認められる。14世紀末～15世紀の製品である。近世水路(27溝)内より出土した。

図59-10は、廈門窯系白磁碗の口縁部である。内面および外面の上半位まで施釉する。口縁附近に釉溜りが認められる。13世紀後半から14世紀の製品である。

図59-11は灰釉陶器鉢の底部である。底部外面には回転糸切り痕、ヘラ状工具による擦痕を残す。高台は、断面台形の貼り付け高台である。内面のうち底部中央は露胎、器壁の一部にオリーブ黄色を呈する釉の塗布が認められる。

図59-14・15は瓦質土器の鉢である。14は、口縁が内湾する鉢であり、口縁端部をとがらせる。15は、擂鉢の底部であり、内面に3本を1セットとする擂り目が残る。

以上、第3調査区の調査成果を記述した。この調査区では、既往の調査成果に連続する遺構を数多く検出することができた。また、竪穴住居3棟や掘立柱建物2棟を新たに検出することができた。

特に、南半部にあたる3-2区や3-4区では、新たなる竪穴住居を4棟を検出したほか、柱穴等の濃密な分布を確認することができた。これらの成果によって、古墳時代後期の上私部集落は、さらに南へと広がることが確実となった。

## 第4節 第4調査区

### 1. 調査区の状況と基本層序

**調査区の状況** 第4調査区は、平成19年度調査の上私部遺跡(その3)〔本書第I部報告〕において、掘立柱建物をはじめとする遺構群が密に検出された調査区の北側にあたる。現況は住宅地および里道で、標高は東から西へ向かってなだらかに下がる。第2調査区と同様、遺構面は宅地盛土によって守られた部分と、ライフラインの埋設によって大きく損傷を受けた箇所がある。

主要遺構面である古墳時代～古代初頭遺構面の標高は、T.P.33.2～33.4m前後、調査区中央部分がわずかに高く、東西に向かって緩やかに下がる。中世期には、この傾斜途中に段を設けて水田の境とし、溝を掘り、畦を築いた。これが近年の開発によって再び均され、緩い傾斜をもつ現況に至っている。

**基本層序** 調査区の中央部では、盛土および旧耕作土の下に中世末～近世包含層、中世包含層があり、これを除去した段階で、地山の露呈を確認した。地山上面が古墳時代後期～古代初頭遺構面に相当する。遺構面は東西に向かって緩やかに傾斜するため、調査区の東西端では、薄層ながら古墳時代後期包含層の残存を確認することができた。

中世末～近世初頭包含層および、中世包含層は基本的に耕作土であり、黄灰色粗砂まじりシルトを主体とする。しかし、オリーブ黒色を呈する古墳時代包含層を激しく巻き上げるため、混じり合って黒色化の著しい箇所がある。調査区西半部では、中世末～近世初頭包含層を除去した面において、南北方向に伸びる畦、杭列を伴う溝を検出した。

古墳時代～古代初頭包含層は、オリーブ黒色粘土質シルトを主体とする。軟質で土器片が多く含むが、細片が多い。地山は、灰オリーブ色～緑灰色を呈するしまりの良い粗砂まじりシルト層である。

## 2. 検出遺構

今回の調査では、古墳時代後期～古代初頭の掘立柱建物を、あわせて9棟検出した（図62）。このうち1棟は、既往の調査時に確認されていた建物〔建物2〕に連続すると考えられる。建物の規模は、2間×2間を数える総柱建物が3棟（建物460・建物461・建物572）、4間×3間の建物が1棟（建物433）、5間×4間の建物が1棟（建物432）、他一部のみを検出した柱列群が3棟分（建物431・建物573・建物576）である。

柱穴の上下関係と建物の方向軸から、

- ① 建物461（2間×2間総柱）・建物572（2間×2間総柱）・建物460（2間×2間総柱）
- ② 建物573（2間×3間以上）・建物576（4間×2間以上）
- ③ 建物432（5間×4間）
- ④ 建物433（4間×3間）
- ⑤ 建物431（3間×1間以上）

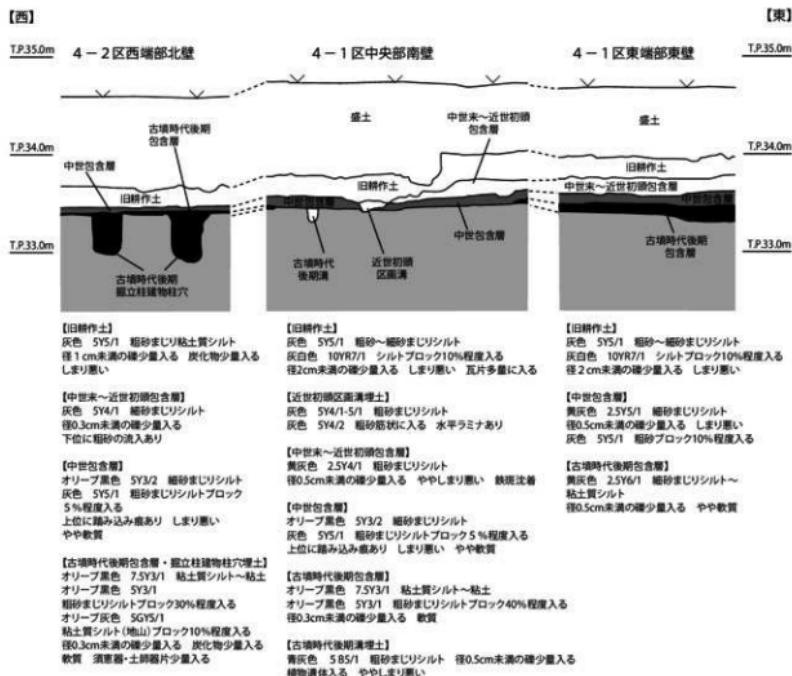


図60 第4調査区基本層序模式図

という、計5期の時期差を想定することができる。

建物の存続時期は、既往の調査成果との対比からおおむね、①期=6世紀前半～中頃、②期=不明ながら6世紀中頃～後半、③・④期=6世紀後半～7世紀前半、⑤期=7世紀以降と捉えている。

このうち①期の建物群は、平成19年度の調査において確認されている竪穴住居と方向軸が合致する。②期の建物は、平成15年度に調査がなされた区画溝に平行する方向軸をもつ。③期の建物432は、大型の柱穴を備えた建物で、柱数、床面積とともに上私部遺跡集落の中では最大級に分類される。既往の調査では、この時期を、竪穴住居から掘立柱建物への移行期と捉えている。なお、建物432の柱穴のうち、3基に柱根が残存していた（図版三三 5～7）。

**建物431**（図63）4-1区北辺部において検出した柱穴群からなる建物である。柱間は、3間×1間以上を数えると考えられるが、調査区外へと続くため、明らかではない。ピットは、413・414・418・419・428の5点を確認した。柱間の長さは、1.52～1.88m程度である。

検出した南側柱列の長さは、5.00mを測る。この南側柱列を建物の長辺とするならば、建物の主軸は方位北に対して70度東に振る方向となる。柱穴は、直径50cm前後を測る円形ないし隅丸方形の平面形状をもつ。柱痕は、直径20cm前後である。柱穴掘り方の埋土からは、須恵器類の小片が出土した。

**建物432**（図64）調査区中央において検出した建物である。一部調査区外にかかるため確認できていないピットもあるが、5間×4間の規模をもつ掘立柱建物として復元できる。柱間の長さは1.60～2.00m程度で、長辺の方がやや長い。建物の主軸は方位北に対して71度東に振る。建物の長辺は9.80m、短辺は6.60m、床面積は64.68m<sup>2</sup>を測る。上私部遺跡集落では、最大級の規模をもつ建物である。

柱穴は、直径60～90cmを測る円形ないし隅丸方形の平面形状をもつ。柱痕は、直径18cm前後で

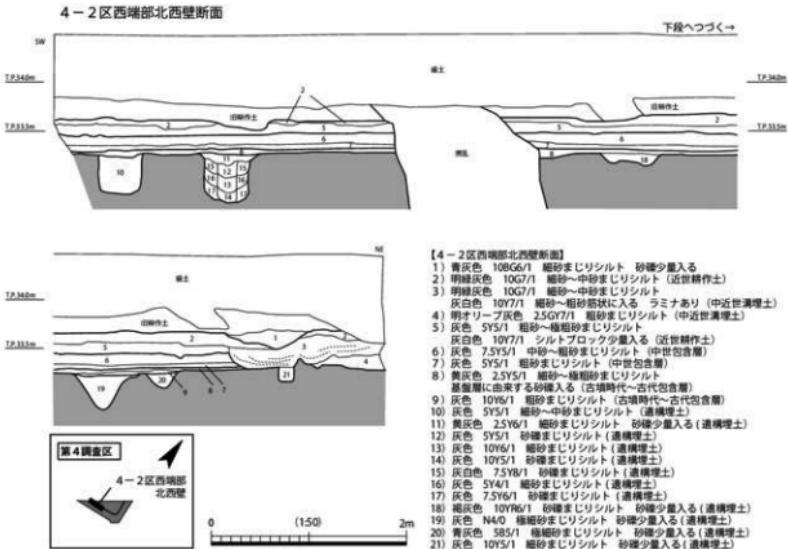


図61 第4調査区壁断面図



図 62 第4調査区造構面全体図(古墳時代後期~古代初期)

ある。このうち、488 ピットには、柱根が残存していた。

**建物 433 (図 65)** 建物 432 と同様、調査区中央において検出した建物である。建物 432 よりも小規模であるため、その内側に入り込むように位置している。ただし、南西隅の柱穴が建物 432 の南側柱列のひとつと重なるため新旧関係が明らかであり、小規模な建物である建物 433 の方が新しいことがわかつている。

4 間 × 3 間の規模をもつ掘立柱建物で、柱間の長さは 1.60 ~ 1.92 m 程度である。北側柱列は、対応する南側柱列に比べて、柱間の長さにばらつきがある。

建物の主軸は方位北に対して 71 度東に振る。建物の長辺は 7.12 m、短辺は 5.00 m、床面積は 35.60 m<sup>2</sup> を測る。柱穴は、直径 60 ~ 90 cm を測る円形ないし隅丸方形の平面形状をもつ。標高が高い場所に設けられた北側柱列に比べて、若干低いところに設けられた南側柱列の方が、柱穴は深く残る。柱痕跡は、直径 18 cm 前後である。柱穴埋土からは、須恵器甕、土師器甕の小片が出土した。

**建物 460 (図 66)** 調査区中央部において検出した建物である。建物 431 の柱群とは切り合う関係で、

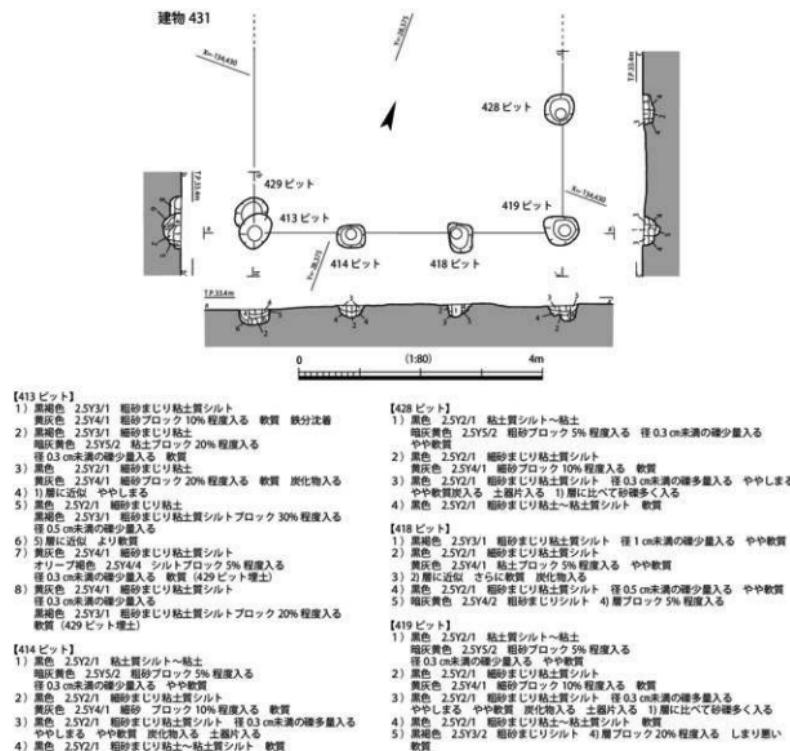


図 63 建物 431 平面・断面図

建物 432

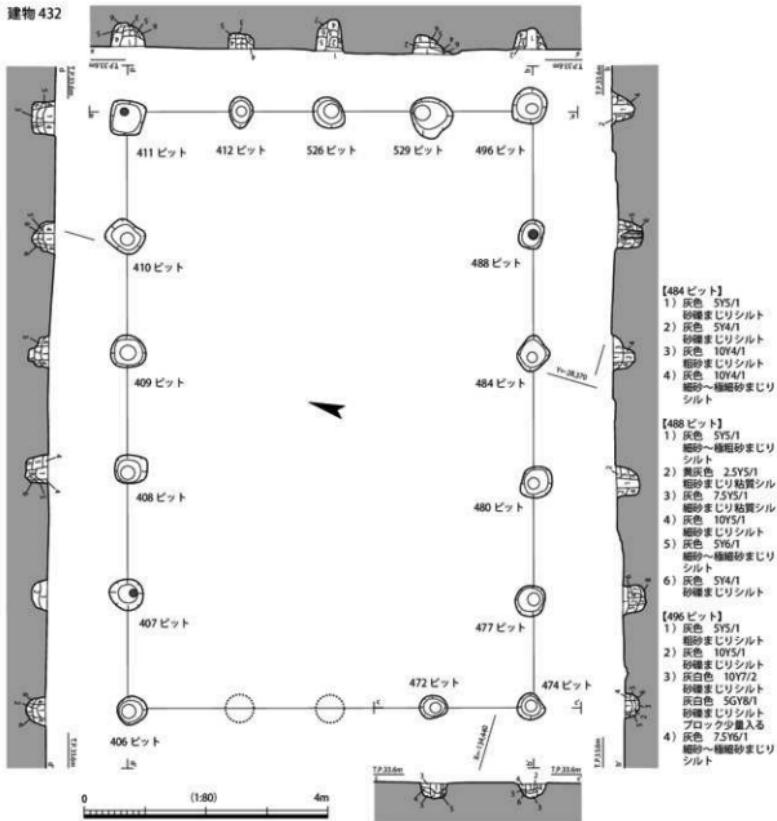


図 64 建物 432 平面・断面図

建物 431 に先行する遺構であることが確認できている。規模は 2 間 × 2 間を測る総柱建物である。

柱間の長さは 1.80 m 前後である。建物は東西長が若干長く 3.60 m、南北長が 3.40 m を測る。床面積は、12.24m<sup>2</sup> である。建物の長辺軸は方位北に対して 70 度東に振る。柱穴は、中央柱である 420 ピットの最大径が 60cm の楕円形、そのほかは、直径 50cm 前後の円形ないし隅丸方形の平面形状をもつ。中央柱の掘り方は他に比べて浅い。柱痕は、直径 20cm 前後である。

**建物 461 (図 67)** 建物 461 の東側において検出した 2 間 × 2 間の規模をもつ総柱建物である。建物 460 とは、距離が近く、同時に並設したとは考えにくい。

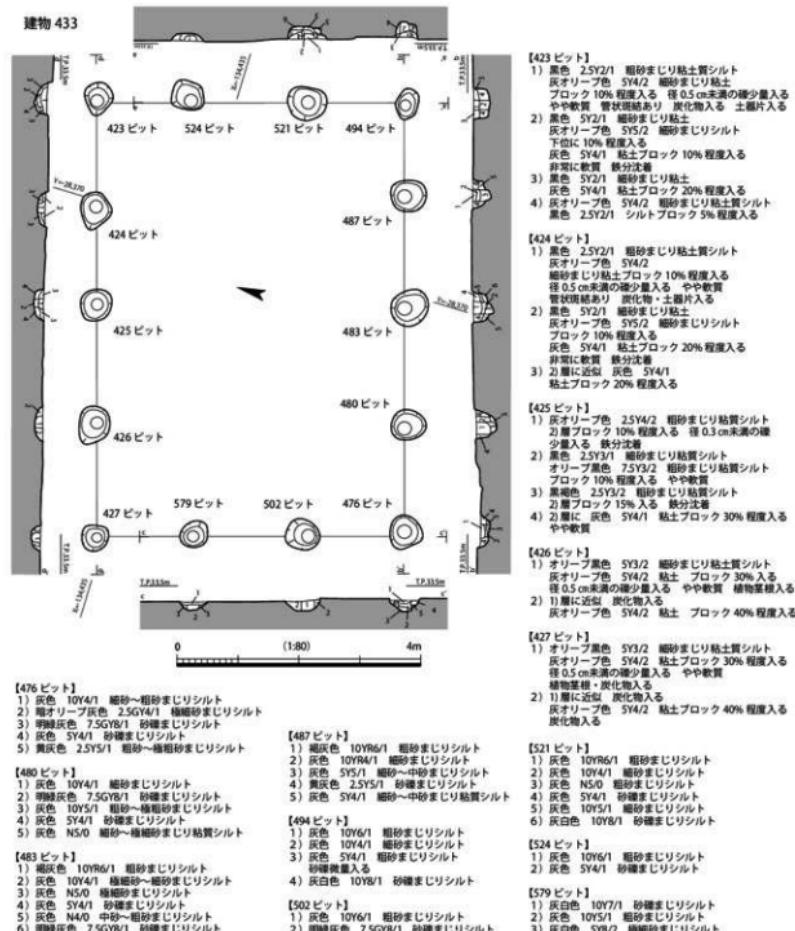
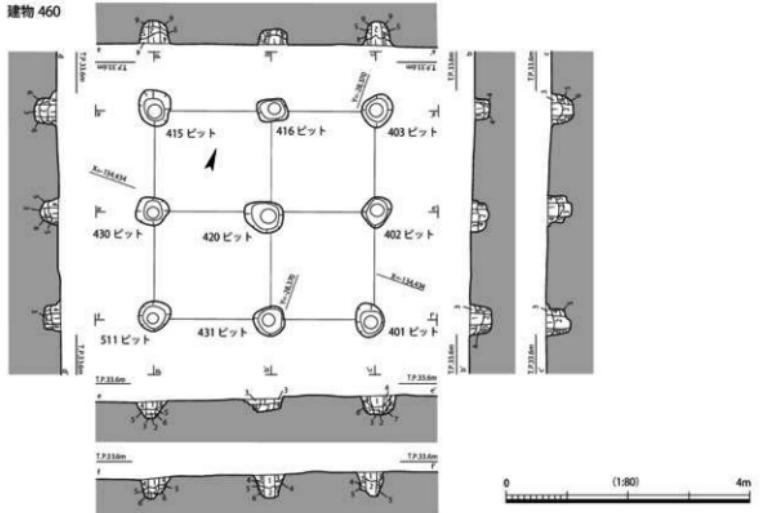


図 65 建物 433 平面・断面図



- 【401 ピット】  
 1) オリーブ黒色 SY3/1 細砂まじり粘質シルト  
   灰オリーブ色 SY4/2 粘土ブロック 30% 程度入る  
   灰分少着 原化物入る やや軟質  
   径 0.5 cm未満の礫少量入る しまりやや良い  
 2) 黒色 SY2/1 細砂まじり粘土  
   褐褐色色 2.5Y4/2 細砂まじりシルト  
   細砂少着 粘土ブロック 20% 程度入る  
   灰分少着 原化物入る 非常に軟質  
 3) オリーブ黒色 SY3/1 細砂まじり粘質シルト  
   灰オリーブ色 SY4/2 粘土ブロック 20% 程度入る  
   灰オリーブ色 SY5/3 細砂まじりシルトブロック  
   10% 程度入る  
   灰色 SY4/1 粘土ブロック 5% 程度入る 鉄分沈着  
 4) オリーブ黒色 SY3/1 細砂まじり粘土 非常に軟質 鉄分沈着  
 5) オリーブ黒色 SY3/1 細砂まじり粘土  
   灰色 SY4/1 シルトブロック 20% 程度入る

- 【402 ピット】  
 1) 黒色 SY2/1 細砂まじり粘土～粘質シルト  
   灰オリーブ色 SY4/2 粘土ブロック 5% 程度入る  
   径 0.3 (m)以上の礫少量入る やや軟質  
 2) 灰褐色 黑褐色 SY2/1 細砂まじり粘土  
   SY2/1 細砂まじり粘質シルトブロック 30%  
   程度入る 灰褐色の礫少量か入る 非常に軟質  
 3) 黑色 SY2/1 粘土質シルト～粘土  
   オリーブ黒色 SY3/2 粘土～細砂まじりシルトブロック  
   30% 程度入る 非常に軟質  
 4) 1) 層に近似 やや軟質 鉄分沈着  
 5) 2) 層に近似 軽微の含水率高い 鉄分沈着  
 6) 3) 層に近似 灰色 SY4/1 シルトブロック少量入る  
 7) 黑色 SY2/1 粘土 径 0.5 cm未満の礫少量入る 非常に軟質

- 【403 ピット】  
 1) 黒色 SY3/1 細砂まじり粘土～粘質シルト  
   黑褐色 SY2/1 細砂ブロック 5% 程度入る 軟質  
 2) 黑褐色 SY2/1 細砂まじり粘土質シルト  
   褐褐色 SY2/1 細砂まじりシルトブロック  
   20% 程度入る 径 0.3 cm未満の礫少量入る  
   鉄分少着  
 3) 黑色 2.5Y2/1 細砂まじり粘土～粘質シルト  
   径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質  
 4) 3) 層に近似 より軟質  
   暗灰褐色 2.5Y4/2 粘土ブロック 20% 程度入る  
 5) 黑褐色 2.5Y3/1 粘土～粘土質シルト  
   褐褐色 SY2/1 粘土ブロック 10% 程度入る  
   径 0.3 cm未満の礫少量入る  
 6) 黑褐色 2.5Y3/2 細砂まじり粘質シルト  
   径 0.5 cm未満の礫少量入る 軟質

- 【415 ピット・430 ピット】  
 1) 黒褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘土  
   灰灰褐色 SY4/1 粘土ブロック 10% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
 2) オリーブ黒色 SY3/1 細砂まじり粘土  
   灰褐色 SY4/1 粘土ブロック 10% 程度入る 非常に軟質  
 3) オリーブ黒色 SY3/1 粘土  
   灰色 SY4/1 粘土ブロック 10% 程度入る  
 4) オリーブ黒色 SY3/1 細砂まじり粘土質シルト  
   SY4/2 細砂まじりシルトブロック 20% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
 5) 2) 層に近似 より軟質  
 6) 3) 層に近似

- 【416 ピット】  
 1) 黒褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘質シルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る 軟質 土器片入る  
 2) 2) 層に近似 より軟質  
 3) 黑褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘質シルト  
   オリーブ黒色 2.5Y4/2 粘土ブロック 20% 程度入る 軟質 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
 4) 黑褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘質シルト  
   オリーブ黒色 2.5Y4/3 粘土ブロック 40% 程度入る 鉄分沈着  
 5) 黑褐色 2.5Y3/1 細砂まじり粘質シルト  
   オリーブ黒色 2.5Y4/3 粘土ブロック 50% 程度入る 鉄分沈着

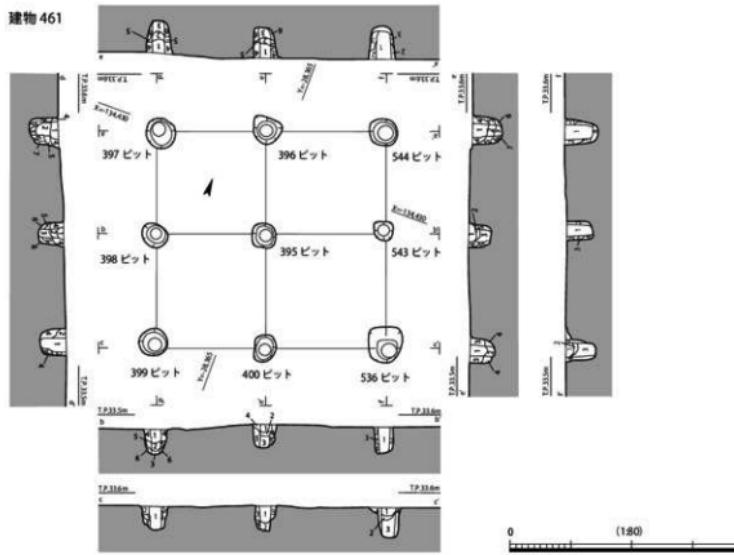
- 【416 ピット】  
 1) 黒色 2.5Y2/1 細砂まじり粘質シルト  
   暗灰黄色 2.5Y4/2 粘土ブロック 5% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る やや軟質  
 2) 黑色 SY2/1 粘土～粘質シルト  
   灰色 SY4/1 粘土ブロック下層に 10% 程度入る 軟質  
 3) 黑褐色 SY2/1 細砂まじり粘土  
   灰オリーブ色 SY2/1 粘土ブロック 10% 程度入る 軟質 鉄分沈着  
 4) 黑褐色 SY2/1 粘土～粘土質シルト  
   灰褐色 SY2/1 粘土ブロック 50% 程度入る やや軟質

- 【420 ピット】  
 1) 黒色 2.5Y2/1 細砂まじり粘質シルト  
   暗灰黄色 2.5Y4/2 粘土ブロック 5% 程度入る 径 0.3 cm未満の礫少量入る やや軟質  
 2) 灰褐色 SY2/1 粘土～粘質シルト  
   1) 層に近似 より軟質  
   2) 層に近似 粘土～粘土質シルト  
   3) 層に近似 より軟質  
   4) 2) 層に近似 より軟質  
   5) 2) 層に近似 灰色 SY4/1 粘土ブロック構造に入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
   6) 4) 層に近似 白褐色多く入る しまり悪い

- 【511 ピット】  
 1) 灰色 10Y4/1 細砂まじりシルト  
 2) 灰オリーブ黒色 5G4Y1/1 細砂まじりシルト  
 3) 灰色 SY5/1 細砂まじり粘質シルト  
 4) 灰褐色 2.5Y4/1 細砂まじりシルト  
 5) 灰色 SY4/1 細砂まじり粘質シルト  
 6) 灰白色 SY8/2 粘土～粘土質シルト

図 66 建物 460 平面・断面図

建物 461



## [395 ピット]

- 黒褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
灰青色 7.5Y4/1 相間セリヒー粘土質シルトブロック 10% 程度入る  
径 0.5 cm未満の礫少量入る 敷質
- 黒色 5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト  
径 0.3 cm未満の礫少量入る 敷質
- 2) 壁面に灰色 5Y4/1 砂矽までじりシリットブロック 30% 程度入る しまり悪い  
やや敷質
- 1) 壁面に近似、砂礫の混合多い ややしめる
- 黒褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト  
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い  
敷質 塗化物少量入る

## [96 ピット]

- 黒褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
灰色 7.5Y4/1 砂矽までじり粘土質シルトブロック 10% 程度入る 敷質
- 黒褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土～粘土質シルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る 敷質
- 2) 壁面に、灰色 5Y4/1 砂矽までじりシリットブロック 30% 程度入る  
4) 壁面に近似、砂礫の混合多い ややしめる
- 黒褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い  
6) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト  
灰オーラー色 5Y4/2 砂矽ブロック 40% 程度入る しまり悪い
- 7) 黑褐色 5Y2/1 砂矽までじり粘土質シルト 敷質  
細砂ブロック 10% 程度入る

## [97 ピット]

- 黒褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
灰色 7.5Y4/1 砂矽までじり粘土質シルトブロック 10% 程度入る 敷質
- 黒色 5Y3/1 砂矽までじり粘土～粘土質シルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る 敷質
- 黒褐色 5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る  
灰色 5Y4/1 砂矽までじりシリットブロック 30% 程度入る しまり悪い やや敷質
- 5) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い  
6) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土～粘土質シルト  
灰オーラー色 5Y4/2 砂矽ブロック 40% 程度入る しまり悪い
- 7) オリーブ黒色 5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト  
灰オーラー色 5Y4/2 砂矽までじりシリットブロック 40% 程度入る  
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い  
敷質

## [98 ピット]

- 黒褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
灰青色 7.5Y4/1 砂矽までじり粘土質シルトブロック 10% 程度入る 敷質
- 黒褐色 5Y3/1 砂矽までじり粘土～粘土質シルト 径 0.3 cm未満の礫少量入る 敷質
- 黒色 5Y3/1 砂矽までじり粘土～粘土質シルト  
灰オーラー色 5Y4/1 砂矽までじりシリットブロック 20% 程度入る しまり悪い やや敷質
- 4) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る やや敷質

- 5) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト 径 0.5 cm未満の礫少量入る  
しまり悪い 敷質 塗化物少量入る
- 6) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土～粘土質シルト  
灰オーラー色 5Y4/2 砂矽ブロック 30% 程度入る しまり悪い

## [399 ピット]

- 5) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト  
灰青色 2.5Y4/1 粘土ブロック 10% 程度入る  
徑 0.5 cm未満の礫少量入る 敷質 入れ物
- 2) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト  
径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い  
3) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト
- 灰オーラー色 5Y4/2 砂矽ブロック 30% 程度入る しまり悪い  
4) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト  
灰オーラー色 5Y4/2 砂矽までじりシリットブロック 50% 程度入る  
徑 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 敷質

## [400 ピット]

- 1) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト  
灰褐色 2.5Y3/2 粘土ブロック 20% 程度入る 塗化物入る  
徑 0.3 cm未満の礫少量入る やや敷質
- 2) 黑褐色 2.5Y3/1 砂矽までじり粘土質シルト  
黑色 2.5Y2/1 粘土～ブロック 10% 程度入る  
灰オーラー色 7.5Y2/2 砂矽までじり粘土質シルト 10% 程度入る  
3) オリーブ黒色 5Y3/1 粘土質シルト  
灰褐色 2.5Y3/2 粘土ブロック 20% 程度入る 敷質
- 4) オリーブ黒色 5Y3/2 砂矽までじりシリット  
黑色 2.5Y2/1 粘土ブロック 10% 程度入る  
徑 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い 敷質

## [536 ピット]

- 1) 黑褐色 N4/0 砂矽までじりシリット
- 2) 灰色 10Y4/1 砂矽～粘土矽までじりシリット
- 3) 灰色 7.5Y4/1 砂矽までじりシリット
- 4) 灰褐色 5G4/1 砂矽までじりシリット
- 5) 灰オーラー色 5G4/1 砂矽までじりシリット

## [544 ピット]

- 1) 黑色 N4/0 砂矽までじりシリット
- 2) 灰青色 5B6/4/1 シルト・砂矽少量入る
- 3) 青灰色 5B5/3/1 砂矽までじりシリット
- 4) 灰褐色 5G3/1 砂矽までじりシリット

図 67 建物 461 平面・断面図

柱間の長さは 1.70 ~ 1.80 m 程度、南北長に対して東西長が若干長く、南北長 3.52 m、東西長 3.80 m を測る。床面積は 13.38 m<sup>2</sup> である。建物の主軸は方位北に対して 70 度東に振る。柱穴は、直径 60 cm 前後を測る。残存状態が良好で、深さ 70 cm を測るものもあるため、平面積に比べて深い印象を与える。柱痕は、直径 20 ~ 22 cm 程度である。

**建物 572 (図 68)** 調査区西半部において検出した建物である。西側柱列は調査区外に統くため確認できていないが、南側柱列の検出状況から、2 間 × 2 間の総柱建物であったと推測される。建物 433 の柱群とは切り合う関係にあり、建物 433 に先行する遺構であることが確認できる。

柱間の長さは 1.52 ~ 1.60 m 程度、建物の長さは一辺 3.20 m を測る。床面積は、10.24 m<sup>2</sup> である。建物軸は、周辺の建物と同様、方位北に対して 70 度東に振る。柱穴は、直径 60 ~ 80 cm 程度を測る。同じく総柱建物である建物 460・建物 461 に比べて、建物の規模は小さいが、柱穴は大型である。

**建物 573 (図 69 上段)** 調査区南辺において検出した建物である。建物の南半部は調査区外へと統くため確認できていないが、3 間以上 × 2 間の規模であることが推測される。柱間の長さは 1.30 ~ 1.60 m 程度で、桁行よりも梁行の柱間の方が長い。建物の主軸は方位北に対して 4 度西に振る。建物の長辺は 4.00 m 以上、短辺は 3.32 m を測る。建物 432 とは切り合う関係にあり、建物 432 に先行する遺構であると推測される。

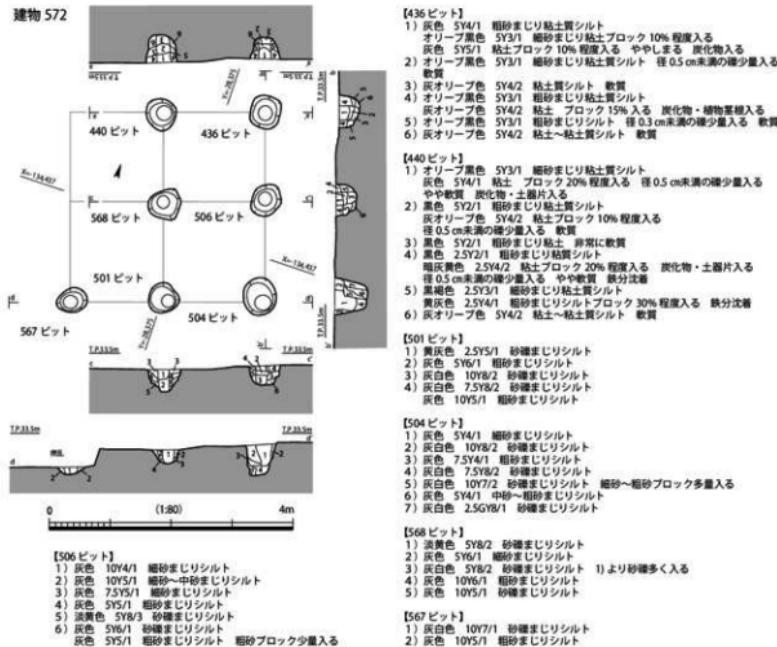
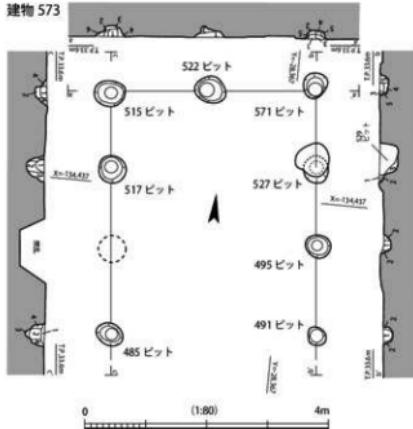


図 68 建物 572 平面・断面図

建物 573



## 【485 ピット】

- 1) 灰色 SY4/1 砂礫まじり粘質シルト
- 2) 明オーリーブ灰色 SGY7/1 砂礫まじりシルト 砂礫の含有量が多い
- 3) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト
- 4) 灰色 10Y6/1 砂礫まじりシルト

## 【491 ピット】

- 1) 灰色 10Y4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 明オーリーブ灰色 SGY7/1 砂礫まじりシルト 砂礫の含有量が多い
- 3) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト

## 【495 ピット】

- 1) 灰色 10Y4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 明オーリーブ灰色 SGY7/1 砂礫まじりシルト 砂礫の含有量が多い
- 3) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト
- 4) 灰色 10Y6/1 砂礫まじりシルト

## 【515 ピット】

- 1) 灰色 10Y7/2 粗砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y6/1 粗砂まじり粘質シルト
- 3) 灰色 SYS/1 砂礫まじりシルト

## 【517 ピット】

- 1) 灰色 10Y7/2 粗砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y6/1 粗砂まじり粘質シルト
- 3) 灰色 SYS/1 砂礫まじりシルト

## 【522 ピット】

- 1) 灰色 10Y4/1 粗砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト

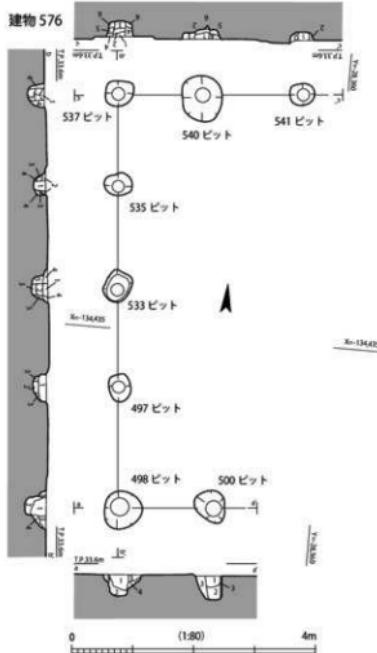
## 【527 ピット】

- 1) 暗オーリーブ灰色 2.5GY4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 暗オーリーブ灰色 2.5GY7/1 砂礫まじりシルト
- 3) 灰色 10Y4/1 砂礫まじり粘質シルト
- 4) 灰色 10Y6/1 砂礫まじりシルト

## 【537 ピット】

- 1) 灰色 SY4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 灰色 2.5Y4/1 砂礫まじりシルト
- 3) 灰色 7.5Y4/1 砂礫まじり粘質シルト
- 4) 灰色 10Y4/1 砂礫まじりシルト
- 5) オリーブ灰色 10Y6/2 砂礫まじりシルト

建物 576



## 【497 ピット】

- 1) 灰色 SY5/1 粗砂まじりシルト
- 2) 明オーリーブ灰色 SGY7/1 砂礫まじりシルト 砂礫の含有量が多い
- 3) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト

## 【498 ピット】

- 1) 灰色 SY4/1 砂礫まじり粘質シルト
- 2) 明オーリーブ灰色 SGY7/1 砂礫まじりシルト 砂礫の含有量が多い
- 3) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト
- 4) 灰色 10Y6/1 砂礫まじりシルト

## 【500 ピット】

- 1) 灰色 SY4/1 細砂～極細砂まじりシルト
- 2) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト
- 3) 灰色 7.5Y6/1 砂礫まじりシルト
- 4) 灰色 10Y8/1 砂礫まじりシルトブロック入る

## 【533 ピット】

- 1) 灰色 SY4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 灰色 2.5Y4/1 砂礫まじりシルト
- 3) 灰色 7.5Y4/1 砂礫まじり粘質シルト
- 4) 灰色 10Y4/1 砂礫まじりシルト
- 5) オリーブ黒色 7.5Y3/2 砂礫まじり粘土質シルト

## 【535 ピット】

- 1) 灰色 N4/0 砂礫まじりシルト
- 2) 明オーリーブ灰色 SGY7/1 シルト
- 3) 青灰色 10RG6/1 砂礫まじりシルト
- 4) 灰色 10Y5/1 砂礫まじりシルト
- 4) 灰色 SYS/1 砂礫まじりシルト

## 【537 ピット】

- 1) 灰色 SY5/1 砂礫まじりシルト
- 2) 灰色 SY4/1 中砂～粗砂まじりシルト
- 3) 灰色 7.5Y4/1 極細砂まじりシルト
- 4) 黄灰色 2.5Y4/1 砂礫まじりシルト
- 5) 暗赤色 10Y4/1 極細砂まじりシルト
- 6) 黑褐色 2.5Y3/1 砂礫まじり粘質シルト

## 【540 ピット】

- 1) 黄灰色 2.5GY4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 増強灰 2.5GY8/1 砂礫まじりシルトブロック入る
- 3) 增強灰 5G4/1 細砂～極細砂まじりシルト
- 3) 増強灰 N3/0 砂礫まじりシルト
- 4) 明オーリーブ灰色 SGY7/1 極細砂まじりシルト
- 5) 増強オーリーブ 2.5GY4/1 砂礫まじりシルト
- 6) 増強灰 5G4/1 極細砂まじりシルト

## 【541 ピット】

- 1) 2.5Y4/1 砂礫まじりシルト
- 2) 灰色 SY4/1 砂礫まじりシルト

図 69 建物 573・建物 576 平面・断面図

柱穴は、直径 50cm 前後を測る円形である。ただし、遺構面の標高が高い地点にあたるため、東側柱列は残存深度の浅いピットが目立つ。柱痕は、直径 18cm 前後である。

**建物 576**（図 69 下段） 調査区東辺部において検出した建物である。東半部は調査区外にかかるため確認できないが、4 間 × 2 間以上の規模をもつ掘立柱建物であったと推測される。柱間の長さは 1.50 ~ 1.90 m 程度、西南隅柱と西側柱列の 497 ピットの柱間がやや長い。建物の主軸は方位北に対して 4 度西に振る。建物の長辺は 6.72 m、短辺は 3.00 m 以上を測る。柱穴は、直径 40 ~ 70cm、柱痕は、18 ~ 28cm と、大小差がみられる。

以上、第 4 調査区の調査成果を記述した。この調査区では古墳時代後期～古代初頭の遺構面において、掘立柱建物の柱穴を緊密に検出し、合計 9 棟の掘立柱建物を復元した。

既往の調査では、上私部遺跡集落の形成は 5 世紀前半にはじまり、6 世紀前半から集落が拡大化、6 世紀後半から 7 世紀初頭に最盛期を迎え、7 世紀前半には終焉を迎えるものと推測されている。今回の調査では、この過程を遺構の先後関係から追認することができた。また、上私部遺跡の集落がより北側へ広がると予想されること、今回の調査範囲が、上私部遺跡集落全体の開発の中では、やや後発的な地点にあたること、さらに時期的に後続する建物が、調査区の北西に位置することが明らかとなった。これらのことから、終息期に入った上私部遺跡集落は、集落が成立した微高地上より、北西の方向へと移動・展開したことが、推測される。

## 第 5 節 まとめ

以上、有池遺跡および上私部遺跡の調査成果について、その成果を記述した。限られた範囲ではあったが、既往の調査によって得られた成果に加えるべき、新たな知見を多く得ることができた。以下、調査区ごとに列記して、まとめとしたい。

1) 有池遺跡（第 1 調査区）では、中世遺構面を確認し、中世前半、中世後半、中世末～近世初頭の各遺構を検出した。特に豪族居館をめぐる大溝の一辺を確認し、周辺遺構との切り合い関係を明確に捉えることができた。

また、調査区東半部において、多くのピット群を検出し、有池遺跡の居住域がさらに広がることを追認した。調査区の西半部では、生産域である水田跡や大型土坑を確認し、居住域周辺部の土地利用の様相に新たな資料を加えることができた。

2) 上私部遺跡では、古墳時代後期～古代初頭の遺構面を確認した。既往の調査成果では、調査区周辺は、竪穴住居や掘立柱建物が緊密に立ち並ぶ集落の中心地にあたる。今回の調査では、これらに連続する遺構のほか、新たに竪穴住居 6 棟や掘立柱建物 11 棟を検出することができた。

3) これまで、低地であるため居住域としては不向きと考えられていた上私部遺跡の南半部でも、新たに竪穴住居を検出した。また、柱穴等の濃密な分布を確認することができた。

4) 微高地となる上私部遺跡の北半部においても、集落の範囲がより北側へ広がることを確認した。特に北端部では、一時期、大型の掘立柱建物が目立っており、集落の中心が、時代とともにより北側へと移動した可能性もある。

5) 古墳時代後期～古代初頭の上私部遺跡では、少なくとも東西約 300 m、南北 100 m 以上の範囲において竪穴住居や掘立柱建物が立ち並ぶ状況にあった。これまでの調査により集落居住域の東西

限はほぼ確定できたが、南北方向の範囲については今回の調査によってさらに広がることを確認したにとどまっている。今後の周辺の調査によって、集落の様相がより明らかになることが期待される。

# 写 真 図 版





1, 1-1区 中世遺構面全景（北西から）



2, 1-2区 中世遺構面全景（南東から）



1. 1-3区 中世遺構面全景（東から）



2. 1-3区 85溝完掘状況(北西から)



3. 1-2区 30土坑 遺物出土状況（北から）



4. 1-3区 87井戸検出状況（南西から）



1. 1-3区西半部 中世遺構面完掘状況（南東から）



2. 1-4区 中世遺構面全景（北西から）



1. 1-5 区 中世遺構面全景（南東から）



2. 1-5 区 130 土坑半裁状況（北東から）



1. 2-1区 中世遺構面全景（東から）



2. 2-1区 中世遺構面全景（西から）



3. 2-1区西半部 中世遺構面全景（東から）



4. 2-1区中央部 古墳時代後期～中世遺構面全景（南から）



5. 2-1区 213 竪穴住居完掘状況（西から）



6. 2-2区 中世遺構面全景（東から）



1. 3-1区 中世遺構面全景（西から）



2. 3-1区 中世遺構面全景（東から）



3. 3-1区 102溝完掘状況（南から）



4. 3-1区 111溝完掘状況（南から）



1. 3-1区東半部 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（西から）



2. 3-1区西半部 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（東から）



1.3-1区 105 竪穴住居周辺遺構検出状況（南から）



2.3-1区 105 竪穴住居完掘状況（東から）



3.3-1区 112 土坑完掘状況（南から）



4.3-1区 117・118 竪穴住居完掘状況（北から）



5.3-1区 120 竪穴住居完掘状況（南から）



1. 3-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（西から）



2. 3-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（東から）



1. 3-2区 中世遺構面全景（南から）



2. 3-2区 167 竪穴住居完掘状況（東から）



3. 3-2区 167 竪穴住居遺物出土状況



4. 3-2区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（東から）



1. 3-3区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（北西から）



2. 3-3区 〔建物 26〕検出状況（南西から）



1, 3-4区 中世遺構面全景（北から）



2, 3-4区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（北から）



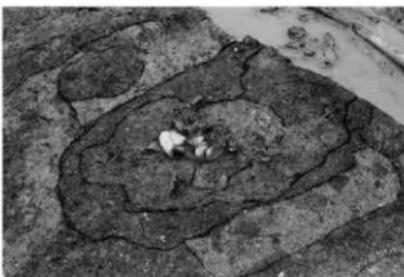
1. 3-3区 303 竪穴住居完掘状況（西から）



2. 3-4区 296 竪穴住居検出状況（西から）



3. 3-4区 297 竪穴住居検出状況（南から）



4. 3-4区 296 竪穴住居検出状況



5. 3-5区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（南東から）



1. 3-6区 古墳時代後期～古代初頭  
遺構面全景（北から）



2. 4-1区 中世遺構面全景（西から）



3. 4-2区 中世遺構面全景（西から）



4. 4-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面全景（西から）



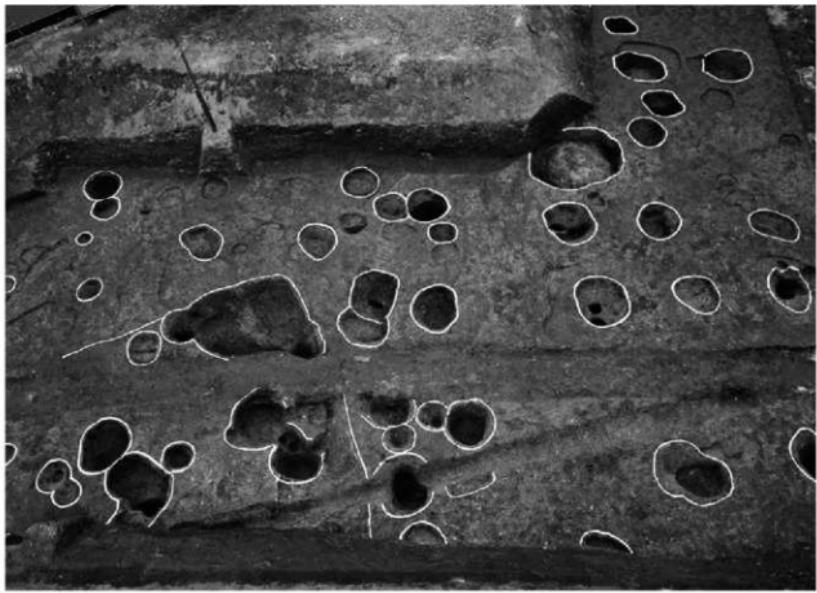
1. 4-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（南から）



2. 4-1区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（東から）



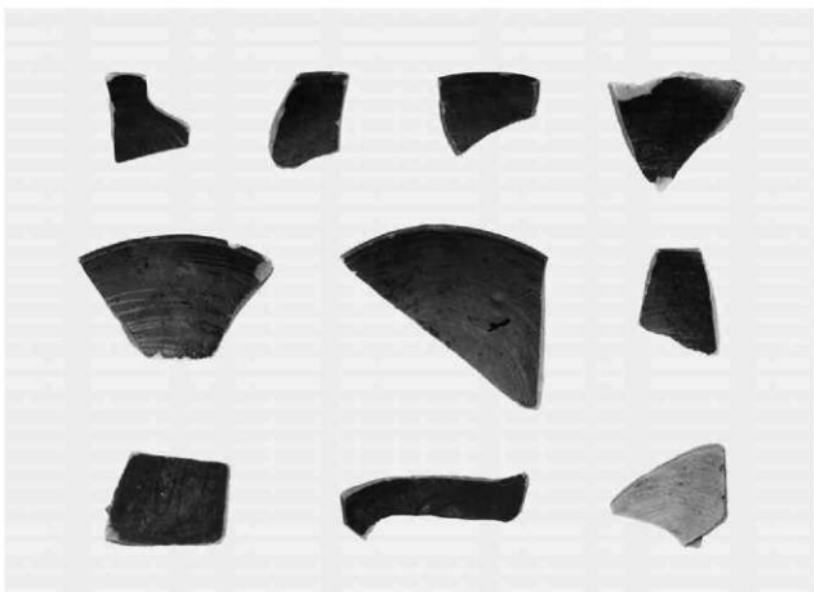
1. 4-2区 古墳時代後期～古代初頭遺構面検出状況（西から）



2. 4-2区 古墳時代後期～古代初頭遺構面完掘状況（南から）



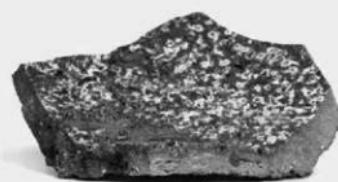
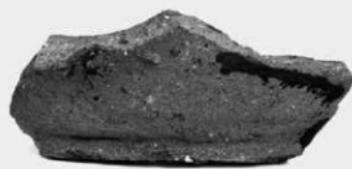
1. 第1調査区 85溝出土遺物（1）



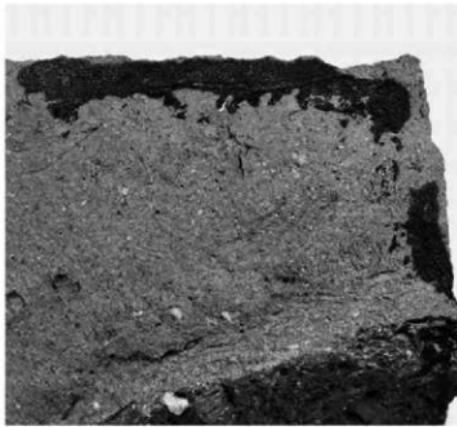
1. 第1調査区 85溝出土遺物（2）



1. 第1調査区 85溝出土常滑燒壺底部



2. 第1調査区 85溝出土備前燒壺底部



3. 第1調査区 85溝出土備前燒壺底部  
織維付着部分拡大



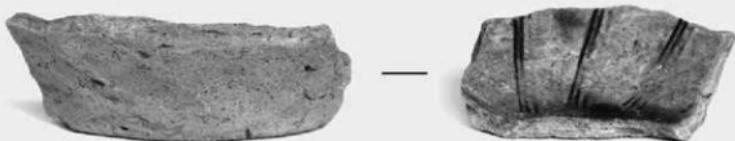
4. 第1調査区 85溝出土土器皿



5. 第1調査区 85溝出土青磁碗底部



6. 第1調査区 85溝出土白磁碗底部



1. 第1調査区 86溝出土瓦質土器擂鉢



2. 第1調査区 86溝出土遺物



3. 第1調査区 87井戸出土遺物



1. 第1調査区 124 溝出土土師器皿



1. 第1調査区 遺構内出土遺物（1）



2. 第1調査区 遺構内出土遺物（2）



1. 第1調査区 122溝出土遺物



2. 第1調査区 127溝出土水晶製石器未成品

3. 第1調査区 中世包含層出土銭貨  
「皇宋通寶」「聖宋元寶」



4. 第1調査区 中世包含層出土遺物



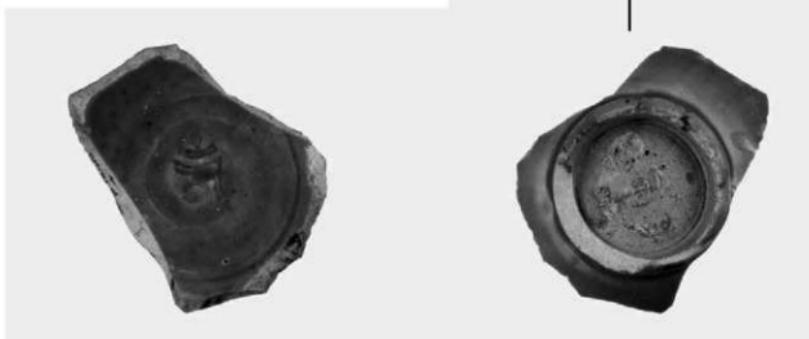
1. 第2調査区 出土遺物



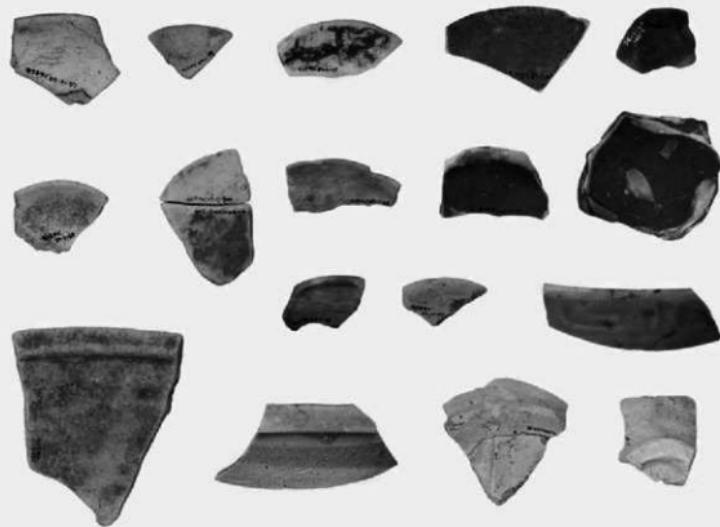
2. 第2調査区 207溝出土瓦質土器釜



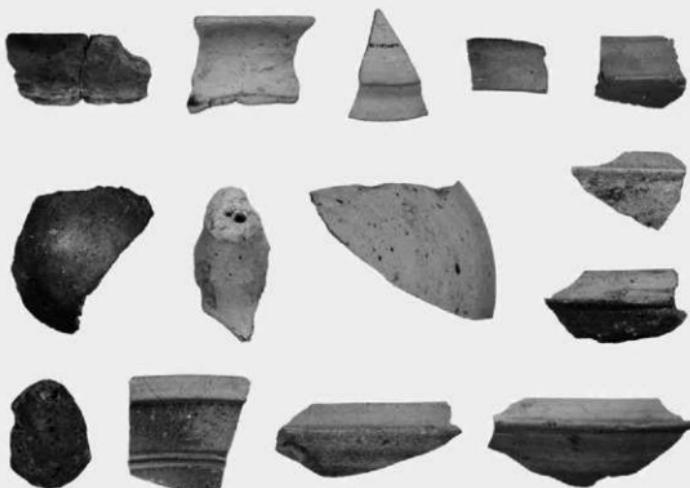
3. 第3調査区 4溝出土天目茶碗底部



4. 第1調査区 27溝出土青磁碗底部



1. 第3調査区 中世遺構・包含層出土遺物



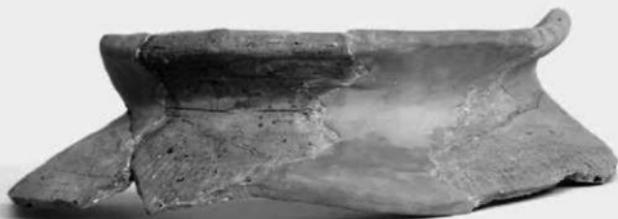
2. 第3調査区 古墳時代遺構内出土遺物



1. 第3調査区 34 溝出土須恵器杯身



2. 第3調査区 99 穫穴住居出土須恵器杯身



3. 第3調査区 57 溝出土須恵器甕



4. 第3調査区 105 穫穴住居出土遺物



5. 第3調査区 118 穫穴住居出土土師器高杯



6. 第3調査区 109 ピット出土土師器甕



1. 第3調査区 111溝出土須恵器小型壺



2. 第3調査区 111溝出土須恵器杯身



3. 第3調査区 111溝出土須恵器壺



4. 第3調査区 111溝出土鐵滓



5. 第3調査区 111溝出土砥石



6. 第3調査区 111溝出土須恵器壺口縁



7. 第3調査区 111溝出土須恵器壺口縁



8. 第3調査区 111溝出土須恵器壺口縁



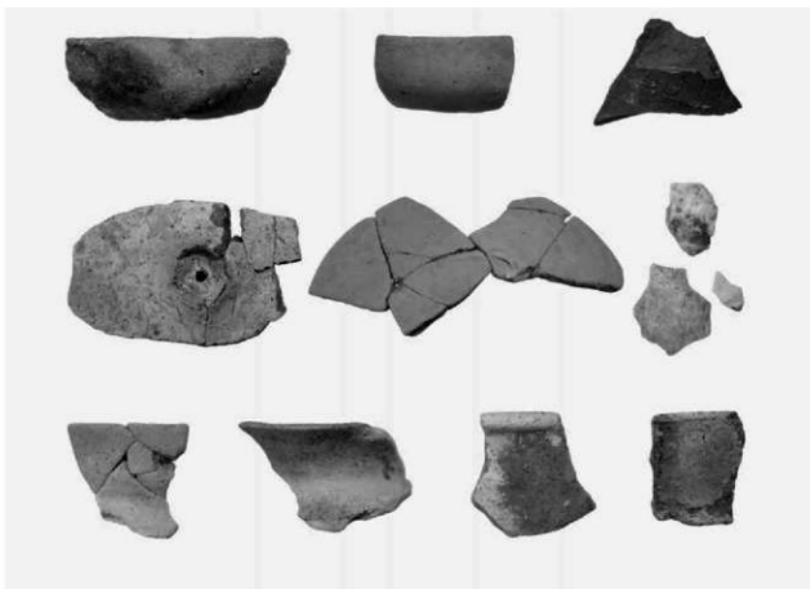
1. 第3調査区 106溝出土  
須恵器杯蓋

2. 第3調査区 112土坑出土  
土師器高杯

3. 第3調査区 119土坑出土  
土師器高杯



4. 第3調査区 古墳時代溝出土遺物



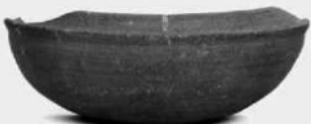
5. 第3調査区 118竪穴住居出土遺物



1. 第3調査区 214 ピット出土土師器高杯



2. 第3調査区 214 ピット出土土師器高杯



3. 第3調査区 222 穫穴住居出土土須恵器杯身



5. 第3調査区 303 穫穴住居出土土師器高杯



4. 第3調査区 296 穫穴住居出土土師器蓋



6. 第3調査区 308 ピット出土土須恵器杯蓋



8. 第3調査区 310 ピット出土土須恵器杯身



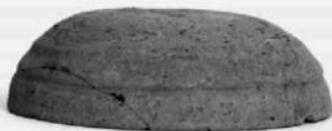
7. 第3調査区 308 ピット出土土師器高杯



9. 第3調査区 337 溝出土土師器甕



1. 第3調査区 296 竪穴住居出土遺物



1. 第3調査区 297 窓穴住居出土遺物



2. 第3調査区 296・297 窓穴住居出土  
ガラス製小玉・ガラス片・滑石製白玉

3. 第3調査区 296 窓穴住居窓内出土骨片

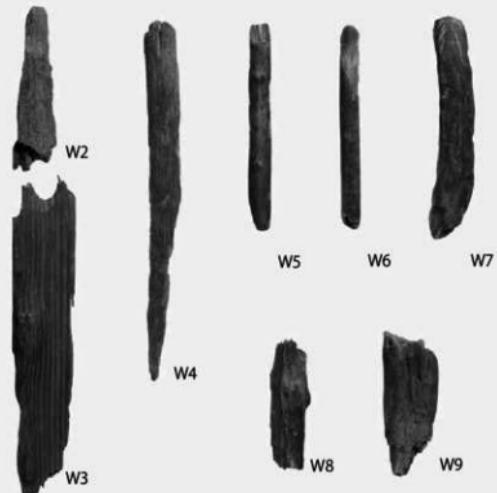


1. 第3調査区 古墳時代包含層出土遺物



1. 第1調査区

101溝出土木製樋（中世末～近世初頭）



2. 第1調査区 89溝出土板状部材・杭（中世末～近世初頭）



3. 第3調査区 1水路出土漆器椀（近世）



W1

W11

W12

W13

4. 第3調査区 1水路出土板状部材（近世）



W14

1. 第1調査区  
199 井戸出土  
棒状部材(近世)



W15



W16



W17

3. 第2調査区  
206 流路出土  
板状部材(近世)



W18

4. 第2調査区  
206 流路出土  
漆器椀(近世)



W19

5. 第4調査区  
407 ピット出土柱根  
(古墳時代後期～古代初頭)



W20

6. 第4調査区  
411 ピット出土柱根  
(古墳時代後期～古代初頭)



W21

7. 第4調査区  
490 ピット出土柱根  
(古墳時代後期～古代初頭)

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	かいみきさべいせきん ありいけいせきん										
書名	上私部遺跡Ⅲ 有池遺跡Ⅲ										
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書										
巻次											
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書										
シリーズ番号	第193集										
編著者名	若林幸子 黒須亜希子										
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター										
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Tel.072(299)8791										
発行年月日	2009年8月31日										
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号								
かいみきさべいせきん 上私部遺跡	かたのしあおぢやま 交野市青山	27230	64	34° 47' 3"	135° 41' 32"	上私部07-1 : 平成19. 5.22～ 平成20.1.18/有 池07-1・上私 部07-2 :平成 20.2.1～平成 20.10.31/上私 部09-1 :平成 20.7.15～平成 20.10.28	4622m <sup>2</sup>	一般国道1号バ イパス（大阪北 道路）・第二京 阪道路建設			
ありいげいせきん 有池遺跡	かたのしあおぢやまちうさき 交野市青山地先		22	34° 47' 17"	135° 41' 47"						
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物			特記事項				
上私部遺跡	集落	古墳時代～中世	竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑・井戸・水田・畦畔	土師器・須恵器・移動式竈・瓦器・陶磁器・瓦	掘立柱建物と竪穴住居を合せて30数棟検出した。加えて集落を区画する溝群と柵の延長部分を調査した。						
有池遺跡	集落	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物・溝・井戸・土坑	土師器・須恵器・須恵質土器・瓦器・陶磁器・瓦	周囲に区画溝を配した屋敷地の縁辺部を調査した。						
要約	上私部遺跡		前回までの調査で明らかになった、集落の中心域の北側および西側の状況を明らかにすることことができた。これにより6世紀後半に構造差を拡大させつつ居住範囲も最大になる段階を経て、集落構造が均質化しつつ縮小させながら7世紀初頭に廃絶にむかうという、集落変遷をより明確にとらえることができた。								
	有池遺跡		未調査範囲として帯状に残されていた部分を調査したことにより、大小の屋敷地の区画溝がどのように関連付けられるかという点や、居住域縁辺部の様子を明らかにすることができた。								

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第193集

上 私 部 遺 跡 III  
有 池 遺 跡 III

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2009年8月31日

編集・発行／財團法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪市東成区深江南2丁目6番8号